

令和5年度全国高等学校総合体育大会

登山大会

第67回全国高等学校登山大会

記録報告書

車から
魂の
鼓動
北の大地へ
大空へ

翔び立て若き翼
北海道総体2023

令和5年8月7日(月)～11日(金)
大雪山系 黒岳 北鎮岳 旭岳
十勝岳連峰 十勝岳
東川町民運動公園
旭川市民文化会館

- 【主催】(公財)全国高等学校体育連盟(公社) 日本山岳・スポーツクライミング協会 北海道 北海道教育委員会 東川町 上川町 美瑛町 上富良野町 東川町教育委員会 上川町教育委員会 美瑛町教育委員会 上富良野町教育委員会
- 【共催】読売新聞社
- 【後援】スポーツ庁 (公財)日本スポーツ協会 NHK (公財)北海道スポーツ協会 東川町スポーツ協会 上川町体育協会 美瑛町スポーツ協会 上富良野町スポーツ協会
- 【主管】(公財)全国高等学校体育連盟登山専門部 北海道高等学校体育連盟 北海道山岳連盟
- 【特別協賛】大塚製薬
- 【協賛】JTB マイナビ KDDI カンコー学生服



高体連マーク



このマークは「若い力とわざと明朗な精神」を象徴するもので高体連のシンボルマークとされています。真紅の色彩は「高い理想」と「希望に燃える若人の情熱」の象徴であり、このマークを構成している3つの「K」は次のドイツ語の頭文字をとったものです。

KRAFT

「力」

KUNST

「技」

KLARHEIT

「明朗な精神」

大会愛称

翔び立て若き翼 北海道総体 2023

選手一人一人が勝利を目指し上へ翔び立ち、北海道の広い大地で羽ばたいてほしいという願いを込めました。

北海道釧路江南高等学校 ^{すずき} 鈴木 ^{しづく} 瞳月

大会スローガン

高校生の闘志、勝利への執念、大会への思いを、競技を通して表現し、広大な北海道の広大な地を揺るがすほどの感動、躍動を届けてほしいという思いを込めています。

北海道千歳高等学校 ^{わしみ} 鷺見 ^{こうた} 晃太

轟かせ魂の鼓動北の大地へ大空へ

スローガン揮毫作品 市立札幌藻岩高等学校 ^{すずき} 鈴木 ^{ふうか} 風花

シンボルマーク



北海道らしくするためにアイヌの模様を参考にしました。そして模様の間は選手をイメージし1つになるというのをイメージしました。みんなで1つになり結果を出すというイメージを中央の花の形で表現しました。

北海道札幌東商業高等学校 ^{わたなべ} 渡邊 ^{みさき} 美咲

総合ポスター図案



今年はコロナで多くの大会が開催されなかったので、新しいスタートを切り出せるような構図にしました。走り出す姿は躍動感があって高体連にぴったりだと思いました。

北海道札幌稲雲高等学校 ^{みやい} 宮井 ^{こうせい} 康成

〔令和3年3月選考（在籍(校)は応募当時）〕

目 次

○ あいさつ

- ・全国高等学校体育連盟登山専門部部長 本 多 滋 明
- ・令和5年度全国高等学校総合大会登山競技実行委員会会長 岸 本 亮
- ・北海道高等学校体育連盟会長 駒 井 博 和
- ・北海道高等学校体育連盟登山専門部部長 稲 津 誠

○ 大会写真集

○ 大会記録

1	登山大会コース概念図	1
2	日程およびコース	4
3	式典次第	5
4	班別出場校一覧	7
5	都道府県別出場校一覧	11
6	審査員長講評並びに問題の解答	12
7	成績一覧表	32
8	役員等人数表	34
9	登山大会 役員・補助員	36
10	A隊行動記録	51
11	B隊行動記録	55
12	A・B隊支援隊報告書	59
13	救護記録	61
14	通信に関して	62
15	設営隊の記録	63
16	サポート隊の記録	64
17	C P 隊（兼通信隊）の記録	66
18	総務記録（開閉会式担当）	68
19	専門委員長隊の記録	72
20	総務記録	73
21	大会準備経過	80
22	A 隊（団体男子）感想文	81
23	B 隊（団体女子）感想文	104
24	登山大会を終えて	132



御 挨 拶

公益財団法人全国高等学校体育連盟

登山専門部 部長 本 多 滋 明

真夏の北海道東川町、上川町、美瑛町、上富良野町に広がる大雪山系・十勝岳連峰において、「轟かせ 魂の鼓動 北の大地へ 大空へ」の大会スローガンのもと、令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会、第67回全国高等学校登山大会が、8月7日から11日までの5日間にわたって開催されました。

今年は、観測史上最も暑い7、8月と言われましたが、北海道でも例年にない暑さや不順な天候が続き、期間中の気象状況が心配される中で大会は始まりました。実際に、登山行動1日目は冷たい雨や風が予想されたため、安全面を考慮してコースの短縮とサブザック行動への変更を行いました。しかし、大雪山を踏破する行動2日目以降は天候も回復し、黒岳から旭岳へ至るその稜線からの景色の雄大さとともに、数々の思い出を皆に残して、その全行程を終えることができました。

登山行動以外の場面でも、突然の強雨や予想外の高温のため、東川高校と東川中学校の体育館をお借りして宿営をしたり、解団式の場所を変更したりと、目まぐるしく変わる気象状況に応じて様々な対応が求められましたが、選手や監督の先生方をはじめ、役員の方々にも臨機に対処していただきました。ご協力に感謝いたします。

また、陸上自衛隊の皆さまや支援隊・医療関係の皆さまなど、多くの方々の御支援によって、登山行動中の選手・監督の安全を確保していただいたことに対しましても、厚く御礼申し上げます。

入賞校の皆さん、入賞おめでとうございます。皆さんの日ごろの努力が実を結び、この結果につながったのだと思います。今後もさらに精進して、各都道府県そして全国の高校登山部の活動を引っ張っていってもらえるよう期待しています。

そして、惜しくも入賞が叶わなかった学校の皆さんも、それぞれが各都道府県を代表するチームのメンバーであることに変わりはありません。この全国大会で得た様々な経験を、それぞれの地域の仲間たちとも共有し、還元していくようにお願いします。そして、各地の高校登山部の活動をさらに盛り上げていってください。

登山道開削前の大雪山を踏破し、今も山にその名を残す大正時代の随筆家 大町桂月は、「大雪山に登って、山岳の大いさを語れ」と書き残しました。大会に参加した選手の皆さん、青春の1ページを飾るこの大会の思い出とともに、ぜひ今回登った山々の雄大さを周りの友人やご家族にも語ってあげてください。それがきっと新たな山仲間を生み出すことにつながっていくものと思います。

登山は、生涯にわたって楽しみ、続けていくことができるスポーツです。近くの里山から3,000m級の山々まで、季節にも応じてそれぞれの魅力を楽しむことができます。これからも、皆さんが山にあこがれ、山に親しみ、山に関わりを持ちながら、山を楽しむことのできる、豊かな人生を過ごしていけるよう望んでいます。

最後になりましたが、大会開催にご理解を賜り、私たちを温かく迎え入れてくださった東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、旭川市の皆様、そして献身的なお手伝いをしていただいた地元北海道の高校生の皆さんにも改めて心からの感謝を申し上げますとともに、いつかまたお会いできることを祈念し、結びといたします。

御 挨 拶



令和5年度全国高等学校総合体育大会
登山競技実行委員会

会長 岸 本 亮

「轟かせ 魂の鼓動 北の大地へ 大空へ」の大会スローガンのもと、令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会第67回全国高等学校登山大会が、全国45都府県から選手、監督、関係者の皆様をお迎えし、盛大に開催できましたことをお慶び申し上げますとともに、大会運営に携わっていただいた全ての皆様に心から感謝申し上げます。

本大会は、新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、4年ぶりに制限のない通常の登山大会となりましたが、大会前から大雨と低温に見舞われ、大会の開催が心配されました。

登山行動の一部変更などがありましたが、大会4日目の登山行動最終日には、前日までの悪天候が嘘のように回復し、5日間の大会日程を無事終了することができましたことを大変嬉しく思います。

また、選手の皆さんは、そのような状況の中でも、乱れぬチームワークと規律正しい行動で最後まで諦めることなく競技を繰り広げていただき、大変素晴らしい大会となりました。心から感謝申し上げます。

見事入賞されたチームの皆さん、誠におめでとうございます。これまでの練習の成果を存分に発揮されたことと思います。天候や慣れない環境に左右された部分もあったかもしれませんが、皆さんの閉会式での表情を見ていますと、今回のインターハイは、友情の絆が深まり、記憶に残る大会になったと確信しております。是非、この貴重な経験を後輩の皆さんに引き継いでいただきたいと思います。

大会期間中、選手の皆さんは、自然豊かな北海道や上川管内の魅力等を存分に感じられたことと思います。ゆっくりと堪能する時間はなかったかもしれませんが、近い将来、リピーターとして再び訪れていただけることを心待ちにしております。

結びになりますが、本大会の開催に当たり、多大なる御支援と御協力を賜りました関係者の皆様、そして高校生活動として大会を盛り上げ、また、競技・運営補助生徒として大会を支えていただいた高校生の皆様に、心から感謝を申し上げますとともに、全国高等学校総合体育大会登山大会、全国高等学校体育連盟登山専門部のさらなるご発展を祈念申し上げ、あいさついたします。

あいさつ



北海道高等学校体育連盟

会長 駒 井 博 和

「轟かせ 魂の鼓動 北の大地へ 大空へ」の大会スローガンのもと、北海道・山形県・栃木県・和歌山県において、令和5年度全国高等学校総合体育大会「翔び立て若き翼 北海道総体 2023」が、7月21日の少林寺拳法を皮切りに各地で熱戦が繰り広げられ、8月21日に終了いたしました。北海道でのインターハイ開催は36年ぶりで、北海道で28競技、山形県でカヌー、栃木県で水泳（飛込）、和歌山県でヨットを実施し、全国から選手、指導者、保護者、大会関係者を迎え、盛大に開催することができました。本大会は4年ぶりに通常の形で開催することができ、各会場には保護者や学校関係者をはじめ多くの観客の姿とともに、選手たちを鼓舞、激励する大きな声援が響き渡り、スポーツが本来もつ「する」「見る」「知る」「支える」の多様な関わりが戻ってきました。

総合開会式は、7月22日「北海きたえーる（北海道立総合体育センター）」において、秋篠宮皇嗣殿下、皇嗣妃殿下のご臨席のもと、プラカードを務めた北海道札幌白石高等学校の生徒の先導により各都道府県選手団382名が堂々と入場行進をしました。式の中では、北海道高校生活動推進委員会の北海道科学大学高等学校3年 畠山真乃介 委員長が「雄大な北海道の大地と大空が、選手の皆さんの闘志、魂が轟く舞台となりますことを期待します」と歓迎の言葉を述べました。そして、選手を代表し北海道科学大学高等学校男子ソフトテニス部 根田大地 主将と酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校女子ソフトテニス部 吉根珠樹 主将が「多くの声援に囲まれる幸せをかみしめながら正々堂々とプレーする」と力強く宣誓しました。式典演技では、北海道発祥と言われるダンプレをはじめ、ダンス、チアリーディングなど、北海道の高校生による歓迎と激励のパフォーマンスが披露されました。また、総合開会式後は、高校生活動推進委員、式典演技出場の生徒代表との交流会が催され、秋篠宮皇嗣殿下、皇嗣妃殿下から高校生たちに温かいお言葉をおかけいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

本大会の開催にあたっては、高校生活動推進委員会が秋・春フェスの開催、手作り記念品の作成、SNSを活用した情報発信などを行ってきたほか、道内の高校と連携しさっぽろ雪まつりにおけるイメージキャラクター「ピリカ」の雪像づくりやカウントダウンリレーなど、工夫を凝らしたオール北海道での活動を行い大会の開催を盛り上げてくれました。また、各競技においては、多くの地元高校生が競技補助員や運営補助員として、猛暑の中、爽やかな挨拶と一生懸命な態度で大会を支えていただきました。インターハイの目的には、「高校生活動も含め生徒相互の親睦を深め、心身ともに健全な青少年を育成すること」が掲げられています。本大会に出場した選手はもとより、大会を支えた生徒にとっても生徒相互の親睦を深め、健全な心身を育成する絶好の機会となったことと思います。本大会に関わった全ての高校生にとって、人生における最高の思い出、今後の人生の良き経験、糧となることを期待しています。本大会を支え盛り上げてくれた生徒の皆さんの頑張り、ご指導いただいた先生方や各競技役員の皆様方に心から感謝申し上げます。

結びに、本大会を開催するにあたり、（公財）全国高等学校体育連盟をはじめ、安全で安心な大会にご尽力いただきました会場市町及び各実行委員会、各競技団体ならびに各競技専門部、道内の高等学校、大会に関係されたすべての皆様方に深く感謝申し上げますとともに、高校生たちの今後の活躍を祈念申し上げ挨拶いたします。

大会を終えて



北海道高等学校体育連盟

登山専門部 部長 稲 津 誠

「轟かせ 魂の鼓動 北の大地へ 大空へ」というスローガンのもと、北海道東川町・上川町・美瑛町・上富良野町の4つの町が舞台となり、8月7日から11日までの5日間にわたり、「翔び立て若き翼 北海道総体 2023 令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会第67回全国高等学校登山大会」が開催されました。

今年度は、5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、それに伴いコロナ禍前の大会形式で行うことが決定されました。この大会の実施には登山競技実行委員会や北海道山岳連盟等の関係者と協力し、安全かつ円滑な実施を確保するための準備が行われました。また、全国各地から集まる高校生山岳部員の選手たちには、北海道の最高峰である旭岳を中心とする大雪山系・十勝岳連峰の魅力を存分に感じてもらうことを目指しました。

北海道の2000m級の山々が舞台となるため、競技役員の方々は事前に何度も現地に赴いてもらい、コースの下見を行いました。残雪の状況や低体温症対策、熱中症対策、登山中の傷病者の搬送計画など、大会中に発生しうる様々な事象について詳細な検討が行われました。これにより、スムーズな大会運営が可能となりました。

特に大会当日は気温の寒暖差が激しかったり、大雨などの気象条件が厳しかったりしましたが、そのような状況にも迅速かつ的確に対応し、登山行程の変更や支援活動等を行うことができました。このようなスムーズな対応は、事前の綿密な打ち合わせと準備の成果であると思います。また、コロナ禍前の大会形式を成功させるため、関係者の一体感もあり、スローガン通りの素晴らしい大会が実現しました。この点について心から感謝申し上げます。

大会期間中は気候の不順が続き、参加選手や監督たちの体調管理が心配される状況でしたが、登山は一生を通じて楽しめるスポーツです。再び北海道を訪れ、大雪山系の山々を満喫していただければと思います。

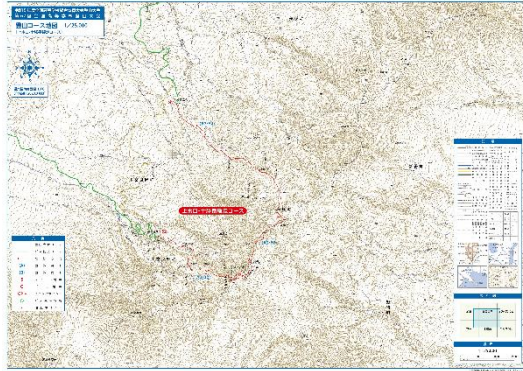
参加者にとって、今大会は素晴らしい思い出となり、今後の登山活動やその他の様々な活動の源となることを願っています。今年の大会は新型コロナウイルス感染症の影響により参加を取りやめた学校もあり、その選手や顧問の方々の気持ちを思うと残念です。来年度以降はこうした事態が起こらないことを願うばかりです。

最後に、大会開催に尽力いただいた関係者の皆様、地元の高校生の協力者の皆様、そして参加選手や監督の皆様の今後のご健勝とご活躍を心から祈念し、感謝の意を表します。

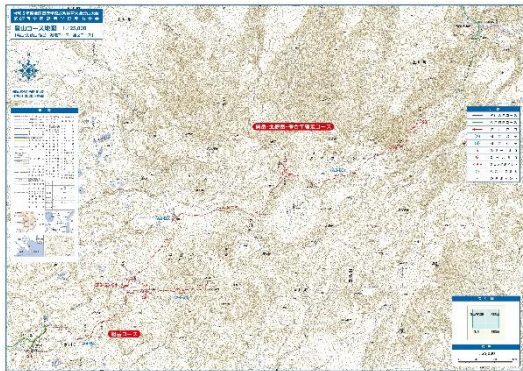
第67回全国高等学校登山大会 北海道大会

【事前準備】

・登山コース地図 十勝岳連峰 1/25,000



・登山コース地図 大雪山系 1/25,000



・諸会議



・横断幕 大雪山層雲峡ロープウェー



・大会案内ボード 東川町 B & G 海洋センター



・大会案内看板 吹上温泉分岐



・インタビューボード 開閉会式場



【開会式】

・アトラクション 旭川東高等学校音楽部



・登山隊紹介



・選手団紹介



・受付打合せ



・優勝杯返還



・コース隊編成



・選手宣誓



・交流会



【幕营地】

・幕营地全景



・引継式 午後



・引継式 早朝



・設営審査



・大雨による水没 8月8日



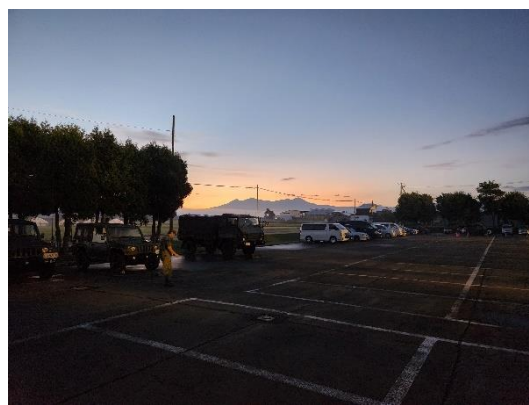
・緊急避難所 東川高等学校



・出発



・朝焼けの旭岳



【登山行動】

・旗手



・8月8日 上富良野岳～上木口 十勝岳温泉



・8月8日 上富良野岳～上木口 安政火口



・8月8日 上富良野岳～上木口 三百階段



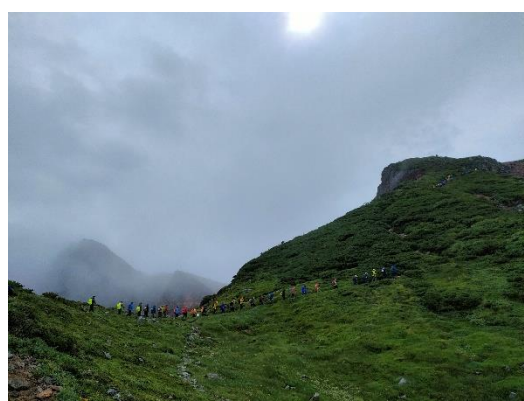
・8月8日 上富良野岳～上木口 上木口へ



・8月8日 上富良野岳～上木口 後ろに富良野岳



・8月8日 上富良野岳～上木口 上富良野岳直下



・8月8日 上富良野岳～上木口 上富良野岳



・8月9日 黒岳～北鎮岳 奥に黒岳



・8月9日 黒岳～北鎮岳 まねき岩



・8月9日 黒岳～北鎮岳 チシマクモマグサ



・8月9日 黒岳～北鎮岳 黒岳 CP0



・8月9日 黒岳～北鎮岳 チーム行動スタート



・8月9日 黒岳～北鎮岳 黒岳石室へ



・8月9日 黒岳～北鎮岳 黒岳石室へ



・8月9日 黒岳～北鎮岳 支援隊 黒岳石室にて



・8月9日 黒岳～北鎮岳 黒岳にて監督隊



・8月9日 黒岳～北鎮岳 御鉢平



・8月9日 黒岳～北鎮岳 雲の平



・8月9日 黒岳～北鎮岳 北鎮分岐直下



・8月9日 黒岳～北鎮岳 中岳へ



・8月9日 黒岳～北鎮岳 中岳分岐から裾合平



・8月9日 黒岳～北鎮岳 中岳温泉足湯



・8月9日 黒岳～北鎮岳 専門委員長隊の激励



・8月10日 旭岳 四合目



・8月10日 旭岳 姿見の池へ



・8月10日 旭岳 旗手スタート



・8月10日 旭岳 姿見の池 激励



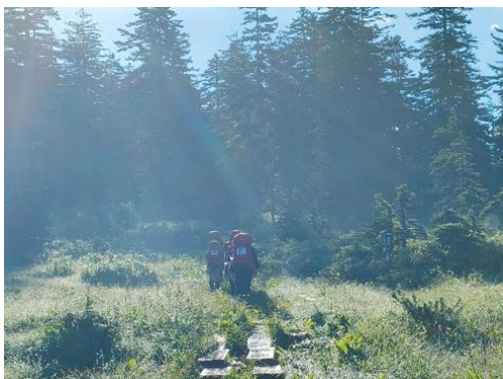
・8月10日 旭岳 登山口で激励



・8月10日 旭岳 姿見の池から旭岳



・8月10日 旭岳 天女ヶ原



・8月10日 旭岳 姿見の池 CP1



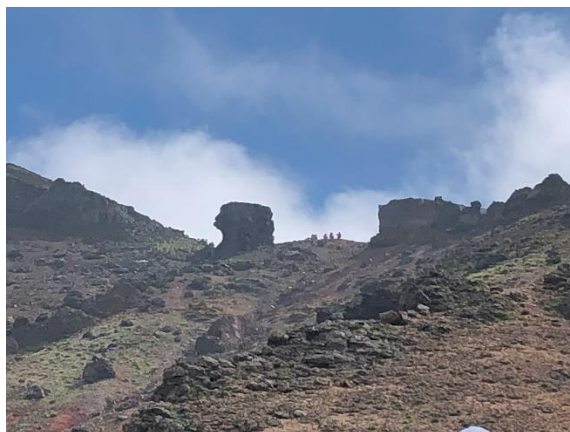
・8月10日 旭岳 姿見の池と旭岳石室



・8月10日 旭岳 山頂へ



・8月10日 旭岳 金庫岩



・8月10日 旭岳 旭岳山頂にて





・8月10日 解団式

・おもてなし



【開会式】

・A 隊優勝 岡山県 岡山操山高等学校



・B隊優勝 静岡県 富士高等学校



・A 隊2位 福岡県 修猷館高等学校



・B隊2位 千葉県 千葉東高等学校



・A 隊3位 静岡県 沼津東高等学校



・B隊3位 兵庫県 長田高等学校



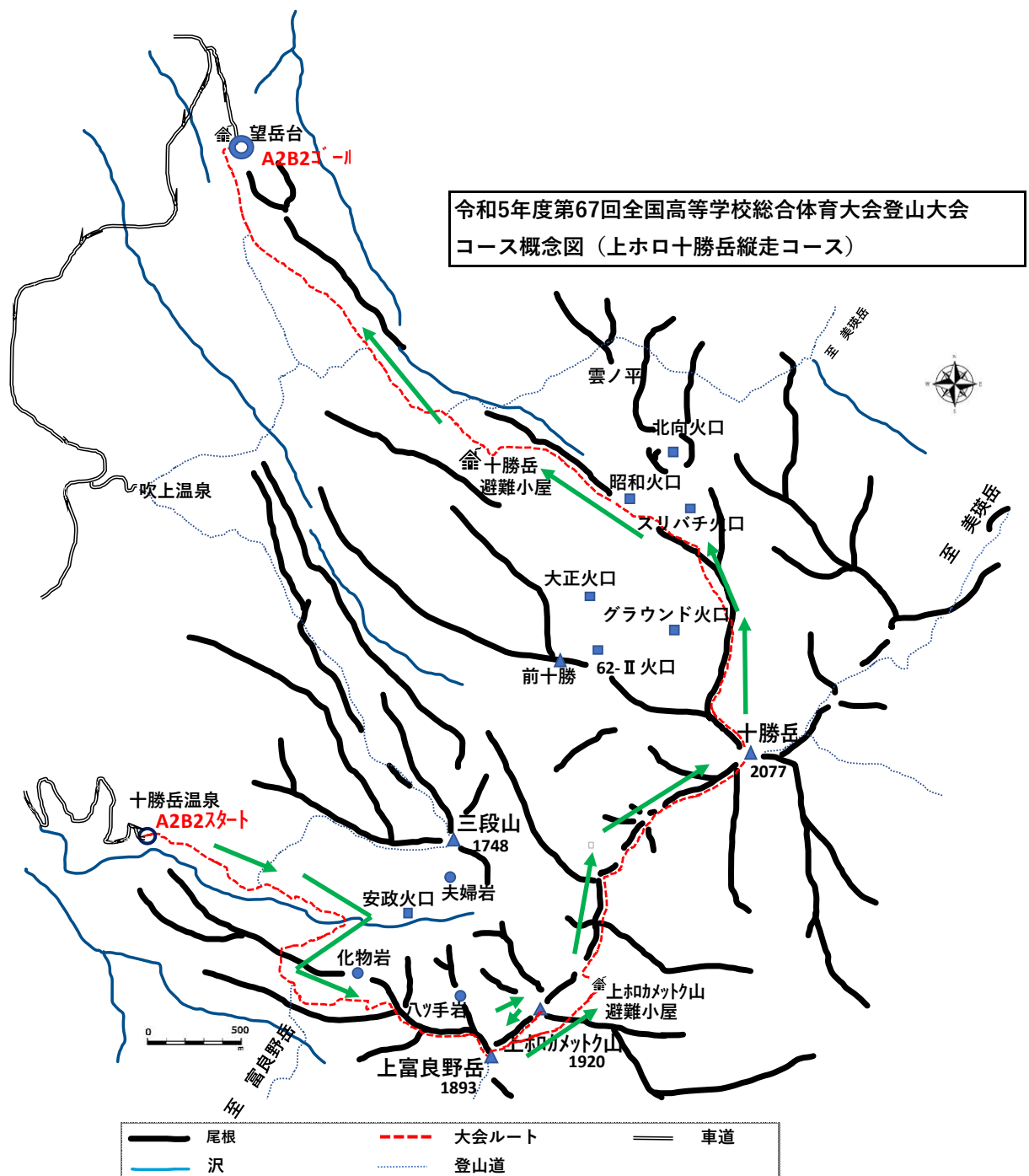
・A 隊4～6位 前橋高校 膳所高校 盛岡第一高校



・B 隊4～6位 長崎北陽台高校 盛岡第一高校 池田高校

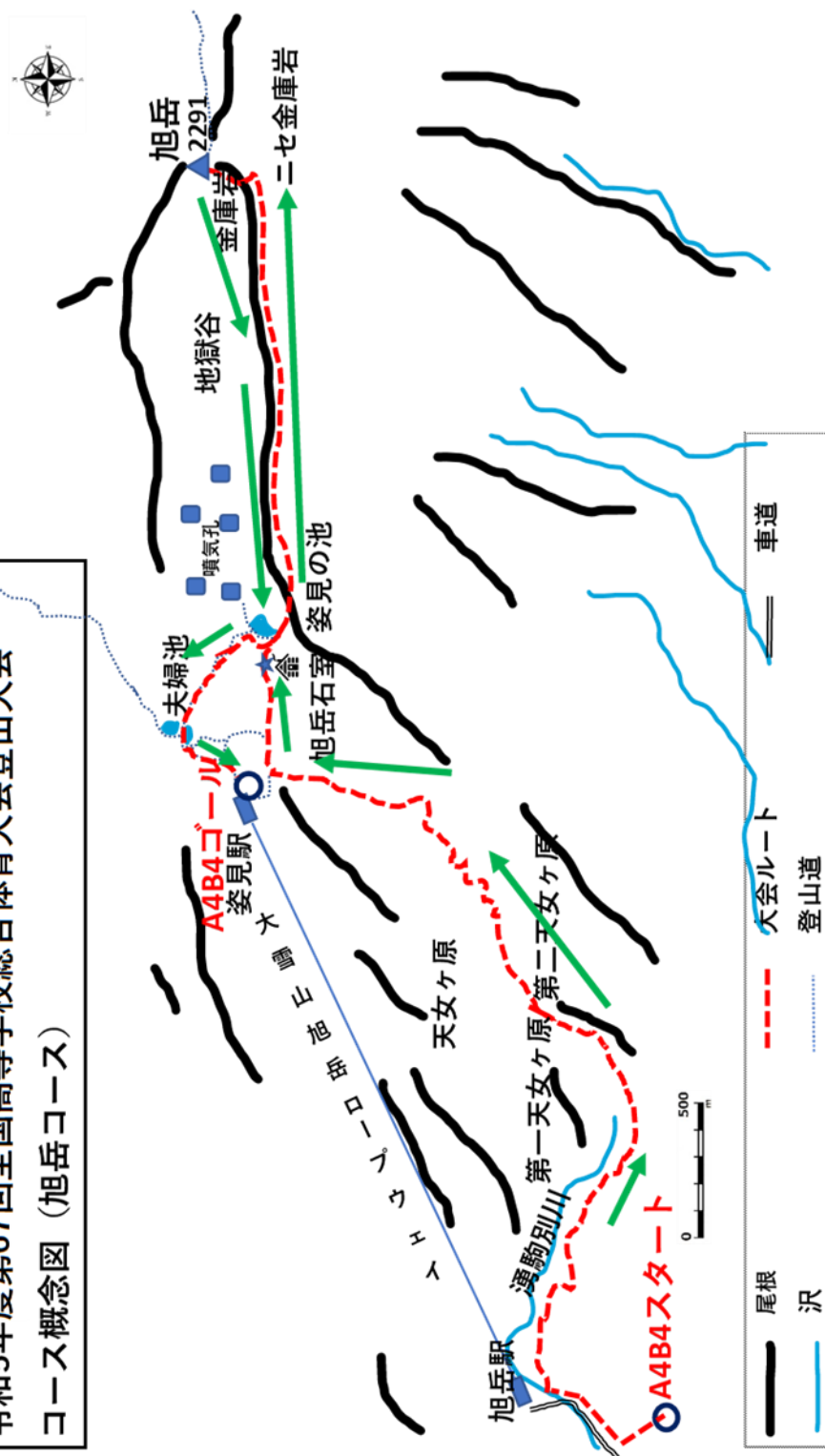


1. 登山大会コース概念図



令和5年度第67回全国高等学校総合体育大会登山大会

コース概念図（旭岳コース）



2. 日程およびコース

8月 5日(土)諸会議(全国常任委員会ほか)

8月 6日(日)受付・諸会議(全国専門委員長会議、監督リーダー会議ほか)

8月10日(木)審査委員会、全国常任委員会、中央総務委員会

8 月 7 日		A隊(団体男子)	B隊(団体女子)
	開会式	旭川市民文化会館	
	審 査	旭川市民文化会館(天気図・自然・気象・救急)	
	移 動	開会式会場＝幕営地	
	幕営地	東川町民運動公園	東川町民運動公園
8 月 8 日	上ホロ 十勝岳 縦走 コース	幕営地＝十勝岳温泉登山口－上 富良野岳－上ホロメツク山－上ホロ 避難小屋－十勝岳－十勝岳避難 小屋－望岳台＝幕営地 (終日班行動)	A隊に同じ
	幕営地	東川町民運動公園	東川町民運動公園
8 月 9 日	黒岳 北鎮岳 裾合平 縦走 コース	幕営地＝層雲峡駅→黒岳駅→黒 岳七合目登山口…黒岳…黒岳石 室…北鎮岳…中岳温泉…裾合分 岐…姿見駅→旭岳駅＝幕営地 (班行動・黒岳よりチーム行動)	A隊に同じ
	幕営地	東川町民運動公園	東川町民運動公園
8 月 10 日	旭岳 コース	幕営地＝東川町旭岳青少年野営 場横広場－姿見の池－旭岳－姿 見駅→旭岳駅＝幕営地(解団式) ＝各宿舎 (チーム行動・姿見の池より班行 動・旭岳よりパーティー行動)	A隊に同じ
	宿泊地	各校宿舎	
8 月 11 日	移動	宿舎 閉会式会場	
	閉会式	旭川市民文化会館	

凡例:＝バス輸送 →ロープウェイ、リフト ―登山行動(メインザック行動)

…登山行動(サブザック行動)

3. 式典次第

開会式 8月7日(月) 旭川市民文化会館大ホール

- 1 受付 8:45 ~ 9:30
- 2 入場 9:30 ~ 9:40
- 3 アトラクション 9:40 ~ 9:55 (北海道旭川東高等学校音楽部)
- 4 開会式次第 10:00 ~ 11:00

時刻	次 第	内 容	備 考
10:00	開式通告		アナウンス ファンファーレ
10:01	選手団紹介	答礼 大会委員長(公財) 全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明	アナウンス 行進用音楽
10:25	開会宣言	大会副委員長(公財) 全国高等学校体育連盟登山専門部副部長 玉垣光伺朗	ファンファーレ
10:27	国旗掲揚	国歌演奏とともに国旗に注目	国歌
10:30	諸旗掲揚	「高体連の歌」演奏とともに諸旗に注目	高体連の歌
10:35	優勝杯返還 レプリカ授与	大会委員長 (公財) 全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明	得賞歌
10:40	あいさつ	大会委員長 (公財) 全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明 大会名誉会長 (公社) 日本山岳・スポーツクライミング協会会長 丸 誠一郎	
10:45 10:50	歓迎の言葉	登山競技実行委員会会長 北海道教育庁上川教育局長 岸本 亮 開催地生徒代表 北海道東川高等学校 桑原 未夢 開催地生徒代表 北海道上川高等学校 井口 詩教 開催地生徒代表 北海道美瑛高等学校 山家 琉佳 開催地代表生徒 北海道上富良野高等学校 佐藤 知優	
10:55	来賓紹介		アナウンス
10:57	選手宣誓	選手代表 北海道旭川東高等学校 向井 和玖 選手代表 北海道旭川東高等学校 土門ひより	ファンファーレ
10:59	閉式通告		アナウンス

5 登山隊編成 11:00~11:15

時刻	次 第	登 壇 者
11:00	登山隊長・審査員長紹介	競 技 委 員 長 本多 滋明
11:02	コース隊長・自衛隊協力隊長紹介	登 山 隊 長 内海 健一
11:03	審査員紹介・行動予定等の説明	審 査 員 長 松本 至巨
11:13	諸連絡	総 務 委 員 長 細野 護

6 審査 11:30~12:15 (12:15~昼食)

審 査	審 査 場 所	集 合	審査開始	審査終了
自然観察テスト	旭川市民文化会館大ホール	11:30	11:35	11:55
救急知識テスト				
気象知識テスト				
天気図作成	旭川市民文化会館大会議室	11:30	11:35	12:15

7 コース隊編成・バス乗車・移動 コース隊編成 旭川市民文化会館内 13:00~

8 諸注意

- (1) 開会式会場への移動は、チーム毎にお越しください。車両持ち込みのチームは、監督のみ車で東川町民運動公園まで移動し、指定場所に駐車をお願いします。開会式中の駐車については、旭橋下流左岸駐車場(9:00~無料)か周辺の有料駐車場をご利用ください。
- (2) 選手は、登山大会の服装(ユニフォーム)で参加してください。(靴は外靴(登山靴)のままで結構です。)
監督は、選手に準じた服装で参加してください。
- (3) ザックは会場の指定場所(A隊2階ホワイエ、B隊1階ホワイエ)へチーム毎に置いてください。
- (4) 選手・監督の受付は、代表者が行ってください。

閉会式 8月11日（金） 旭川市民文化会館大ホール

1 受付・入場 8:45～ 9:45

2 閉会式次第 10:00～11:10

時刻	次 第	内 容	備 考
10:00	開式通告		アナウンス
10:01	講評・成績発表	審査員長 松本 至巨	アナウンス
10:20	賞状授与 会長杯授与 メダル授与 文部科学大臣杯 NHK盾 読売新聞社杯授与	① 賞状（A・B隊それぞれの優勝～6位の各校）授与者 ② 全国高体連会長杯（優勝校）授与者 大会委員長（公財）全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明 ③ メダル（A・B隊それぞれの優勝～3位の各校）授与者 優勝 北海道高等学校体育連盟登山専門部長 稲津 誠 2位（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会会長 丸 誠一郎 3位 北海道山岳連盟名誉会長 小野 倫夫 ④ 賞状・杯・杯（A・B隊それぞれ優勝校）授与者 ・文部科学大臣杯 登山競技実行委員会会長 岸本 亮 ・NHK盾 NHK旭川放送局 局長 茂田 喜郎 ・読売新聞社杯 登山競技実行委員会会長 岸本 亮	得賞歌
10:40	あいさつ	大会委員長（公財）全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明 登山競技実行委員会会長 北海道教育庁上川教育局長 岸本 亮	
10:50	国旗・諸旗降納	国歌・高体連の歌演奏	
10:53	国旗・諸旗引継	国 旗 登山競技実行委員会会長→ 添田町実行委員会 高瀬 光一 全国高体連旗 北海道選手代表 → 福岡県選手代表 中村 理乃 登 山 大 会 旗 北海道登山隊長 → 福岡県登山隊長 石田 康治 各コース隊旗 北海道A隊コース隊長 → 福岡県A隊コース隊長 平野 憲崇 北海道B隊コース隊長 → 福岡県B隊コース隊長 嶺 善晴	高体連の歌
11:00	次期開催県挨拶	福岡県代表者 添田町実行委員会添田町教育長 高瀬 光一	
11:05	閉会宣言	大会副委員長 北海道高等学校体育連盟登山専門部長 稲津 誠	アナウンス
11:08	閉式通告		アナウンス

3 感謝状贈呈式・諸連絡 11:10～11:20

時刻	次 第	内 容	備 考
11:10	感謝状贈呈	① 登山競技実行委員会会長 北海道教育庁上川教育局長 岸本 亮 様 ② 東川町長 菊地 伸 様 ③ 上川町長 佐藤 芳治 様 ④ 美瑛町長 角和 浩幸 様 ⑤ 上富良野町長 斉藤 繁 様 ⑥ 陸上自衛隊 第2特科連隊（旭川駐屯地）第5大隊長 西村 朋泰 様 ⑦ 陸上自衛隊 第4特科群（上富良野駐屯地）第1科長 苦瀬 康行 様 ⑧ 国土地理院北海道地方測量部 部長 仲井 博之 様 ⑨ 香川県高等学校体育連盟登山専門部 白川 直美 様 ⑩ 第66回全国高等学校登山大会登山隊長 西村 真也 様 贈呈者 大会委員長（公財）全国高等学校体育連盟登山専門部長 本多 滋明他	
11:15 11:16	来賓退場 諸連絡	大会事務局より各都道府県の監督（代表1名）へ ①「大会成績一覧表」の配布、 ②各都道府県高体連旗の返却	アナウンス

4 会場撤収 11:30～

5 諸注意

- 閉会式会場への移動は、チーム毎にお越しく下さい。車両持ち込みのチームは、旭橋下流左岸駐車場（9:00～無料）か周辺の有料駐車場をご利用ください。
- 選手・監督は、登山大会の服装（ユニフォーム）、屋外用シューズで参加してください。
屋外用の靴はスニーカー等でも構いません。なお選手・監督の受付は、代表者が行ってください。
- ザックは会場の指定場所へチーム毎に置いてください。（車両持ち込みの場合、ザックは不要です。）
- 弁当を注文しているパーティーは、11:45までに1階ホワイエにて、代表者が受け取ってください。
- インタビューボードを2階ホワイエに2ヶ所設置していますので、記念撮影にご利用ください。
- 売店が13:00まで営業しています。今回の開催自治体、インターハイのお土産などお買い求めください。

4. 班別出場校一覧

A 隊

【 第 1 班 】

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
ふくしまけんりつふくしまひがしこうとうがっこう 福島県立福島東高等学校	福島県	わたなべ あきと 渡邊 晶斗	ねもと ゆうすけ 根本 祐輔	こばやし りゅうと 小林 龍斗	のだ りゅうのすけ 野田 龍之介	ばば じゅんべい 馬場 淳平
やまなしけんりつほくとうとうがっこう 山梨県立北杜高等学校	山梨県	あおき しょうたろう 青木 樟太郎	たかはし しげさね 高橋 成実	すずき たいしん 鈴木 大心	いわした こうせい 岩下 耕晴	おの かつひと 小野 勝仁
とよかわこうとうがっこう 豊川高等学校	愛知県	あおき けんすけ 青木 謙介	うえむら ゆうせい 植村 悠生	ふじなみ しんのすけ 藤波 慎之介	すずき りょうへい 鈴木 陵平	さはし ひでお 佐橋 秀男
ならけんりつこおりやまこうとうがっこう 奈良県立郡山高等学校	奈良県	さとう そう 佐藤 爽	やまざき みちかず 山崎 理和	ふくま りお 福間 璃音	すぎむら げんしん 杉村 謙心	きやま やすし 木山 康史
やまぐちけんりつほうふこうとうがっこう 山口県立防府高等学校	山口県	出場辞退				
えひめけんりつまつやまみなみこうとうがっこう 愛媛県立松山南高等学校	愛媛県	いけだ たいせい 池田 大晟	たきぐち えいじ 滝口 瑛士	みつい たいき 三ツ井 太樹	おかむら あゆむ 岡村 歩	ながい ひでき 永井 秀樹
ながさきけんりつながさきほくようだいこうとうがっこう 長崎県立長崎北陽台高等学校	長崎県	よしなが りゅうた 吉永 龍汰	みちこし かける 道越 大翔	えはま いぶき 江濱 惟吹	たかはし そら 高橋 颯良	いわもと ゆうた 岩本 勇太
くまもときたこうとうがっこう 熊本県立熊本北高等学校	熊本県	きょうづか だいち 京塚 大知	ふくやま じゅんや 福山 淳也	いぬつか たかや 犬塚 尊哉	うえの はるき 上野 開	いざわ としき 井澤 俊樹

【 第 2 班 】

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
ほっかいどうあさひかわひがしこうとうがっこう 北海道旭川東高等学校	北海道	むかい わく 向井 和玖	ふにゆう しょうま 舟生 昇馬	すずき りく 鈴木 陸碧	もり やまと 森 大和	なかがわ きよふみ 中川 清文
とちぎけんりつおおたわらこうとうがっこう 栃木県立大田原高等学校	栃木県	たかなし ひろたか 高梨 仁孝	ひらの まさとら 平野 雅虎	こばやし あきと 小林 秋翔	たかねざわ ひでひろ 高根沢 英大	たかなし かずゆき 高梨 和幸
わせだだいがくけいけいぞくわせだじつぎょうがっこうこうとうふ 早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	東京都	えのきど りゅうのすけ 榎戸 竜之介	ひるま ふみと 比留間 文人	ひぐち てつ 樋口 哲	せきぐち ともや 関口 智也	ますやま ひでき 増山 秀樹
にいがたけんりつながおかこうとうがっこう 新潟県立長岡高等学校	新潟県	かねこ しゅんた 金子 隼大	うすい たかはる 笛吹 崇晴	とくはし ゆうま 徳橋 悠真	とみなが こうしろう 富永 幸志郎	にちょうぎ たかゆき 二槌木 貴幸
ふくいけんりつたけふこうとうがっこう 福井県立武生高等学校	福井県	やまもと ゆうだい 山本 雄大	よしだ たくま 吉田 拓真	きかい れん 酒井 蓮	かみかわ しゅんた 上川 隼汰	はやし あきひこ 林 昭彦
わかやまけんりつとういんこうとうがっこう 和歌山県立桐蔭高等学校	和歌山県	みの ゆうご 美濃 佑苒	たなか ゆうき 田中 佑紀	こばやし ことろう 小林 虎太郎	にしむら なおき 西村 直輝	わかまつ けいじゅ 若松 慶樹
さがけんりつとすこうぎょうこうとうがっこう 佐賀県立鳥栖工業高等学校	佐賀県	きたじま けいと 北島 啓杜	ならはら しんや 檜原 慎矢	えざき ゆうた 江崎 裕太	とよます しゅうや 豊増 柊也	どい まさし 土井 優志
みやざきけんりつみやざきおおみやこうとうがっこう 宮崎県立宮崎大宮高等学校	宮崎県	いわなが そういち 岩永 草一	ゆげ こうだい 弓削 昂大	みうら こうき 三浦 康暉	さがら たいき 相良 太輝	すぎた たけし 杉田 岳士

【 第 3 班 】

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
いわてけんりつつもりおかだいいちこうとうがっこう 岩手県立盛岡第一高等学校	岩手県	しらぐら としや 白倉 歳也	うちざわ こうたろう 内澤 昊太郎	ささき かつし 佐々木 克志	まつだ ゆうせい 松田 悠清	ひろ瀬 けんぞう 廣瀬 謙三
みやぎけんふるかわこうとうがっこう 宮城県立古川高等学校	宮城県	出場辞退				
とやまけんりつとやまこうとうがっこう 富山県立富山高等学校	富山県	なかだ まさき 中田 昌希	みやた はると 宮田 遥翔	たかせ しゅうじ 高瀬 柊二	はやし ひかる 林 ヒカル	まるやま けい 圓山 圭
みえけんりつかんべこうとうがっこう 三重県立神戸高等学校	三重県	ゆのき たくや 柚木 拓也	うすい しょうた 碓井 晟大	まえずみ しゅんすけ 前角 俊輔	いとう りゅうせい 伊藤 琉星	よこやま るみ 横山 瑠美
きょうとふりつさかのこうとうがっこう 京都府立嵯峨野高等学校	京都府	たかはし そうた 高橋 蒼太	こうが そうま 甲賀 壮真	ごとう ゆう 後藤 祐	さわだ かい 澤田 權	やまむろ こうじ 山室 浩二
おかやまけんりつおかやまそうざんこうとうがっこう 岡山県立岡山操山高等学校	岡山県	やまだ こうへい 山田 晃平	あらかわ ゆういちろう 荒川 雄一郎	しらすな りゅうのすけ 白砂 龍之介	やまね よしひろ 山根 圭裕	いまい かずひこ 今井 和彦
とくしまけんりつつつるぎこうとうがっこう 徳島県立つるぎ高等学校	徳島県	かさい ゆうた 笠井 友太	かわひと かいせい 川人 海晟	いかわ きょうすけ 井川 京介	ひがしばた はると 東端 遙叶	ひのき しげひろ 檜 茂広
こうちけんりつこうちおうてまえこうとうがっこう 高知県立高知追手前高等学校	高知県	つつい そら 筒井 空	すぎむら みうあ 杉村 実暁	みぞぶち まひと 溝渕 真人	かたぎり わたる 片桐 航	かなおか のぶひろ 金岡 展弘

〔 第 4 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
あ お も り け ん り つ は ち の へ こ う こ う 青 森 県 立 八 戸 高 等 学 校	青森県	あんどう れんせい 安藤 廉晟	たかや れい 高谷 滯	おおぼり まひろ 大堀 真拓	はらだ あおい 原田 蒼生	なるみ あきら 鳴海 暁
ぐ ん ま け ん り つ ま え ば し こ う と う が つ こ う 群 馬 県 立 前 橋 高 等 学 校	群馬県	つちや かずま 槌谷 和真	こばやし ひろと 小林 大翔	かみかさ ゆうせい 神坂 優正	いいの りゅうたろう 飯野 龍太郎	てしま なおき 手島 直樹
ち ば け ん り つ ち ば こ う と う が つ こ う 千 葉 県 立 千 葉 高 等 学 校	千葉県	あずま ひろき 東 宏樹	ごとう かずき 五島 和輝	しまだ えいしん 島田 瑛真	よこやま けい 横山 慶	しみず よしたか 清水 孝高
いしかわけんりつかなぎわいずみがおかこうとうがっこう 石 川 県 立 金 沢 泉 丘 高 等 学 校	石川県	おおざわ りゅうま 大澤 瑠真	まるかわ せいしろう 丸川 征史朗	いしづ つむぎ 石津 紡	おおた かくせい 大田 郭晴	ふじさわ ともひろ 藤澤 友大
ひょうごけんりつかいばらこうとうがっこう 兵 庫 県 立 柏 原 高 等 学 校	兵庫県	うえだ こうき 上田 倖生	くりた こういち 栗田 耕一	みやぎ しゅんや 宮城 駿哉	よでん はる 余田 温	つじの あきひと 辻野 彰一
しまねけんりつまつえきたこうとうがっこう 島 根 県 立 松 江 北 高 等 学 校	島根県	みかみ ゆきなり 三上 征成	みよし かいと 三好 海都	きど けんた 木戸 健太	なわた こうたろう 縄田 皓太郎	とみた かずし 富田 一志
がっこうほうじんじょうちがくいんひろしまがくいんこうとうがっこう 学 校 法 人 上 智 学 院 広 島 学 院 高 等 学 校	広島県	いっちょうはた れい 一丁畑 零	きしだ よう 岸田 陽	ひらおか たくま 平岡 拓磨	ならさだ かつひろ 奈良定 克拓	したまえ ともよし 下前 知義
か ご し ま け ん か じ き こ う と う が つ こ う 鹿 児 島 県 加 治 木 高 等 学 校	鹿児島県	おだ ゆうと 小田 悠人	とりい こうせい 鳥居 康生	かとう さとし 加藤 聡	えぐち あきら 江口 晃	さめしま おさむ 鮫島 修

〔 第 5 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
やまがたけんりつさかたひがしこうとうがっこう 山 形 県 立 酒 田 東 高 等 学 校	山形県	さとう ひらく 佐藤 啓	すがわら うきよう 菅原 羽堯	ほんま かいと 本間 海斗	さとう かいせい 佐藤 快成	ひぐち しゅん 樋口 駿
かながわけんりつひらつかちゅうとうきょういくがっこう 神 奈 川 県 立 平 塚 中 等 教 育 学 校	神奈川県	まつもと けいしゅう 松本 溪秀	くらた ようめい 倉田 葉明	つゆき はると 露木 陽都	ますざわ ほはる 桝澤 歩春	いとう しんや 伊藤 伸也
しずおかけんりつぬまづひがしこうとうがっこう 静 岡 県 立 沼 津 東 高 等 学 校	静岡県	たにざわ けん 谷澤 賢	みうら けいた 三浦 敬汰	かない ゆうたろう 金井 裕太郎	たけのや ゆづき 竹野谷 優月	たまき だいご 玉城 大梧
おおさかふりつてんのうじこうとうがっこう 大 阪 府 立 天 王 寺 高 等 学 校	大阪府	たにばた りく 谷端 涼草	すずき りょうた 鈴木 涼太	こばやし あつし 小林 温	まつむら さとし 松村 哲志	ひらおか いくお 平岡 郁男
とっとりけんりつよなごこうぎょうこうとうがっこう 鳥 取 県 立 米 子 工 業 高 等 学 校	鳥取県	たなが かなと 田長 奏人	くぼ ゆうや 久保 友哉	たかみ こうへい 高見 耕平	えんどう りゅうせい 遠藤 琉生	しらかわ たかひろ 橋本 隆宏
かがわけんりつまるがめこうとうがっこう 香 川 県 立 丸 亀 高 等 学 校	香川県	みやたけ こうたろう 宮武 孝太郎	なката もとはる 中田 基晴	にしほり りょうや 西堀 凌矢	さかい りゅう 坂井 龍	はしもと なおみ 白川 直美
ふくおかけんりつしゅうゆうかんこうとうがっこう 福 岡 県 立 修 猷 館 高 等 学 校	福岡県	かわぞえ てん 川添 天	たぐち ひろき 田口 弘樹	あかほし こうた 赤星 康太	やまぐち しゅん 山口 隼	くすだ かずひろ 楠田 和宏

〔 第 6 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
あ き た け ん り つ あ き た こ う と う が つ こ う 秋 田 県 立 秋 田 高 等 学 校	秋田県	きむら ひろ 木村 緋呂	はなた やまと 花田 大和	ふじた よしまさ 藤田 欣叡	むとう つかさ 武藤 宰	きくち ふみお 菊地 文雄
いばらきけんりつみとだいいちこうとうがっこう 茨 城 県 立 水 戸 第 一 高 等 学 校	茨城県	かわらい たくと 川原井 琢斗	いけだ ひろと 池田 広人	おおつき そうた 大槻 颯太	かとう そうま 加藤 蒼真	みやけ まさたか 三宅 正隆
さいたまけんりつさやまこうぎょうこうとうがっこう 埼 玉 県 立 狭 山 工 業 高 等 学 校	埼玉県	さわむら ちから 澤村 力	たなか じょうじ 田中 譲士	さくら きょうのすけ 阪倉 杏之介	じゃば つるじ ジャバ ツルジ	はしもと こうだい 橋本 広大
な が の け ん や し ろ こ う と う が つ こ う 長 野 県 屋 代 高 等 学 校	長野県	みさわ しゅんや 三澤 駿也	たなか たいせい 田中 大成	ながやま たいせい 永山 太惺	まつもと そうご 松本 爽吾	みついい たつや 三石 達也
し が け ん り つ ぜ ぜ こ う と う が つ こ う 滋 賀 県 立 膳 所 高 等 学 校	滋賀県	せき えいしん 関 叡心	いのうえ はる 井上 遙	やまぐち けんと きたがわ ともき 山口 健登	きたがわ ともき 北川 知樹	かきたに りゅうた 笠谷 竜太
お お い た け ん り つ た た け た こ う と う が つ こ う 大 分 県 立 竹 田 高 等 学 校	大分県	わだ こうたろう 和田 洸太郎	いとう あきひろ 伊藤 彰洋	かい けんち 甲斐 健智	つちや ゆうき 土屋 佑樹	おの じゅんき 小野 淳貴
ほ っ か い ど う あ さ ひ か わ き た こ う と う が つ こ う 北 海 道 旭 川 北 高 等 学 校	北海道	やまぐち そうた 山口 創大	しぶや よう 澁谷 耀	まつもと まさき 松本 晟己	なかむら ゆうや 中村 友哉	おかざき ともゆき 岡崎 知之

4. 班別出場校一覧

B 隊

〔 第 1 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
いわてけんりつつもりおかだいいちこうとうがっこう 岩 手 県 立 盛 岡 第 一 高 等 学 校	岩手県	よしだ ほのか 吉田 穂香	かやたい なつな 茅平 夏奈	きくち まこと 菊地 真琴	すとう はるみ 須藤 はる美	さとう ゆきひさ 佐藤 幸久
わせだいがくけいぞくわせだじつぎょうがっこうこうとうぶ 早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	東京都	ひがし あんり 東 杏璃	こやま ゆき 小山 結希	うめもと ゆうか 梅本 優花	ささき すい 佐々木 翠	たけぼやし かずひこ 竹林 和彦
しがけんりつひがしおおつこうとうがっこう 滋 賀 県 立 東 大 津 高 等 学 校	滋賀県	おとしま のえり 音島 望衣里	さいとう あい 齋藤 愛	やまもと さゆり 山本 小百合	ささき おと 佐々木 緒都	うねさき ひかる 畦崎 光
ならけんりつたかだこうとうがっこう 奈 良 県 立 高 田 高 等 学 校	奈良県	ますだ りお 桼田 梨央	なかぎし みか 中岸 美嘉	こうせんぼう みゆ 高仙坊 実優	むかい こと 向井 倅都	あおき すがよ 青木 秀雅代
わかやまけんりつたなべこうとうがっこう 和 歌 山 県 立 田 辺 高 等 学 校	和歌山県	くぼちりん 久保地 凜	なかしま しおり 中嶋 しおり	くぼ あおい 久保 葵	はしもと ひなこ 橋本 日菜子	やまもと としや 山本 俊哉
かがわけんりつまるがめこうとうがっこう 香 川 県 立 丸 亀 高 等 学 校	香川県	まつお はるき 松尾 遥希	りゅう えいしん 劉 珮辰	あや さほこ 綾 彩凡子	はるた ひろみ 春田 宏美	しらい いぐえ 白井 郁絵
えひめけんりつまつやまみなみこうとうがっこう 愛 媛 県 立 松 山 南 高 等 学 校	愛媛県	いわみ ひなき 岩見 光菜生	かんの ゆいな 菅野 結菜	ふくはら ゆうか 福原 優果	ひがしやま ひかる 東山 ひかる	まつした よしゆき 松下 吉之
さがけんりつからつひがしこうとうがっこう 佐 賀 県 立 唐 津 東 高 等 学 校	佐賀県	えがわ かな 江川 叶苗	あそう さき 麻生 紗希	おかべ はるな 岡部 春奈	まつもと あいは 松本 愛羽	みやがわ あつし 宮川 淳

〔 第 2 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
ほっかいどうあさひかわひがしこうとうがっこう 北 海 道 旭 川 東 高 等 学 校	北海道	どもん ひより 土門 ひより	よこやま にの 横山 仁乃	さいとう みのり 齋藤 穂	こばやし こざくら 小林 小桜	かみぐち てつや 上口 徹也
ふくしまけんりついわきこうとうがっこう 福 島 県 立 磐 城 高 等 学 校	福島県	おおもり みう 大森 美羽	さとう あい 佐藤 あい	たかはぎ かりん 高萩 華凜	おの はるか 小野 春花	ふなばし ひろゆき 船橋 洋行
さいたまけんわこうこくさいこうとうがっこう 埼 玉 県 和 光 国 際 高 等 学 校	埼玉県	みやおか りさ 宮岡 里彩	えぐち りな 江口 莉愛	たけがま かのん 嶽釜 花音	こんどう りせ 近藤 倫世	たきしま あきやす 瀧嶋 明康
かながわけんりつあさみぞだいいちこうとうがっこう 神 奈 川 県 立 麻 溝 台 高 等 学 校	神奈川県	ほさか はな 保坂 羽那	かくた ゆめ 角田 優芽	なががわ みゆう 中川 未悠	つちだ ひろな 土田 寛菜	まさふみ 高田 雅文
いしかわけんりつかなざわにすいこうとうがっこう 石 川 県 立 金 沢 二 水 高 等 学 校	石川県	ちゅうじょう りこ 中條 理子	なら さはな 奈良 咲花	むらなか そら 村中 空來	ささじま みなみ 笹島 みなみ	かわかみ ようじろう 川上 洋次郎
きょうとふりつさがのこうとうがっこう 京 都 府 立 嵯 峨 野 高 等 学 校	京都府	ふじい りほ 藤井 梨歩	まつもと かな 松本 葉奈	まえかわ ひびき 前川 響	ふじわら みづき 藤原 実月	ふるはし まよ 古橋 万葉
のーとるだむせいしんこうとうがっこう ノ ー ト ル ダ ム 清 心 高 等 学 校	広島県	まめだ みゆき 豆田 深雪	まえた わかな 前田 和佳奈	たけとも ゆあ 竹友 結愛	やまもと りほ 山本 里歩	やすもり えいご 安森 英悟
こうちけんりつこうちおうてまえこうとうがっこう 高 知 県 立 高 知 追 手 前 高 等 学 校	高知県	やすおか ももか 安岡 桃香	わけじま ゆう 分島 優	はまぐち ほのか 濱口 保乃加	おかもと かのん 岡本 華音	いしかわ りつこ 石川 律子

〔 第 3 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
いばらきけんりつみとだいいちこうとうがっこう 茨 城 県 立 水 戸 第 一 高 等 学 校	茨城県	すずき りの 鈴木 莉乃	おおもり みさこ 大森 美沙子	くろだ みゆ 黒田 美唯	きくち ちえ 菊池 千恵	あおき ひでのり 青木 秀則
ちばけんりつちばひがしこうとうがっこう 千 葉 県 立 千 葉 東 高 等 学 校	千葉県	みやもと まひろ 宮元 茉優	たかまる りほ 高丸 里穂	みやけ ののは 三宅 希々葉	おおた はるな 太田 晴菜	さなだ たけひこ 眞田 武彦
ふくいけんりつたけふこうとうがっこう 福 井 県 立 武 生 高 等 学 校	福井県	しばや ちかほ 渋谷 知夏帆	きしもと りさ 岸本 梨沙	たけうち まなか 竹内 愛華	まつもと まなか 松本 麻奈可	あかし ひであき 明石 英章
しずおかけんりつふじこうとうがっこう 静 岡 県 立 富 士 高 等 学 校	静岡県	おおとも ももか 大友 萌々佳	おきた ももか 置田 百香	まつむら はるな 松村 陽菜	やまだ すみれ 山田 純怜	もろと あきら 諸戸 明
とっとりけんりつとっとりにしこうとうがっこう 鳥 取 県 立 鳥 取 西 高 等 学 校	鳥取県	やまね きょうこ 山根 京子	すみ あいこ 角 愛子	はせ あきこ 長谷 昭子	やまもと あき 山本 明希	まえた たかゆき 前田 孝行
やまぐちけんりつほうふこうとうがっこう 山 口 県 立 防 府 高 等 学 校	山口県	あきやま れいな 秋山玲奈	のまり りさこ 野間理佐子	うちだ りな 内田梨渚	ふなき はるほ 船木 晴帆	かたおか やすひこ 片岡 泰彦
ふくおかけんりつしゅうゆうかんこうとうがっこう 福 岡 県 立 修 猷 館 高 等 学 校	福岡県	なかむら りの 中村 理乃	くろだ まゆか 黒田 真優香	もりやま ゆり 森山 由里	はらだ かな 原田 佳奈	かじ ゆきこ 梶 由紀子
くまもときたこうとうがっこう 熊 本 県 立 熊 本 北 高 等 学 校	熊本県	みやべ りこ 宮部 莉子	ばば ことみ 馬場 琴海	かわむら みお 河村 美桜	じょう かずは 城 和葉	はまちか だいすけ 濱近 大輔

〔 第 4 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
あ お も り け ん り つ は ち の へ こ う こ う 青 森 県 立 八 戸 高 等 学 校	青森県	とき ひおり 土岐 妃桜里	でがわ いつか 出川 いつか	つばた はな 坪田 芭菜	いとう ゆき 伊藤 雪	よしだ なおまさ 吉田 直正
あ き た け ん り つ あ き た こ う と う が つ こ う 秋 田 県 立 秋 田 高 等 学 校	秋田県	はたけやま ここみ 畠山 心美	もり りょう 森 涼	さとう さん 佐藤 サン	なかやま ちひろ 仲山 千尋	にしむら こうへい 西村 航平
ぐ ん ま け ん り つ た か さ き じ ょ し こ う と う が つ こ う 群 馬 県 立 高 崎 女 子 高 等 学 校	群馬県	まちだ ちえり 町田 千笑	ねぎし めい 根岸 明依	いしぐれ えみり 石樽 笑李	はやし みずき 林 瑞葵	たきぐち あつと 滝口 諄人
な が の け ん ま つ も と あ が た が お か こ う と う が つ こ う 長 野 県 松 本 県 ケ 丘 高 等 学 校	長野県	すぎもと りさ 杉本 梨紗	すみよし さら 住吉 桜空	ふしみ ももか 伏見 百々花	まるやま さき 丸山 桜季	かなざわ だいすけ 金澤 大典
み え け ん り つ か ん べ こ う と う が つ こ う 三 重 県 立 神 戸 高 等 学 校	三重県	はだ むつき 羽田 睦月	なかの みつは 中野 光葉	さかぐち しおり 坂口 詩織	なかもと れいこ 仲本 澤子	きしだ せいじ 岸田 誠司
し ま ね け ん り つ ま つ え き た こ う と う が つ こ う 島 根 県 立 松 江 北 高 等 学 校	島根県	やまもと たまお 山本 珠緒	きだて ななみ 木建 七海	おくの まひろ 奥野 真汎	えぎ ちひろ 江木 千尋	しょうじ りょうこ 昌子 亮子
み や ざ き け ん り つ み や ざ き お お み や こ う と う が つ こ う 宮 崎 県 立 宮 崎 大 宮 高 等 学 校	宮崎県	こばやし うた 小林 咲楽	こう あきみ 黄 晶美	いしはら わかな 石原 若奈	くすはら みずほ 楠原 瑞歩	いのまた しゅういち 猪股 秀一

〔 第 5 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
み や ざ き け ん せ ん だ い さん お う こ う と う が つ こ う 宮 城 県 仙 台 三 桜 高 等 学 校	宮城県	さとう なぎさ 佐藤 風紗	しょうじ まあや 庄司 真彩	つなだ みづき 綱田 美月	さとう こはる 佐藤 小春	いけだ ひでき 池田 秀樹
や ま な し け ん り つ に ら さ き こ う と う が つ こ う 山 梨 県 立 韮 崎 高 等 学 校	山梨県	しむら あまね 志村 天音	あきやま ゆあ 秋山 結碧	たかはし ののか 高橋 温	あしざわ ゆみ 芦澤 結美	おだ たけひと 小田 雄仁
ひ ょ う ご け ん り つ な が た こ う と う が つ こ う 兵 庫 県 立 長 田 高 等 学 校	兵庫県	おだ ふうか 小田 楓佳	やまもと みゆき 山本 美優紀	きむら ゆうき 木村 優希	いわみ あいこ 岩見 愛子	よしい けんたろう 吉井 謙太郎
し ゅ う じ つ こ う と う が つ こ う 就 実 高 等 学 校	岡山県	しまだ せいな 島田 聖菜	よこやま ちひろ 横山 千尋	にえだ ゆき 仁戸田 汐姫	にしえ あゆみ 西江 歩	せのお なつき 妹尾 奈月
な が さ き け ん り つ な が さ き ほ く よ う だ い こ う と う が つ こ う 長 崎 県 立 長 崎 北 陽 台 高 等 学 校	長崎県	きむら まゆみ 木村 真有実	いりえ ゆい 入江 優衣	あさくら まいこ 朝倉 まい子	みやざき はな 宮崎 羽夏	おばた たかはる 小畑 喬晴
か ご し ま け ん か じ き こ う と う が つ こ う 鹿 児 島 県 加 治 木 高 等 学 校	鹿児島県	なかぞの すずか 中園 すず花	こじょう あゆな 小城 杏友那	わかまつ えこ 若松 絵子	おおば ゆき 大庭 夕季	かい ひさみ 甲斐 久美
ほ っ か い ど う あ さ ひ か わ き た こ う と う が つ こ う 北 海 道 旭 川 北 高 等 学 校	北海道	さかもと ななみ 坂本 菜々美	つかもと ひより 塚本 陽依里	もりもと せりな 森本 芹那	たなか あいり 田中 愛俐	とみた かずしげ 富田 一茂

〔 第 6 班 〕

学 校 名	都道府県	リーダー名	選 手 名			監督名
や ま が た け ん り つ や ま が た に し こ う と う が つ こ う 山 形 県 立 山 形 西 高 等 学 校	山形県	わたなべ にこ 渡辺 仁胡	すずき しあん 鈴木 心碧	さくらい きょうか 櫻井 京佳	なかいえ ゆき 中家 由貴	かめい まさひこ 亀井 昌彦
に い が た け ん り つ な が お か こ う と う が つ こ う 新 潟 県 立 長 岡 高 等 学 校	新潟県	なぐも わか 南雲 和香	にしやま わか 西山 和花	しょうじ ひかり 東海林 暁	せしも なずな 瀬下 なずな	いちむら ぜんや 市村 善也
と や ま け ん り つ と や ま こ う と う が つ こ う 富 山 県 立 富 山 高 等 学 校	富山県	たかもり りょうこ 高森 棕子	くぼた りさ 窪田 吏紗	かわむら あんじゅ 河村 安珠	ますやま あおい 増山 碧	かとう けいこ 加藤 桂子
あ い ち け ん り つ お か ざ き こ う と う が つ こ う 愛 知 県 立 岡 崎 高 等 学 校	愛知県	なかえ わかな 中江 和奏	みうら あん 三浦 あん	おおびき りお 大引 理央	わたなべ ひな 渡邊 陽奈	こじま ようへい 小島 洋平
じ ょ う し ょ う け い こ う が く え ん こ う と う が つ こ う 常 翔 啓 光 学 園 高 等 学 校	大阪府	はやみ ゆうか 速水 結花	やまぞえ とうこ 山添 桃瑚	やまぞえ りこ 山添莉瑚	きたむら ゆり 北村 優莉	きただ ひろあき 北田 広明
と く し ま け ん り つ い け だ こ う と う が つ こ う 徳 島 県 立 池 田 高 等 学 校	徳島県	おおにし ひかる 大西 ヒカル	やまぐち かの 山口 佳乃	こんどう せいか 近藤 青歌	しのはら ひなた 篠原 ひなた	しんくぼ さとし 新久保 諭
お お い た け ん り つ た け た こ う と う が つ こ う 大 分 県 立 竹 田 高 等 学 校	大分県	ごとう ひなこ 後藤 ひな子	すずき あい 鈴木 愛依	べつぶ こいろ 別府 瑚彩	ふなくし りこ 船串 莉瑚	たかはし ゆうしょう 高橋 裕昇

5. 都道府県別別出場校一覧

番号	都道府県	A 隊（団体男子）		B 隊（団体女子）	
		学校名	監督名	学校名	監督名
1	北海道	北海道旭川東高等学校	中川 清文	北海道旭川東高等学校	上口 徹也
2	青森県	青森県立八戸高等学校	鳴海 暁	青森県立八戸高等学校	吉田 直正
3	岩手県	岩手県立盛岡第一高等学校	廣瀬 謙三	岩手県立盛岡第一高等学校	佐藤 幸久
4	宮城県	宮城県吉川高等学校（出場辞退）		宮城県仙台三桜高等学校	池田 秀樹
5	秋田県	秋田県立秋田高等学校	菊地 文雄	秋田県立秋田高等学校	西村 航平
6	山形県	山形県立酒田東高等学校	樋口 駿	山形県立山形西高等学校	亀井 昌彦
7	福島県	福島県立福島東高等学校	馬場 淳平	福島県立磐城高等学校	船橋 洋行
8	茨城県	茨城県立水戸第一高等学校	三宅 正隆	茨城県立水戸第一高等学校	青木 秀則
9	栃木県	栃木県立大田原高等学校	高梨 和幸		
10	群馬県	群馬県立前橋高等学校	手島 直樹	群馬県立高崎女子高等学校	滝口 諄人
11	埼玉県	埼玉県立狭山工業高等学校	橋本 広大	埼玉県立和光国際高等学校	瀧嶋 明康
12	千葉県	千葉県立千葉高等学校	清水 孝高	千葉県立千葉東高等学校	眞田 武彦
13	東京都	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	増山 秀樹	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	竹林 和彦
14	神奈川県	神奈川県立平塚中等教育学校	伊藤 伸也	神奈川県立麻溝台高等学校	高田 雅文
15	山梨県	山梨県立北杜高等学校	小野 勝仁	山梨県立韮崎高等学校	小田 雄仁
16	新潟県	新潟県立長岡高等学校	二挺木貴幸	新潟県立長岡高等学校	市村 善也
17	長野県	長野県屋代高等学校	三石 達也	長野県松本県ヶ丘高等学校	金澤 大典
18	富山県	富山県立富山高等学校	圓山 圭	富山県立富山高等学校	加藤 桂子
19	石川県	石川県立金沢泉丘高等学校	藤澤 友大	石川県立金沢二水高等学校	川上洋次郎
20	福井県	福井県立武生高等学校	林 昭彦	福井県立武生高等学校	明石 英章
21	静岡県	静岡県立沼津東高等学校	玉城 大梧	静岡県立富士高等学校	諸戸 明
22	愛知県	豊川高等学校	佐橋 秀男	愛知県立岡崎高等学校	小島 洋平
23	三重県	三重県立神戸高等学校	西 和典	三重県立神戸高等学校	岸田 誠司
24	岐阜県				
25	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	笠谷 竜太	滋賀県立東大津高等学校	畦崎 光
26	京都府	京都府立嵯峨野高等学校	山室 浩二	京都府立嵯峨野高等学校	古橋 万葉
27	大阪府	大阪府立天王寺高等学校	平岡 郁男	常翔啓光学園高等学校	北田 広明
28	兵庫県	兵庫県立柏原高等学校	辻野 彰一	兵庫県立長田高等学校	吉井謙太郎
29	奈良県	奈良県立郡山高等学校	木山 康史	奈良県立高田高等学校	青木秀雅代
30	和歌山県	和歌山県立桐蔭高等学校	若松 慶樹	和歌山県立田辺高等学校	山本 俊哉
31	鳥取県	鳥取県立米子工業高等学校	橋本 隆宏	鳥取県立鳥取西高等学校	前田 孝行
32	島根県	島根県立松江北高等学校	富田 一志	島根県立松江北高等学校	昌子 亮子
33	岡山県	岡山県立岡山操山高等学校	今井 和彦	就実高等学校	妹尾 奈月
34	広島県	学校法人上智学院 広島学院高等学校	下前 知義	ノートルダム清心高等学校	安森 英悟
35	山口県	山口県立防府高等学校（出場辞退）		山口県立防府高等学校	片岡 泰彦
36	香川県	香川県立丸亀高等学校	白川 直美	香川県立丸亀高等学校	白井 郁絵
37	徳島県	徳島県立つるぎ高等学校	檜 茂広	徳島県立池田高等学校	新久保 諭
38	愛媛県	愛媛県立松山南高等学校	永井 秀樹	愛媛県立松山南高等学校	松下 吉之
39	高知県	高知県立高知追手前高等学校	金岡 展弘	高知県立高知追手前高等学校	石川 律子
40	福岡県	福岡県立修猷館高等学校	楠田 和宏	福岡県立修猷館高等学校	梶 由紀子
41	佐賀県	佐賀県立鳥栖工業高等学校	土井 優志	佐賀県立唐津東高等学校	宮川 淳
42	長崎県	長崎県立長崎北陽台高等学校	岩本 勇太	長崎県立長崎北陽台高等学校	小畑 喬晴
43	熊本県	熊本県立熊本北高等学校	井澤 俊樹	熊本県立熊本北高等学校	濱近 大輔
44	大分県	大分県立竹田高等学校	小野 淳貴	大分県立竹田高等学校	高橋 裕昇
45	宮崎県	宮崎県立宮崎大宮高等学校	杉田 岳士	宮崎県立宮崎大宮高等学校	猪股 秀一
46	鹿児島県	鹿児島県立加治木高等学校	鮫島 修	鹿児島県立加治木高等学校	甲斐 久美
50	北海道	北海道旭川北高等学校	岡崎 知之	北海道旭川北高等学校	富田 一茂

6. 令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会審査員長講評

審査員長 松本 至巨
(東京学芸大学附属高等学校)

「轟かせ魂の鼓動 北の大地へ大空へ」のスローガンの下、8月7日から今日までの5日間渡って行われた 翔び立て若き翼 北海道総体 2023 令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会 第 67 回全国高等学校登山大会は、36 年ぶりにこの北海道で行われました。北海道の真ん中に聳える大雪山系と十勝岳連峰を抱く東川町、上川町、美瑛町、上富良野町を会場に、全国から山を愛する高校生が集まり、登山の技術力を試す大会が繰り広げられました。

みなさんは今回北海道を訪れて、国土面積の約5分の1を占めるその広さを実感したと思います。その広大な大地にある山々も雄大で、その大きさに圧倒されたのではないのでしょうか。今大会では、旭岳と北鎮岳、十勝岳などの名峰を3日間に分けて訪れる予定でしたが、天候等の影響で上ホロ・十勝岳コースは一部縮小となり、残念ながら火山活動が作り出した荒々しい風景が広がる十勝岳には行けませんでした。翌日の黒岳・北鎮岳・裾合平コースは北海道らしい長大なコースでしたが、雲が切れると遠くのおやかな山並みが望め、足下にはチシマキンバイなどの可憐な花が見られ、疲れが癒されたことと思います。昨日は北海道最高峰の旭岳を目指しましたが、予想以上の暑さと姿見の池からの急な登りにたいへん苦しめられ、北海道の自然の厳しさを感じさせられたのではないかと思います。

大会では、開催地の4町をはじめ地元北海道のみなさんにたいへんお世話になりました。大会開催が決まってから長い期間にわたって準備をしていただき、登山道の維持・管理をはじめ、さまざまな施設の利用などにおいて多大なご協力を賜りました。おかげさまで好天時はもちろん、天候が安定しない時も安全に大会を実施することができました。大会を支えていただいたみなさまにこの場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

今大会は、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症が5類感染症に移行して初めて行われたインターハイとなりました。昨年まで実施を控えていた炊事も復活し、2019 年の宮崎大会以来、4年ぶりに全面実施の大会となりました。健康管理などを綿密に行うなど、選手、監督のみなさんの協力によって予定していた日程を無事終えることができました。選手、監督のみなさんにも感謝いたします。

次に、審査にあたった審査員の先生方の報告をもとに、いくつかの項目について大会の講評をいたします。

最近になってようやく、学校での部活動が以前のように盛んに行われるようになってきたと思いますが、山を楽しむために体力づくりは今後も欠かさず行ってください。そしてできるだけ多くの山行に参加して、山の歩き方や山での生活を学んでください。山の経験が増えると、装備の使い方や必要性を理解できるようになります。今大会で経験したような厳しい環境にも対応できる力が身に付きます。体力があれば、周りの景色を楽しむことができますし、周囲の人や自然にも優しくなれます。今大会中、チーム内で辛そうなメンバーを周りのメンバーが励ましていたり、中には他のチームを心配して声をかけていた選手もいたと山中を巡回していた審査員から聞きました。素晴らしいことだと思います。みなさんも体力をつけて周辺に配慮できる余裕のある山行を楽しめるようにしてください。

装備について、大会本部から持参するように連絡があったレスキューシートや湯沸かしのできる金属食器等はほぼ全てのチームが所持していましたが、登山部報に書かれている大きさ・量のテーピングのないチームがありました。防水については、同じく登山部報に示しましたので確認してください。

設営では、作業中に自分のチームのエリアからポールがはみ出すという場面が散見されました。ペグを打ちすぎて張り綱の一部が土の中にめり込んでしまったり、フライを強く張りすぎて出入り口のファスナーにかなり負担がかかっていたチームも見られました。また、次の山行で快適な幕営生活が送れるように、テントは使ったら必ず掃除をするなどメンテナンスをするようにしてください。

今大会では4年ぶりに炊事審査を実施しました。感染症拡大の影響で炊事については制限がされるなどしたため、炊事に慣れていない選手がいたかもしれません。コンロの使い方はしっかりと身につけておきましょう。また、食料の管理については慎重に行ってください。特に要冷蔵の食料を利用することは控えてください。

天気図では、放送された高気圧・低気圧や等圧線の緯度・経度がずれて描かれているものが見られました。放送された経緯度は天気図を作成する上では数少ない貴重なデータです。有効に活用してください。各地の天気について、気温や気圧の書き方、風向・風力の示し方が正しくない学校がありました。このような天気図作成の際の約束については登山部報に書かれています。天気図作成の練習を始める前に必ず確認するようにしましょう。今回の天気図は台風もなく、比較的描きやすい日時のもを課題に選んでいただきましたので、例年よりも減点のないチームが多かった一方、減点の多いチームがいくつかありました。学校に戻ったら、もう一度基礎を確認してほしいと思います。

課題テストは今年も基本的な知識を問う問題を出題しましたが、全体的に苦手としている分野があることがわかりました。共通課題では、今回コース設定がなされた山々の位置関係、山の高さ、開催自治体である北海道内での大会山域の位置といった基本的な知識を問う問題での失点が目立ちました。また、山の名称や地名の由来についても興味を持ってほしいと考えています。自然観察では、谷や火山の火口跡といった山で見られる地形を地形図で正確に読み取れていない選手が少なからずいるということがわかりました。そして、自分が登る山で多く見られる植物についても関心を持ってほしいと思います。自然災害伝承碑の地図記号を正しく理解していない選手がいましたが、これは火山地域のほか、津波などの災害の見られる沿岸部や河川の氾濫の多い平野部といったみなさんにとって身近な地域の地形図でも見られる記号ですので、必ず覚えておきましょう。救急知識では高山病と低体温症の知識が曖昧な選手が比較的多く見受けられました。今大会では低体温症の知識の必要性を強く感じたと思います。救急処置の知識はいざという時に役に立ちますので、できるだけ広く身につけておきましょう。気象知識では、北海道の気象の特徴はもちろんですが、予報第1号に記述されていた日の出・日の入りなどの天体暦についても学んでほしいと思います。このように登山ではさまざまな知識を広く知ることが必要で、それらの知識をただ覚えているだけでなく、総合的に活用できるようにしてください。

計画書の概念図には、大会の登山ルートを中心にその周辺を描いてください。予報の概念図や大会地図に示されている尾根や河川の名称は忘れずに記入してください。また、予備食をはじめ食事に関しては全て献立、カロリー、分担、重量を記載することになっていますので、もう一度登山部報を確認してほしいと思います。

行動記録は、今後の山行の貴重な資料となります。有効に活用できるように、前夜から泊まった幕営地からその日の山行が終了するまで、その日の動きを多くのページを活用して記録してください。また地点名と時刻、天気を書くだけでなく、各地点までに見てきた自然の様子や登山道の概況、天気や体調の変化などについてもできるだけ詳細に記載してください。

最後に共通して言えることは、大会前に登山部報の「全国高等学校登山大会成績評価実施要領」全般や大会本部から出される実施要項、予報を必ず読んでほしいということです。開会式後に行われた筆記審査で鉛筆や黒色でない色のボールペンを使用する、読図審査地図の地点表示が登山道に直

交する直線でない、ポイント名が山中の掲示と同じでないなどの小さなミスがいくつかのチームで見られました。登山技術の向上あるいは安全登山の普及を目指すという大会の本質とは多少異なる点ではありますが、参加する以上は大会で決められた約束事には従い、できるだけ減点されないようにしてほしいと思います。実施要領等の内容は毎年検討し、必要があれば改訂しています。最新の登山部報で大会に関する内容を確認してください。

選手のみなさん、今回の大会で訪れた大雪山系・十勝岳連峰の山を楽しむことができたでしょうか。大会で登ることができなかった十勝岳については、またの機会にぜひ訪れてほしいと思います。望岳台からの登山道の周辺にはいくつかの火口があり、時折火山性のガスの匂いが漂い、展望がよい時には火山の地形景観を近くで観察することができます。旭岳や北鎮岳のある大雪山系の9月中旬の美しい紅葉の風景は壮観ですので、この時期の訪問をお勧めします。今大会で歩いた山域のほか、前回の北海道大会で会場となった羊蹄山、世界自然遺産の知床連山、マントルを構成する橄欖岩の山として知られるアポイ岳など、広大な北海道には多くの自然豊かな素晴らしい山があります。再びこの北の大地に訪れて、いろいろな山に登ってみたいと思います。

項目別講評と審査報告

今大会では、以下の1～11の項目について「審査基準と指導目標」および「審査確認事例」に従って審査しました。

1 体力(40点)

悪天候により十勝岳温泉から上ホロカメットク山(A隊)・上富良野岳(B隊)までのピストンの行程となった上ホロ・十勝岳コースは、稜線の手前に通称三百階段とよばれる急登があるルートでしたが、どのチームもよく歩いていたと思います。黒岳・北鎮岳・裾合平コースは、リフトを降車した後の黒岳の登りがきつかったためか、わずかに体力差が観察されました。黒岳からのチーム行動中は、距離が長かったものの御鉢平展望台前の登りのほかは目立った登りはなく、各チームとも計画的に歩けたのではないかと思います。旭岳コースでは体力差が大きく見られました。姿見の池までのコースは緩やかな登りでしたが、体力的な面で苦しんでいたチームがあり、規定時間に遅れたチームもありました。さらに旭岳を目指す班行動での登りでは、晴れて気温が高くなった影響もあり、途中で離脱するチームがいくつもありました。登山行動最終日ということで、前日までの疲れが残っていた上、今年は北海道でも夜間の気温が比較的高く、テント内でしっかりと休養できなかった選手が多くいたと思います。感染症の影響でテントを利用することが減り、テント内で眠りにつけないということも多かったのではないのでしょうか。今後は山行をできるだけ多く行うなどして、さまざまな環境下で幕営生活を営み、多様な環境に対応できるようにして下さい。また、重量のあるメインザックにも耐えられるような体力づくりも必ず行ってください。

2 歩行技術(10点)

下りでスリップしてしまったチームがいくつか見られました。少し歩みにくいところで通過に時間がかかっている選手もいました。スリップしそうな下りでは小股で歩き、体の重心が不安定にならないよう注意しましょう。多くの山行を行い、いろいろな登山道を歩くことで安全に歩く方法を身につけましょう。一方、下りの登山道を小走りで通過するチームもありました。山で走るのは危険です。特に下りは思わぬ危険が待ち受けていることがあります。正しい歩き方で歩くようにして下さい。

3 装備(5点)

事前に大会本部から持参を求める連絡のあった物品はほとんどのチームが所持していましたが、どの山行でも必要とされる装備を所持していないチームが少数ですがありました。テーピングについては、持参したものの幅が狭かったり、量が少ないチームがありました。『登山部報』の「審査確認事例」に基準が示されていますので、確認してほしいと思います。昨年と同様、防水の必要な装備については「個々の」防水について審査しました。防水はしてあれば良いというものではなく、「個々に」防水をする意味があります。そのようなこともよく考えながら防水対策を綿密に行ってください。装備は安全な登山を行うための基本ですので、普段から必要な物品を忘れずに持ち、どのような環境下でも使用できるようにしておいてください。

審査した装備は以下の通り(A・B 隊共通)。

呼笛[1/1]	レスキューシート[1/1]	テーピング[7/9]
体温計[2/3]	温度計[4/3]	ツェルト[3/1]
携帯トイレ[0/0]	湯沸かしセット[2/4]	ライター[7/3]
計画書[3/3]		

※[]内の数字は装備不足と判断されたチームの数(A 隊/B 隊)

4 設営・撤収(5点)

設営の際に、自分のエリアからポールがはみ出していたチームがありました。他のチームの選手と接触する可能性がありますので注意してください。実際の山行では、大会の幕営地よりも狭いエリアで設営を行うこともあります。周囲に迷惑をかけないようにしながら行うようにして下さい。ペグを打ちすぎて張り綱の一部が土の中にめり込んでいたもの、フライの張り綱を強く張りすぎていたもの

のもありました。テントの設営は普段の校内での活動でも練習できますので、上手に設営できるように練習を積み重ねてください。また、テントの中にゴミが入っているなどしているチームもありました。山行が終わったらテントを干したり掃除をするなど、装備を長持ちさせるためにもメンテナンスが必要です。

5 炊事(5点)

コンロの使い方を再確認するとともに、コンロを使用して十分な栄養のとれるおいしい食事を作れるよう研究してください。食事については山行の内容や日数、山域の気候などを考慮して事前に綿密に計画を立てていると思いますが、計画書に書かれている通りに食料を持参し、食事を摂るようにしましょう。また、要冷凍・要冷蔵の食品は山行には不向きです。食事はその後の健康にも大きな影響を与えますので、使用する食料をよく考えて食事の計画を立ててください。

6 天気図(4点)

日本気象予報士会の方に作成していただいた講評を後方ページに掲載しました。

7 課題テスト(各4点)

共通課題では、大会山域の山の高さや位置関係、北海道内での位置などの基本事項を問う問題を作成しました。山名や地名は読めるというだけではなく、その由来についても興味を持ってほしいと思います。自然観察では、地形図から正確に地形を読み取ることができるか、大会山域で見られる植物について問いました。地形図の読図では地図記号を正確に知っていることが大切です。救急知識では高山病と、北海道の山では絶対に必要な知識である低体温症を中心に出题しました。気象知識では、北海道の気象の特徴のほか、天体暦についても聞きました。日の出・日の入りの時間は地域によって多少異なり、山行ではこれらを知っておく必要があります。

8 計画書(2点)

上ホロ・十勝岳コースの概念図で、登山ルート周辺の尾根や河川が描かれているものの、名称が書かれていないものがありました。大会地図や予報でわかる地名は忘れずに記入するようにしてください。黒岳・北鎮岳・裾愛平コースの概念図では、御鉢平を囲む尾根の描画が正確でない、御鉢平から流出する河川が描かれていないなどの減点がありました。予備食に関する記載が不完全なものが多数見られました。食料計画に記載することについては『登山部報』の審査確認事例に書いてありますので、必ず確認してください。

審査した項目は以下の通り(A・B 隊共通)。

- ・メンバー表:保護者名と電話番号の記載[98/100]
- ・日程表:8月9日のロープウェイと2つのリフトの記載[95/100]
- ・日程表:8月10日の区間ごとの行動形態の記載[89/91]
- ・概念図:上ホロ・十勝岳コースにおけるヌツカクシ富良野川とD尾根の記載[54/62]
- ・概念図:御鉢平を囲む尾根とそこにつけられた登山道、御鉢平展望台の名称とその南側の沢の記載[73/84]
- ・断面図:十勝岳と十勝岳避難小屋の記載とその間の傾斜の変化[93/93]
- ・断面図:裾合分岐の記載とそこからの登りの記載[82/82]
- ・装備:防寒具とその重量の記載[98/98]
- ・食糧計画:予備食の献立、分担の記載[61/69]
- ・救急装備表:救急絆創膏の記載[100/100]

※[]内の数字は記載率(A 隊/B 隊, 単位は%)。

9 行動記録(2点)

地点による差が大きく見られました。上ホロ・十勝岳コースで登った上富良野岳の手前の階段(通称:三百階段)はコースの概況として記載すべきものです。悪天候によるコースの変更でこの日のコースはピストンの形式になり、登った登山道を下山にも利用しました。この場合、途中の主要地点

は下山の際も主要地点となりますので、記録書1ページを確保して記載してください。黒岳・北鎮岳・裾合平コースの途中にあった中岳温泉について、地点名に「温泉」の文字が入りますが、ここでは温泉水が流れている様子や、温泉の湯を溜めた槽が見られることから、「コース概況・自然観察など」の項目にも温泉の存在を示す記入が必要です。旭岳コースの途中に広がっていた天女ヶ原の湿原は記載すべき事項ですが、付近に主要地点がないため、通過後の休憩地点、あるいは次の主要地点である姿見の池で記録することになります。記録は基本的にその日に泊まった幕営地から記載するものです。したがって、出発地となる幕営地の記録が、記録書の最初の1ページ目に記載されることになります。

審査した項目は以下の通り(A・B 隊共通)。

8月8日 ・十勝岳温泉登山口:体調の記載[90/93]

・上富良野岳手前における休憩地点:階段の記載[74/78]

・上富良野岳(A隊は往路):天気の記事[90/100]

・ヌッカクシ富良野川渡渉地点(復路):通過時刻の記載[69/74]

8月9日 ・黒岳:体調の記載[98/95]

・中岳温泉:温泉の存在に関する記載[93/80]

・裾合分岐:木道の記載[63/78]

・姿見駅(ゴール):到着時刻の記載[78/80]

8月10日 ・幕営地:出発時刻の記載[66/80]

・姿見の池:湿原(天女ヶ原)の記載[51/51]

※[]内の数字は記載率(A 隊/B 隊, 単位は%)。

10 読図技術(10 点)

初めて歩くチームでも、事前に地形図を読み込み、現地で地形や登山道の形状に注意を払って歩いていけば十分にわかる地点にポイントを設置しました。ピークやコル、尾根、谷などの地形を普段の山行から意識して歩くことが大切です。全チームの正答率は 91.3%, 17 地点全てについて正答できたのはA隊 17 チーム, B隊 13 チームでした。悪天候のため、上ホロ・十勝岳コースが短縮となったことから、1.5 点は付与点としました。

11 マナー・自然保護(5点)

今大会での減点はほぼ全てが指示違反によるものです。知識審査で鉛筆や黒色でないボールペンを用いる、読図審査の地図の地点名の表記方法が異なる、テントのフライに記名がされていないなどといったものです。登山技術の向上あるいは安全登山の普及を目指すという大会の本質とは多少異なることですが、参加する以上は大会で決められた約束事には従い、このような減点はないようにしてほしいと思います。大会前に必ず『登山部報』や募集要項をよく読んでくるようにしてください。

共通課題テスト（令和５年度 全国高校総体）

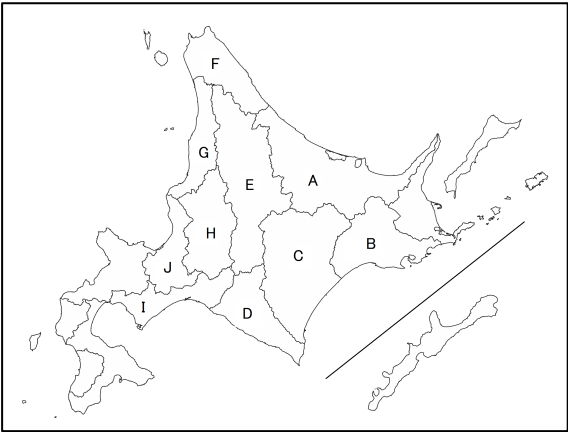
1. 次の文中の（①）から（⑥）に適する語句を下の語群から選び、記号で答えなさい。また、（☆）には
図中のA～Jから選び記号で答えなさい。（0.1点×7）

- (1) 第67回全国高等学校登山大会が行われる北海道は、日本の総面積の（①）%を占める。今大会登山競技が開催される上川総合振興局は、図中の（☆）である。

(2) 今大会足を踏み入れる大雪山系は、「北海道の（②）」と呼ばれる。

(3) 大会地図に記載されているように大雪山はアイヌ語で（③）と呼ばれている。ちなみに東川町によれば、大雪山のアイヌ語の（③）とは「（④）の地形の上につもいらっしやるもの」という意味を持つ。

(4) 北海道の地名に「〇〇別」が多い、この「別」は、アイヌ語由来で（⑤）を表す。

(5) 大会3日目は層雲峡温泉からロープウェイとリフトを乗り継いで、最初の目的地である黒岳の（⑥）合目まで一気に上ります。
- 

ア 1 1

イ 2 2

ウ 3 3

エ 川

オ 滝

カ 山脈

キ 5

ク 6

ケ 7

コ 8

サ 屋根

シ 尾根

ス 谷

セ 頂

ソ 遊ぶ庭

タ 台形状

チ ヌatapカウシペ

ツ カムイミンタラ

テ オプタテシケ

①	②	③	④	⑤	⑥	☆
イ	サ	チ	タ	エ	ケ	E

2. 次の問いに答えなさい。（0.1点×2）

(1) 旭岳・北鎮岳・十勝岳を北から順に並べたものを、次のア～カのうちから1つ選びなさい。

- ア 旭岳・北鎮岳・十勝岳

イ 旭岳・十勝岳・北鎮岳
- ウ 北鎮岳・旭岳・十勝岳

エ 北鎮岳・十勝岳・旭岳
- オ 十勝岳・旭岳・北鎮岳

カ 十勝岳・北鎮岳・旭岳

(2) 次の①～⑥の山頂を標高の高い順に並べ、記号で答えなさい。

- ① 旭岳 ② 上富良野岳 ③ 上ホロカメットク山 ④ 北鎮岳 ⑤ 黒岳 ⑥ 十勝岳

(1)	(2)
ウ	① → ④ → ⑥ → ⑤ → ③ → ②

3. 次の表は大会本部が示している行動の形態について、各コースで実施されるものには○を、実施されないものには×を記入したものである。このア～シのうち、誤っているものを3つ選び、表中の各欄に示した記号で答えなさい。(0.1点×3)

コース	メインザック行動	班行動	チーム行動	パーティー行動
上ホロ・十勝岳 縦走コース	ア ○	イ ○	ウ ×	エ ○
黒岳・北鎮岳・裾合平 縦走コース	オ ×	カ ○	キ ○	ク ×
旭岳コース	ケ ×	コ ×	サ ○	シ ○

エ	ケ	コ
---	---	---

4. 次の予報1号にある「北海道登山をするにあたって」に書かれている内容として正しいものには○、間違っているものは×を答えなさい。(0.1点×4)

- ① ヒグマの方がヒトの気配などに敏感で、嗅覚なども発達しているので、遠くからこちらの存在を知らせるようにすることが大切である。
- ② 山中を問わず山野の水の飲用は、非常にまれだが、野生動物（主にキタキツネなど）の糞便由来の寄生虫エキノコックスをもらう可能性がある。沢などの水は、煮沸しての飲用をお勧めする。
- ③ ほとんどが私有林であり、台風被害の復旧遅れや、そのほかの理由で林道入口が施錠されていることがある。
- ④ 北海道では表大雪、十勝岳連峰、利尻山、羊蹄山などの有名な山域以外でも、山中には避難小屋が多く、有料でいつでも利用することができる。

①	②	③	④
○	○	×	×

5. 次の地名の読みをひらがなで答えなさい。(0.1点×4)

- ① 夫婦岩 ② 裾合分岐 ③ 鋸岳 ④ 安足間岳

①	②	③	④
めおといわ	すそあいぶんき	のこぎりだけ	あんたろまだけ

	都道府県番号	都道府県名	学 校 名	担当	得点(2点満点)
□A隊 □B隊				□自然観察 □救急 □気象	

共通課題（令和5年度全国高校総体）

自然観察知識課題テスト（令和５年度全国高校総体）

1. 次の図は上ホロ・十勝岳縦走コースを含む地形図の一部を示したものである。これを見て以下の問いに答えなさい。（0.1点×4）

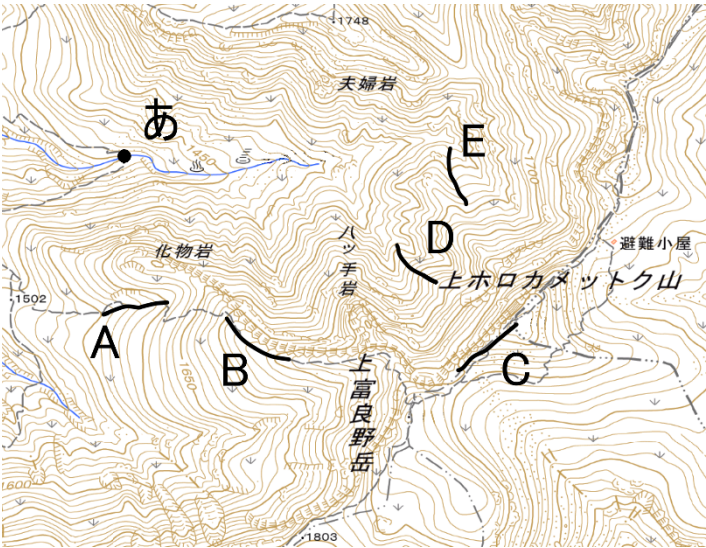
(1) 図中のA～Eのうち、谷のみの組み合わせを示したものをア～エから1つ選び、記号で答えなさい。

- ア AB イ AC ウ AD エ AE
オ BC カ BD キ BE ク CE

(2) 以下の文章の{ }内に当てはまる語句を1つ選び記号で答えなさい。

今大会のコースでは、地点「あ」において、
[①ア：上ホロカメットク川 ・ イ：美瑛川 ・
ウ：ヌッカクシ富良野川] を
[②ア：右岸から左岸に ・ イ：左岸から右岸に]
渡る。

(3) 上富良野岳から十勝岳までは25000分の1の地形図において9cmであった。実際の水平距離は何mであるか求めなさい。

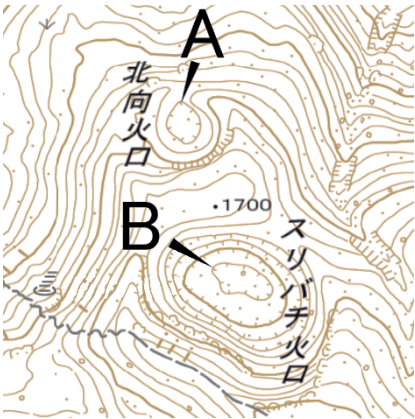


(1)	エ	(2)	①	②	(3)	③
			ウ	ア		2 2 5 0 m

2. 次の図は、25000分の1の地形図の大会コース周辺を拡大したものである。以下の文章のうち、正しいものを選び記号で答えなさい。（0.1点×1）

- ア. 地点Aの標高は、地点Bの標高と同じ
イ. 地点Aの標高は、地点Bの標高より10m高い
ウ. 地点Aの標高は、地点Bの標高より20m高い
エ. 地点Aの標高は、地点Bの標高より10m低い
オ. 地点Aの標高は、地点Bの標高より20m低い

エ



3. 黒岳を通るコースに関する次の文章中の、①から④で示した下線部と同じ意味の登山用語を語群から選んで記号で答えなさい。（0.1点×4）

お鉢の縁に沿って、①岩石が崩壊しがらがらしたところを登ると、右手すぐ下に雪解け水が流れている。やがて、北鎮分岐までつながる②夏になっても沢や斜面に残雪がある場所を通る。この場所は、雪質が堅く傾斜もあるので、③ひざから下を振り子のようにふって靴をつま先から雪に食い込ませ、足場を作りながら歩く。このあと、④北鎮分岐から北鎮岳まで往復した。

- ア. ザレ場 イ. ガレ場 ウ. ゴルジュ エ. 雪庇 オ. 雪洞 カ. 雪渓
キ. トレース ク. キックステップ ケ. トレッキング コ. セルフビレイ
サ. コル シ. トラバース ス. ピストン セ. 縦走

①	②	③	④
イ	カ	ク	ス

4. 以下の文章の{ }内に当てはまる語句を1つ選び記号で答えなさい。(0.1点×3)

- (1) 旭岳ロープウェーは、{①ア：上川町 ・ イ：上富良野町 ・ ウ：東川町 ・ エ：美瑛町}にある。
 (2) 旭岳からの眺望で、北鎮岳は{②ア：北東 ・ イ：北西 ・ ウ：南東 ・ エ：南西}方向に見える。
 (3) 旭川出身の三浦綾子の『泥流地帯』の題材になった山は、{③ア：黒岳 ・ イ：北鎮岳 ・ ウ：旭岳 ・ エ：十勝岳}である。

①	②	③
ウ	ア	エ

5. 以下の各問いに答えなさい。(0.1点×8)

- (1) 「ヨツバシオガマ」と「エゾノツガザクラ」の写真を、次のア～エのうちから1つずつ選び、記号で答えなさい。

ア



イ



ウ



エ

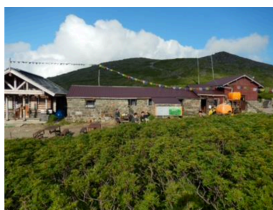


- (2) 「黒岳石室」の写真を、次のア～エのうちから1つ選び、記号で答えなさい。

ア



イ



ウ



エ



- (3) 旭岳の標高を答えなさい。

- (4) 次の①～④の地図記号の示しているものをあとの語群から選び、記号で答えなさい。

①	②	③	④

【語群】ア. 記念碑 イ. 自然災害伝承碑 ウ. 電子基準点 エ. 水準点 オ. 市区町村界
 カ. 都府県界 キ. 北海道総合振興局・振興局界 ク. 湿地 ケ. 万年雪 コ. 砂礫
 サ. 噴火口・噴気口 シ. 温泉 ス. 煙突 セ. ハイマツ地 ソ. 笹地 タ. 荒地

	ヨツバシオガマ	エゾノツガザクラ	(2)	(3)		①	②	③	④
(1)	イ	ア	イ	2290.9m OR 2291	(4)	サ	セ	イ	キ

☐ A隊 ☐ B隊	都道府県番号	都道府県名	学 校 名	得点 (2点満点)

自然観察知識課題 (令和5年度全国高校総体)

救急知識課題テスト（令和5年度全国高校総体）

1. 高山病の中で、急に発症するものには、A 高地肺水腫、B 急性高山病、C 高地脳浮腫の3つがある。これらについて以下の問いに答えなさい。（0.1点×9）

(1) A～Cの3つの高山病の症状として当てはまるものをア～ウのうちから1つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. 最初は、急に息切れが激しくなったり、仲間のペースについていけない、などという症状から始まる。トイレへ行くのさえも、息切れが激しくなる。息切れ、咳が典型的で、進行するとピンク色の泡状の痰が出てくる。発熱を伴うと感冒と区別しにくい場合もある。

イ. ファスナーを締める、靴のヒモを結ぶなどの動作に時間がかかる。まっすぐ歩けず、よろめく。意識はあるが、いつもと違うなどの変化がある。

ウ. 主なものは、頭痛、吐き気、めまい、疲労、睡眠障害などで、高度順応が不十分な高度に到着後、通常2～12時間で始まる。順応すれば1～3日で改善する。

(2) A～Cの3つの高山病の中で致命的になり、緊急の対応を要するものを全て答えなさい。

(3) 以下の文の{ ① }～{ ⑤ }に最も適する語句を選び、記号で答えなさい。

軽度の頭痛と吐き気があった。疲労やめまいの症状はなく、睡眠はいつものようにとれた。この症状の時のレイクルイーズスコアを計算すると、{ ① ア：1点 ・ イ：2点 ・ ウ：3点 ・ エ：4点 }となり、{ ② ア：急性高山病でない ・ イ：軽症 ・ ウ：中等症 ・ エ：重症 }と考える。

軽症の急性高山病には「努力呼吸」が有効である。「努力呼吸」とは、{ ③ ア：10cm ・ イ：30cm ・ ウ：60cm ・ エ：1m }先のロウソクの火を、{ ④ ア：1秒 ・ イ：3秒 ・ ウ：20秒 ・ エ：30秒 }かけてゆっくり吹き消すような呼吸を繰り返すことである。これにより肺の中の圧を高めることで、死腔を減らすことにより酸素の取り込みを上げる。

高地肺水腫や高地脳浮腫の処置では、ともに{ ⑤ ア：下山 ・ イ：酸素吸入 ・ ウ：投薬 ・ エ：休養 }が最も必要な措置である。

	A	B	C				①	②	③	④	⑤
(1)	ア	ウ	イ	(2)	A, C	(3)	イ	イ	イ	イ	ア

2. 低体温症について、以下の文を読み後の問いに答えなさい。（0.1点×6）

2009年7月にトムラウシ山でツアー客を含む9名が低体温症で死亡する大惨事が発生した。低体温症とは、通常内臓は{ ① ア：36 ・ イ：38 ・ ウ：40 }℃程度あるが、脳や内臓（深部体温）が{ ② ア：31 ・ イ：33 ・ ウ：35 }℃以下になった状態である。

冷たい雨の降り続く日に、本大会の黒岳・北鎮岳・裾合平縦走コースのように長いルートを歩いていて、行動中のメンバーが休憩中に{ ③ ア：発汗 ・ イ：頭痛 ・ ウ：震え }の症状を示した場合は、「低体温症」の「なりかけ」と考え、症状が進んでしまうことが無いように、A 対応を始めなくてはならない。

(1) 文中の{ ① }～{ ③ }に最も適する語句を選び、記号で答えなさい。

(2) 下線部Aの低体温症の対応④～⑥のうち、正しいものには○、間違っているものには×を答えなさい。

④ 意識が正常でないと認められたので、身体をさすった。

⑤ 低体温症への処置には、折畳式水筒で湯たんぽをつくり手足を温めた。

⑥ 食べることができそうだったので、カップラーメンを作り食べさせた。

	①	②	③		④	⑤	⑥
(1)	イ	ウ	ウ	(2)	×	×	○

3. 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。 (0.1点×5)

本大会中、上ホロカメットク山の下りで転倒した。足首をひねり、腕にすり傷を負っている。腕の傷口は土が付着していた状態で出血していたので、急いで A 傷口を洗浄し、B 直接圧迫での止血をおこなった。足首は腫れていたが、激しい痛みはなかったので、取り急ぎ C 足首に捻挫の処置を行った。自力での歩行が可能であったので、上富良野岳方面へとゆっくり下山した。

- (1) 下線部 A「傷口を洗浄」とあるが、その説明として**不適切なもの**を1つ選びなさい。
 ア. 洗浄では完全に滅菌できない。細菌を薄め、減らすものである。
 イ. 洗浄の際に使用する水は、飲める程度に清潔であればよい。
 ウ. 感染を防ぐため、土は綿棒などを用いてできる限り取り除く。
 エ. 挫滅傷のように出血が多い場合、止血よりも洗浄を優先する。
 オ. 少ない水での洗浄は、ペットボトルを利用した高压での洗浄がよい。
- (2) 下線部 B「直接圧迫での止血」とあるが、その方法として**不適切なもの**を1つ選びなさい。
 ア. 直接血液に触れないよう、ビニール袋で手のひらを覆って止血した。
 イ. 滅菌ガーゼがなかったので、清潔なタオルを傷口に当てて止血した。
 ウ. 止血効果を確認したかったが、何度も圧迫を解除することは避けた。
 エ. 手を離すと少しだが血が出てきたので、ひき続き止血をおこなった。
 オ. 再出血を防ぐために、傷口に伸縮しないテープを全周性に巻きつけた。
- (3) 下線部 C「足首に捻挫の処置」とあるが、その方法について説明した次の文章の空欄 { ① } ~ { ③ } に入る、語句や数字を1つずつ選び、記号で答えなさい。

外くるぶしを伸ばして靭帯を痛めた捻挫で、外くるぶしの前下に痛み、腫れがあった。まず腫れと痛みを押さえるために、{ ① ア：冷却 ・ イ：保温 ・ ウ：圧迫 }を行った。過度の{ ① }は患部の悪化を伴うため、1回につき{ ② ア：10 ・ イ：20 ・ ウ：30 }分以内に留め、痛みが再発したら再び行った。腫れをやわらげるために足首を心臓より高い位置にあげ、損傷の悪化を防ぐために副え木を用いて足首を{ ③ ア：45° ・ イ：60° ・ ウ：90° }に固定した。

					①	②	③
(1)	エ	(2)	オ	(3)	ア	イ	ウ

	都道府県番号	都道府県名	学 校 名	得点 (2 点満点)
□A隊				
□B隊				

救急知識課題 (令和5年度全国高校総体)

気象知識課題テスト（令和５年度全国高校総体）

1. 次の文章は大会山域と北海道の気象に関するものである。文中に示した①～⑩の空欄に当てはまる最も適切な語句を、ア～ウの記号で答えなさい。（0.1点×10）

7月下旬の、北海道における気象の特徴としては、{ ① ア：オホーツク気団・イ：小笠原気団・ウ：赤道気団 } に覆われることが少なく湿度が低いさわやかな気候である。このように気持ちの良い季節である反面、登山の対象としては注意すべきことがいくつか挙げられる。

まず、北海道の山々は { ② ア：大雪山系・イ：日本海側・ウ：道東地方 } を中心に積雪が非常に多い。さらに緯度が高く、夏の大雪山（旭岳）の気温は { ③ ア：阿蘇山・イ：槍ヶ岳・ウ：富士山 } とほぼ同様に低く融雪が遅れるため、登山歩道の多くが6月でも雪の下に埋まっている。7月に入ると、雪原・雪渓を残しながらの登山シーズンとなるため、残雪を歩くための装備と技術が必要となる。

次に、風の影響である。大雪山・十勝岳では、7月に平均でも { ④ ア：5・イ：10・ウ：15 } m/s の風が吹いているため、体感温度は実際の温度より下がると考えてよい。例えば、標高約200mの東川町で気温が28℃のとき、気温減率を高度1,000mにつき6.5℃低下するものとする、標高2,200mの金庫岩付近の気温は

約 { ⑤ ア：12℃・イ：15℃・ウ：18℃ } となる。さらに、ここに風速9m/sの風が吹く場合の体感温度は、

リンケの式によると { ⑥ ア：3℃・イ：6℃・ウ：9℃ } となる。したがって、風のある稜線付近に長く留まることは注意が必要である。さらに衣服が濡れている時は、わずかな風でも体熱を激しく奪うようになるため、夏山でも凍死することがある。これが原因で2009年7月に、9名のツアー客が死亡するという大惨事が

{ ⑦ ア：オプタテシケ山・イ：ニセイカウシュッペ山・ウ：トムラウシ山 } で発生している。

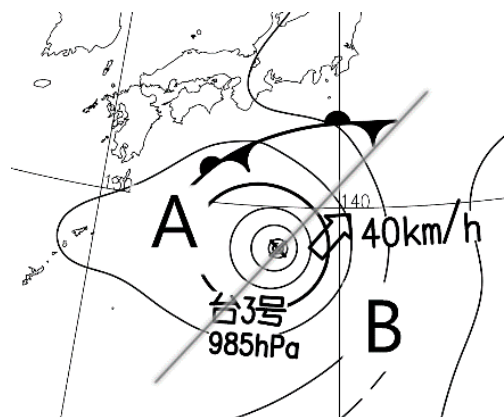
8月上旬、緯度の高い北海道の山では、東京と比べて日の出の { ⑧ ア：時間が早い・イ：時間はほぼ同じ・ウ：時間が遅い } だけでなく、昼間の長さが長いのも特徴であり、8月8日の十勝岳では昼の時間が

{ ⑨ ア：12時間18分・イ：13時間18分・ウ：14時間18分 } ある。

また、大雪山では { ⑩ ア：9月・イ：10月・ウ：11月 } に紅葉が始まり、紅葉と前後して初雪も見られるようになる。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
イ	イ	イ	イ	イ	ア	ウ	ア	ウ	ア

2. 次の文章は台風の気象に関するものである。文中に示した①～④の空欄に当てはまる最も適切な語句を記号で答えなさい。（0.1点×4）



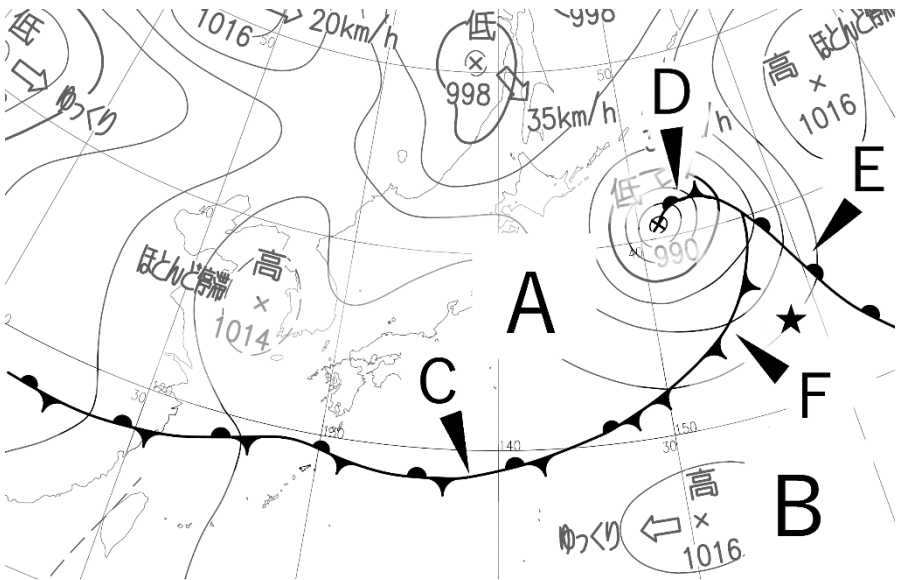
台風は熱帯地方で発生する低気圧で、風速により台風と熱帯低気圧に区別され、中心付近の最大風速が

{ ① ア：15・イ：16・ウ：17 } m/s 以上になったものを台風という。また、台風の風はその中心に向かって、{ ② ア：時計回り・イ：反時計回り } に { ③ ア：吹き込む・イ：吹き出す }。

台風の風は左図中の { ④ ア：A側・イ：B側 } で強まることが知られている。これは、台風自体の風と台風を流している一般流が合成されるからである。

①	②	③	④
ウ	イ	ア	イ

3. 下に前線に関する図を示した。以下の問いに答えなさい。 (0.1 点×6)



(1) 前線と気団について説明した、以下の文章中の空欄にあてはまる最も適切な語句を記号で答えなさい。

性質の異なった気団が接触すると、気団同士は簡単に混ざらず、その間に境界面ができる。この境界面が地上と交差した所が前線である。上図の気団Aと気団Bでは、その性質として温度が異なり、気団Bは気団Aに対して、温度が { ① ア：低い イ：同じ ウ：高い } と考えられる。

これらの前線のうち、図中Cで示した前線の名称は { ② ア：閉塞 イ：停滞 ウ：温暖 エ：寒冷 } 前線である。また、図中の記号Fの上部に示した★印の天気は { ③ ア：晴天 イ：長雨 ウ：雷雨 } になっている可能性が高いと考えられる。

①	②	③
ウ	イ	ア

(2) 前線について説明した以下の文章について、その内容が正しいものには○を、誤っているものには×を答えなさい。

- ④ 図中にEで示された前線は、時に、ひょうやあられを降らせることがある。
- ⑤ 図中にDで示された前線ができると、それを伴った低気圧は衰弱に向かう。
- ⑥ 図中にFで示された前線は、南北に上がったりと下がったりと、多少の移動がある。

④	⑤	⑥
×	○	×

	都道府県番号	都道府県名	学 校 名	得点 (2 点満点)
□A隊				
□B隊				

気象課題 (令和5年度全国高校総体)

天気図審査講評

一般社団法人 日本気象予報士会

■概況

フィリピンの東で7月28日に発生した台風6号は、沖縄付近を通過して東シナ海にぬけたあとにほぼUターンをするように進路を変えた。その後奄美大島の東でさらに北寄りに大きく進路を変えて、九州の西側を通過するという、まさに迷走台風となった。西日本から東日本はこの時期は台風による影響が大きいですが、今年の大会山域の北海道では、台風の影響はそれほど多くない。

一方、北海道では低気圧が急速に発達する場合には天気が急変し、過去には大きな遭難事故などが起きている。低気圧の急速な発達には、冬場に発生すると道内では猛烈な吹雪や大雪をもたらす、春先から初夏にかけて、および秋に発生すると、急激な気温の低下や暴風雨をもたらすため、非常に危険なものである。

今年の出題は、令和3年(2021年)4月13日12時の天気図とした。日本海には前線を伴った発達中の低気圧があり、このあと大会山域に近づいてくる。北側の沿海州付近にも前線を伴った低気圧がある。また九州から東シナ海を通り大陸にかけても停滞前線があるが、九州付近の前線が北に盛り上がった部分も低気圧または低圧部とみられるため、三つ玉低気圧のような形である。放送では、熱帯低気圧や今後発生する低気圧、霧の情報など、多くの情報が放送されているが、実際に天気図の画面上に描ける低気圧や高気圧はそれほど多くない。台風もなく、比較的書きやすい天気図であったと思う。

■審査結果詳細

審査対象天気図

令和3年(2021年)4月13日 12時

項目ごとの配点(合計4点)

各地の天気・ 船舶からの報告	高気圧・低気圧・前線	等圧線	解析・予報等
1.2 点	1.5 点	0.8 点	0.5 点

以下、審査項目ごとのポイントを示す。

審査項目1 各地の天気、船舶からの報告(配点 1.2 点)

【採点基準】

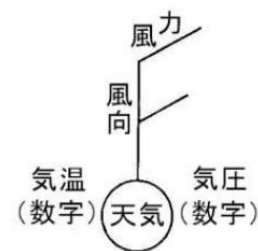
下表各地の天気の5地点と船舶からの報告1件について、風向、風力、天気、気圧、気温および船舶の位置が正確に記入されているか。審査地点には、大会山域の近くや、特徴的な気象状況の地点などを選定した。

配点: 地点ごとに配点は0.2点。誤りが1項目あればマイナス0.1点、2項目以上あればマイナス0.2点。船舶などからの報告は、位置が正しいかも採点項目。

那覇	稚内	ハバロフスク	ウラジオストク	台北	北緯 35 度 東経 146 度
西	南	西	北北西	北北西	南南東
風力2	風力5	風力4	風力7	風力1	風力6
はれ	雨	にわか雪	くもり	快晴	はれ
15hPa	06hPa	00hPa	05hPa	15hPa	26hPa
25℃	12℃	-1℃	4℃	30℃	—

《評価》

各地の天気は基本的には正確に描かれていたものが多かったが、基本的な描き方を間違えて覚えていると思われるものも、いくつか見られた。各地の天気の気圧は、天気記号の右上、気温は左上が基本となっている。記入地点が混んでいたりして記入できない場合に、わかる位置に書くのはよいが、ほとんどの地点で気圧が右下、気温が左下に書かれていたものがあつた。また、ほとんどの地点で風速の矢羽が風向に対して内側に描かれているものもあつた。まずは、『登山部報』の統一学習資料に沿っての記入をお願いしたい。



審査項目2 高気圧, 低気圧, 前線(配点 1.5 点)

●高気圧, 低気圧

【採点基準】

以下の高気圧の表記(H), 低気圧の表記(L), 位置, 中心気圧, 進行方向, 進行速度の記入が適切かどうか。

配点: 各 0.3 点。誤りが1項目あればマイナス 0.1 点, 3項目以上あればマイナス 0.3 点。

表記 低(L)	北緯 42 度 東経 135 度	気圧 998hPa	進行方向 東北東	進行速度 65km/h
表記 低(L)	北緯 49 度 東経 138 度	気圧 996hPa	進行方向 東	進行速度 45km/h
表記 高(H)	北緯 39 度 東経 108 度	気圧 1030hPa	進行方向 東南東	進行速度 30km/h

《評価》

放送で読まれた低気圧, 高気圧のうち, 天気図の枠内に描くことができるものは, 審査対象とした3つとなっている。表記や気圧はおおむね正しく描かれていたが, 位置を間違えていたり, 進行方向の矢印がずれているものが見受けられた。進行方向は 16 方位で描き, 緯線・経線の方が東西南北それぞれになる。多少の方向のぶれは許容して採点はしているが, 東のものは躊躇せずに緯線の向きに素直に矢印をつけてほしい。速度については, 単位が km/h, km については○としたが, k のみはノットと間違える可能性があるため不可とした。単位の表記のないものも不可としている。

●前線

【採点基準】

前線が適切に描かれているか, 位置や描画は正しいかを採点対象とした。描画については, 記号による描画でも色付けによる描画でもよい。

配点: 各 0.2 点。誤りが1項目あればマイナス 0.1 点, 2項目以上あればマイナス 0.2 点。

閉塞前線, 温暖前線については描画の採点対象としていない。

沿海州の低気圧に伴う前線

温暖前線の 通過位置 北緯 50 度 東経 148 度	温暖前線の 表記	寒冷前線の 通過位置 北緯 43 度 東経 133 度	寒冷前線の 表記
--------------------------------------	-------------	--------------------------------------	-------------

日本海の低気圧に伴う前線

温暖前線の 通過位置 北緯 43 度 東経 142 度	温暖前線の 表記	寒冷前線の 通過位置 北緯 33 度 東経 127 度	寒冷前線の 表記
--------------------------------------	-------------	--------------------------------------	-------------

停滞前線

通過位置 北緯 28 度 東経 126 度	通過位置 北緯 32 度 東経 132 度	通過位置 北緯 30 度 東経 136 度	停滞前線の 表記
-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-------------

《評価》

沿海州の低気圧、日本海の低気圧それぞれに温暖前線、寒冷前線が描かれるもので、放送で示された通過位置を素直に結んで、温暖前線、寒冷前線の記号を描けばよい。日本海の低気圧から伸びる寒冷前線は、風向で判断すると厳原やプサン、ウルルン島よりも南側に描かれても不自然ではないが、プサンの気温が下がりきっていないことで寒冷前線はまだ通過していないととることができるため、審査項目としては採用しなかった。

停滞前線は大陸から東シナ海を通り、紀伊半島の南まで伸びている。九州南部付近で北側に盛り上がるような形状になり、この部分はもともと低気圧があった場所になっている。描画については、北側に盛り上がった形でも、キンクのように北側にとがった形でもどちらでもよい。

審査項目3 等圧線(配点 0.8 点)

●放送等圧線

【採点基準】

放送された等圧線のうち、以下の放送位置を通過して描かれているか。

配点:0.2 点。誤りが1項目あればマイナス0.1 点。2項目以上あればマイナス0.2 点。

1016hPa の等圧線が指定された点を通っているか			
北緯 27 度 東経 140 度	北緯 35 度 東経 136 度	北緯 39 度 東経 142 度	北緯 47 度 東経 149 度

《評価》

放送等圧線は 1016hPa が読み上げられている。正しい地点を結べばよいのだが、地点そのものを間違えてプロットしてしまっているものが見受けられた。

●等圧線

等圧線がなめらかに適切に描かれているか。過不足がないか。不要な等圧線がないか。

配点:0.6 点。誤りの項目ごとにマイナス0.1 点、最大マイナス0.6 点。

日本海周辺の 1010hPa の等圧線が太く描かれていて、気圧表記があるか。
太平洋の 1020hPa の等圧線が太く描かれていて、気圧表記があるか。
日本海の低気圧とモンゴル付近の高気圧(39N, 108E)との間の等圧線の数が適切か。
1018hPa の等圧線:小名浜、銚子の間を通り、御前崎の西側を通過しているか。
1012hPa の等圧線:函館、浦河の間を適切に通過しているか。
1008hPa の等圧線:ウルルン島、プサンの間を適切に通過しているか。
等圧線の枝分かれや交差がないか。不要な等圧線が描かれていないか。
等圧線が滑らかに描かれているか。

《評価》

『登山部報』の統一学習資料では 990, 1000, 1010 など 10 の倍数の等圧線は太く描き、気圧を記入することになっている。気圧が書かれていないものがいくつかあった。

等圧線については、放送等圧線を基本として、記入した各地の天気気圧をもとに順番に引いていけば、今回の天気図であればそれほど悩まなくても引けると考えられる。

1014hPa の等圧線を見ると、松山と室戸岬の間を通り足摺岬を通過する。南西諸島付近から日本の南にかけては 1015hPa のところが多いため、1014hPa は名瀬付近から停滞前線を横切って、福江、ソウルの西に引くことが自然である。

全般的には、統一学習資料に沿ってしっかりと書かれているもの、ある程度描けているが基準どおりではないところが目立つもの、等圧線をはじめ天気図として十分に描ききれていないものなど、描画の技術の差が大きく感じられた。ぜひ統一学習資料をあらためて確認して、ほかの人が見ても理解しやすい天気図を描けるよう努力してもらいたい。

審査項目 4 解析・予報等(配点 0.5 点)

【採点基準】

解析・予報の解答時間が短いため、問題を平易にすることと、採点の客観性を明確にするため、解析と予報から計5問を選択肢(3択)から選び記号で解答する形式としている。

配点:0.5 点(各 0.1 点)

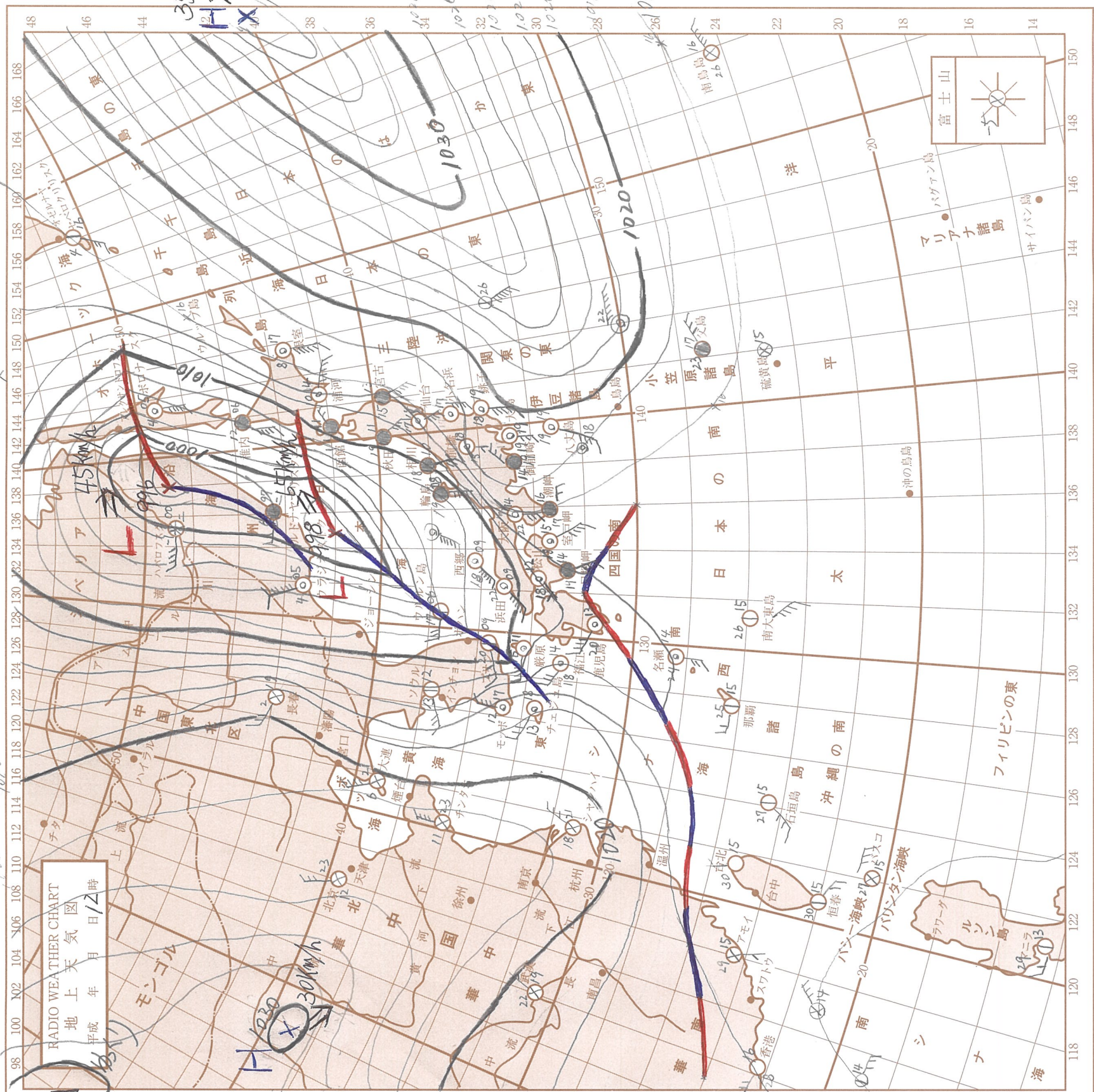
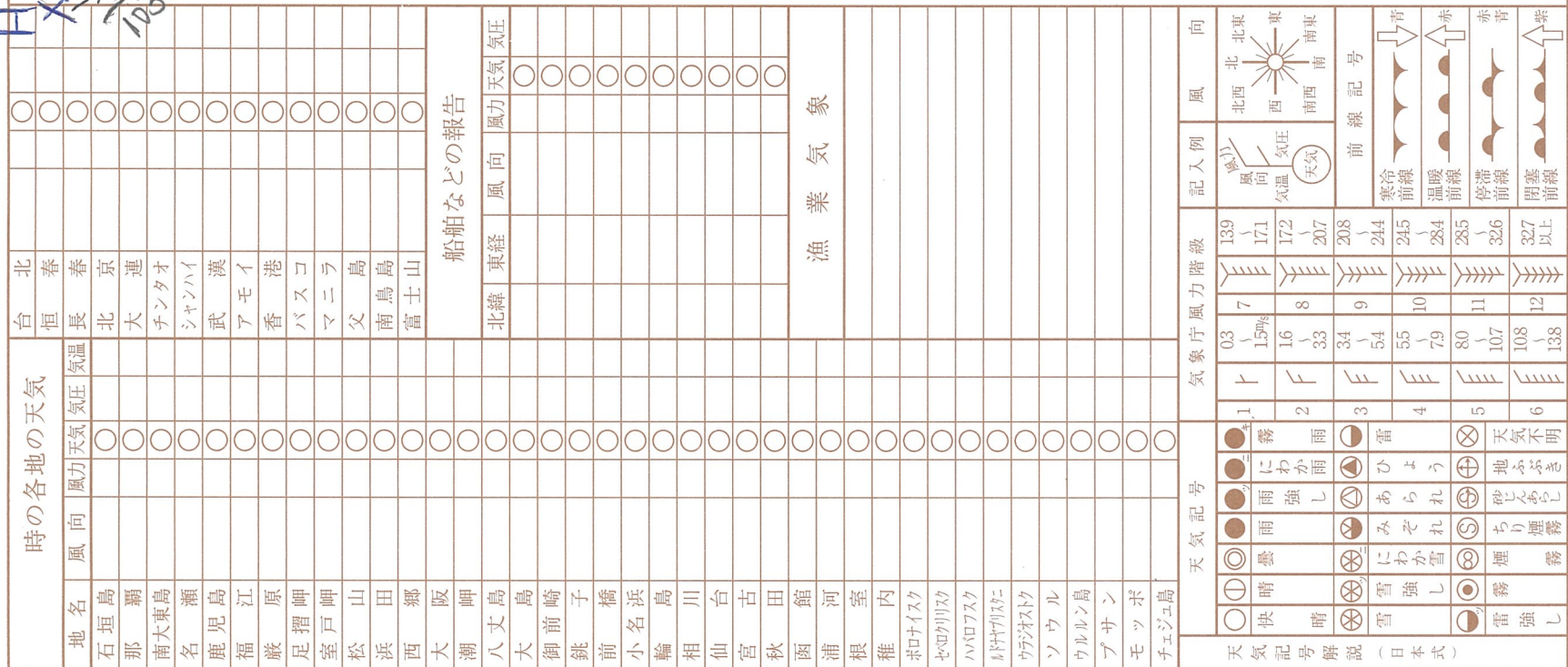
解答

- ① (ア)高気圧
- ② (イ)発達している
- ③ (イ)約 10 時間後
- ④ (ウ)北寄りの
- ⑤ (ア)急激に下がる

《評価》

天気図の解析、予報については、大会山域への影響をみて出題をしている。今回の天気図では、やはり日本海の低気圧が大会山域にどのように影響がでるのがポイントになる。

予報の③については、日本海の低気圧は東北東に 65km/h で進んでいる。低気圧の中心から大会山域までの天気図上の長さを緯度線の長さで換算すると、おおよそ6度となり、約 660km となる。このため低気圧が大会山域付近を通過するのは約 10 時間後と計算できる。低気圧の通過後は、すでに低気圧が通過したウラジオストクの風や気温の状況を見れば、風は北寄りに変わり、気温もぐっと下がることが予想できる。



令和 5 年（2023 年）度 全国高校総体 天気図審査
天気図解析・予報

作成した天気図に基づき、次の文の中①～⑤の部分について、最も適切なものの記号を答えなさい。

（１）実況解析

日本のはるか東には ① があって、東に進んでいる。日本海にある前線をもなった低気圧は、しだいに ②。

（２）予報

日本海の低気圧がそのまま進むと、大会山域付近を通過するのは、③ となる見込みである。接近するまでは南寄りの風が強く、通過後は ④ の風が強く吹く。通過とともに気温は ⑤ 見込み。

選択肢

- | | | | |
|---|--------------|-------------|---------------|
| ① | （ア）高気圧 | （イ）低気圧 | （ウ）熱帯低気圧 |
| ② | （ア）衰弱している | （イ）発達している | （ウ）温帯低気圧化している |
| ③ | （ア）約 3 時間後 | （イ）約 10 時間後 | （ウ）約 24 時間後 |
| ④ | （ア）東寄り | （イ）南寄り | （ウ）北寄り |
| ⑤ | （ア）急激に下がる | （イ）急激に上がる | |
| | （ウ）ほとんど変化しない | | |

第67回全国高等学校登山大会

団体男子(A隊) 成績一覧表

〔成績順〕

班	県番	都道府県	学校名	行動		生活技術			知識						読図 技術	マナー 自然保護	計	順位	備考
				体力	歩行	装備	設営 撤収	炊事	天気図	課題テスト			計画書	行動 記録					
										自然	救急	気象							
				40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0	4.0	4.0	2.0	2.0	10.0	5.0	100.0		
A-3	33	岡山県	岡山県立岡山操山高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.8	4.0	3.8	2.0	1.8	10.0	5.0	99.1	1	
A-5	40	福岡県	福岡県立修猷館高等学校	39.7	10.0	5.0	4.9	5.0	3.9	3.9	3.9	3.8	2.0	1.8	10.0	5.0	98.9	2	
A-5	21	静岡県	静岡県立沼津東高等学校	40.0	9.6	5.0	5.0	5.0	3.9	3.8	3.9	3.9	1.8	2.0	10.0	5.0	98.9	3	
A-4	10	群馬県	群馬県立前橋高等学校	40.0	9.7	5.0	4.8	5.0	4.0	3.7	3.9	3.8	1.8	2.0	10.0	5.0	98.7	4	
A-6	25	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	40.0	10.0	4.5	5.0	5.0	4.0	4.0	3.9	3.6	1.8	1.8	10.0	5.0	98.6	5	
A-3	3	岩手県	岩手県立盛岡第一高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	4.6	3.9	3.8	3.7	3.9	1.6	2.0	10.0	5.0	98.5	6	
A-1	42	長崎県	長崎県立長崎北陽台高等学校	40.0	10.0	5.0	4.5	5.0	4.0	4.0	3.8	3.8	1.8	1.6	10.0	5.0	98.5	7	
A-4	34	広島県	広島学院高等学校	39.7	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.9	3.8	3.9	2.0	1.4	10.0	5.0	98.4	8	
A-2	45	宮崎県	宮崎県立宮崎大宮高等学校	39.7	10.0	5.0	5.0	5.0	3.6	4.0	4.0	3.7	2.0	1.8	10.0	4.5	98.3	9	
A-1	38	愛媛県	愛媛県立松山南高等学校	40.0	10.0	5.0	4.9	5.0	3.3	3.8	3.9	3.8	2.0	1.4	10.0	5.0	98.1	10	
A-2	41	佐賀県	佐賀県立鳥栖工業高等学校	39.7	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.8	3.3	3.5	2.0	2.0	10.0	5.0	98.0	11	
A-2	1	北海道	北海道旭川東高等学校	40.0	10.0	4.5	4.9	5.0	4.0	4.0	4.0	3.8	2.0	1.6	10.0	4.0	97.8	12	
A-5	6	山形県	山形県立酒田東高等学校	39.1	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.7	3.7	3.7	1.8	2.0	10.0	5.0	97.7	13	
A-4	46	鹿児島県	鹿児島県立加治木高等学校	39.7	10.0	4.5	4.6	5.0	4.0	3.6	3.4	3.9	2.0	2.0	10.0	5.0	97.7	13	
A-2	13	東京都	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	39.7	9.6	5.0	5.0	5.0	4.0	3.9	3.5	3.1	2.0	1.8	10.0	5.0	97.6	15	
A-3	26	京都府	京都府立嵯峨野高等学校	40.0	9.3	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0	3.7	3.9	2.0	1.6	9.0	5.0	97.5	16	
A-3	39	高知県	高知県立高知追手前高等学校	39.7	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.9	3.8	3.2	1.8	1.8	9.5	5.0	97.4	17	
A-5	14	神奈川県	神奈川県立平塚中等教育学校	40.0	9.7	4.5	4.6	5.0	3.7	4.0	3.8	3.7	1.6	1.6	10.0	5.0	97.2	18	
A-4	19	石川県	石川県立金沢泉丘高等学校	39.4	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.7	3.7	3.7	1.8	1.6	9.0	5.0	96.6	19	
A-1	22	愛知県	豊川高等学校	39.7	9.7	5.0	4.9	5.0	3.4	3.5	3.7	3.6	1.6	1.6	9.5	5.0	96.2	20	
A-6	8	茨城県	茨城県立水戸第一高等学校	40.0	8.8	5.0	4.8	5.0	3.9	3.8	3.7	3.0	1.8	1.8	9.5	5.0	96.1	21	
A-4	32	島根県	島根県立松江北高等学校	39.4	10.0	5.0	5.0	5.0	3.4	3.4	4.0	3.9	1.8	1.0	9.0	5.0	95.9	22	
A-4	28	兵庫県	兵庫県立柏原高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.3	3.4	2.9	3.2	1.4	1.6	10.0	5.0	95.8	23	
A-2	20	福井県	福井県立武生高等学校	38.9	10.0	4.5	5.0	5.0	3.7	3.6	3.6	3.4	1.6	2.0	9.0	5.0	95.3	24	
A-3	37	徳島県	徳島県立つるぎ高等学校	40.0	10.0	4.0	4.5	5.0	3.8	3.0	3.3	2.8	1.6	1.8	9.5	5.0	94.3	25	
A-2	16	新潟県	新潟県立長岡高等学校	38.0	10.0	4.5	5.0	5.0	3.7	3.6	2.9	3.6	1.2	1.0	9.5	5.0	93.0	26	
A-6	50	北海道	北海道旭川北高等学校	38.8	10.0	4.0	4.8	5.0	3.1	3.7	3.4	3.7	1.4	1.2	9.0	4.5	92.6	27	
A-6	5	秋田県	秋田県立秋田高等学校	39.1	9.3	3.5	4.9	5.0	3.9	3.5	3.2	3.1	1.6	1.0	9.5	5.0	92.6	27	
A-1	15	山梨県	山梨県立北杜高等学校	40.0	10.0	4.0	4.5	5.0	3.5	2.8	3.2	2.2	1.8	0.8	9.5	5.0	92.3	29	
A-3	18	富山県	富山県立富山高等学校	37.2	9.7	4.0	4.8	5.0	3.6	3.4	3.1	3.7	1.8	1.4	9.0	5.0	91.7	30	
A-2	9	栃木県	栃木県立大田原高等学校	38.2	10.0	4.0	4.8	5.0	3.9	2.7	3.1	3.6	1.4	1.2	8.5	4.5	90.9	31	
A-4	12	千葉県	千葉県立千葉高等学校	38.3	9.6	3.5	4.0	4.6	3.3	3.5	3.2	3.9	1.8	1.4	9.0	4.5	90.6	32	
A-4	2	青森県	青森県立八戸高等学校	36.7	9.6	5.0	4.4	5.0	3.2	3.4	3.3	2.7	1.4	1.4	9.5	4.5	90.1	33	
A-6	17	長野県	長野県屋代高等学校	32.7	10.0	5.0	4.8	4.6	3.9	3.7	3.8	3.7	1.8	1.4	9.5	5.0	89.9	34	
A-2	30	和歌山県	和歌山県立桐蔭高等学校	37.5	9.7	4.0	5.0	4.2	3.6	2.6	3.4	3.5	1.0	1.0	7.5	4.5	87.5	35	
A-1	7	福島県	福島県立福島東高等学校	29.4	10.0	5.0	4.6	5.0	3.5	3.5	3.4	3.2	1.4	1.6	8.0	5.0	83.6	36	
A-5	31	鳥取県	鳥取県立米子工業高等学校	29.4	10.0	5.0	5.0	5.0	3.1	3.6	3.0	3.2	1.4	1.4	8.0	5.0	83.1	37	
A-6	44	大分県	大分県立竹田高等学校	33.3	9.3	4.0	5.0	4.6	3.5	2.3	2.5	2.6	1.6	0.8	8.0	5.0	82.5	38	
A-1	29	奈良県	奈良県立郡山高等学校	30.0	10.0	5.0	4.1	4.6	2.6	2.4	3.4	2.5	1.0	0.6	6.9	5.0	78.1	39	
A-6	11	埼玉県	埼玉県立狭山工業高等学校	12.5	5.0	3.0	1.5	3.8	1.9	1.8	2.0	2.1	1.4	0.0	2.0	5.0	42.0	40	
A-3	23	三重県	三重県立神戸高等学校	0.0	0.0	2.0	2.3	5.0	3.7	3.8	3.4	3.4	1.8	0.0	0.0	5.0	30.4		棄権
A-5	27	大阪府	大阪府立天王寺高等学校	15.0	5.0	3.5	1.9	5.0	3.3	2.8	3.7	3.8	1.2	0.6	5.0	5.0	55.8		棄権
A-5	36	香川県	香川県立丸亀高等学校	30.0	9.6	5.0	4.9	5.0	3.7	3.8	3.9	3.9	2.0	1.6	9.0	5.0	87.4		棄権
A-1	43	熊本県	熊本県立熊本北高等学校	0.0	0.0	1.5	2.5	5.0	2.9	3.4	3.0	3.3	1.6	0.0	0.0	5.0	28.2		棄権
A-3	4	宮城県	宮城県古川高等学校																出場辞退
A-1	35	山口県	山口県立防府高等学校																出場辞退

第67回全国高等学校登山大会

団体女子(B 隊) 成績一覧表

〔成績順〕

班	県番	都道府県	学校名	行動		生活技術			知識					読図 技術	マナー 自然保護	計	順位	備考	
				体力	歩行	装備	設営 撤収	炊事	天気図	課題テスト			計画書						行動 記録
										自然	救急	気象							
				40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0	4.0	4.0	2.0	2.0	10.0	5.0	100.0		
B-3	21	静岡県	静岡県立富士高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.9	3.7	4.0	3.9	2.0	2.0	10.0	5.0	99.5	1	
B-3	12	千葉県	千葉県立千葉東高等学校	39.7	10.0	5.0	5.0	5.0	4.0	3.9	3.9	3.9	2.0	2.0	10.0	5.0	99.4	2	
B-5	28	兵庫県	兵庫県立長田高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.9	3.6	3.8	3.9	2.0	2.0	10.0	5.0	99.2	3	
B-5	42	長崎県	長崎県立長崎北陽台高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.8	4.0	3.9	3.9	2.0	1.6	10.0	5.0	99.2	4	
B-1	3	岩手県	岩手県立盛岡第一高等学校	39.3	10.0	5.0	5.0	5.0	4.0	3.9	4.0	4.0	1.6	2.0	10.0	5.0	98.8	5	
B-6	37	徳島県	徳島県立池田高等学校	40.0	9.8	5.0	5.0	5.0	4.0	3.9	3.5	3.7	1.8	1.8	10.0	5.0	98.5	6	
B-5	33	岡山県	就実高等学校	39.7	10.0	5.0	4.8	5.0	3.4	4.0	3.8	3.9	1.8	2.0	10.0	5.0	98.4	7	
B-6	6	山形県	山形県立山形西高等学校	39.7	10.0	5.0	4.8	5.0	3.6	4.0	3.5	3.8	2.0	1.8	10.0	5.0	98.2	8	
B-4	45	宮崎県	宮崎県立宮崎大宮高等学校	40.0	9.7	5.0	5.0	5.0	3.7	3.8	3.7	3.8	2.0	2.0	9.5	5.0	98.2	8	
B-5	46	鹿児島県	鹿児島県立加治木高等学校	40.0	10.0	5.0	4.8	5.0	3.7	3.6	3.4	3.6	2.0	2.0	10.0	5.0	98.1	10	
B-2	34	広島県	ノートルダム清心高等学校	39.3	10.0	5.0	5.0	5.0	3.9	4.0	3.8	3.8	2.0	2.0	9.0	5.0	97.8	11	
B-2	1	北海道	北海道旭川東高等学校	40.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.8	4.0	4.0	3.1	2.0	1.8	10.0	4.0	97.7	12	
B-6	22	愛知県	愛知県立岡崎高等学校	39.3	10.0	5.0	5.0	4.6	4.0	3.9	3.9	3.9	1.8	1.8	9.5	5.0	97.7	12	
B-3	35	山口県	山口県立防府高等学校	40.0	9.5	5.0	5.0	5.0	3.6	3.8	3.6	3.9	2.0	1.2	10.0	5.0	97.6	14	
B-1	38	愛媛県	愛媛県立松山南高等学校	39.3	10.0	5.0	5.0	5.0	3.7	3.8	4.0	3.7	2.0	1.6	9.5	5.0	97.6	14	
B-3	40	福岡県	福岡県立修猷館高等学校	40.0	10.0	4.5	4.9	5.0	3.5	3.9	3.8	3.6	1.8	2.0	9.5	5.0	97.5	16	
B-4	10	群馬県	群馬県立高崎女子高等学校	39.7	10.0	4.5	4.9	5.0	3.8	4.0	3.7	3.8	2.0	2.0	9.0	4.0	96.4	17	
B-1	41	佐賀県	佐賀県立唐津東高等学校	40.0	9.7	5.0	5.0	4.6	3.5	3.4	3.6	3.4	1.6	1.6	10.0	5.0	96.4	17	
B-1	36	香川県	香川県立丸亀高等学校	38.2	9.8	5.0	5.0	5.0	3.9	3.4	3.6	3.0	2.0	2.0	9.5	5.0	95.4	19	
B-2	14	神奈川県	神奈川県立麻溝台高等学校	39.7	10.0	4.5	5.0	4.6	3.4	3.5	3.7	3.0	1.8	1.6	9.5	5.0	95.3	20	
B-2	26	京都府	京都府立嵯峨野高等学校	39.0	10.0	4.0	5.0	5.0	3.3	3.5	3.8	3.7	2.0	1.8	9.0	5.0	95.1	21	
B-2	39	高知県	高知県立高知追手前高等学校	37.5	10.0	5.0	5.0	5.0	3.3	3.9	3.1	3.7	1.8	1.8	10.0	5.0	95.1	21	
B-6	16	新潟県	新潟県立長岡高等学校	39.7	9.7	5.0	5.0	4.6	3.7	3.2	3.4	3.3	2.0	1.4	9.0	5.0	95.0	23	
B-5	50	北海道	北海道旭川北高等学校	40.0	10.0	4.5	5.0	5.0	3.4	3.6	3.6	3.5	1.4	1.4	8.5	5.0	94.9	24	
B-4	5	秋田県	秋田県立秋田高等学校	38.3	10.0	4.5	5.0	4.6	3.9	3.4	3.2	3.6	1.8	1.8	9.5	5.0	94.6	25	
B-3	8	茨城県	茨城県立水戸第一高等学校	37.9	10.0	5.0	4.9	4.6	3.8	3.6	3.7	3.4	1.6	1.4	9.5	5.0	94.4	26	
B-4	17	長野県	長野県松本県ヶ丘高等学校	39.0	10.0	5.0	5.0	5.0	3.6	3.6	3.7	3.0	1.8	1.2	9.0	4.5	94.4	26	
B-4	2	青森県	青森県立八戸高等学校	39.7	10.0	4.5	4.8	5.0	4.0	3.0	3.5	3.3	1.8	1.4	7.0	5.0	93.0	28	
B-6	18	富山県	富山県立富山高等学校	36.7	10.0	5.0	5.0	5.0	3.8	2.5	3.6	3.6	1.8	2.0	8.5	5.0	92.5	29	
B-4	32	島根県	島根県立松江北高等学校	39.7	9.8	5.0	5.0	5.0	2.6	3.1	4.0	3.0	1.6	1.2	7.5	5.0	92.5	29	
B-6	27	大阪府	常翔啓光学園高等学校	37.2	9.8	5.0	5.0	5.0	3.0	3.5	3.2	3.8	1.8	1.4	8.5	5.0	92.2	31	
B-6	44	大分県	大分県立竹田高等学校	38.6	9.8	4.5	5.0	5.0	2.7	2.7	2.8	3.3	1.8	1.2	9.5	5.0	91.9	32	
B-1	30	和歌山県	和歌山県立田辺高等学校	38.6	9.8	4.5	4.6	5.0	3.5	3.0	3.3	2.8	1.6	1.2	8.5	5.0	91.4	33	
B-2	19	石川県	石川県立金沢二水高等学校	40.0	10.0	4.5	4.8	5.0	3.5	3.1	2.7	3.7	1.6	0.6	6.0	5.0	90.5	34	
B-3	20	福井県	福井県立武生高等学校	30.0	9.5	4.0	5.0	5.0	3.5	2.8	4.0	2.7	1.8	1.4	8.0	4.5	82.2	35	
B-3	31	鳥取県	鳥取県立鳥取西高等学校	30.0	10.0	5.0	5.0	4.6	3.2	3.4	3.9	2.5	1.8	1.0	6.5	5.0	81.9	36	
B-2	7	福島県	福島県立磐城高等学校	28.6	9.7	5.0	4.2	5.0	3.0	2.7	2.7	3.1	2.0	1.2	7.5	5.0	79.7	37	
B-1	25	滋賀県	滋賀県立東大津高等学校	28.6	10.0	3.5	4.7	5.0	3.6	3.9	2.7	2.6	1.4	0.8	7.5	5.0	79.3	38	
B-1	29	奈良県	奈良県立高田高等学校	28.6	9.5	3.0	4.9	5.0	1.6	2.3	3.2	2.9	1.6	1.2	8.5	5.0	77.3	39	
B-1	13	東京都	早稲田大学系属早稲田実業学校高 等部	27.0	8.5	3.5	4.5	4.6	3.4	3.2	3.6	2.9	1.8	1.8	7.0	5.0	76.8	40	
B-2	11	埼玉県	埼玉県立和光国際高等学校	30.0	9.5	3.0	3.3	3.8	1.1	2.4	2.6	2.8	0.8	1.0	0.0	5.0	65.3	41	
B-5	15	山梨県	山梨県立韮崎高等学校	15.0	5.0	3.0	2.5	5.0	2.6	1.3	1.5	2.2	1.2	0.4	3.6	5.0	48.3	42	
B-5	4	宮城県	宮城県仙台三桜高等学校	15.0	5.0	4.0	2.5	4.6	3.5	2.9	3.4	2.8	1.4	0.8	3.5	4.5	53.9		棄権
B-4	23	三重県	三重県立神戸高等学校	0.0	0.0	2.0	2.5	5.0	3.9	3.6	3.7	3.0	1.4	0.0	0.0	5.0	30.1		棄権
B-3	43	熊本県	熊本県立熊本北高等学校	0.0	0.0	1.0	2.3	5.0	3.2	2.5	1.9	3.1	1.4	0.0	0.0	5.0	25.4		棄権

8. 役員等人数表

参加者総数

選 手	監 督	視察員	競技役員	運営役員	補助員	合 計
356	89	10	188	26	103	772

コース隊総人数（コース隊＝参加者＋行動隊役員）

	※参加チーム		参加者数			行動隊役員数		合計
	参加校数	班編成数	選手	監督	視察員	行動役員	補助員	
A隊(団体男子)	44	6	176	44	2	31	4	257
B隊(団体女子)	45	6	180	45	1	32	4	262
A隊/B隊 共通					7	126		133
合計	89	12	356	89	10	189	8	652

※新型コロナウイルスの関係で、A隊4チーム、B隊2チームが出場辞退

行動隊役員数（行動隊役員＝競技役員（自衛隊含む）＋補助員）

係名	道高体連	道高体連 OB・OG	道岳連	近県	山岳部 OB・OG	高校生	その他	A隊	B隊	AB隊共通	合計
コース隊長	2							1	1		2
コース副隊長	2							1	1		2
コース先発	2							1	1		2
班長	8	2			2			6	6		12
副班長	5				5		2	6	6		12
隊付総務	1						1	1	1		2
隊付通信	1				1			1	1		2
隊付記録					2			1	1		2
支援	11	2			6			9	10		19
CP隊（兼通信隊）	7	1			2		1			11	11
サポート隊	3									3	3
設営隊	7				2		1			10	10
医師							2	1	1		2
看護師							4	2	2		4
自衛隊協力隊							101	27	27	47	101
旗手						8		4	4		8
監督対応	1	1						1	1		2
専門委員長対応	1	1								2	2
合計	51	7	0	0	20	8	112	62	63	73	198

審査員数

審査員	8						14	8	8	6	22
-----	---	--	--	--	--	--	----	---	---	---	----

競技役員・補助員数（大会本部・行動隊）

		全 国			近 県		北海道内						合計
		高体連	日山協	その他	高体連	その他	高体連	高体連OB	道岳連	OB・OG	高校生	その他	
大会本部	競技委員長	1											1
	競技副委員長	1					1		1				3
	名誉会長		1										1
	技術顧問		1										1
	中央総務委員長	1											1
	中央総務委員	16											16
	登山隊長						1						1
	審査委員長	1											1
	審査副委員長	1											1
	審査員	8					8						16
	気象予報士			1								5	6
	通信						2						2
行 動 隊							44	7	0	18	8	111	188
小 計		29	2	1	0	0	56	7	1	18	8	116	238

運営役員・補助員数

		道高体連	高体連OB	県岳連	OB・OG	高校生	町職員	その他	合計
大会本部	総務委員長	1							1
	総務副委員長	2							2
	総務委員					5			5
開閉会式会場	総務委員	2						9	11
	アナウンス・放送					4			4
	会場・ステージアシスタント					20			20
	アトラクション・式典	2				22			24
	会場・受付					5			5
	救護							1	1
	会場・弁当配布					4			4
その他	設営・救護	2				48		1	51
	筆耕	1							1
合計		10	0	0	0	103	5	11	129

9. 登山大会 役員・補助員

(1) 登山大会役員

(順不同、敬称略)

名 譽 会 長 丸 誠一郎

名 譽 副 会 長 菊 地 伸 佐 藤 芳 治 角 和 浩 幸 齊 藤 繁 岸 本 亮

名 譽 顧 問 鈴 木 直 道 岡 田 正 治 荒 川 裕 生 山 口 寿 一

会 長 鈴木康司

副	会	長	亀	山	健太郎	小日向	徹	古	賀	英	年	小野寺	斉	倉	本	博	史
			駒	井	博和	吉成	卓	溝	端	茂	樹	石井	昭彦	杉	山	昌	次
			館	山	孝佳	鈴木	貴久	鈴	木	真	弓						

顧	問	衛	藤	征	士	郎	山	本	久	子	城	隆	嗣	田	中	文	男	本	木	總	子
		神	崎	忠	男		八	木	原	明	富	原	亮	青	山	夕	香	本	木	一	人
		川	端	絵	美		大	鐘	秀	峰	清	水	彰	加	藤	俊	文	荒	川	裕	策
		澁	谷	有	人		谷	本	歩	実	奈	良	隆	増	田	明	美	森	岡	英	一郎
		山	崎	成	夫		鈴	木	秀	利	中	村	謙	小	島	寿	文	齊	藤	裕	二
		金	本	賢	治		牛	島		徹	下	屋	浩	黒	後	茂	山	日	田	尚	子
		吉	村		薫		森	本	新	一	生	島	典	森	野	和	泰	土	浅		勲
		笠	師	久	美	子	藤	田		理	澤	田	清	太	田	紘	文	村	屋		子
		宮	西		博		能	登	暢	吉	安	部	逸	野	村	祐	司	上	和		子
		山	城	宏	一		稻	津		誠	庄	内	東	笠	木	和	博	齊	藤	幸	一
		松	本		章		前	木	理	一郎	山	田	隆								

参	与	服部平岩杉伊小山峯西飛蛭山安平今高白	部子崎田藤畑本本松田本井田村橋倉	一吉喜浩智和典安好伸博伸隆周克典	雄政司康彦人穰寛幸子一讓志也之也典	吉西廣中加藤山刈原野前佐水小松佐伊	田内川西藤本田谷村田藤村部井藤藤	春健紀正直雅範勇善善信晃裕政	彦博太郎夫之民昭光人弥彦建二拓之恒利	村条水新小木山口林崎高田口本橋木邊秋	上川嶋曾口崎高田口本橋木邊秋	美彰耕昭喜良保令義沙永將	智章治一文進明夫忠子豪朗怜羅二亮史	齊吉小山澤小木宮永栗赤島西山岡秋坂	藤田山本坂村原谷田尾田谷口山本	喜直利秀康敏常季浩邦善純一克聡	志人稔幸惠己男明和慎一昭子子仁巳志	大加稻木ノ湯松原古細望町中畑松木中	滝藤田内浅本川月田島中井村村俣	潤富春高誠秀好啓幸隆直清義	二之男嘉二実樹幸浩治男之涉樹基志一
---	---	--------------------	------------------	------------------	-------------------	-------------------	------------------	----------------	--------------------	--------------------	----------------	--------------	-------------------	-------------------	-----------------	-----------------	-------------------	-------------------	-----------------	---------------	-------------------

梶 丹 稻 宮 加 齋 壽 大 高 西 小	生 葉 滝 藤 淺 石 木 野 山	良 敬 寛 寛 邦 章 秀 正 信 裕	成 人 功 己 章 明 洋 一 晴 雄 昭	梅 嶋 西 友 那 下 相 松 鎌 西 津	本 田 上 澤 須 山 沢 尾 田 海 崎	浩 和 嘉 義 雅 シ ゲ 克 康 正 勝	照 彦 人 弘 博 子 明 彰 雄 博 利	鈴 小 岡 葛 山 神 高 西 瀧 青 杉	木 田 目 口 山 倉 出 田 野 山	利 隆 憲 良 利 一 明 勝 範 大	英 司 優 昭 人 健 郎 史 彦 子 樹	桑 村 山 小 野 城 町 広 村 加 高	原 上 崎 下 間 田 野 上 藤 倉	俊 昌 和 敏 英 行 邦 祐 友	樹 司 誠 宏 生 謙 男 利 一 恵	狩 山 田 平 高 大 福 山 浜 藤	野 根 中 江 野 浦 濱 崎 辺 原	靖 尚 薫 一 洋 充 子 二 啓 文
---	---	--	---	---	---	---	---	---	--	--	---	---	--	---	--	--	--	--

大会委員長 本 多 滋 明

大会副委員長 松 本 至 巨 玉 垣 光 伺 朗 明 田 通 世 土 居 昌 彦 越 前 谷 知 子
宮 崎 敦 田 渕 英 治 梅 沢 清 次

委 員	佐久間 浦 山 佐 藤 河 竹 草 川 難 波 豊 田 福 永 石 川 五十嵐 松 本 西 村 高 間 戸 田 谷 口 本 田 鈴 木 藤 澤 日 下 藤 野 富 田 柏 原 持 永 新 佐 須 川 篠 原 清 水	務 樹 由 之 明 次 郎 司 郎 德 夫 也 也 一 輔 平 一 幸 二 光 之 学 磨 之 樹 久 子 健 幸	古 井 天 開 水 白 鹿 山 新 勝 枝 舟 光 松 坂 中 松 山 澤 山 小 高 野 花 齋 関 勝 北	屋 上 野 澤 谷 子 野 上 原 木 吉 木 富 尾 本 村 本 本 木 本 倉 田 濱 木 藤 根 山 村	壽 邦 賢 浩 嘉 欽 慶 祐 爵 一 英 浩 浩 俊 一 益 庸 孝 光 一 憲 宏	隆 彦 一 義 宏 也 行 司 治 慶 世 司 輔 志 一 之 健 登 徹 久 二 行 健 成 志 夫 子 武	四 渡 桜 米 雲 渡 明 武 岩 河 平 近 中 清 中 福 鴻 糲 平 土 高 瀬 池 津 中 泉 辻 近	戸 辺 井 田 辺 上 末 本 崎 山 野 村 水 村 永 野 尾 井 取 良 田 島 野 水 本 藤	義 敏 正 義 公 邦 良 郁 直 斉 匡 稔 雄 和 広 高 章 一 俊 耕 将 清 和 彦	継 夫 進 明 昭 二 彦 樹 夫 茂 昭 生 彦 三 平 明 誠 晴 芳 弥 明 二 文 節 茂 和 努 彦	小 野 中 伊 榎 加 富 椎 前 田 鈴 内 根 山 中 鯉 高 竹 池 西 大 山 北 大 磯 櫻 室 横	寺 沢 藤 田 藤 田 野 川 場 木 海 石 田 村 口 沼 田 内 田 岡 信 崎 木 邊 井 田 井	修 一 雄 德 利 志 浩 雄 淳 也 一 修 征 弘 樹 朗 浩 祐 健 洋 士 匡 里 一 久 一 暢	大 芳 今 北 石 山 武 松 木 松 石 岩 佐 水 富 関 古 島 富 安 行 大 黒 小 新 川 中 越	槻 賀 井 村 田 崎 田 井 村 井 田 田 橋 元 樗 根 田 崎 永 藤 實 渚 木 野 井 島 森 野	聰 治 二 彦 行 晶 明 明 幸 式 治 作 男 肇 史 努 司 剛 隆 介 司 隆 宏 美 聡 輔 已 德
-----	---	---	--	--	---	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--

内	田	正	俊	原		和	樹	荒	木	保	幸	田	中	克	介	若	林	安	德
村	松	洋	子	丸	山	浩	浩	田	中	晋	勲	大	田	真	一	岩	崎	浩	明
名	山	泰	子	村	井		昭	北	村	哲	助	渡	邊	啓	明	大	島	安	博
大	川	周	一	中	川	時	泰	合	澤	陽	郎	篠	田	俊	彦	桑	山	靖	幸
田	中	清	子	澤	田	秀	人	加	藤	孝	子	本	宮	敬	士	西	嶋	克	己
出	嶋	淳	也	山	納	と	俊	春	山	邦	義	國	谷	斗	馬	増	子	麗	子
高	見	直	広	玉	木	和	幸	横	辻		宰	澤	田	信	夫	桑	島	宏	明
渡	邊	祐	美	菅	原	慎	也	渡	邊	邦	夫	齊	藤	光	一	竹	越	広	志
須	藤	由	司	天	野	展	成	西	川	泰	勤	福	田	雅	人	菅	野	秀	樹
矢	橋	佳	之	島	瀨	建	一	中	島	純	彰	木	部		悟	宮	田	五	夫
小	師	良	仁	太	刀	川	恵	高	野		平	桂		直	讓	小	池	輪	太
畑	野	和	宏	中	條	田	三	大	井		聡	松	永	秀	樹	三	戸	圭	涉
藤	本	容	佳	飯	田	丸	高	中	新		尊	水	野		人	玉	森		一
鈴	木		子	石	丸		志	細	野		護								

(2) 登山大会競技役員

(順不同、敬称略)

役職	氏名	所属都道府県	所属
競技委員長	本 多 滋 明	愛知県	小坂井高等学校
競技副委員長	稲 津 誠	北海道	旭川工業高等学校
	小 野 倫 夫	北海道	北海道山岳連盟名誉会長
	玉 垣 光伺朗	香川県	坂出高等学校
技術顧問	野 村 善 弥	埼玉県	JMSCA理事 山岳指導委員長
中央総務委員長	前 田 善 彦	奈良県	添上高等学校
中央総務委員	石 田 康 治	福岡県	筑紫丘高等学校
	西 村 真 也	香川県	善通寺第一高等学校
	舟 木 司	島根県	平田高等学校
	近 野 匡 生	山形県	酒田東高等学校
	根 石 修	石川県	翠星高等学校
	高 間 一	滋賀県	守山高等学校
	岩 田 顕 作	鳥取県	米子工業高等学校
	中 村 稔 彦	新潟県	長岡高等学校
	山 田 修	徳島県	つるぎ高等学校
	佐 橋 秀 男	愛知県	豊川高等学校
	戸 田 大 輔	三重県	鈴鹿高等学校
	松 尾 浩 志	三重県	久居農林高等学校
	清 水 雄 三	静岡県	富士東高等学校
	中 村 裕 征	岐阜県	高山工業高等学校
	水 元 肇	三重県	いなべ総合学園高等学校
	谷 口 浩 平	神奈川県	藤沢翔陵高等学校

審査員長	松 本 至 巨	東京都	東京学芸大学附属高等学校
副審査員長	光 富 英 輔	長崎県	長崎明誠高等学校
A隊審査員	木 村 宣 幸	北海道	北広島高等学校
	勝 木 爵 慶	山梨県	韮崎高等学校
	松 井 応 式	兵庫県	姫路市立姫路高等学校
	松 本 卓 也	島根県	松江工業高等学校
	平 山 斉 昭	大分県	三重総合高等学校
	相 田 敬 史	北海道	旭川北高等学校
	大 塚 徹	北海道	札幌南高等学校
	青 山 泰 教	北海道	北見柏陽高等学校
B隊審査員	鈴 木 和 也	静岡県	浜松日体高等学校
	五十嵐 則 夫	福島県	安積黎明高等学校
	河 崎 直 茂	長野県	長野吉田高等学校
	枝 吉 一 世	愛媛県	松山中央高等学校
	山 納 秀 俊	北海道	小樽潮陵高等学校
	大 井 聡	北海道	札幌工業高等学校
	松 永 直 樹	北海道	函館ラ・サール高等学校
	藤 原 幸 二	北海道	苫小牧高等商業学校
気象予報士	諸 岡 雅 美	千葉県	日本気象予報士会
	大 野 雅 人	北海道	日本気象予報士会
	竹 村 雅 之	北海道	日本気象予報士会
	木 下 温	北海道	日本気象予報士会
	三 宅 武 寿	北海道	日本気象予報士会
	安 藤 勸	北海道	日本気象予報士会

(3) 登山隊の編成

(順不同、敬称略)

役職	氏名	都道府県	所属
登山隊長	内 海 健 一	北海道	旭川北高等学校
【A 隊（団体男子）】			
役職	氏名	都道府県	所属
A 隊コース隊長	小 池 圭 太	北海道	旭川工業高等学校
A 隊コース副隊長	山 下 宗 紀	北海道	旭川商業高等学校
A 隊コース先発	大 島 一 展	北海道	札幌工業高等学校
A 隊 1 班班長	佐々木 亮 介	北海道	札幌北高等学校
A 隊 2 班班長	米 倉 志 高	北海道	旭川医科大学
A 隊 3 班班長	畑 野 和 宏	北海道	遠軽高等学校
A 隊 4 班班長	蓑 口 一 哲	北海道	帯広柏葉高等学校
A 隊 5 班班長	塩 谷 和 樹	北海道	市立函館高等学校
A 隊 6 班班長	二 瓶 伸 一	新潟県	高体連登山専門部OB
A 隊 1 班副班長	木 谷 弥 彦	北海道	小樽潮陵高等学校
A 隊 2 班副班長	坂谷内 颯 斗	北海道	北海道教育大学岩見沢校
A 隊 3 班副班長	目 谷 祐 太	北海道	遠軽地区広域組合消防本部
A 隊 4 班副班長	山 本 圭 一	北海道	帯広農業高等学校
A 隊 5 班副班長	谷 山 直 俊	北海道	遠軽地区広域組合消防本部
A 隊 6 班副班長	植 木 玲 一	北海道	有朋高等学校
A 隊隊付総務	坂 井 励	北海道	北海道大学雨龍研究林
A 隊通信	本 郷 蒼 良	北海道	北海道大学
A 隊記録	八 島 伊 吹	北海道	北海道大学
A 隊支援隊長	田 中 拓 己	北海道	札幌北高等学校
A 隊支援副隊長	澤 田 大 輝	北海道	札幌南高等学校
A 隊支援隊	酒 井 一 明	北海道	札幌南高等学校
	帯 川 慎 平	北海道	札幌工業高等学校
	田 辺 亮 輔	北海道	苫小牧高等商業学校
	伊 藤 一 輝	北海道	苫小牧高等商業学校
	星 野 弘 樹	北海道	酪農学園大学
	清 野 恵 多	北海道	酪農学園大学
	村 松 俊 輔	北海道	帯広柏葉高等学校

A 隊医師	三 浦 裕	愛知県	JMSCA登山医科学委員会（至学館大学）
A 隊看護師	福 島 弓 子	愛知県	JMSCA登山医科学委員会（なごや福祉施設協会）
	濱 本 樹	北海道	札幌北榆病院
A 隊旗手	後 藤 奏 汰	北海道	札幌北高等学校
	高 橋 侑 希	北海道	札幌北高等学校
	川 島 優 仁	北海道	札幌北高等学校
	北 村 航 大	北海道	札幌北高等学校
A 隊監督対応	今 井 一 穂	北海道	利尻高等学校
【B 隊（団体女子）】			
役職	氏名	都道府県	所属
B 隊コース隊長	飯 田 一 三	北海道	旭川東高等学校
B 隊コース副隊長	板 垣 教 一	北海道	江別高等学校
B 隊コース先発	牛久保 琢 哉	北海道	旭川永嶺高等学校
B 隊 1 班班長	細 野 瑛	北海道	旭川医科大学病院
B 隊 2 班班長	三 戸 涉	北海道	室蘭栄高等学校
B 隊 3 班班長	松 本 奈 巳	北海道	札幌北高等学校
B 隊 4 班班長	竹 中 正 喜	北海道	釧路商業高等学校
B 隊 5 班班長	鈴 木 容佳子	北海道	江別高等学校
B 隊 6 班班長	西 千 秋	北海道	高体連登山専門部OB
B 隊 1 班副班長	齊 藤 風 香	北海道	美瑛町役場
B 隊 2 班副班長	日 向 真 樹	北海道	室蘭栄高等学校
B 隊 3 班副班長	丹 野 裕 之	北海道	旭川西高等学校
B 隊 4 班副班長	鈴 木 伶 那	北海道	酪農学園大学
B 隊 5 班副班長	合 浦 みのり	北海道	(株)アインホールディングス
B 隊 6 班副班長	葛 西 春 嬉	北海道	藤女子大学
B 隊隊付総務	中 條 恵	北海道	旭川東高等学校
B 隊通信	業 天 眞由美	北海道	富良野緑峰高等学校
B 隊記録	田 中 雅 人	北海道	孝仁会記念病院
B 隊支援隊長	山 下 文 孝	北海道	高体連登山専門部OB
B 隊支援副隊長	佐々木 隆 光	北海道	帯広柏葉高等学校

B隊支援隊	岩 橋 一 成	北海道	北星学園女子中学高等学校
	Couture Alexander	北海道	北星学園女子中学高等学校
	高 井 勝 巳	北海道	高体連登山専門部OB
	柴 田 一	北海道	室蘭栄高等学校
	江 頭 ひかる	北海道	帯広畜産大学
	佐 藤 慶 典	北海道	北海道農業共済組合
	木 藤 優太郎	北海道	酪農学園大学
	町 井 束香沙	北海道	旭川市消防本部
B 隊医師	中 島 隆 之	岩手県	JMSCA登山医科学委員会（盛岡友愛病院）
B 隊看護師	浦 川 陽 子	愛知県	JMSCA登山医科学委員会（光生会病院）
	臼 井 香 澄	北海道	さっぽろ銀杏会記念病院
B隊旗手	後 藤 かの子	北海道	札幌北高等学校
	工 藤 妃 由	北海道	札幌北高等学校
	木 下 倖 華	北海道	札幌北高等学校
	宇 崎 なごみ	北海道	札幌北高等学校
B隊監督対応	川 名 典 道	北海道	高体連登山専門部OB
【通信隊】			
役職	氏名	都道府県	所属
通信隊長	及 川 研一郎	北海道	旭川北高等学校
通信副隊長・記録	林 保 彦	北海道	八雲高等学校
【チェックポイント CP 隊（兼通信隊）】			
役職	氏名	都道府県	所属
CP隊長	漆 山 裕 章	北海道	旭川西高等学校
CP副隊長	玉 森 一	北海道	釧路湖陵高等学校
CP隊(兼通信隊)	今 啓 輔	北海道	釧路北陽高等学校
CP隊(兼通信隊)	川 口 翼	北海道	根室高等学校
CP隊(兼通信隊)	大 川 智 史	北海道	根室高等学校
CP隊(兼通信隊)	岡 本 祥 一	北海道	美瑛町役場
CP隊(兼通信隊)	丸 山 大 堯	北海道	北海道科学大学
CP隊(兼通信隊)	杉 山 透 来	北海道	釧路湖陵高等学校OB
CP隊(兼通信隊)	桐 尾 義 之	北海道	高体連登山専門部OB
CP隊(兼通信隊)	上 内 智 英	北海道	釧路湖陵高等学校
CP隊(兼通信隊)	金 森 雅 弥	北海道	八雲高等学校

【サポート隊】

役職	氏名	都道府県	所属
サポート隊長	城 座 研 一	北海道	富良野緑峰高等学校
サポート副隊長	瓶 田 幸 宏	北海道	富良野緑峰高等学校
サポート隊	関 村 康 則	北海道	士別翔雲高等学校

【設営隊】

役職	氏名	都道府県	所属
設営隊長	藤 本 和 夫	北海道	岩見沢東高等学校
設営副隊長	水 野 秀 人	北海道	帯広大谷高等学校
設営隊	梅 川 悟 史	北海道	岩見沢東高等学校
設営隊	中新井 尊	北海道	北見北斗高等学校
設営隊	林 宏 司	北海道	高体連登山専門部OB
設営隊	水 野 憲 雄	北海道	高体連登山専門部OB
設営隊	稲 津 雄 二	北海道	釧路北陽高等学校
設営隊	菅 原 麻里子	北海道	北広島高等学校
設営隊	小 野 泰 章	北海道	北見北斗高等学校
幕営地看護師	小 野 静 香	北海道	訪問看護ステーションめぐみ

【専門委員長隊】

専門委員長対応	永 木 正 彦	北海道	帯広三条高等学校
専門委員長対応	日 下 哉	北海道	NPO北海道自然エネルギー研究会

【自衛隊協力隊】

役職	氏名	都道府県	所属
総務課長	波多野 武	北海道	第2師団司令部
第2師団広報室長	京 谷 匠 吉	北海道	第2師団司令部
広報幹部	佐々木 巨	北海道	第2師団司令部
広報陸曹	秋 田 優	北海道	第2師団司令部付隊
広報陸曹	北 川 元 気	北海道	第2師団司令部付隊
広報陸曹	越 田 菜 摘	北海道	第2師団司令部付隊
広報陸曹	竹 林 修 平	北海道	第2師団司令部付隊
黒岳・旭岳支援隊長	西 村 朋 泰	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳支援本部班長	殿 村 孝 平	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳企画・庶務	小 関 康 仁	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳企画・庶務	見 延 龍 司	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳企画・庶務	船 木 直 哉	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳企画・庶務	渡 邊 亮 太	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳広報室長	辻 裕一郎	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳広報陸曹	山 平 英 生	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳広報陸曹	佐 藤 春 樹	北海道	第2特科連隊

黒岳・旭岳広報陸曹	伊瀬谷 文 浩	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳サポート隊隊長	山 内 祥 一	北海道	第2特科連隊
黒岳・旭岳サポート隊付陸曹	品 川 悟	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊サポート班長	上 山 泰 弘	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班1	松 本 樹生也	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班2	大 野 瞭 太	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班3	大 塚 敏 彦	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班4	石 丸 祥	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班5	鈴 木 康 伸	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援班6	村 岡 快 斗	北海道	第2特科連隊
黒岳A隊支援衛生	久 保 芳 晴	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊サポート班長	上 野 鉦 輔	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班1	山 崎 大 樹	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班2	矢 野 雄 大	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班3	服 部 舞 華	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班4	西 尾 友 樹	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班5	秋 葉 一 輝	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援班6	高 村 雅 人	北海道	第2特科連隊
黒岳B隊支援衛生	佐々木 大 地	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊サポート班長	隈 部 健 幸	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班1	山 下 真 司	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班2	星 野 太 一	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班3	齋 藤 諒	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班4	江 刺 学	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班5	長 尾 隆 二	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援班6	前 田 怜 音	北海道	第2特科連隊
旭岳A隊支援衛生	江 幡 元 気	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊サポート班長	尾ヶ瀬 彪 馬	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班1	杉 本 有 喜	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班2	水 野 賢 一	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班3	吉 川 保	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班4	佐々木 大 輔	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班5	奈 良 武 大	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援班6	村 田 竜之介	北海道	第2特科連隊
旭岳B隊支援衛生	福 永 和 真	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	松 岡 博 士	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	山 下 和 幸	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	吉 川 貴 康	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	近 藤 佳 佑	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	今 健 治	北海道	第2特科連隊
給水隊（旭川）	和 田 耐	北海道	第2特科連隊

給水隊（旭川）	野 原 智 博	北海道	第 2 特科連隊
給水隊（旭川）	辻 健 太	北海道	第 2 特科連隊
十勝岳支援隊長	苦 瀬 康 行	北海道	第 4 特科群
十勝岳班長	蝶 野 晴 彦	北海道	第 4 特科群
十勝岳広報陸曹	菊 地 厚 史	北海道	第 4 特科群
十勝岳広報陸曹	小 形 猛	北海道	第 4 特科群
十勝岳広報陸曹	大 場 睦 美	北海道	第 4 特科群
十勝岳A隊サポート班長	若 林 奏 生	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 1	工 藤 貴 大	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 2	阿 部 将太郎	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 3	青 山 幸 充	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 4	西 川 明 紀	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 5	若 林 希 望	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 6	高 橋 海 翔	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳A隊支援班 7	山 崎 修 斗	北海道	第 2 戦車連隊
十勝岳B隊サポート班長	岡 崎 弘 樹	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 1	山 田 真 己	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 2	東 智 也	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 3	大 谷 菜 摘	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 4	石 田 凜太郎	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 5	佐 藤 巧 和	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 6	池 田 智 士	北海道	第 1 4 施設群
十勝岳B隊支援班 7	前 田 連 平	北海道	第 1 4 施設群
給水隊本部班長（上富良野）	村 上 真 博	北海道	第 4 特科群
給水隊本部（上富良野）	小 林 佳 之	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	杉 本 稔	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	熊 谷 裕 太	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	高 田 裕 司	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	林 雅 美	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	山 内 悟	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	黒 澤 拓 矢	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	鈴 木 義 博	北海道	第 4 特科群
給水隊（上富良野）	大 関 哲 志	北海道	第 4 特科群
通信隊長	坂 本 利 夫	北海道	第 2 通信大隊
通信隊本部班長	佐々木 健 太	北海道	第 2 通信大隊
通信隊本部要員	西 村 詩 音	北海道	第 2 通信大隊
無線通信陸曹	松 田 仁	北海道	第 2 通信大隊
無線通信陸曹	小 林 信 行	北海道	第 2 通信大隊
無線通信陸曹	安 藤 克 樹	北海道	第 2 通信大隊
無線通信陸曹	菅 谷 博 士	北海道	第 2 通信大隊
無線通信陸曹	下 山 翔 春	北海道	第 2 通信大隊

無線通信陸曹	小 松 秀 平	北海道	第2通信大隊
無線通信陸曹	田 中 準 次	北海道	第2通信大隊
無線通信陸曹	渡 部 卓	北海道	第2通信大隊

【運営役員】

役職	氏名	都道府県	所属
総務委員長	細 野 護	北海道	旭川北高等学校
総務副委員長	石 丸 高 志	北海道	旭川西高等学校
総務副委員長	高 橋 健 一	北海道	旭川東高等学校
総務委員	今 野 裕 太	北海道	東川町教育委員会
総務委員	渡 辺 翔 太	北海道	東川町教育委員会
総務委員	片 岡 仁	北海道	上川町教育委員会
総務委員	梶 原 祐 治	北海道	美瑛町教育委員会
総務委員	谷 口 裕 二	北海道	上富良野町教育委員会
総務委員(式典)	伊與田 浩 紀	北海道	旭川東高等学校
総務委員(式典)	堀 江 昌 昭	北海道	旭川東高等学校
総務委員(受付)	千 葉 雄 次	北海道	旭川東高等学校
総務委員(受付)	白 田 裕 基	北海道	旭川東高等学校
総務委員(式典)	菊 田 茜	北海道	旭川東高等学校
総務委員(式典)	渡 辺 瑞 恵	北海道	旭川東高等学校
総務委員(会場・記録)	須 藤 裕 昭	北海道	旭川北高等学校
総務委員(会場・記録)	本 田 晴 樹	北海道	旭川北高等学校
総務委員(輸送)	日 野 秀 一	北海道	旭川工業高等学校
総務委員(輸送)	白 戸 愁 真	北海道	旭川工業高等学校
総務委員(輸送・筆耕)	黒 川 朋 寛	北海道	旭川工業高等学校
総務委員(輸送)	佐久間 悠 子	北海道	旭川工業高等学校
総務委員(本部)	齋 藤 和 彦	北海道	東川高等学校
総務委員(本部)	藤 島 由 紀	北海道	東川高等学校
総務委員(宿泊・弁当)	阪 本 さおり	北海道	旭川西高等学校
総務委員(宿泊・弁当)	山 本 一 葉	北海道	旭川西高等学校
総務委員(式典救護)	宮 澤 紀久子	北海道	旭川東高等学校

【アトラクション・式典補助員】

担当	氏名	都道府県	所属
アトラクション・式典	多 田 彩 花	北海道	旭川東高等学校音楽部
	岡 本 智結梨	北海道	旭川東高等学校音楽部
	山 本 潤	北海道	旭川東高等学校音楽部
	谷 村 誠 矢	北海道	旭川東高等学校音楽部
	山 田 弥 佳	北海道	旭川東高等学校音楽部
	高 橋 巧 磨	北海道	旭川東高等学校音楽部
	北 島 有 紗	北海道	旭川東高等学校音楽部

アトラクション・式典

佐川百恵	北海道	旭川東高等学校音楽部
佐藤杏樹	北海道	旭川東高等学校音楽部
横浜桃香	北海道	旭川東高等学校音楽部
高橋みちる	北海道	旭川東高等学校音楽部
菊地英介	北海道	旭川東高等学校音楽部
西尾美樹	北海道	旭川東高等学校音楽部
水間樹	北海道	旭川東高等学校音楽部
木下陽菜乃	北海道	旭川東高等学校音楽部
堀花純	北海道	旭川東高等学校音楽部
山田梨乃	北海道	旭川東高等学校音楽部
久保翠蓮	北海道	旭川東高等学校音楽部
本母実結	北海道	旭川東高等学校音楽部
藤島有音	北海道	旭川東高等学校音楽部
渡邊由佳	北海道	旭川東高等学校音楽部
近藤舞美	北海道	旭川東高等学校音楽部

【運営補助員】

担当	氏名	都道府県	所属
式典放送	造田紗央音	北海道	旭川東高等学校
	片岡凜	北海道	旭川東高等学校
	松村怜林	北海道	旭川東高等学校
	糸毛陽香	北海道	旭川東高等学校
式典運営・会場準備等	南澤寿凜	北海道	旭川東高等学校
	一ノ瀬玲央	北海道	旭川東高等学校
	太田創	北海道	旭川東高等学校
	中西海斗	北海道	旭川東高等学校
	飯田優心	北海道	旭川東高等学校
	澤田乃彩	北海道	旭川東高等学校
	関口詩乃	北海道	旭川東高等学校
	佐橋知英	北海道	旭川東高等学校
	加賀谷華	北海道	旭川東高等学校
	林一樹	北海道	旭川東高等学校
	青木一馬	北海道	旭川東高等学校
	早坂翼	北海道	旭川東高等学校
	佐藤拓人	北海道	旭川東高等学校
	水間樹	北海道	旭川東高等学校
	平田周	北海道	旭川東高等学校
	熊田彩里	北海道	旭川東高等学校
	三浦俊亮	北海道	旭川東高等学校
	川村峻矢	北海道	旭川東高等学校

式典運営・会場準備等

高 野 晴	北海道	旭川東高等学校
長 野 翔太郎	北海道	旭川東高等学校
板 垣 飛 翔	北海道	旭川北高等学校
泉 谷 琉 斗	北海道	旭川北高等学校
高 橋 伸 作	北海道	旭川北高等学校
中 塩 拓 斗	北海道	旭川北高等学校
村 岡 快 遂	北海道	旭川工業高等学校
佐 藤 春 輝	北海道	旭川工業高等学校
佐 藤 将 城	北海道	旭川工業高等学校
森 田 羽	北海道	旭川工業高等学校
向 井 陽 生	北海道	旭川工業高等学校

【競技補助員】

担当

競技・幕営地補助

氏名	都道府県	所属
米 澤 彼 方	北海道	旭川東高等学校
傳 馬 優太郎	北海道	旭川東高等学校
泉 康 太	北海道	旭川東高等学校
東 方 耀 平	北海道	旭川東高等学校
長 野 詠 祐	北海道	旭川東高等学校
岩 井 陽 菜	北海道	旭川東高等学校
迫 さらら	北海道	旭川東高等学校
村 山 想 真	北海道	旭川東高等学校
大 川 蒼 太	北海道	旭川東高等学校
吉 田 元 修	北海道	旭川東高等学校
佐々木 の ん	北海道	旭川東高等学校
千 田 光 矢	北海道	旭川北高等学校
堀 内 七 創	北海道	旭川北高等学校
安 達 恵 介	北海道	旭川北高等学校
堂 前 佳 史	北海道	旭川北高等学校
本 田 陸	北海道	旭川北高等学校
内 山 亮	北海道	旭川北高等学校
筒 井 朋 恵	北海道	旭川北高等学校
山 和 希	北海道	旭川北高等学校
高 橋 智 哉	北海道	旭川北高等学校
奈 良 果 音	北海道	旭川北高等学校
久 保 蒼 月	北海道	旭川北高等学校
白 鳥 涼 和	北海道	旭川北高等学校

幕営地補助

[illegible][illegible]

10. A隊行動記録

A隊コース隊長 小池 圭太
(北海道旭川工業高等学校)

多くの方々にご協力いただき、令和5年度全国高校総体登山大会を無事に終了することができた。36年ぶりに開催された北海道インターハイは、まずはインターハイを知るところから準備が始まった大会であった。またコース設定は、大雪山を縦走するという北海道の山を代表する素晴らしいコースであったが、エスケープルートが無いなどの懸案事項もあった。しかし、大きな事故など無く無事に大会を終えることができた。ご協力いただいた多くの方に感謝申し上げ、この大会を振り返りたい。

1 大会前日8月6日(日)

この日は、開会式の行われる旭川市民文化会館に集合して事前準備を行った。午前中は視察員説明会に同席し、福岡県と広島県から来られた視察員の方々と情報交換を行った。行動役員の選出方法や大会中の行動について(隊行動か班行動かなど)説明をした。昨年までは視察員として登山大会に参加していたので、いよいよ自分たちの番が来たと感じ、徐々に緊張感が高まってきた。また、この日は審査員会にオブザーバーとして参加した。審査員の方々と登山行動における休憩地点の確認などを行った。ここでは行動隊と審査員の連携はとても大事だと感じた。お互い、多少の調整をして審査員会は退席した。最後に監督・リーダー会議に出席した。大雪山では登山中に長時間の休憩をとることは難しい。低体温症のリスクがあるためだ。そのため、今大会においては、短い時間の休憩を複数回とることを説明した。昼食についても複数回に分けるように連絡した。この時点では明日以降の天気予報が良くなく、登山行動がどこまで出来るのか不安を感じていた。

2 大会1日目8月7日(月)

今大会は4年ぶりにテント泊や炊事などが復活した。ようやく元に戻った大会であった。開会式においてもアトラクションが行われた。旭川東高校の生徒達からの歓迎があり、大会は開幕した。行動役員も開会式に参加してもらった。この日はコース隊編成や装備審査、写真撮影などがあるが、行動隊役員との細かい打ち合わせは無い。そのため、開会式終了後すぐに行動役員にはステージ前に集ってもらい、この日の行動について確認した。タイムスケジュールが厳しいこともあり、コース隊編成はA隊、B隊合同で行い、班長の紹介のみであった。その後すぐに班長と副班長は選手をバスまで誘導し、いよいよ幕営地への移動となった。幕

営地到着後はすぐに装備審査、そしてチームごとの写真撮影と続き、全体の動きを指示するのが大変だったが、班長と副班長の臨機応変な対応によって、何とかスムーズに進めることができた。また、空き時間や設営審査中などを利用した交流会も、上手に時間を使ってもらえたので助かった。設営隊への引き継ぎが終わり、夕方の役員会でもやく行動役員がそろっての打ち合わせとなった。この日は無線機も無く、行動隊の動きを指示するのが非常に大変だった。ただ、行動隊の皆さんの主体的な動きですべて上手にこなすことができた。初日にして、とても助けられた1日目となった。行動役員の打ち合わせでは、次の日の天候があまり良くない予報であるが、予定通り行動することを確認して終了した。

3 大会2日目8月8日(火)

朝、朝食と昼食を受け取りに本部に行くと、内海登山隊長からコースなどの変更連絡を受けた。変更内容は、全装行動からサブザック行動とする、コースを上ホロカメットク山の往復登山とすることであった。理由は新型コロナウイルスの感染者が選手等から出ている状況を勘案して総合的に判断したとのことであった。天気予報もあまり良くなく、実は登山行動中でのコース変更を想定していた。十勝岳に行けないことは非常に残念であったが、登山行動開始前でのコース変更は、ある意味で気が楽になった。引き継ぎ式は予定通り行われ、班ごとバスに乗り込んで十勝岳温泉登山口に向かった。上富良野高校でのトイレ休憩は予想以上に時間がかかったが、ほぼ計画通りに準備できた。この日はすべて班行動である。1班から3分ごとにスタートしていった。歩き出しの序盤から雨粒が空から落ちてくる中、予定取りのペースで隊は進んでいった。



300階段の上から見た雲海

300階段を上りきったあたりでは雨は非常に弱くなり、上ホロカメットク山の頂上が目視できるくらい明るくなる瞬間もあった。また、富良野岳も見えていて、まずまずの天候であった。その後も上富良野岳から上ホロカメットク山が見える時があった。上ホロカメットク山の頂上では、ガスが濃かったが、雨は無く風も弱く、予定通り休憩することができた。下山はB隊とのすれ違いである。すでにB隊の1班が上富良野岳まで上がってきており、上富良野岳付近が大渋滞になってしまっていたため、とりあえずA隊を優先して下山させることにした。B隊には申し訳なかったが、道を譲ってもらいながらA隊は班ごとに順次下山した。300階段を降りると、雨も本降りとなってきて、びしょびしょで登山口に到着した。天候的にはかなり厳しい登山となったが、気温が高めであったことが幸いであった。また、短い時間でも、十勝岳連峰の壮大な自然を見ることができて良かった。A隊がすべて下山後、バスは出発し、白金温泉でお湯に浸かった。今大会唯一のお風呂であったが、濡れた体を温めるのにちょうどよかった。入浴中もかなり強い雨が降っていて、心配な中、幕営地に戻ると何とテントが水没していた。かなり水はけの良い幕営地であったが、スコールのような激しい雨によって、完全に水没していた。ショックであった。内海登山隊長の指示により、避難場所として指定していた東川高校の体育館に移動することになった。結果的には体育館で引き継ぎ式を行い、炊事は駐輪場の屋根の下、そしてその日の夜は体育館で寝ることになった。B隊はさらに隣の東川中学校の体育館で寝ることになった。

4 大会3日目8月9日(水)

この日は今大会で一番のメインとなる大雪山の縦走コースである。相変わらず天気予報はよく無いが、計画通りに引き継ぎ式が行われてバスは出発した。選手に聞くと、体育館は快適に寝ることができたという選手もいれば、落ち着かず寝れなかったという選手もいた。不安定な天候を恨みながらも、なんとか今日は雨が降らずにいて欲しいと願うばかりであった。上川高校でのトイレ休憩は、班長、副班長の連携でスムーズに終わることができた。層雲峡駅からのロープウェイも、ほぼ計画通り乗車できた。黒岳リフトを乗り継ぎ、順調に登山口に到着した。ここから黒岳の頂上までは班行動である。黒岳5合目駅でトイレに行った選手が数人いて、若干遅れたが全ての班がほぼ予定通りに出発した。黒岳頂上までの班行動は、離脱するチー

ムもなく全選手がチーム行動に移ることができた。私が隊の最後尾で黒岳の頂上に到着すると、A隊全ての選手がチーム行動スタートの準備をしていた。若干風はあるが、選手が頂上で待機するのに問題はなかった。そして、すぐにチーム行動のスタートである。約4年間、この大会のために準備をしてきて、目の前でチーム行動のスタートが切られた瞬間、思わず感動してしまった。この大雪山で全国の高校生がチーム行動でスタートしていく姿を見て、本当に今まで準備してきてよかったと感じた瞬間であった。また、天候もそれを讃えるかのように青空が見えていた。選手たちは勢いよく黒岳頂上を後にし、北鎮岳を目指して歩いていった。



黒岳の頂上からチーム行動がスタート

途中のお鉢平展望台からは、大雪山のお鉢がきれいにすることが出来た。北鎮分岐から北鎮岳の間は、ガスが濃く、眺望を楽しむことは出来なかったが、何とか雨も降ることなく登山行動を進めることができた。中岳付近もガスが濃く、踏み跡が不明瞭な箇所もあったが、班長、副班長が登山道に立って選手を見守るなど、役員の迅速な対応で安全登山を実現することができた。行動役員には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。



お鉢を見ながら中岳を目指す選手

結果的には1チームも離脱することなくゴールの姿見駅までたどり着いた。この大雪山縦走コースが無事に終わったときは、安堵感でいっぱいであった。この日は幕営地で引き継ぎ式を行い、選手はそれぞれのテントで夜を迎えることができた。

5 大会4日目8月10日(木)

登山行動最終日は北海道の最高峰旭岳の往復登山である。天候も当初の予報に反して、悪くなかった。ただ、前日の夜は気温が下がらず、非常に蒸し暑い夜だった。おそらく選手のテントの中は、蒸し風呂のような状態だったと察する。寝ることができなかった選手も多かったようだ。予定通りに引き継ぎ式が終わり、バスに乗車する。この日は監督達が拍手で選手達を送り出してくれた。



気温が高く、ガスがかかる早朝の幕営地

登山口に到着すると、すでにチェックポイント隊がチーム行動スタートの準備をしていた。予定通り姿見までのチーム行動がスタートした。この日は結果的に今大会唯一の全装行動であった。さすがに昨日のチーム行動とはペースが違い、最後尾のチームに追いつきそうになるので、コース隊長はペースを確認しながら行動した。しかし、盤の沢の登りで1チームが離脱となった。熱中症のような症状で、すぐに支援隊に引き渡し、看護師と医師の支援を受けた。気温が若干高いことと、ザックが重いこと、そして、3日間の行動の疲れがここで出ている様であった。姿見からは班行動である。私が姿見に到着するとすぐに最初の班のスタートであった。しかし、ここで2チームほどが、体調不良で行動が厳しい状態であった。すぐに支援隊と看護師による支援をお願いして対応した。この日の行動に関しては、特に支援隊、医療隊、自衛隊の皆さんにはとても助けられた。感謝でいっぱいである。班行動は定刻にスタートした。旭岳を覆っていたガスも、徐々に晴れてきて、十勝岳連峰やトムラウシ山まで見ることができた。A隊のすぐ後ろで行動し

ていた監督隊から歓声が聞こえてきた。しかし、全装行動での旭岳の登りは厳しく、すぐに2チームが班離脱となり、隊であずかった。チーム内で体力的に厳しい選手の荷物を他のメンバーに分けるなどして、何とか頂上まで登りきった。1人では登ることができない山も、チームで協力すれば登ることができる。これも登山で大事なことの1つだとあらためて感じた。



噴煙を見ながら班行動で頂上を目指す

8合目付近で休憩していると、先に登頂した旗手が頂上でコース旗を大きく振っているのが見えた。その光景に、選手と監督から歓声が上がリ、最後の1ピッチへの大きな励みとなった。そして、監督隊も予定していたコースタイムで頂上まで登り、頂上では選手から拍手で迎えられていた。ガスがかかったり晴れたりを繰り返す頂上では、監督と選手と一緒に写真を撮ったり、食事をしたり自由な光景が広がっていた。何より風が無いのが幸いである。



専門委員長隊から激励を受ける選手達

そしてここからはパーティ行動となる。監督と選手と一緒に下山していく姿は、なんとも微笑ましく感じた。9合目付近では足がつって動けない選手がいて離脱したチームがあった。旭岳にエスケー

プルートは無い。自衛隊員がその動けない選手を背負い、下山することになった。自衛隊員の手際の良さと、歩けない選手を背負って下山していく体力とスピードには驚いた。エスケープルートの無い大雪山において、自衛隊員による支援は非常にありがたく助けられた。心から感謝を申し上げたい。往復登山なので、下山はB隊とすれ違う。A隊とB隊が互いに声を掛け合いながらの下山は、この登山大会における頑張りを、互いに讃えているようで微笑ましかった。予定通り選手、監督、役員はロープウェイで下山し、バスに乗車した。最後はエアコンの効いた東川町農村環境改善センターで解散式を行った。



班ごとに最後の交流をした解散式

各班ごとに交流し、写真撮影など行なって登山行動の全てが終了した。最後に選手の乗ったバスを見送った時に、ようやく登山大会が終わろうとしていることを実感した。

6 大会5日目8月11日(金)

開会式と同じ旭川市民文化会館に集まり、閉会式が行われた。高校総体登山大会もいよいよフィナーレである。結果発表では、喜びで涙ぐむ選手の姿を見て、一生に一度しか無い高校生活で、登山競技に全力をかけてきた思いを感じた。閉会式ではA隊のコース旗を次年度開催県となる福岡県のA隊コース隊長に引き継いだ。北の北海道から次は南の九州である。福岡インターハイの成功を祈りつつ、コース旗を引き継いで握手を交わした。今大会を通して、全国の多くの人と出会い交流することができた。我々に共通していることは、ただ「山を登る」というだけである。一言で「山を登る」と言っても、多様な登山があるのも事実である。例えば8000m級の山に挑戦する登山もあれば、カメラを片手に近くの里山をハイクする登山もある。どちらも登山である。登山に上も下も無い。多様である。その多様性を受け入れることができるのも登山

の魅力の一つだと感じている。だから山を登る人には、個性的な人が多い。そして互いをリスペクトする。今回のインターハイの登山競技を通して、いろいろな人と出会い、そのような登山の素晴らしさにあらためて気付かされた。最後に登山を愛する、個性的な役員、監督、選手、関係する全ての人に感謝申しあげてA隊の行動記録としたい。本当にありがとうございました。

11. B隊行動記録

B隊コース隊長 飯田 一三
(北海道旭川東高等学校)

1 全体として

今回は熱中症に加えて、低体温症の懸念もあり、ナーバスな行動となったが、本州での大会は熱中症が心配される。8月の初めに 1000～2000mの山々で地元の人でさえその時期には登らないような山でやるのはわざわざ熱中症になりに行くようなものだと感じる。開催時期の変更を求める。また、暑さ対策として、引継式終了後はすぐに移動するのも大切だと思う。例年は式後にダラダラしている気がする。今回はすぐに移動した。また、例年は引継式が長すぎる気がする。選手のためにも短時間で終わらせるべきである。



図1 2021年9月11日 全国高体連視察

一昨年の9月に中央総務及び審査員の数名、そして審査員講習会での審査員との交流でコミュニケーションが取れたことで大会運営がスムーズにできたといえる。特に審査員講習会ではコース隊長2人が案内したことでお互いに信頼が生まれたことはありがたかった。また、いつもさまざまな大会をともにし、プレ大会を通して班長とも信頼関係があったことも重要であった。今回、班長は総務委員長が中心に人選を進め、副班長は班長が自分で決めており、大会役員それぞれの調和が取れていたと感じる。

今回は十分なトイレの数が確保された。それにより、トイレのために時間が延びることはほぼなかった。また、簡易トイレブースも使用していた。今後は個人装備として携帯トイレも入れるべきだと感じる。

隊長の下では、隊付きの総務・通信・記録と常に一緒に行動であった。そのため、隊長としては時間など細かいことはまかせ、リタイアや全体的な時間配分、天候チェックなど大局を見て行動することができた。これまで数回の隊長さんの動きを見ると、無線・AP・スマホ・バインダーと全て持って一人でやっている感じがしていた。隊長は大局を見る余裕がほしいと感じる。

無線のチャンネルは男女分けたが、スタート時は男子に合わせた。先発が男子隊のためで行動の動きを生かすことができるからであった。途中から私の判断で切り替えるように指示した。ただ、隊長以下は本隊とは若干離れているので、イヤホンを外し、隊付き総務は男子のチャンネルに合わせて全て傍受して全体の把握に努めた。

各班長にはラミネートされた班名を持ってもらった(B隊は赤色)。これはかなり有効で班員が集まりやすい。今後とも継続するべきである。

2 大会1日目 8月7日 開会式→東川町

行動隊編成はホールにて男女一緒に行った。また、紹介も班長のみとした。交流会を行うのでこれだけで十分であった。例年は別々に行っていたが、同じフロアでやることが多く、声が混じるなど聞き取り辛いことが多かったので今後とも一緒にやっていくのが良い。ホールからバスまでの動線は昼休みに班長と打ち合わせ、また補助員の誘導もあり、スムーズにできた。ただ、無線が初日はまだ配布されず、やり辛かった。テン場移動後、装備点検

の最中にカメラマンの写真撮影。これはかなり時間がかかり、イライラした。まず、カメラマンが1名のみ。これは運営上大変困った。テント設営後もやったが、班長の誘導でスムーズになった。



図2 コース隊編成

3 大会2日目 8月8日 上富良野岳まで

班行動 サブザック行動

コロナ陽性者が続出し、朝の確認作業でかなり時間がかかった。深夜まで中央総務の会議があったようだが、何とか歩くことができてよかった。班行動は班長と副班長の連携がよく取れており、早いとか遅いとか言い合いながらも予定通りの行動となった。上富良野岳からの下山で雨に当たり、だんだんと雨脚が強くなって、途中の班から休憩をなくしての行動となった。

引き継ぎ式終了後も体育館での避難生活のため、隊長及び班長による指示も出した。

行動隊の会議は引き継ぎ終了後に速やかに行った。例年夕食後が多いと思われるが、すぐに短時間で行うのが良い。



図3 十勝岳温泉登山口にて



図4 三百階段上の稜線



図5 上富良野岳山頂



図6 緊急避難所 東川高等学校体育館

4 大会3日目 8月9日 黒岳～北鎮岳～裾合平

班行動→チーム行動 サブザック行動

トイレで遅れた班があったが、その時間分、チーム行動を遅らせた。また、チーム行動のスタートはチェックポイント隊に任せた。チーム行動はスター

トからゴールまで全てCP隊に任せた方が良い。北鎮岳付近は濃霧ではらはらどきどきさせられた。北鎮分岐から中岳分岐まではそれぞれ班長副班長に立ってもらったが、北鎮分岐から北鎮岳は無人。どうしようがなかったが、選手はしっかりと迷わず歩き、安心した。



図7 黒岳から黒岳石室と凌雲岳



図8 雲の平を行く



図9 黒岳を背に雲の平を行く



図10 中岳稜線

5 大会4日目 8月10日 旭岳

チーム行動→班行動→パーティ行動 全装行動

これまでの引継式にて厳しい天候や体調管理の把握が予想されるから、特にリーダーは責任を持って把握、リタイアもリーダーの責任だから、と再三話したが、この日はその効果が現れた。

今回初の全装行動。やはりゴール前にリタイアが出た。私の方で確認を取り、支援隊に預ける。以降は隊長—支援隊のやりとりではなく、支援隊—登山隊長とする。これはかなり有効で、今後ともこのやり方を踏襲していくのが良いと思われる。

大会中、最も厳しい局面を迎えたのが、姿見の池CP1であった。まず、熱中症の疑いで旭岳石室で医師の治療。ここからリタイアしたいと申し出が続々とくる。これは各チームのリーダーがしっかりと責任を持ってくれた証であると感じた。登山隊長への報告が何回もあった。ただ、細かいことは支援隊—登山隊長で話してもらったのがありがたかった。既に出発した男子の無線からは班離脱が相次ぎ、こうした状況下でのB隊としての対応が重大な局面を迎える。全班長を招集し、登りを全装ではたどり着けないことが予想され、サブ行動を私から提案、満場一致でB隊の総意として登山隊長に提案する。また、サブになった場合の携帯品の確認と各チームの体調把握も合わせて確認した。また、12:30RW乗車も間に合わず、14 時乗車の可否を登山隊長に確認する。これらが認められ、何とか

登り始めることができた。登山隊長及び中央総務の先生方、ありがとうございました！！登る途中、このペースだと 14 時までに合わないと予想し、登山隊長へ具申。最大 14:30 前後まで認めてもらい、以降休憩なしで登った。コース隊長によるこうした変更は過去あまり無かったかと思われるが、今後こうした重大な判断がコース隊長にはより求められると考えられる。だからこそ、隊長は大局を考えられる心の余裕がほしいし、その環境も整理する必要が感じられる。また、B隊はA隊よりはデリケートなので経験豊富でかつ臨機応変な対応ができる人物が隊長となるべきである。やや生意気な言い方であったが、今回はたまたまうまくいったにすぎない。ただ、そこに行き着くまでに各方面との信頼関係、リーダーの重要性、隊長自身のゆとりがうまく作用できた結果だと感じる。

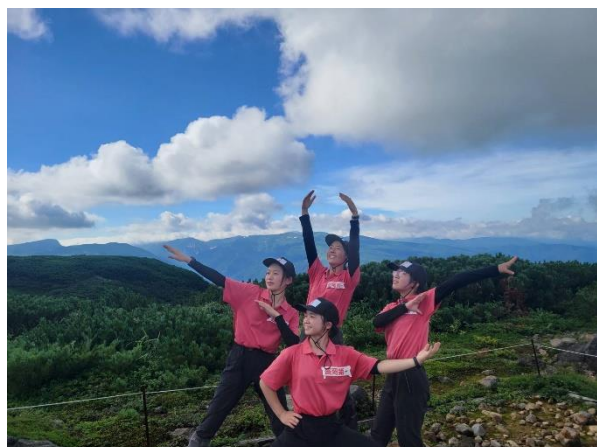


図11 姿見の池にて①



図12 姿見の池にて②



図13 旗手 山頂直下



図14 旭岳山頂にて①



図15 旭岳山頂にて②

12. A・B 隊支援隊報告書

A隊支援隊長 田中 拓己

(北海道札幌北高等学校)

生徒を下山させることになったとき実際にどのような動きをしていいのか、我々が最後まで歩けるのかなど不安だらけでした。直前の安全対策会議で、実際の隊列に近い形での動きの確認。医療の方、自衛隊の方とも行動をすることが出来たこと、我々も最後まで歩けたことからだいぶ不安は解消されました。また、課題も見えてきたと思います。

迎えた本番のインターハイではコロナにより登山できなかったチームを除き、登山1日目、2日目は離脱するチームもなく終えることが出来、このまま何事も無く終わって欲しいなと思いました。



登山最終日、全装での旭岳登山。いろいろな場所で4チームが体調を崩しコース隊長・医療隊の迅速な対応で下山する判断をしました。(睡眠不足や前日の夜に脱水症状を起こしていたことなど確認されています)医療隊の方は生徒が待っている場所に少しでも早く到着しようと、息を切らし全力で登っていただきました。この下山についてはそれぞれの場面で支援隊員1名が付き、自衛隊の方には体調を崩した生徒を背負っていただき対応しています。複数回、きつい登りや足場の悪い下りで、生徒を背負って長い距離を歩いていただいた自衛隊の方にはただただ感謝です。自衛隊の方がいらっしやらなかったら大変なことになっていたことが想像できます。また、下山することになったチーム、

途中まで苦労して登ったのに降りていただいた支援隊員の方のことを思うと心が痛みます。

多くの方の協力により、事故もなく無事に終えることが出来、感謝しています。ありがとうございました。



B 隊支援隊長 山下 文孝

(道高体連登山専門部OB)

支援隊は、登山行動中の不測の事態発生時に、それに対応するための様々な支援を行う隊と認識し、その場合、医療班も共に動く可能性が高いの

で、医療班と連携しながら支援体制を整えて活動に臨んだ。また、これは A 隊支援隊も同様で、

A 隊とも連携して、登山隊全体の統一を図った。具体的には以下の点である。

- ・ AED は必須の装備だが、結構重い物なので 1 隊に 2 台ある AED を共に自衛隊に運搬してもらった。支援隊の負担軽減につながり、自衛隊には感謝したい。踏襲すべきである。また、2 台同時に稼働する可能性は非常に小さいが必要時に迅速に対応するためには 2 台は必須で、必要場所へ届く時間を短縮するために、今回は各隊の中央と最後尾に配置したが、隊の前四分の一と後四分の一に置くのが理想的であろう。



- ・ 1隊当たり 50 校近くの参加校数で、1列縦隊で行動するので、AED と同様に、支援隊が隊の最後尾、隊長の後ろでは支援が間に合わない可能性があるかと判断し、AED に加えて支援隊の一部、看護師1名(AED に看護師は必須)を、隊の中央に配置(班数6による班行動の場合は3班目と4班目の間)した。

- ・ 旭岳の全装チーム行動では、RW の発着駅とチーム行動の開始点終了点が一致しており、登山道が意外と狭いなどを考慮し、A 隊 B 隊の区別なく、医師1名を含む医療班の一部と支援隊の一部を RW で先に姿見まで上げ、支援が必要になった場合には、AB 隊の区別なく最後尾にいる支援隊・医療班か、姿見に上がっている支援隊・医療班か、早い方が対応する体制を取った。山では、往々にして高い所から下る方が速いことを考慮した措置でもある。結果として、支援隊・医療班が途中で駆けつける事態は聞いていないが、これとは別に、オーバーワークなどで姿見に上がって来るチームが結構あって、これには待ち構えていた医師、看護師が素早く対応できた。この時は、かなりの忙しさであった。医療隊には感謝したい。全装行動であったことを考えると、この日のチーム行動の制限時間は短すぎたのではないかな。



管轄外の事項

重要 医療班の看護師さんたちからの一言

旭岳の熱中症続出について、熱中症でバタバタと生徒が倒れるということが、IH 登山で毎年のように起きているが・・・？ 暗に、高校生の大会の在り方としてこれでいいのか と述べられていると思う。今回の場合、それを見てかどうかはわからないが、途中で B 隊隊長がサブ行動に切り替えたのは英断だったのではないかな。賞賛したい！細かい規定や、習慣に縛られないのが登山の良さであろう。柔軟に対応すべきである。



なお、熱中症対策は、班長、副班長のかかわりが大事になってくるのではないかな。出発前の帽子、保持している水の量の点検(1人1L は必須で2L は欲しい)、着帽、薄着の奨励、休憩ごとの給水奨励、など。

13. 救護記録

No	時刻	A選手、B選手、役員	症状等
1	2023/8/7/17:00	A	抗原検査陽性
2	2023/8/7/17:00	B	抗原検査陽性
3	2023/8/7/17:00	B	抗原検査陽性
4	2023/8/7 19:50	B	コロナ陽性、症状悪化により救急通報(21:00)搬送(21:10)
5	2023/8/8 4:00	A	コロナ陽性
6	2023/8/8/3:40	A	昨日朝37.2℃倦怠感
7	2023/8/8/3:45	A	8/7咽頭痛 元気 コロナ陰性
8	2023/8/8/4:00	B	8/7咽頭痛 元気 コロナ陰性
9	2023/8/8 14:10	A	微熱 コロナ陰性
10	2023/8/8 14:15	A	左手親指切り傷
11	2023/8/8 14:20	A	腰痛
12	2023/8/8 19:10	B	暗くて眠れない 家に帰りたい
13	2023/8/8 19:30	B	微熱 コロナ陰性
14	2023/8/8 19:40	B	微熱 コロナ陰性
15	2023/8/9 3:45	A	コロナ陽性
21	2023/8/9/17:10	B	脱水、頭痛、倦怠
22	2023/8/9/18:50	B	発熱、コロナ陰性
23	2023/8/9/18:50	B	発熱、コロナ陰性
24	2023/8/9/19:50	B	ストレス
25	2023/8/9/19:50	B	ストレス
26	2023/8/9/20:10	B	脱水、微熱、頭痛
27	2023/8/10/4:00	B	発熱、コロナ陰性
28	2023/8/10/4:00	A	発熱、コロナ陽性
29	2023/8/10/5:00	役員	発熱、コロナ陰性→陽性(11:00)
30	2023/8/10/7:17	A	吐き気、疲労:8:50コ可能性・救急搬送(ー)
31	2023/8/10/9:26	A	両太ももつり・途中まで担ぎ搬送
32	2023/8/10/9:48	A	両太ももつり・途中まで担ぎ搬送
33	2023/8/10/9:39	B	手足しびれ、脱水・姿見から担ぎ搬送:10:00コ可能性・救急搬送(ー)
34	2023/8/10/9:40	B	疲労・睡眠不足・離脱希望・離脱
35	2023/8/10/9:40	B	疲労、めまい、離脱
36	2023/8/10/9:20	B	頭痛、離脱希望、離脱
37	2023/8/10/8:10	A	脱水、しびれ、担ぎ搬送
38	2023/8/10/8:11	B	吐き気、過換気、行動離脱
39	2023/8/10/9:55	B	頭痛、寒気、湯たんぽ使用、離脱:12:00コ可能性・救急搬送(ー)

1. 今大会の救護体制

救護本部(救護室)を東川町B&G海洋センターに設け、看護師1養護教諭1に常駐していただいた。また、行動隊への帯同には医師2名看護師4名の体制で臨んだ。開会式、閉会式のチーム健康チェックシートはgoogle formを利用して、省力化を図ったが、紙媒体での提出が多く、煩雑になった。

2. 北海道大会の状況

コロナ感染症が第5類に分類されて初めての大会であったが、初日から陽性者が出現し離脱する

など、影響は大きかった。医師からの助言もいただきながら、変化があった場合の検査の実施を選手、監督に呼びかけ、かなりの簡易検査を行い、ある程度の封じ込めの効果があったのではないかと考える。気候の変動、慣れないテント生活での疲れや不安に起因する救護室利用が多く、かなりの人数の処置者が出たことで、救護室、医療班、支援隊、自衛隊の皆さんにはご苦勞をおかけした。この場をお借りして、感謝申し上げたい。これからテントが競技にもどり、この傾向は強まると考えられる。

14. 通信に関して

通信隊長 及川 研一郎
(北海道旭川北高等学校)

自衛隊通信の皆様のご協力・中継の設置・通信器機の変更により、大きな支障はなく遂行できたと考えております。特に各隊で本部との通信にあられた方々には多大のご負担をおかけしたことを思います。お力添えありがとうございました。また、器機の管理については、本部通信側からの細かい注文に沿って使用いただき、お礼申し上げます。



以下、気の付いたことを記しておきます。

通信機器の管理上、使用者と機材No.をあらかじめ紐づけしたのは有効でした。細かいパーツの紛失はありましたが、大きな支障にはなりませんでした。結果的に、デジタル無線は3台程度の予備を確保しながら運用しました。



通信状況については、2度の安全対策会議や北海道予選での通信運用状況から、中継位置を工夫する、通信会社を変える、などにより改善された部分もありますが、山壁に入ると容易に通信できない山域は最後まで残りました。

本部の通信環境ですが、行動隊通信の他に多くの人員がそれぞれ動き回り、発言し、場合によっては、通信している傍らで、会議が行われるなど、情

報の混乱・伝達の遅滞につながりかねない状況が見られました。1日目の十勝岳周辺のような、天候悪化などによって、緊迫した状況下での伝達・判断が迫られる場合には、本部の通信環境も行動の成否を左右しかねない重要な要素になると考えます。通信内容が、そのままスクリーン・モニター上に文字化されれば、狭い場所でも支障なくやれるかもしれませんが。通信内容を逐一エクセルに打ち込む作業も並大抵のものではありません。

通信を担う人員は、自衛隊の皆様と違い、それを専門としているわけではないので、基本的な器機の取り扱いから、山域の地形を考慮に入れた実際の発信・受信に至るまで、同じ人員による同じ行程での訓練が大切であることも痛感しました。

以上、反省点もないわけではありませんが、与えられた状況の中で、多少の工夫を加え、大部隊の行動を通信面からサポート出来たことは幸いです。



15. 設営隊の記録

設営隊長 藤本 和夫
(北海道岩見沢東高等学校)

1 はじめに

4年ぶりの幕営実施の大会となった。コロナ渦で大会自体が中止になったり、幕営審査はするがテントを使用しない宿泊施設に宿泊するという大会が続いていた。私は、令和3年度の福井大会を視察に言ったのだが、実際に選手が宿泊した幕営地の状況を目にすることがなかったため、様々なことを予想し、過去の資料を基に計画準備を進めるしかなかった。それに加え本番は大雨による緊急避難もあって、柔軟な対応を迫られる場面にも遭遇することになった。

2 大雨と避難と猛暑の幕営地



大会中の幕営地の様子を簡潔に表すと、1日目、蜂騒動と雨の中広がるコロナ感染。2日目、テント場水没緊急避難体育館泊の静寂。3日目、火照る身体と猛暑のテント場で右往左往する選手。皮肉な

事に選手が一番身体を休められたのは、体育館だった様である。

3 蜂騒動



補助生徒のテント場上の土手にキイロスズメバチの巣を見つけた方が我々に危険を知らせてくれた。さっそく東川町に連絡して駆除していただくことになった。全身白い防護服に身を包んだ職員

が、殺虫剤で見事撃退してくれた。

4 静まりかえる体育館

2日目、大雨で水を湛えた幕営地から避難場所の中学校の体育館へ最終的に移動し一夜を過ごしてもらうことになった。まさかに備え避難経路

は設営隊全員で歩いて確認してはいたが、実際にそのような事態になるとは想定していなかった。設営隊を2班に分け、それぞれが各体育館を分担し、選手に指示を行った。宿泊場所の変化に応じて生じた調整や伝達方法等に苦慮したが、選手や監督に最終伝達する数分前に内容が突然覆され、現場が混乱する場面もあった。しかし、緊急時に配慮し、何とか事を治めた。

就寝時間の19時半を過ぎると、B隊選手の避難先の体育館は見事なほどに静まりかえっていた。日中の山行の厳しさを感じると同時に、その純粋さに感動すら覚えた。

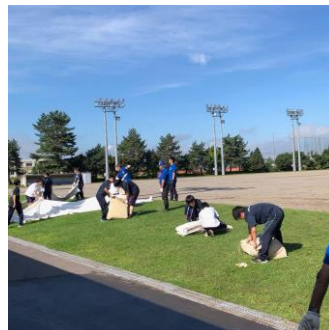
5 3日間寝泊まりした幕営本部



大会の3日間、私は幕営本部で寝泊まりした。1日目は雨降る夜中にコロナ感染チームのテントを別の場所に移動する現場に立ち会い、2日目は補助生徒を幕営地に残してい

ることもあって、避難場所の体育館と行き来しながら仮眠した。3日目の幕営地は蒸し暑さで体調不良の選手達が相談に訪れてきた。今思えば、水場がしっかりしていれば火照る顔や身体を冷ますのにもっと役立ったかもしれないと悔やまれる。

6 おわりに



登山のインターハイを見たこともなく、設営隊そして設営隊長の仕事がどのようなものかも知らず引き受けてしまった仕事だった。手探りの業務を何とかやり遂げられたのは、副隊長の水野さんをはじめ、お

一人お一人の設営隊員と補助生徒の協力のお陰に他なりません。心より感謝申し上げます。

16. サポート隊の記録

サポート隊長 城座 研一

(北海道富良野緑峰高校)

サポート隊はおもに携帯トイレブース(簡易テント)の設営、管理、撤去と、重要な分岐点のコースサポートに当たった。

サポート隊は男性役員 3、女性役員 1 の計 4 名で当たる予定だった。携帯トイレブースの管理は女子選手の利用を考え、女性役員が当てられたと理解していた。しかし役員全体の数が足りず、女性役員は別の部署に振り替えられ、最終的に男性役員 3 名で業務を行うことになった。ところが同役員のうち 1 名が大会直前に新型コロナに感染したため欠席となり、実際は 2 名で業務を行うことになった。元々の予定の半分である。

大会 2 日目は十勝岳温泉から十勝岳連峰主稜線を縦走し、十勝岳を経由して望岳台に至るルートで、十勝岳避難小屋の横に携帯トイレブースを二基設置する計画であった。しかし男女とも縦走が中止になり、十勝岳避難小屋に達しないことがわかったので、この日は望岳台で顧問隊の先生方と一緒に待機となった。



大会 3 日目は黒岳から北鎮岳と中岳温泉を経由し、ロープウェー姿見駅に至る縦走ルートである。我々の任務は二つあり、中岳温泉に携帯トイレブース二基を増設すると同時に裾合平分岐でコースサポートを行うことである。元々の計画では 3 名とも搦め手の旭岳姿見駅から入山し、隊を二手に分け、中岳温泉にトイレブースを増設した後 1 名はそのまま中岳温泉に待機してブースの管理、選手・役員通過後は撤去しそのまま最後尾について

下山、2 名は裾合平分岐でコースサポートに専念する予定であった。裾合平分岐のコースサポ



ートは、A・B 両隊長に通過チームを無線で報告すると同時に愛山溪方面への誤進入を防ぐために必ず複数で当たる必要があったので、まず 2 名ともに中岳温泉に進出してブースを設置し、裾合平分岐に後退してコースサポートに当たった。選手・役員が裾合平分岐を通過した後、中岳温泉に再進出しブースの撤去を行った。人数不足でブース管理ができなかったのが汚れてはいないか?と心配していたが、汚れはなく安堵した。未使用と言うわけではなく、後で女性役員からブースを使用したと聞いた。裾合平分岐から中岳温泉までの往復と撤去で B 隊の最後尾から約 1 時間半の遅れとなったが、裾合平分岐につく頃雷雨となり、溪と化した登山道を姿見駅へと向かった。



途中、下山ルートがわからなくなっていた外国人 2 名を引率して姿見駅に着くことができた。下山後、選手達はあの雷雨に遭うまでにロープウェーに乗ることができたと聞き、安堵した。



大会4日目は旭岳山頂往復である。携帯トイレブースの設営、撤去はなく、旭岳石室と姿見駅との分岐のコースサポート終了後、姿見周辺で待機している監督のサポートを行う係と、旭岳山頂へ登攀する監督隊の最後尾についてサポートを行う係に別れた。私は監督隊に同行したが、途中歩けなくなった選手達が自衛隊の救護班に背負われて下山する姿を何度も見た。監督隊の先生にこれ以上登ることができない方がいたので、8合目付近で待機し体力の回復を見守った。幸い、自校の選手達と合流でき、その後は元気に駆け下って行かれたので安堵した。B 隊の最後尾について姿見駅に下山し、ロープウェイに乗車、我々の業務は終了した。

17. CP隊(兼通信隊) 報告書

CP隊隊長 漆山 裕章

(北海道旭川西高等学校)

今回のインターハイでは2回のチーム行動があり、CP隊はそのタイム計測を行うことが主たる役割だった。タイム計測の方法は ICONIT というスマートフォン用のアプリを使用し、事前にチームに配布したQRコードをスマートフォンで読み取ることでチェックポイントの通過時間を記録する方法を採用した。読み取りは、A隊、B隊通しで1機のスマートフォンで行い、スキャンした記録を2つの方法で本部へ送信した。1つは記録のページをスクリーンショットで画像化し、メールに添付して送信する方法であり、もう一つは同様のスクリーンショットをラインで送信する方法とした。

プレ大会を通じて分かったことは、まず、スタート位置では多くのチームがごったがえすので、声での指示だけでは誘導が成立せず、声の指示に加えて可視化した掲示用ラミネートを用意し、使用することとした。これにより各チームが情報を得やすくなることと、CP隊の中でも統一した指示を出すことができた。また、スタート位置での各チームの集合場所等の情報については、資料を作成し事前に配布したことで、混乱なく当日の実施に結びつけることができた。なお、スタート地点でのQRコードのスキャンは行わず、CP隊の記録係がスタート時間の記録を一括して行った。

次に、各チェックポイントの業務については、二日目が北鎮岳山頂(CP1)、旭岳ロープウェイ姿



見駅舎(CP2)、三日目が旭岳姿見の池石室前(CP1)の合計三カ所でのQRコード読み取りと本部への送信作業があった。特に、二日目のCP0、CP1の設置については、前日からCP隊8名が黒岳石室で前泊して準備にあたった。あいにくの悪天候の中の移動となったが、前泊して準備にあたったことで時間的に余裕を持って取り組むことができた。



CP1、CP2についても可視化した掲示用ラミネートを作成し、使用した。スキャン担当者はビブスを着用しチームが行き先を容易に分かるように工夫した。A隊、B隊を通じて、トラブルや混乱はなく、スムーズに記録業務を行うことができたと感じている。

制限時間を過ぎたチームが出てしまった場合、その情報を各隊の隊長が把握しておく必要がある。スタート時間も異なり、到着時間もバラバラな状況の中で把握するのは難しいが、記録担当者がスタートとやりとりしながら時間管理を行い、制限時間を超えたチームが出た場合は速やかに隊長へ報告できるシステムが必要であると感じた。

また、QRコードを紛失したり忘れたりして、予備のQRコードを再発行して行動しているチームもあった。これについても、新規に配布した番号の共

有が必要である。スタートとの連絡を取りながら、情報の共有を進めることが大切であると感じた。

通信業務については、黒岳山頂での中継が大きな役割を担った。北鎮岳山頂は電波状況が不安定で、通信できない場合が多くあった。通信空白の場面を減らすために黒岳山頂での中継の果たした役割は大きかったと感じている。

旭岳でも盤の沢コースで一部デジタル無線の空白地帯が見られた。通信隊と協力しながらIP無線で本部と通信を行ったが、100%中継できたわけではなかったので、ここについてはもう少しシュミレーションが必要だったと感じている。

全体を通じて、大きく破綻することなく業務を終えられたと総括します。それぞれの担当者の方々に助言をいただきながら、何とか業務を終えられました。全ての大会関係者の方々に感謝申し上げます。

18. 総務記録(開閉会式担当)

総務副委員長 高橋 健一
(北海道旭川東高等学校)

1年前の香川インターハイ視察業務から、今年度の北海道インターハイの準備が本格始動しました。香川大会総務委員長の玉垣先生、開閉会式責任者の土井先生には、本番業務のお忙しい中快く取材に応じていただきました。この場をお借りし、改めて感謝申し上げます。その視察・取材に加え、現地における視察団の先生方とのディスカッションにより、本番へ向けてのイメージを十分掴んだ上で今回の仕事に臨むことができました。一方、新型コロナ禍で短縮を余儀なくされてきた開閉会式を、4年ぶりに「フルバージョン」で行うという目標もあり、かなりの緊張感も強いられたのも事実です。以下、準備から本番に至るまでの「記録」を、担当として雑駁ながら挙げさせていただきます。

＜昨年度冬～今年度春＞

- ・過去5～6年分のマニュアルを精査。会場それぞれによる違いなどを確認しつつ、コロナ禍前最後の「フルバージョン」として行われた、2019年宮崎大会のマニュアルをベースに、今年度のものを作成していくこととした。
- ・アトラクションの内容や、4町にまたがって行われる大会の挨拶や歓迎の言葉の人選については、4月上旬から6月下旬・拡大会議の直前まで、道教委実行委員会担当者との協議を数々重ねる必要があり、確定までに時間を要した。
- ・本校音楽部に開会式「諸旗掲揚」の「高体連の歌」を生演奏してもらいたいと考え、全国高体連事務局に音源及び楽譜(ピアノ演奏)の有無を問い合わせたところ、「有」との回答を得、早速取り寄せ音楽部顧問に渡し、練習に励んでもらった(高体連の歌の音源は、HPやYOUTUBEでもアップされています)。早めに渡せたので、一安心であった。(図1)



図1 開会式 高体連の歌生演奏

＜5～6月＞

- ・細野総務委員長、道教委登山競技実行委員会担当者と、マニュアルの確認を重ねながら、何度も修正や微調整を重ね、拡大会議に提出する資料(第1版)とした(今年度のマニュアルで大きく修正した点は、リハーサル日程の追加と、閉会式における表彰時の段取り・動線の変更についてである。優勝チームから6位チームまで全チームが授与を受けた後揃って「記念撮影タイム」を設けたのが、今年度の形である。会場のステージや舞台袖が広がったため、当日は問題なくマニュアル通りに行えた)。完成したマニュアル(第1版)は、早速本校放送局顧問・担当生徒に渡し、顧問指導のもとで練習を始めてもらった。
- ・開閉会式で流す音源を準備。自家用車や職場、自宅等で「CDが擦り切れるほど!」聞き込み、使用曲を決めていった。その後、6月下旬から日本音楽著作権協会(JASRAC)北海道支部とのやり取りを重ねていった。営利を伴わず入場料も徴収しないインターハイではあるが、共催に「読売新聞社」が入っているということで、JASRACからは「著作権料が発生するイベント」との回答を受け、手続きを進めた。驚きだったのは、『「高体連の歌」

にも著作権料が発生』という点である！ 閉会式では「諸旗降納」、「諸旗引継ぎ」の2回流す場面があったため、後日届いた請求書には、「2曲分（¥480×2）」の金額がしっかり刻印されていました。

<7月～8月上旬>

・7月上旬の拡大会議終了後、マニュアルの修正・微調整を更に施し、マニュアル(第2版)作成完了。本校担当者全員(教諭・放送局・生徒会執行部・音楽部)に渡し、当日の業務をイメージしてもらった。放送局・生徒会執行部生徒とは、何度も細かなやり取りを行ってはきたものの、学校祭もあったため、7月中旬安全対策会議の裏で行った会議が「実質的な初動」といえた(そこでの流れは、昨年の香川大会で撮影した動画を流しながら今年度の手引きと見比べながら説明、その後ディスカッションというものであった)。ここでも、動線・文言訂正の必要箇所が散見され、また手直しへ…(手直しは何十回行ったか、数知れず…)。⇒補助員の誰が何を担当するかについては、何度も補助員生徒の意向も踏まえつつ吟味を重ねていく必要がある。

<8月6日(日)>

・開会式リハーサル当日。集合・点呼後、今日明日の流れや作業について説明し、準備やリハーサル業務に入った。ステージや音響の準備が整った後、本校音楽部がリハーサルを開始。その裏で補助員による会場座席配置や席次カード設置を行った。その後、優勝杯返還・レプリカ授与の部分練習を何度か行い、午前の最後に1度目の通しリハーサルを行った。

・昼食休憩を挟んで午後からは、4町から集まった生徒会長による「歓迎の言葉」のリハーサルを行った。30分という短い時間であったが、道教委実行委員会事務局の鈴木係長主導のもと、入念な練習が行われた。(図2)同時進行で、各県から寄せられた高体連登山専門部旗の設置(図3)を行いつつ、2回に渡る通しリハーサルにより、細部



図2 4町生徒会長による歓迎の言葉



図3 各高体連登山専門部旗の設置

の確認・修正を行った。「優勝杯返還・レプリカ授与」の所では、代役ではなく全国登山部長の本多先生自ら協力していただいた。ご本人から細部のご助言もいただき、大変有難かった。(閉会式リハーサルを含め、本多校長先生、ありがとうございました。)

・15時から選手宣誓者(本校山岳部男女代表)の練習も行え、前日リハーサルにより、ゼロとはいえないものの、不安要素は限りなく少なくてきた。唯一、1.5分で完了しなければならないアトラクション終了後のステージ設営(ピアノ移動や座席配置)のみ、何度も練習を行ったものの最大の不安材料といえたが…。

・この日は15:30から監督・リーダー会議が同会場で行われるため、15:15にリハーサルを終え、全体は解散。数名の生徒とともに会場の残る旗の設置を行った。

<8月7日(月)>

・開会式本番。入場後ただちに本校音楽部の最終リハーサル、その裏で放送局員・生徒会執行部員らが最終チェックを行った。8:50からの選手宣誓リハ、9:10からの杯返還・レプリカ授与のリハも問題なく行え、準備万端。会場には「北海道メドレー」・「北の国から」等のBGMを流しておもてなし(メドレー一曲や開会式の選手団紹介で使用した曲は、トラブルを避けるため、それぞれ予め編集により1曲に繋げておいた。なお、開閉会式とも幕前・幕後の曲使用に関する著作権料については、「不要」というJASRACからの回答もあり、全ての曲を安心して使用することができた)。(図4)

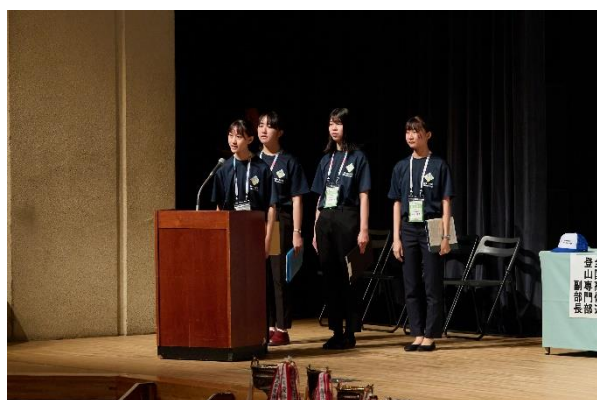


図4 旭川東高等学校放送局による司会

・9:40～、本校音楽部による「4年ぶり」のアトラクション開催。心のこもった、ホスピタリティ溢れる合唱・演奏を行ってくれたと思う。終了後、沢山の方々から賛辞やお褒めの言葉を頂戴した。出演した本人たちも、数日後に控えたコンクールに向けての良い意味での予行演習になったようで、その甲斐あってか全道大会進出を決めることができた。(図5)

・アトラクション終了後、来賓入場。来賓については、受付から控室(楽屋)までの誘導、控室から舞台袖への誘導に手間取った場面があった(閉会式を含む)。本大会は来賓の数も多く、またリハーサル時に観ていただくか否かの取り決めが失念していた(実際は現場の方々の機転により最前列でご覧いただいたが…)など、来賓に関わる受付体制の確認体制等について課題を残した。



図5 旭川東高等学校音楽部によるアトラクション
・10:00～、開会式開幕。ほぼ全て、マニュアル通りかつリハーサル通りに進行することができた。「選手団紹介」については、1都道府県につき15～20秒の尺で進行。マニュアルにも記載したが、最初の学校数校(今回は青森県からだったが、通常は北海道から)には、事前に打ち合わせを持っておいた方がよい。はじめの学校の所作が、その後を決めるといっても過言ではないため、引継ぎとしてコメントを残しておく。(図6)



図6 旭川東高等学校による選手宣誓

・昼食を挟んで午後は、ステージ以外の撤収作業ののち、閉会式リハーサルに入った。まだ出発していないB隊女子が多数残っていたため、開始がかなり遅れた。リハーサルの中では、入賞した6チームの誘導をどうスムーズに行えるかが大きな鍵となった。A隊・B隊の目標時間(マニュアル記載時間)は「各10分=計20分」であったが、記念撮影時間も含めると「計25分」は必要といえた。

<8月10日(木)>

・13:00～、閉会式前日リハーサル。開会式に続いて本多全国登山部長と、中央総務の玉垣副委員長、戸田先生にご協力・アドバイス等をいただきながら、リハーサルを重ねた。リハーサルにあたっては、事前に細野総務委員長へ15～20名の登山部員(旭川東・旭川北山岳部1・2年生)を用意してもらおうリクエストし、壇上における頭数を揃えた状態(表彰時男女各15名ずつ、引継式10名、感謝状贈呈20名)で各立ち位置等の確認・修正・確定等を行っていった。最終的に確定した位置の足元には「バミリ(目張りテープ)」を打ち、それを目印に各誘導員が案内するという手法を取った。加えて演台や、スタンドマイクの設置場所にも予め「バミリ」を入れておいた。前日段階でこれらをしっかりと行っておくことで、当日は問題なく進行できるかと思う。

・表彰終了後の「記念撮影」の並び順については、本多登山部長のアドバイスもあり舞台向かって左側から、「2位校」→「優勝校」→「3位校」(表彰台に見立てて)→「4位校」→「5位校」→「6位校」とした。

・この日もほぼ予定通りリハーサルが進み、17時過ぎには解散できた。

<8月11日(金)>

・閉会式本番。遂に最終日を迎えた。石丸副委員長のコメントにもあったが、拡大会議から続けてきた数々の「早朝(深夜?)2時起き」も終わりを迎えたこととなり、万感込み上げるものがあった(…というのは若干大袈裟ですが)。閉会式本番、生徒たちはリハーサル通りかそれ以上に、集中して仕事に臨んでくれた。はじめの「来賓入場」の段取り・確認が上手くいかずご迷惑をおかけした場面や、表彰時間がやはり5～6分押してしまった場面等もありながら、滞りなく無事閉会式を終えることができて良かった。担当としてホッと胸をなでおろす気持ちで一杯であった。(図7. 図8)

・反省点としては、諸旗引継ぎの国旗引継ぎが手

違いで先に行われてしまった場面、感謝状贈呈前のアナウンスと本多登山部長の感謝状読み上げ開始のタイミングが上手く合わなかった場面がそれぞれ挙げられる。閉会式マニュアル(最終版)として修正したデータを残しておいたので、次年度以降はそちらを参考にしていただけると幸いである。



図7 閉会式の様子



図8 旭川東高等学校生徒会

<最後に…>

直属の「上司」である細野護総務委員長はもちろん、本大会すべてを取り仕切っていただいた内海健一登山部長には本当に世話になりました。細野委員長には、数々のリクエストや我儘に応じていただき、心より感謝申し上げます。また、門外漢の私を温かく迎え入れていただいた、本校飯田一三教諭(B隊隊長)、中條恵教諭(B隊隊付総務)をはじめ、すべての皆さまに感謝申し上げます。本インターハイの全業務を完了させていただきます。ありがとうございました。最後に一言、『登山、万歳』!

19. 専門委員長隊の記録

専門委員長隊対応 永木 正彦
(北海道帯広三条高等学校)

1 はじめに

半年前から1ヶ月前は、担当(永木)は業務について把握につとめたが、専門委員長隊の行動計画については、選手の行動や顧問隊の動きに合わせて計画立案する必要があることから、内海(登山隊長)が計画した。さらに地元宿泊先の選定・予約、専門委員長への参加者集約まで内海が行った。

1ヶ月前頃になり、業務を引き継ぎ、宿泊施設からの諸連絡・食事計画(行動食の準備お願い)・行動計画の詳細(時間場所・交通手段・駐車場)、費用の連絡と集金方法などを直接情報収集、参加者へ永木から連絡を行った。参加者からの問い合わせ対応や事務方や白樺荘との連絡も永木が行なった。

2 大会当日以降

8月6日(日)12:00 専門委員長会議前・費用受付、高体連旗受付手伝い。会議にて事務連絡

8月7日(月)開会式、昼食、選手班編成後、選手激励し13:30バスで東川へ移動。14:30～16:00シンポジウムその1(東川町環境改善センター研修室)終了後幕営地に移動して幕営を見学、白樺荘着、夕食、懇親、就寝。

シンポジウムその1

(参加29名:専門委員長隊21、視察6、中央総務2)

テーマ「学校部活動の社会体育化移行における登山競技のあり方」

自己紹介および各県・各校の現状や考え方を交流、今後のあり方を協議

8月8日(火)3:00行動短縮の連絡あり。起床・朝食、4:30バス発。6:30望岳台発。天候が思いのほかよかったため、参加者の要望を受け十勝岳に向けて出発。11:00十勝岳着(曇りのち雨)、12:30望岳台へ下山。15:00白樺荘着、夕食、懇親、就寝



8月

シンポジウムその2

(参加24名:専門委員長隊22・中央総務2)

テーマ「北海道の自然環境と登山特に大雪山系・十勝連峰を中心に」講師・日下哉(くさかはじめ)氏

8:00～10:00シンポジウムその2(白樺荘食堂)

11:00白樺荘発、ロープウェイ乗車し、11:40ゴール手前で男子激励、全員到着後展望台3へ移動、女子激励、全員到着後、姿見経由、ロープウェイ乗車、白樺荘着、夕食、懇親、就寝

8月10日(木)3:00起床後、白樺荘前集合、移動5:00ビジセンター前にて男子激励し、ロープウェイ乗車、7:10第5展望台にて男子激励、男子到着完了後、第5展望台出発、頂上方向へ移動。8:00に第2ケルンにて男子激励、その後は顧問隊の後から登頂10:10頂上着、下山途中、女子激励して下山

12:20姿見に到着した時点でお礼の挨拶し、隊としては業務終了。ロープウェイ、バス乗車、東川着、改善センター移動、解団式(男女)、バスにて旭川駅へ。

全体にわたって

行動について、バス・ロープウェイには予定どおりに乗車した。一方登山行動や激励の場所や時間などは、現地判断、選手の状況・天候を見て臨機応変に対応することで、激励の機会を逃すことなく、好評を得た。また参加各位は、道外から多くの費用と時間をかけての参加であり、要望・問い合わせにその都度ていねいに対応するようにした。

一方、選手や幕営地の状況については、わからないことも多かった。各係が対応に多忙なことは想像できたので、こちらから電話をかけて連絡を取ることも迷惑と考え、知り合いから情報収集した。LINEなどを使っの、一方通行の情報提供も有効かと思う。



20-1. 総務記録

総務委員長 細野 護
(北海道旭川北高等学校)

1 はじめに

高体連登山競技に携わって15年以上になるが、専門委員長の経験もなく、ましてや全国大会にいったこともない中で、36年ぶりの北海道総体登山大会の運営の一端を担うことになった。まずは、何とか無事終えることができ、いろんな場面で協力や助言、サポートをいただいた全ての方に深く感謝したい。

私が全国大会に関わることになった理由は、大会山域の設定にある。40歳を過ぎてから登山を始め、大雪山国立公園の山々に魅せられた。全国の選手たちには、是非この雄大な大雪山系と十勝岳連峰を縦走し、北海道の山の素晴らしさと登山の楽しさを再認識してもらいたいという思いがあった。そのため、5年前から北海道登山専門部のローテーションの変更を決定し、3年前から山域のある旭川支部に専門部を構え、専門委員長として準備に取りかかることとした。

まずは人材育成である。北海道には登山専門部の加盟校が30校あり、顧問の先生もたくさんいらっしゃるが、もともと登山経験がない方も多い。また、支部大会を突破しなければ全道大会にすら出場できず、なかなか経験を積むことが出来ない。令和2年度と令和3年度は北海道の指導者養成事業で予算をいただき、研修会を実施した。(図1)



図1 令和3年度指導者研修会の様子

天気に恵まれず、山行における予行練習はあまり出来なかったが、登山隊長より全国大会の流れを説明いただき、経験のない顧問には大変参考になったと考える。

また、私を含めA隊コース隊長の小池圭太先生も全く全国大会を知らないため、急遽全国高体連登山専門部から予算をいただき、令和元年度の宮崎大会を視察した。これは大きな経験となった。このあとコロナ禍による中止や縮小が余儀なくされたので、幕営や調理審査、おもてなしなど通常の登山大会を見る最後の機会となった。

次に審査方法の改訂である。北海道予選会の大会審査については、登山部報と違う独自のものがある。特に体力については、今まで明確な基準がなく、そのため初めて審査員となる先生にはかなりの負担であった。これを全国大会に準じる形に変更した。いろいろ議論はあったが、最終的には賛同頂き、全国大会に向けて準備のかたちが整った。

最後に班長の人選である。今回の山域では、急な気象条件の変化で、予定していたチーム行動が出来なくなって班行動になる可能性があった。上ホロ～十勝岳の縦走では、安全登山の観点から終日班行動としていた。つまり今大会の山域における班長の役割はとても重要であり、体力だけでなく山をよく知っている方をお願いした。このことが本大会の登山行動において大きな問題が生じなかったことに繋がったと考えている。当然私一人の考えでなく、登山隊長をはじめ、各コース隊長と相談の上お願いしたことである。

2 大会地図作成

令和4年1月21日、国土交通省国土地理院北海道地方測量部に訪問し、北海道総体登山大会

の概略を説明し、本大会の登山ルートの再測量の実施を申し出た。まだまだ積雪期で測量できないため、年度明けの4月に専用のGPS機器をお借りすることになった。雪がなくなる7月と8月に集中的に実施し、国土地理院から提示された方法でGPS機器にルートを保存し、写真と紙媒体でも記録を残しながら、必ず同じコースを2回たどる。終了後直ちに機器と記録用紙を返却し、何度かメールでのやりとりと確認ののち、12月に国土地理院の電子地図が更新された。これを元に、大会地図の作成に入った。

また、大会ルートではないが、吹上温泉から十勝岳温泉登山口(湯元凌雲閣)に至る登山道が近年再開削された。もともと凌雲閣の主人が開削したルートであるが荒廃していたところ、近年地元の有志の方に整備いただいたので、同様に測量し、国土地理院の電子地図掲載していただけるよう申請し掲載いただいた。(図2)



図2 新しく電子地図に載った登山道

業者選定は12月で、1月から打合せを開始した。まず広域地図であるが、5万分の1の地図では到底まかないきれず10万分の1とした。また、十勝岳の噴火警戒レベルが2以上となり、上ホロ～十勝岳の縦走が不可能になることも想定し、銀泉台登山口から赤岳～白雲岳のルートが地図に入るように工夫した。その後校正と修正を4回ほど行い、予定通り4月下旬の納品となった。

3 安全対策会議

第1回安全対策会議は令和4年9月17日(土)～9月19日(月)の三連休で実施した。本来であれば、予算措置がある当年度になってからの実施と

なるが、北海道の場合の4月5月は雪山であるため、やむなく前年度に実施した。北海道実行委員会からは予算立てしてもらえなかったため、指導者養成事業や全国高体連登山専門部からの補助と、第1回北海道高等学校選抜大会として実施することにより、引率教員は自校の負担として集まっていた。コロナ禍でもあり、全役員の7割程度の出席であったが何とか予算内で運営することが出来た。選手の参加は17チームと少なめではあったが、本大会のよいシミュレーションとなった。

拡大事務局会議兼審査員講習会は、まだまだ残雪のある時期ではあるが6月29日(木)～7月2日(日)に実施した。今年は雪解けが早く、登山道もかなり出ており、また天候に恵まれ審査員講習会は順調に行われた。(図3)



図3 東川町 B&G 海洋センターアリーナ

第2回安全対策会議は7月14日(金)～17日(月)の3連休で実施した。全役員の8割程度に参加していただいたが、学生役員はテストのため半数ほどの欠席となった。当初はより雪の少ない1週間後の7月21日からを予定していたが、本大会までの準備のことを考えると、この日程でよかったと考える。班長・副班長が最も不安に思っているのは、班行動のペースということで、コース隊長を中心の細かいタイムテーブルを組み、行動中確認しながら進めた。本大会ではこの練習が活き、班行動では設定通りの行動時間となった。上ホロ～十勝岳は荒天のため、B隊は上ホロ避難小屋で引き返したが、本大会でもいろんなケースが想定されるので、バスの運行も含めてよいシミュレーションになった。

4 大会看板と横断幕の設置

大会の行われる山域では、7月～9月にかけては多くの観光客や登山者で賑わうことが想定される。そのため、ロープウェー関係者のお話しや実際に登山をした状況から、最も人の出入りが落ち着いているお盆前の平日に大会を設定した。これは東川町で毎年7月下旬に実施されている写真甲子園とも一定期間時期を外している。とはいえハイシーズンであることは間違いなく、天候が良ければ多くの観光客が訪れ、600名程度が一気に登山行動するとなると迷惑をかけることとなる。そのため、7月から黒岳ロープウェーには横断幕(図4)、旭岳ロープウェー・十勝岳温泉登山口・望岳台分岐・吹上温泉分岐(図5)には大会看板を設置させていただいた。



図4 黒岳ロープウェー横断幕



図5 望岳台分岐と吹上温泉分岐の大会看板

その他、ビジターセンターや町内の店舗にポスターの掲示を依頼した。また、最も迷惑がかかると想定される、CP2 の旭岳ロープウェー姿見駅の第

1展望台周辺、十勝岳温泉登山口駐車場にはさらに注意ポスターを作成し掲示させていただいた。

5 環境省への設置申請と北海道上川総合振興局旭川建設管理部への看板設置許可

大会の行われる大雪山国立公園は、特別保護区であり、ほぼ全ての工作物、広告物に設置申請が必要である。

大会看板は、地上より 2.5m 以下の場所については申請はいらないが、横断幕は申請し許可いただいた。道路は旭川建設管理部に北海道実行委員会で許可申請していただいたが、大型視線誘導標(道路の端を表示する↓)の支柱に看板は設置できないとのことで許可にご苦労いただいた。(図5の左)

地点確認旗、携帯トイレブース、仮設トイレは、何れも規格と実物写真、地図上での位置と場所の写真など細部にわたり提出が求められ、許可までに2ヶ月ほど要した。

6 大会プログラム

北海道実行委員会が主導し、6月上旬にプログラム原稿ページ割りが示された。それに従い、登山大会競技役員や開閉会式等、関係する部分を出稿し、校正原稿の確認作業を繰り返した。出場校などのデータも6月末にすべて集まるので、最終×切の7月18日まで確認作業が続いた。

この時期、拡大事務局会議兼審査員講習会や第2回安全対策会議等もあり、最も忙しい時期である。出来るものについては早めに取り組んでおくことが大切である。登山大会役員は、日本山岳・スポーツクライミング協会の関係者がわからず、全国高体連登山専門部の担当者からご助言をいただき作成した。

7 予報の作成と編集

予報は例年通り、予報1号、予報2号(競技・運営版)、予報2号(配車・配宿版)を配信した。

予報1号は、令和3年11月から順次原稿を依頼

し、令和4年8月を一旦〆切とし校正作業を行った。原稿の依頼者は、大学教授、地元の研究者、高体連登山専門部関係者など多岐にわたっているが、いずれも快く引き受けて下さり感謝している。

審査との関係から、特にコース概況については細部まで検討し作成したが、審査の詳細な部分まで掌握していなかったため、予報2号で訂正することとなった。下線と主要地点は必ず一致するということなので注意してほしい。

予報2号(配車・配宿版)は7月27日の配信となったが、配宿センターの開示が7月22日なので致し方ない。しかし、本大会は配宿先が多岐にわたっていたので、出場校から配宿先早く知りたいとの要望が多く、今後は配宿センターとの調整も必要なことであろう。

8 大会本部の設営と撤収

8月7日の開会式までは旭川市民文化会館2階の第2会議室(図6)を大会本部とし、開会式後は幕営地の東川町民運動公園に隣接する東川町 B & G 海洋センターに場所を移した。



図6 大会本部 旭川市民文化会館第2会議室
開会式後のコピー機、PC の移動に少し時間がかかったが、大きな支障なく設置できた。ただ、東川町 B & G 海洋センターの本部設営は、8月6日の16時まで行事が入っていたため、それ以降の時間となった。東川町職員や担当教諭、補助員の皆様には大変忙しい思いをさせてしまった。また、同時に監督リーダー会議や開会式のリハーサル

が行われていたため手薄になったこともあり、事前に人員配置を考えておくべきだったと反省している。

8月7日以降、東川町 B & G 海洋センター2階トレーニングルームの大会本部、1階アリーナの登山隊役員会、1階ミーティングルームの救護室は問題はなかった。

8月10日は選手が出発した後、2階大会本部以外は朝から撤収作業に入った。東川町 B & G 海洋センターは翌日から使用が始まるため、また8月11日は休日になるので、東川町から借用した机、椅子、ベット、イベントテントなどすべて返却した。人手が足りず苦労したが、補助員の働きには大いに助けられた。

9 開閉会式

旭川市民文化会館で開閉会式を行うことが決まった時点で、旭川東高等学校の放送局と生徒会に内々をお願いして了解を得た。また、山岳部顧問でもある高橋健一先生に総務副委員長になっていただき、一切を仕切っていただく予定で香川大会にも視察に参加してもらった。開閉会式ともほぼ時間通りで素晴らしい運営だった。受付周りは、旭川西高等学校の石丸高志先生にすべてお任せし、補助員への的確な指示で混乱なく業務を遂行していただいた。(図7)



図7 受付補助員のミーティングの様子

会場は十分な広さがあり、何とか高体連旗を掲揚する場所も確保できた。46都道府県のものが揃うとなかなか壮観であった。(図8)



図8 高体連旗と開閉会式会場

コロナ禍による短縮で昨年は実施されなかったアトラクションは、旭川東高等学校音楽部にお願いした。全国常連校の合唱はとても美しく聴き応えがあった。高体連の歌も歌っていただき、選手はよい思い出となったであろう。

選手団紹介も復活し、自身の学校名が呼名され選手は誇りを感じ、身の引き締まる思いで開会式に臨めたことと思う。(図9)



図9 選手団紹介

歓迎袋の袋詰め作業は、8月4日から仕分けや少しずつ詰めていった。数もバラバラで量も多かったが、役員分を先に終わらせることが出来たので8月6日の午前中に運営役員と補助員で選手・監督を何とか終了した。お手伝いいただいた旭川支部の先生に感謝したい。

10 宿舎輸送

選手・監督の宿舎については、全てのチームを

旭川駅前周辺に出来るよう、かなり前から強く要望していた。旭川市民文化会館が開閉会式場であり、ここから計画輸送として選手団を輸送する計画であった。しかし、実行委員会の立ち上げがままならず、開催市町が決定しないまま、最終的には北海道教育庁が実行委員会会長となり、関係市町への宿泊を余儀なくされた。場所によっては、片道1時間30分以上かかり、宿泊場所による有利不利や、交通費の負担増も考えられたので、最も避けたいことであったが、どうすることも出来なかった。離れた宿泊地に希望せず配宿された選手・監督の皆様には改めてお詫びしたい。

役員の宿舎については、東川町 B&G 海洋センター本部の近くに大きな宿泊施設が存在しないため、本部役員は東川町施設『暮らし体験館』、登山隊役員は、『キトウシ森林公園家族旅行村ケビン』に宿泊していただいた。夕食と入浴は、隣接する新しくできた『キトウシの森きとろん』を考えていたが、150名の食事には対応できないとのことで、毎食お弁当となり申し訳なかった。入浴(プレオープン期間で東川町民のみ入浴可)に関しては、東川町民の方に迷惑にならぬよう、できるだけ分散して入浴した。また、定休日は時間限定で開館していただき大変助けていただいた。

朝食・昼食については、食中毒のこともあり、すべてコンビニエンスストアの弁当、おにぎり、パンを提供した。8月9日は登山行動の関係上、選手監督にも朝食・昼食を提供した。650人分の袋詰めには4人で4時間ほど要した。夕食の弁当は、すべて東川町内の店舗で提供いただいた。

輸送に関する最大の懸案は、十勝岳温泉登山口駐車場であった。12台の大型バスを止められないことはないが、登山シーズンのため、天気がよければいつも下の道路まで車が駐車されており、到底乗降できない。十勝岳温泉凌雲閣の青野さんに相談して、当初は通行規制をかけることを考えた。しかし許可が下りず、北海道実行委員会が前日から警備員を配備し、パイロンで大型バス6台分の駐車スペースを確保して下さった。しかし、当

日は荒天で登山者も少なく、大会の登山行動も変更になったため、工夫して12台の大型バスをすべて駐車し、上富良野岳往復の登山に対応できた。

黒岳ロープウェーは30分、旭岳ロープウェーは20分、通常より早く大会専用として運行していただき助けていただいた。この場をお借りしてお礼申し上げます。天気予報もあまりよくなかったため混雑せず、スムーズな大会運営ができた。

11 大会を終えて

4月から東川町に出向し、はや5ヶ月が過ぎようとしている。言葉では言い尽くせないほどいろいろなことがあり、教員をやっている限りはあまり経験できないことも多々あった。

特に、大会期間中は感染症、体調不良者、大雨による体育館避難など多くのイレギュラーなことが起こり、走り回っていた記憶しかない。なにかを成し遂げたのではなく、ただいま起こっている出来事に対処する。その繰り返しの5日間だった。そんな何も出来ない私を本当に周りの皆さんが支えてくださり、何とか大会を終えることが出来たことを心よりお礼申し上げます。

大雪山系と十勝岳連峰で全国大会をやりたい、全国の選手にこの山に登らせてあげたい、という思いだけで始めたインターハイ準備だったが、本当に浅はかだった。自分の能力のなさを痛感し、周りの方に頼りきった準備だった。そんな中で温かく助けていただいた旭川支部の山岳部顧問の先生には深くお礼を申し上げる。

大会期間中、一度も山に入ることはなかったが、以下のような写真を見せていただいた。最後までこの山域でよかったのかと自問していたが、自分が思い描いていた光景がそこにあり、全てが報われたような気持ちでとても感動した。

登山隊長の内海健一先生には、本来総務委員長の業務である部分も補填していただき、総務副委員長の石丸高志先生、高橋健一先生には至らぬ所を多々補い助けていただいた。人に恵まれた半年間だとつくづく感じている。

令和5年度全国高等学校総合体育大会登山大会に携わっていただいた全ての皆様、本当にありがとうございました。



8月8日 上富良野岳直下 班行動



8月9日 黒岳 チーム行動



8月10日 姿見の池 班行動

20-2. 総務記録(受付・輸送等担当)

総務副委員長 石丸 高志
(北海道旭川西高等学校)

開会式3日前の8月4日(金)から東川町B&G海洋センターでの準備が始まりました。

この日は、常任委員の歓迎袋への袋詰め作業を夕方まで行い、その後、開会式会場となる旭川市民文化会館へ選手向けに配布する物品を移動しました。8月5日(土)も同様に歓迎袋の作業に携わりました。作業会場が東川から旭川に移動するため、物品をパッキングして車に積み込む作業が増えるため時間が余計にかかりました。そのため、選手・監督用の歓迎袋の作成は8月6日(日)の午前中に補助生徒(旭川支部の山岳部員)で行い、午後の監督・リーダー会議にぎりぎり間に合うことができました。受付はA隊の(東日本)(西日本)、B隊(東日本)の(西日本)と4区分に分け、監督・選手の歓迎袋を45Lの透明なビニール袋に入れて渡すことで、スムーズに受付を行うことができました。



8月7日(月)の開会式当日はスムーズに進行し、幕営地に移動しました。

8月8日(火)は上ホロ十勝岳縦走コースを予定していましたが、悪天候のため短縮されました。マイクロバスに旗手と先発の役員を乗せ、十勝岳温泉登山口に移動し、緊急時の車両として同登山口に待機しました。その後、幕営地では豪雨のため、小中学校の体育館へ避難となりました。

8月9日(水)はマイクロバスで旗手と先発の役員を乗せ、層雲峡ロープウェイ駅に向かいました。全員の黒岳出発を確認後、下山口である旭岳ロープウェイ駅に移動し、旗手と先発の役員を乗せ、幕営地に戻りました。

8月10日(木)は旗手・先発の役員をマイクロバスに乗せ、旭岳野営場・旭岳ロープウェイ駅まで移動しました。この日は天候も落ち着き、選手たちも元気そうだと思っていました。そのため、ロープウェイを使い8合目付近を登っていると、支援の必要な選手がいるとの一報を受け、姿見駅まで急いで下山しました。

その後、医療隊・支援隊から救急車の出動要請を受けたので、計3回電話で救急要請をしました。搬送先は旭川市内の病院で、選手全員が熱中症と診断されて治療を受け、チームに合流できました。

8月11日(金)は旭川市民文化会館で閉会式をスムーズに進行し、登山大会の幕を閉めることができました。

担当した中で一番大変だったのは、毎朝2時30分に届く食事の受け取りです。寝不足になりました。

21. 大会準備経過

年度	月	日	会議名等	内容	会場
R1	5	10	北海道登山専門部第1回専門委員会	大雪山系・十勝岳連峰開催決定 R3より専門部は旭川支部へ	室蘭栄高校
	8	2～6	宮崎インターハイ視察	登山専門部より細野・小池派遣	祖母山他
	2	7	第3回専門委員会	視察報告	室蘭栄高校
R2	5	8	第1回専門委員会	コロナ禍による群馬大会中止、全道大会中止、東川町内定	WEB会議
	8	29～30	指導者研修会、第2回専門委員会	登山ルート案決定、上川町、美瑛町、上富良野町、旭川市協力内定	吹上温泉白銀荘
	2	5	第3回専門委員会	専門部内で実行委員会立ち上げ	WEB会議
R3	5	7	第1回専門委員会		旭川北高校
	6		第1回競技専門部会～第7回(R5.9)	競技会場、大会実施要項、予算、役員等について	WEB会議
	6	22～25	全道大会	ブレ大会①上ホロ～十勝岳、北鎮岳～旭岳	吹上温泉白銀荘
	8	20～23	福井インターハイ視察	登山専門部より内海、小池、藤本、飯田派遣	三頭山他
	9	10～12	全国高体連登山専門部会場視察	大会山域、幕営地等視察	東川町他
	10	2～3	指導者研修会	班行動、チーム行動、QRコードによる計測等	吹上温泉白銀荘
	10	5	第1回会場地市町実行委員会事前打ち合わせ	道教委、東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、登山専門部	
	11		予報1号原稿依頼開始	大学教授、研究者、高体連登山専門部関係者等	
	11	14～15	全国専門部秋季常任委員会	香川大会幕営実施せず	三重鈴鹿高校
	12	22	第2回会場地市町実行委員会事前打ち合わせ	道教委、東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、登山専門部	WEB会議
	1	21	国土地理院北海道測量部打合せ	今後の作業日程の確認	札幌
	2	4	第3回専門委員会	第1回全道高等学校選抜大会実施決定	旭川北高校
R4	4	1	会場地担当教員 内海出向	東川町B&G海洋センター 週3回	
	5	3～5	香川大会第1回安全対策会議視察	行動役員の動き確認 細野	まんのう町
	5	6	第1回専門委員会	道内役員のGoogleフォームによる登録	旭川北高校
	6	21～24	全道大会	ブレ大会②黒岳～北鎮岳、旭岳	東川町他
	7	3～5	香川大会第2回安全対策会議視察	行動役員の動き確認 内海	まんのう町
	8	5～9	香川インターハイ視察	登山専門部より細野、小池、高橋、石丸派遣	竜王山他
	9	17～19	第1回全道高等学校選抜大会、指導者研修会	黒岳～北鎮岳、旭岳	東川町他
	9	24～25	香川県引継式	引継物品確認、内海・細野訪問	まんのう町
	10	24	北海道総体登山競技実行委員会設立総会、第1回総会	道教委、東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、内海	東川町他
	11	19～20	全国専門部秋季常任委員会	情勢が許すのであれば、コロナ禍以前に戻すことを了承	三重鈴鹿高校
	2	3	第3回専門委員会	進行状況説明	旭川北高校
R5	4	1	会場地担当教員増員 細野出向	東川町B&G海洋センターに常勤2名(内海・細野)	
	4	21	自衛隊打合せ	支援隊、通信隊、給水隊による支援体制の確認	旭川駐屯地
	4	26	旭川東警察署、旭川消防署訪問	緊急時の対応について	旭川市他
	4	28	北海道総体登山競技実行委員会第2回総会	道教委、東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、登山専門部	WEB会議
	5	8	第1回専門委員会	進行状況説明	
	5	8	十勝岳温泉関連施設訪問	大会概要説明、協力依頼	
	5	15	大会スポンサー訪問打合せ	スポンサー、道教委、東川町、上川町、美瑛町、上富良野町、登山専門部	東川町他
	5	18	上富良野高校、上川高校、層雲峡訪問	大会概要説明、協力依頼	上富良野町、上川町
	5	19	大会要項アップ	予定通り	
	5	30	白金温泉、旭岳ロープウェイ訪問	大会概要説明、協力依頼	美瑛町
	6	1	申込フォーム・予報第1号アップ	予定通り	
	6	6	大会地図発送	各都道府県専門委員長へレターバックで発送	
	6	20～23	全道大会	ブレ大会③上ホロ～十勝岳、旭岳	東川町他
	6	29～7/2	拡大事務局会議審査員講習会	大会概要説明、会場視察、協議	一部WEB会議
	7	8	予報第2号(競技・運営)アップ	拡大事務局会議での審議事項を反映	
	7	11	登山隊WEBミーティング	第2回安全対策会議の事前説明 録画配信	
	7	14	東川町立診療所打合せ	三浦医師訪問	東川町
	7	14～17	第2回安全対策会議	コースの確認、業務内容確認、自衛隊との連携確認	東川町他
	7	27	予報第2号(配車・配宿)アップ	JTBの配宿先公表にあわせてのアップになる	
	7	31	大会直前WEBミーティング	各業務確認	WEB会議
	8	5	諸会議開始	大会本部設置等	旭川市民文化会館
	9	23～24	北海道引継式	福岡県登山隊長、総務委員長来道	東川町

22. A隊(団体男子)感想文

A隊 1 北海道 旭川東高校



今日もてくてく。旭東山岳部です。大会感想文を「あいうえ作文」で書きたいと思います！

「あ」りがとうございました。期待していただいた地元の方々、本当に申し訳ありません。地の利を生かせる競技でありながら、チャンスを逃してしまったことは非常に悔しいです。敗因は記録のケアレスミスと部報の読みが足りないことでした。後悔は募るばかりですが、結果は受け止めて今回学んだ多くのことを含め、来年に繋げられたらと思います。最後に、競技中に声をかけて下さった方々、とても驚き感動しました。(3年 舟生昇馬)

「い」つの間にか3年生になり、引退と共にインターハイを向かえ12位という結果を残して(もう残っていないかも。)山を終えました。他3人が悔しさなど色々書き連ねていると思い、この場では山で大切だなんて思うことを1つ書きたいと思います。それは、パーティーの仲間を信頼し切ることです。焦ること、不安になること、色々あると思いますが、山では気持ちの余裕が大事なので楽しく山を登って下さい。たまたまこの文章を読んでくれた方、ありがとうございます。(3年 向井和玖)

「う」どんをすすってから約1年、僕はあの頃から成長できたのでしょうか。どうも、黒岳の標高を間違えた森大和です。たくさんの応援をしてくれた方々、特に黒岳スパッツおじさんには顔向けできません。いくつかやらかしをしましたが高校生活最後のインターハイとしてはそれなりに楽しめました。三年間担ってきた食当として満足いくものを作ることができました。今後はスマホのパスワードを1984に設定し、自戒しつつ生きようと思います。

(3年 森大和)

「え」たものは大きい。そう思った大会でした。北海道開催ということで、ここで勝たなければいつ勝つんだと思って準備をしてきて、その甲斐あってか地の利を生かせる場所はとれたと思います。ただ、そうでないところで大きく減点され、勝敗を分ける

のは地の利ではなく、やっぱりミスをしないことなんだと思いました。今回のミスは次で絶対しないように来年帰って来たいと思います。個人的には練習を積んだ天気図で結果を出せたのは嬉しかったです。(2年 鈴木陸碧)

A隊 2 青森県 八戸高校



全国の高校生の皆さんと行動できたり、話したりすることができてとても楽しかったです。皆さんは流石各県の代表として出場しているだけあり、体力、気力面で強いなあと多々感じてとても刺激になりました。それを見れたから、自分も頑張ることができた時も多くありました。大会前は参加するのを少し渋っていた面もあったのですが、今では本当に参加して良かったと思っています。

事前山行も含めると2週間で6日間登山することができこれからの人生でもなかなかできない経験をすることができました。また全国の高校生と交流し、いろいろ工夫や登山への姿勢などを見て多くの刺激を受けました。僕たちはこれで引退ですが、今回のインターハイで学んだことを後輩たちに伝えていきたいと思います。北海道登山専門部の方々ののおかげで今回貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

3年生になってようやく手に入れたインターハイの出場権。前回の香川大会はコロナウィルスのせいで出場を辞退した先輩方の悔しさを胸に頑張ろうという気持ちと不安な気持ちもありました。初日のテント設営でテントのポールが異なり、テントが設営できず、離脱という言葉が頭をよぎりました。その悔しさをバネに黒岳のチーム行動で1番最初にゴールできて本当に嬉しかったです。旭岳は前日の疲れとメインザックの重さから、何度も倒れそうになりましたが、仲間の支えのおかげで無事下山まですることができました。インターハイで出会った他の高校の仲間を大切にしていきたいと思います。インターハイでの体験を後輩に伝えて来年も後輩

には出場してほしいです。

A隊 3 岩手県 盛岡第一高校



今回のインターハイは、テント泊となり、プライベートの時間というのは前年に比べて圧倒的に少なかった。そのため、ストレスを感じたり、しっかり体を休めることが出来なかったりと、不便を感じる場面が多かった。一方、チームメイトや他のチームの人と関わる場面が多くなった。設営審査中の交流会をはじめ、炊事審査が終了してから、寝るまでの間、山行の休憩中は各県、地方別の文化の違いに互いに驚きあった。

山行 1 日目は、上ホロ引き返しとなり、山行の時間は短くなったが、避難場所の体育館で、足を伸ばしながら平日の部活は何をやっているかなどといったことを交流したり、これまでの活動を振り返ってチームメイトと懐かししの時間を共有した。

山行 2 日目は、黒岳からチーム行動だった。盛岡一高の歩きはゆっくりなため、御鉢平展望台までに多くのチームに追い越された。しかし、ペースは安定して、身体に負荷をかけないので、他チームより休憩にかかる時間は少ない。そのようなこともあり、北鎮の引き返す時に多くのチームとすれ違いとなった。「お疲れ様です」と言うと、登ってくるチームは、急で大変なはずなのに「お疲れ様です！！（譲ってくれて）ありがとうございます。」と元氣よく挨拶を返してくれた。北鎮分岐以降は、追い越してもらう時も「お疲れ様です。」と言う声が続いて、全国の登山部として一つになって来たなと感じた。

山行 3 日目は、旭岳石室まではチーム行動、それ以降は審査外という山行だった。山行 2 日目に比べてさらにチーム間の声の掛け合いが増し、いい仲間たちと歩いているんだなと感じた。

このインターハイを通して、さまざまな人と交流をもてた。チームのメンバーとも、密な時間を過ごすことができた。リーダー以外は、2 年生というこのチームだが、無駄に気遣うことも無く、思ったことをすぐ口に出してくれる 2 年生達は、この盛岡一高の強みだと思う。盛岡一高には、インターハイ経験者が

来年も残っている。是非、注目して欲しい。

最後に、楽しい時間と最高の登山を作っていただいた大会運営の皆さんと、全国の山友達、同じチーム内澤、佐々木、松田、そして、チーム盛岡一高の選手監督全員に感謝を伝えたい。

素敵な大会と登山をありがとう。

(CL 白倉歳也)

A 隊 5 秋田県 秋田高校



今回は、北海道の山々を班、隊という大所帯で登ることができ、大変うれしく思います。山家を始めてからこの一年と少し、我々は秋田の太平山、森吉山、ちょこつと真昼岳、そして山形の鳥海山のみという周辺の山々だけにとどまって、正直、登山を作業のように感じていた節があります。が、遠い地方の山々を知り、改めて山の雄大さ、美しさに気付くことができました。そして同時に、秋田の山との違いにも気付くことができました。各所に点在する大きな岩。火山のパワーを肌身に感じました。そして、秋田もそうでもないですが、下見期間中に山でゴミを見てないです。森林限界の低さはもちろんのこと、そう言った点についても面白く、また、驚かされました。

大会結果はあまり宜しいものではなく、事前準備の甘さ、県大会ルールとの差異を痛感させられた大会ですが、個々でどこなら全国とも渡り合えるか、また他校の強みはどこかなど、よく知れたいい大会になったのではないかと思います。本当に、各所で他校のいいところをたくさん見せていただきました。多彩な料理も山の歩き方も、テントの建て方も、たくさんのいいところを、これからの山行に活かしていこうと思います。今大会では、前回大会よりもよい観点が多く見られましたが、それと同時に伸び悩む点も散見されました。来年に向けて、悪かった点は直すのはもちろんのこと、良かった点もさらに伸ばして、もっと「チーム」として活動する時間を増やし、全員が二年生というアドバンテージを生かし、来年も県大会を突破して、全国という舞台で戦えるよう精進して参ります。

結びになります。班長や副班長、大会運営のみなさんはもちろんのこと、励まし励まされたりと、いろんな交流の中で、あの美しい山々を登ることができ、感極まれます。みんなで食った飯、見下ろした景色、めちゃ暑い天気、全部ひっくるめて最高の山行でした。

A隊 6 山形県 酒田東高校



私たちは今回の北海道インターハイで北海道の自然の雄大さと全国各地から集まった同年代の選手と共に競技を行うことの楽しさを感じました。これまで東北地方の山にしか登ったことがありませんでしたが、大雪山系ではたとえ山の頂上に立っても海が見えることはなく、ひたすらに大地が続いていることに衝撃を受けました。また様々な背景を持つ選手たちと交流することで感じた考え方や文化の違いも非常に刺激的でした。（佐藤啓）

まず初めに 4 日間この登山大会を運営してくれた役員の方々とスタッフの皆さんに感謝の気持ちを示します。三年生になって初出場でワクワクと不安や緊張が入り混じった初日でしたが、無事に過ごすことができました。雨の降る中での炊事や十勝岳連峰と大雪山系登山など貴重な体験をすることができました。自分は今回の大会を持って部活動を引退しますが、今回の大会で得た知識や経験を後輩たちに伝えられたらと思います。（菅原羽堯）

まずは今回の北海道でのインターハイ開催に伴って様々な協力をしていただいた開催地の東川町、上富良野町、美瑛町、上川町の皆さんへ感謝の気持ちを述べたいと思います。大会 4 日間さまざまなサポートをしていただき本当にありがとうございました。今回の山行で今まで登ってきた山とは桁外れの広さの山脈とその中の山を楽しめてとても良い経験になりました。旭岳では地元の山々では味わえない体験ができて楽しかったです。（本間海斗）

私は今回北海道でのインターハイに参加できてとても嬉しいです。私はまだ一年で登山に対する知識や経験が浅く最初は先輩方に付いていけるのかや北海道の山を登る体力があるのか正直不安でした。ですがテント設営や炊事など先輩方のアド

バイスや指示を聞き自分のベストを出し切れたので良かったです。地元に戻っても先輩達からのアドバイスや今回のインターハイでの経験を生かし地元の山を楽しみたいです。（本間大嗣）

A隊 7 福島県 福島東高校



私たち福島東高校にとって、5年ぶりの全国大会出場となりました。現在のメンバーとなってからは初の全国大会だったので、出場できる喜びと不安を抱えながら大会に挑みました。

登山の8割は準備で決まると日頃の練習で学んできたので、大会に向けて入念に準備を行いました。約2ヶ月という短い期間の中で、天気図や筆記試験の勉強、食糧の買い出し、計画書の作成など、やるべきことは本当にたくさんあり、正直間に合うのかと思う時もありましたが、仲間達と一致団結し、出来る限りの準備をして、最高の状態で大会を迎えることができました。

来る8月2日、大会コースの下見を行うため、北海道に入りました。北海道は想像していた以上に涼しく、山頂付近の気温が心配になる程でした。翌日から3日間実際の大会コースとなる山々に登る予定でしたが、天候が悪く事前に考えていた計画を変更せざるを得ない状況となってしまいました。不安はいろいろとありましたが、事前準備で入念に予習したコースを実際に登ることで、達成感を得ることもできました。

8月7日からいよいよ全国大会が始まりました。1日目の天気図審査は私の担当でした。2年間の努力を胸に挑んだ審査は大変緊張しましたが、全てを出し切ることができたと思います。2日目からは実際に大会コースである山々に登りましたが、雨が強くルート変更などもあり、厳しい状況下で行われました。そのような中で私が特に印象に残っているのは4日目の旭岳の登山です。連日の登山でメンバーの疲労もピークに達していましたが、パーティの仲間達と助け合いながら一生懸命頑張ることができたと思います。

今大会では様々なアクシデントから山頂まで登ることができなかった山もあり、悔しい気持ちが残っ

ているので、また機会があればリベンジしたいと思っています。初めての全国大会は私にとって大変貴重な経験となり、3年間の部活動の集大成となりました。(3年 小林 龍斗)

A隊 8 茨城県 水戸第一高校



私たちの学校は、昨年に引き続きインターハイに出場できることになり、部員一同大変喜びました。周りの友人からもたくさんの応援の言葉をもらい、昨年の香川大会の経験を活かして、少しでもいい結果を残せるように意気込んでいました。昨年は体力点で失点してしまったので、今年は北海道に行く前に、荷重やランニングなどの体力トレーニングを重点的に行いました。

大会が始まると、北海道の山は今まで登ってきた山と違う厳しさがあることを実感しました。登山行動一日目のコースでは、荒天のため大きなコース変更がありました。上富良野岳の頂上では、経験したことのないような強風に見舞われ、想像以上に過酷なものとなりました。また、夜は体育館収容となり、これから様々な変更があるのかと不安になりました。しかし二日目には天気に恵まれ、タイムレースの中でも、北海道の雄大な自然を感じることができました。周りに視界を遮る樹木などがなかったため、景色を楽しみながら気持ちよく歩行することができました。その後、ロープウェイから降りて、隊長からの差し入れのアイスをいただき、明日も頑張ろうという気持ちになりました。最終日は厳しいタイム設定の中、仲間と協力して、ある程度余裕を持ち、姿見の池に到着することができました。その後、旭岳を登り切ったときは達成感を感じ、みんな安堵の表情を浮かべました。疲れも吹き飛んだような気がしました。

本大会は、炊事審査や幕営などをインターハイで始めて経験したり、荒天による予定の変更があったりして戸惑うことも多くありました。また、閉会式で発表された順位も昨年よりも低く、悔しい結果となりました。しかし、北海道で過ごした期間は、一生の思い出に残る充実した時間になりました。本大会に関わってくださった大会運営の役員の皆さま

や地元の方々には、心から感謝しています。五日間本当にありがとうございました。

A隊 9 栃木県 大田原高校



栃木県の代表として、大田原高校山岳部の一員として登山競技のインターハイに出場して一番印象に残ったことは、私たちの活動を応援してくださる方が多くいるということです。栃木県の高校登山では二〇一七年三月二十七日に県内の登山部の高校生と教員が巻き込まれる那須雪崩事故がありました。そのことを忘れずに覚えていてくださり、私たちに声援を送ってくださった方がたくさんいました。声援を聞いて、活動に制限がかかることもあった中で三年間「安全登山」ということを第一の目標にして頑張ってきてよかったなと思いました。この声援に応えられるように後輩にはこれからも頑張ってもらいたいと思います。

栃木県では県の予選会がなく、書類での審査により代表チームを決めたため、このインターハイが私たちにとっての初めての競技登山でした。そのため初めて経験することも多く、不安がありました。特に炊事やテント設営の審査は今までしたことが無かったので練習のときから不安でした。炊事の審査では、ほかの県の代表のチームがメンバーで役割を分担しながら本格的に調理をしていたのを見て驚きました。審査では至らない部分もあり失点は多くなってしまいましたが、最後まで歩ききることができて一安心しました。

今大会は、北海道の山を登り本州の私たちが普段登っている山とは違った貴重な光景を目にすることができました。大会に精一杯で山を満喫できなかったのもまた北海道に行ってみたいです。大会中は雨が降ってコースが短縮されたり、テントではなく体育館で一夜を過ごしたりと、予定通りには進みませんでした。登山をする時には常に天気を確認して判断をしなければならいということを改めて実感しました。

昨年、一昨年と栃木県から代表のチームが全国大会に出場することができず、自分が高校に在籍

している間は出場のチャンスはないのだろうと思っていました。しかし、多くの方の尽力のおかげでこの大会に出場することができました。本当に感謝がありません。ありがとうございました。

A 隊 10 群馬県 前橋高校



この大会を通じて常に感じたのは疲労感です。長い準備期間と4日間にも及ぶ長い試合が続いたため、身体的な疲れと共に精神的な疲労が同時に押し寄せてきました。しかし、その疲れが何よりも充実感をもたらしてくれました。自分の限界を超えて頑張った証として、また、4人で疲れを補い合うというチームワークを通して仲間との絆を深めることができました。

加えてこの大会には予想外のハプニングもありました。登山は天候に大きく左右されるので練習や計画が完璧に進んでいたつもりでも、競技中に予測できない出来事が起こるものです。突然のサブザック行動やコースの大幅な変更などがそれにあたります。これらのハプニングは初めは動揺しましたが、その度に柔軟に対応する力を身につける貴重な経験となりました。次回に向けてより準備を練るための教訓しようと思います。

また、インターハイを通じて得られた友情や仲間意識についても触れておきたいと思います。同じ目標に向かって努力し続けた仲間たちとの絆は、一生の宝物です。試行錯誤を繰り返す練習の中で支え合い、喜びや苦しみを共有しました。登山中だけでなく、そのあとでのテント泊も私の良い思い出の一つとなりました。最後に、「やりきった」という気持ちが強くあります。目標に向かって努力し、全力を尽くして競技に臨んだことで、今回の山行を後悔することなく終えることができました。勝利も負けも、すべてが私自身の努力と向き合った結果であり、そのことに誇りを感じます。これからの人生でも、この精神を忘れずに新たな目標に向かって頑張っていきたいと思います。

最後に、インターハイでの経験は私にとって人生を豊かにする素晴らしい宝物となりました。疲労やハプニング、友情や達成感、それら全てが私の

成長を形作る重要な要素となっています。今後もこの経験を胸に進んでいきたいと思います。

A 隊 11 埼玉県 狭山工業高校



私たち狭山工業高校は昭和 63 年以来、久しぶりに全国大会に参加することができました。いざ、北海道にやってくるととても緊張が高まりました。北海道は埼玉県よりも寒くてとても広いなという印象を持ちました。開会式の会場に着くと色々な学校の人たちがいました。どのチームもすごく強そうに見え、自分たちはすっかりと自信を無くしてしまいました。座学のテストを開会式の後にやりましたが、勉強したところが解けた時はとてもうれしかったです。仲間と一緒に勉強をしたかきがあって、登山におけるいろいろな重要な知識を身に付ける事ができました。しかし、満点にはまだまだ及ばなかったのも、これからたくさんのことを勉強して、もっともっと自然に詳しくなれたらなと思います。

幕営で幕営と炊事の審査を行いました。練習ではテキパキと進めることができた幕営でしたが、本番は周りの学校の速さにびっくりして上手くテントが設営できませんでした。改善点がたくさん出てしまったので、今後の部活動ではこういったミスが起こらないように、うまく仲間と連携して進められるようにしていきたいと思います。炊事でもメンバーの一人が包丁で指を切ってしまうなど、普段とは違う環境から起こるミスが多くありました。初日のカレーはあまり良い出来とは言えませんでした。二日目以降は初日の失敗を踏まえておいしいシチューとハヤシライスを作ることができました。

登山行動ではメンバーの一人がけがで初日しかすることができなかったです。二日目と三日目にも登山をしたかったです。今回の大会ではそれが一番の心残りでしたが、初日の登山中は大雨の中メンバーと励まし合いながら厳しい状況を乗り越えることができました。初日も正直山頂まで行ってきれいな景色を見たかったです。

結果的には、40 位だったのでとても良い結果とは言えませんが、今回で貴重な体験がたくさんできたのでこれからの部活も頑張りたいです。

A隊 12 千葉県 千葉高校



私はまずこの大会の開催に尽力してくださったすべての方に感謝したい。登山のみならず設営や審査など多くの方のおかげで、非常に楽しい登山となった。もちろん北海道での登山は初めてであり、北海道の山々のスケールの大きさに驚かされた。とてもよい経験となったと思う。そして、ますます山を好きになった。下見のために一週間前に旭岳に登ったのだが、そのときは濃霧と強風であまり良い思い出がない。しかし、大会の時は太陽が顔を出し、暑かったが遠くまで壮大な景色を望むことができて良かった。自然は時に優しく時に厳しい。このことを改めて教えてくれた素晴らしい登山になった。

(五島和輝)

北海道での総体を通して、普段の練習の大切さと天候を知っておく意義を実感した。本番の山では、より速く行動するために足の回転を増やすことが必要だった。私は練習の段階で少ない回転量のまま行っていたため、本番で疲労が残ってしまった。これらを踏まえ、インターハイで得た技術と同じ部活仲間に伝えたい。また再挑戦したい。(島田瑛真)

大会運営が選手、大会を安全に遂行することを第一に考えており、安心した登山をすることができた。長いようで短かったこのインターハイでの経験は、私の人生の糧となるだろう。貴重な体験を非常にありがたく感じる。

(横山慶)

北海道の山々が作る景色は普段の山行では見られない壮大でかつ繊細なもので、本当に心の底から感動させられた。二日目こそ行動範囲の短縮があったが、三日目以降はこれらの景色を存分に味わうことができ、疲れも吹き飛ばすほどの喜びを感じた。審査に関しては、自分たちの未熟さと全国大会のレベルの高さを実感させられる結果となったが、この貴重な経験を後輩たちに確実に伝え、糧にできるよう務めようと思う。最後に、これまで我々を支えてくださったすべての方々に感謝いたします。

(東宏樹)

A隊 13 東京都 早稲田実業学校高等部



今回は僕にとって2度めのインターハイであり、去年以上の結果を出すことを目標にして全力で競技することができた。天候などの様々なトラブルや予定変更があったがそれでも競技を続けられたのは共に登ってくれた仲間のおかげである。それだけでなく、あらゆる面において競技の円滑な進行を支えてくださった登山隊長を始めとする役員の方々、班長と副班長にも感謝申し上げたい。今回は15位という結果だったが、この経験を今後の部活動に活かしていきたい。

目指していたインターハイという大舞台での競技登山は予想に反し、特に緊張することなく臨むことができた。自分以外は3人が先輩というチーム構成の中、常に助けてくれたチームメイトをはじめ、ノウハウを伝えてくださった監督やOBの方々のお陰だと思う。曇天や荒天に見舞われながらも、炊事や設営審査など、チームメイトと協力して大会中の生活を作り上げることで、最大限にインターハイを堪能したと感じた。

北海道に広がる高山植物や火山由来の地形の織りなす風景は、どこを切り取っても地元では見られぬものであり、別の惑星にきたかのような感覚になりました。そういった雄大な景色やインターハイという場の高揚感のおかげで、体力を尽すことなく無事登り切ることができました。また、人の支えを実感する大会でもありました。地元の方々や学校、一緒に登った仲間(特にCL)からの設備面、金銭面、精神面の支えに感謝したいです。

コロナ明け初めての炊事幕営有リインターハイは、雨によるテン場の水没、十勝岳まで行くことを断念せざるを得ない天候など想定外の事態が続き、決して安心感のあるものではありませんでした。しかし、黒岳や旭岳は天気が崩れることなく、無事登り切ることができ、北海道の壮大な山々を堪能できました。そしてテント生活や山での行動をする中で天候だけでなく、他の班員がいてこそ、この空間が成立しうるのだなと強く思いました。

A 隊 14 神奈川県 平塚中等教育学校



北海道の山々は私の知るどんな山よりも広大であった。霧が晴れて一気に眺望が開けた時の感動は、大会が終わった今となっても度々思い出す。結果こそ 18 位という悔しい順位に終わってしまったが、仲間と共に過ごした山岳部人生の集大成として、今後も大会出場の思い出は心に残り続けるだろう。また私達の全国大会出場は、先輩方やメンバーに入らなかった部活の仲間、先生方によって支えられてきた面が非常に大きいので、彼らに今一度感謝を伝えたい。

実は私は、登山という競技も山そのものも決して好きではない。山岳部に入部し、今までこの部活で活動続けてこれたのは、ひとえに同じ部活の友人や先輩方、後輩がつくりだしてくれる温かい雰囲気、心地よかったからであり、全国大会を目指して神奈川県予選の出場を決めた段階から今まで、大会へ向けた準備やトレーニングの日々は私にとって非常に過酷なものであった。大会期間中も、北海道の厳しい自然や過酷な行程、不便な生活に苦しめられた苦しい思い出が残っている。もちろん、そのような状況下でも先に述べたような感動を私達に与えてくれた山々の魅力は認めざるを得ないし、結果として大会終了後に強い達成感を覚えたのも事実であるが、大会への参加に際して数多くの苦しい思いを味わってきた以上、周囲の人に登山や大会参加を輝いている面だけで判断され、「いい経験」と雑に括られると、やるせない思いを感じる。

では、本大会への出場を「いい経験」で終わらせないためにはどうするべきだろうか。私はまず、この経験を後輩たちの指導に活かすところから始めようと思う。来年以降も全国大会出場を目指したいという後輩には、私達が今大会を通して得た知識や反省を伝えて、さらに上の順位を勝ち取る糧にしてほしい。大会で勝つことよりも山登りや部活での交流を楽しみたいという後輩には、競技としての登山ではなく、山登りを目一杯楽しんでもらえるよう指導する選択肢もある。どちらにせよ、これは全国大会を経験した私達だからこそできること、なくてはならないことであると言えるだろう。全国大会出

場という貴重な体験を活かし、本校山岳部をより一層魅力的な部活にしていきたい。

A 隊 15 山梨県 北杜高校



CL 青木樟太郎

私たち北杜高校スキー山岳部は、インターハイ出場を目標に練習に取り組んで来たので今回出場できとても嬉しかったです。大会本番は、2 日目が天候の影響で途中までしか行動ができなかったが、3・4 日目は無事に全行程を終えることが出来ました。また普段関わりのない他県とも交流ができ、とても楽しむことが出来ました。

SL 高橋成実

私は今回が初めてのインターハイだったので不安点や分からない事も多かった。そんな中でも 29 位という順位を取ることができたのはチームの他のメンバーと顧問の先生のおかげであり本当に感謝している。最後に私達がインターハイに出場するために多くの事を教えてくれたり助けてくれた方々ありがとうございました。

鈴木大心

自分たちにとって初めてのインターハイでとても緊張があり、山梨県を代表して臨むのでミスをしたらどうしようという気持ちでいっぱいでした。ですが、仲間の支えなどもあり最後まで自分たちの全力を出せました。結果はどうであれ、本番までの過程でたくさんの練習や準備を全力でやってきたので悔いが残らない大会になりました。

岩下耕晴

私は最初インターハイにあまり前向きではありませんでした。しかしチームがインターハイに行く方針を決定したのでこの半年間頑張りました。北海道という来たことのない環境にいち早く適応できるよう努力し、本番を迎えました。インターハイも無事に登りきることができて良かったです。この経験を今後の高校生活に役立てたいです。

A隊 16 新潟県 長岡高校



今回私たちはチーム全員が初めてのインターハイであり、分からないことも多く不安でいっぱいでした。しかし開会式で大会競技役員の皆様や地元の高校の音楽部の方々が温かく私たちを迎えてくださったこともあり、リラックスして適度な緊張感を持って大会に挑むことができました。2日目の十勝岳は悪天候になってしまいました。しかし終日班行動ということもあり、班全体で協力しながらスムーズに登山を行うことができました。十勝岳まで行けなかったのは残念ですが、頂上付近では下見の時に見るができなかった素晴らしい景色を見ることができました。3日目の黒岳は昨日に比べて非常に登りやすい天候となりました。この日はチーム行動もあり、チーム内でどのぐらいのペースで行くのか休憩はどこで取るのか入念に話し合いながら登りました。道中で硫黄の匂いがしたり、途中で温泉があつたりして十勝岳とはまた違った魅力がありました。4日目の旭岳は十勝岳の時とは打って変わり快晴でした。2日間の疲れが残り脱落者も出ていた中、多くの選手が旭岳まで登りきることができました。旭岳は植物が無く、常に岩の道が続いており直射日光があたって暑くなりましたが、時折後ろを振り返ると北海道の絶景が広がっていました。また山行以外でも交流会などで班の仲間と触れ合うことができ予想外のトラブルに見舞われながらも、役員の皆様のご協力のおかげで無事に大会を終えることができました。私は三年生なので登山部引退しますが、大学以降も登山を続け、今回逢うことが出来た仲間達と再会でできればいいなと思っています。今回のインターハイにご協力いただいた皆様本当にありがとうございました。

A隊 17 長野県 屋代高校



高校3年生という集大成の年に県大会を勝ち上がり、インターハイという舞台に立てたことを嬉しく思います。開会式の会場に入った瞬間、沢山の選手の方や運営の方がいて、こんなにも多くの方に支えられて大会ができていたのだと実感するとともに、全国から勝ち上がって来たチームが集まって作られる引き締まった雰囲気を感じました。特に印象に残ったのは、という書き出しができないほどに、どの日も、どの瞬間も強く心に焼き付く、そんな大会4日間だったと思います。

大会初日は、開会式後、すぐ筆記系の試験でしたが、全国の人と問題を解いたり、天気図を書いたりするのはとても緊張しました。失点はありましたが、最後自分の納得のいくまで書き切ることができたと思います。

大会2日目は人生で初めて北海道の山に入りました。雨は降っていましたが、上富良野岳の辺りで一瞬雲が切れて、火山性の美しい山の姿を眺めることができ感動しました。雨のせいもあって下山した時には精神的にも疲れていましたが、登山口でご当地のお菓子をいただくことができ、一気に疲れが吹き飛んだような気がしました。

大会3日目は時間規定内に登り、そして下り切ることができ、達成感がありました。高山植物や御鉢の様子を見ることができ、良かったです。また森林限界が低く、比較的ずっと遠くまで見通せて、山の雄大さを全身で体感することができました。

大会最終日はこれまでの疲労もあり規定時間にも少し遅れ、班離脱もしてしまいましたが、5人全員で北海道最高峰の登頂の喜びを噛み締めることができ本当に嬉しかったです。山頂まで引き連れて下さったコース隊長の方をはじめとする運営の方々には感謝しかありません。

全体を通して、自分たちに不足しているものがわかり、次からの山行につながる大会だったと思います。大会を安全に運営して下さった全ての方に感謝です。ありがとうございました。

A 隊 18 富山県 富山高校



まずは、大会を開催してくださった関係者の皆様、自衛隊の方々、支えてくれた班やチームの仲間、そして暖かく迎えてくださった北海道の方々に感謝したいです。

昨年は、県大会で敗れてしまい、インターハイに出場することが出来ませんでした。先輩と一緒にインターハイにいけなかったことで悔し涙を流し、自分の力不足を痛感しました。そのとき、先輩の心残りを取り返す事を約束したからこそ、今回出場する事が出来て嬉しかったです。まだまだ先輩には及びませんが、少しは恩返しが出来た気がします。しかし、だからこそ、もっと活躍して、もっと強い姿を見せたかったです。

大会には、雨の中の下見登山の疲れが溜まった状態で入ってしまいました。特に2日目は1つも思うようにいかず苦しみました。けれど、仲間の力強い言葉に励まされ、少しずつ立て直すことができ、最後まで戦うことができました。最終日には、仲間の一人が脱水症状を起こして倒れてしまうなどハプニング続きでしたが、荷物を分けたり声を掛け合ったりして、チームで協力しながら乗り越えることができ、旭岳の山頂に着いた時には、達成感が感慨深かったです。大会を通じて、大変な時に頼りになる人になりたいと思いました。

今回の大会の結果は実力不足で全く満足できるものではありませんでした。けれど、その分、見つかった多くの課題は、来年成長した後輩が必ず活かしてくれるはずです。ここまでこんな心許ない僕たち先輩を慕い信じてくれた後輩には感謝しかありません。だからか、帰りに流した悔し涙も去年とは違い、少し充実感がありました。ここからの後輩の時代を、精一杯応援します。結果も大事ですが、それ以上にこれまで努力してきた過程が大切だと思うから、悔しいけれど自信を持って、この経験を次に繋げていきたいです。僕は、仲間と過ごした時間大好きな山にみんなでいる時間が、楽しすぎて幸せすぎました。素晴らしい時間をありがとうございました。

A 隊 19 石川県 金沢泉丘高校



まずは 3 日間の山行を無事に終えることができたととてもホッとしています。今年は四年ぶりに本来の形で開催がなされました。まず開会式、早速の炊事、テント泊に苦戦しつつメンバー4人で協力して何とか乗り越えることができました。続く山行初日は天候に恵まれず、道中歩きにくい山道に体力を削られました。それでもサブ装備への変更、宿泊地を体育館へ移動するといった柔軟な対応をとっていただき、私たち選手の安全を最大限考えていただいた本部関係者の皆様に非常に感謝しています。また山行初日の白金温泉入浴は筆舌しがたい心地よさでした。

山行 2 日目のメインは黒岳からのチーム行動。読図は当初の用意もあり比較的余裕を持てたものの、前日からの疲れもあり北鎮岳の CP1 の規定時間がとても苦しく感じました。それでも御鉢平の眺望はよく、大雪の素晴らしい景色と荷物を移動するなどして励まし合ったメンバーに支えられ、規定時間内にゴールすることができました。2 日目の夜はテント内が蒸し暑く、非常に寝苦しい夜でした。

山行3日目スタート地点からのチーム行動は第二天ヶ原を越えてからの登りがきつく、体力的な限界を感じました。さらに班行動となった後もなかなかハードな登りで、3日の中で一番つらい登山でした。大会を通じて当チームも属する4班のみりタイアなく登り切ったと聞き、本当に素晴らしいチームの皆様と登らせていただき感謝しかありません。私たちが苦しいとき、一緒に登る他校から沢山の勇気をもらいました。またチームメンバー3人も同様です。小池隊長の言葉にもあった通り、「体力は4人のもの」各々が自分の持てる力を出し合ってこそ、この4日間無事に登り切れました。それが故に自分のミスで失点した部分はきちんと反省し今後に生かしたいと思います。

A 隊 20 福井県 武生高校



8月7日～11 日にかけて行われた 2023 年度のインターハイは、雄大な山並みのもとで、私たちの夏にかけがえのない思い出を残してくれました。今年度のインターハイはテント泊と炊事が復活したコロナ禍以前と同じものとなり、私たちはこの半年間で今まで練習できなかった炊事やテント生活の練習を、時間をやりくりしながら行いました。特に炊事は食材の保存や重さを考える必要があり、またカロリーを確保することが難しかったですが、仲間たちと試行を重ねて納得できる炊事ができました。私たちは焼きそばを今大会の献立に入れていたのですが、練習の段階では1回も成功しませんでした。しかし、大会直前に水分や野菜の量を話し合いで調節して大会本番に初めて成功でき、練習から学んだ経験の大切さというものを実感できたことは非常に良かったです。

登山行動では、圧倒的スケールに裏打ちされた長大なコースである上に、細かい礫と大きい礫が登山道に散らばっており、高い歩行技術を要求されるものでした。特に10日の旭岳では足元が砂のようで、下りでの足さばきには苦労しましたが、仲間と励まし合いながら歩き切ることができました。

このように大会5日間でチームの絆が深まったのはもちろん、他チームとの交流もできたことはとても良い経験となりました。互いの県に関することや、審査に関すること、練習方法、去年の大会で面識のあるチームとは去年の思い出話など、貴重で刺激的な体験をすることができました。

この大会でチームメンバー全員が引退ということになりましたが、最後まで部活動という形で山岳活動を続け、全国の舞台で全国のチームと競い合えたことは大変名誉なことであり、メンバー各自の努力だけでなく先生方や保護者の支援と応援があったのものでした。今後チームメンバーそれぞれにとって、登山の場面だけでなく他の様々な場面でも、今回の経験がどこかで心の支えとなり、また再び全員で山に登れる日が来ることを切に願っています。

A 隊 21 静岡県 沼津東高校



創部初の県大会優勝を成し遂げた後全国のことを何も知らない僕たちは、競技登山の全てを知る難波先生、そして富士高の諸戸先生を頼りに、ここまで準備を進めてきました。本番10日前に北海道入りをしてから、仲間たちと初出場・初優勝を本気で目指した日々は、一生の宝物です。思い返せば、4日間の大会は本当に過酷でした。2年半鍛えてきた忍耐力の全てを出し尽くした、そんな4日間でした。コロナの影響も未だ軽視することはできず、同じ班のチームと突然お別れしてしまう場面もありました。もっと話しておけばよかった。大会前に防げた減点のことを考えると、やはり悔やんでも悔やみきれません。筆記のミスを含め、自分にもまだまだ隙があるなど実感できました。全国優勝の夢は、後輩たちに追ってもらいたいです。最後に。班長の塩谷さんと閉会式でお会いできなかったのが本当に残念です。またどこかでお話できると嬉しいです。あと先生含め5人で静岡に生きて帰ってこれて嬉しい限りです。大会に関わった全ての皆さん、お疲れ様でした。ありがとうございました。僕の好きな言葉は、「本日の審査は終了しました。」です。

(谷澤 賢)

今大会に参加して運営、役員の方々、4日間僕たち5班を安全に引率して下さった塩谷先生、谷山さんをはじめ、地元の高校生、救護、自衛隊の方々など、たくさんの人々に支えられて競技をすることができたと感じました。次は塩谷先生、谷山さんのような慕われる班長、副班長や、役員として山が好きな高校生を支えたいです。また、監督として今回果たせなかった優勝を獲りに必ずインターハイに戻ってきます。ありがとうございました。

(三浦敬汰)

まず、5班班長の塩谷さん、副班長の谷山さんに深く御礼申し上げます。素早い伝達や細かいペース配分など、本当に我々によくしていただき、心から5班でよかったと思うことができました。運営の皆様におかれましても、厳しい状況でも可能な限り安全に気を配ってくださり、感謝の言葉が尽きません。非常に思い出深い大会となりました。ありがと

うございました。(竹野谷優月)

結果は3位ということで、嬉しいような悔しいような、なんとも歯がゆい気持ちでいます。他メンバー3人におんぶにだっこ、ものは壊すわペーパーは間違えるわ、取り柄は強健さと図太さだけという僕でも、一丁前に悔しがりをするんです。寝れば元通りですが、何はともあれ、四人揃って無事に大会を終えることができたので良かったです。かしこ。

(金井裕太郎)

A隊 22 愛知県 豊川高校



青木謙介

インターハイ出場 2 回目なのですが、昨年の大会とは異なり本州を離れた北海道の大会でした。登山は天候の影響を受けやすく、今大会も天候によって左右した大会でした。

初日は雨が降り、予定とは異なる登山行動で混乱したものの、2 日目 3 日目は回復し、良い登山ができました。北海道の山は晴れば天国、悪ければ地獄でした。雨の中での行動は体が冷えて大変だったけれどもよい経験になりました。

藤波慎之介

昨年に引き続き 2 回目の出場になりますが、昨年の香川大会と今年の北海道大会では全く勝手が違い、とても戸惑いました。今大会は思うような結果は得られませんでした、それが今の実力と受け止め、今後も登山活動に励んでいきたいと思っています。

植村悠生

今大会は天候状況により予定が変わった部分が大きくありましたが、チーム一丸となって最後まで頑張ることができました。自分は救急を担当していて、最後に満点を取ることができ気持ちが良かったです。行動 3 日目のメインザック行動はとてもきつく辛かったのですが、最後の山を踏ん張って頑張ることと、北海道 1 番の山旭岳を登ることができうれしかったです。

鈴木陵平

今大会では天候があまりよくなく、下見でも天候

不順でした。大会当日も初日から天候が思わしくなく、夜になってから雨が降り、行動初日の十勝岳コースは縮小しました。2 日目は黒岳・北鎮岳コースを無事最後まで縦走できてよかったです。最後の旭岳コースは天気も良く最高の景色を見ることができました。部活動最後の登山をこの北海道の山々を登ることができ本当に良かったです。

A 隊 23 三重県 神戸高校



僕が山岳部に入った理由は、「中学までにやってきた事と違うことがしたい。」という単純な理由でした。しかし、そこからどんどん山の魅力に引き込まれていき、インターハイに出場するまでにいました。

あんなに嬉しかったインターハイ出場、ですが私たちはみんなは部活が終わって、受験勉強に集中しているのを横目で見て、焦燥に駆られ準備に集中することができませんでした。そんな中、顧問の先生は私たちのために全力でサポートしてくださり、叱咤激励して前に向かってくれました。

メンバー全員足並みもそろい臨んだ大会の下見、みな主体的に物事に取り組み、団結力もさらに深まり、素晴らしい六日間をすごすことができました。

そして大会本番、すべてをやり尽くしたという自信が、緊張を和らげてくれました。しかし、「さあこれから」という時、悲劇が起こります。メンバーの一人がコロナにかかり棄権になってしまいました。とても悔しかったです。でもこればかりは仕方ありません。ですが、この大会で人として成長した実感が、この大会に満足感を与えてくれました。結果は得る事ができませんでしたが、もっと大切なものを得た気がします。(3 年 柚木 拓也)

A隊 25 滋賀県 膳所高校



今回の北海道大会は4年ぶりの本格開催ということもあり出場できたことに光栄を感じてはいますが、大変な大会でした。初めての行程に不安を感じながら行動したり、カムイの試練なのか思うようにことが運ばなかったりしました。やはり自然は偉大で登山は一筋縄ではいきません。しかし、その中でできることを考え実行する力を養う鍛練するのが登山競技でそれを乗り越えた先には素晴らしいものがあります。香川大会が終わってからこの1年ずっと全国優勝と口にしてきました。残念ながら1歩及びませんでしたが苦しみながらもここまでやれたこの経験は一生の宝です。

2度目の出場となった今年の北海道インターハイを一言で表すなら「打ち勝った」である。逆境に打ち勝つことができた、それがこの大会で一番嬉しく感じられたことだ。僕は今まで何も全力で頑張ったことがなく、何事も器用にこなしてそれに自足していた。しかし、4月にA隊で頑張ることが決まって、初めて本気で頑張ろうと決意した。何度も逃げ出したくなったが、その度に自分で支え、また周りも支えてくれたおかげで乗り越えることができた。5位という素晴らしい結果、周りへの感謝と共にこの経験は一生僕の心の骨となり僕を支えてくれるだろう。

今回開催された北海道インターハイに参加して、北海道の屋根と称される大雪山と、十勝岳連峰の雄大さに感動しました。大会2日目は、荒天により予定通りには行きませんでした。幸運にも下見のときにはコース通り縦走できました。火山活動によって作り出された荒涼とした景色にはすごいとしか言いようがありませんでした。大雪山での登山は急な上りやガレ地など険しさを見せる反面、火口や草原など多様な美しさを私たちに呈していました。そして、何より仲間の重要性を認識させられました。パーティの仲間はもちろん、同じ班の仲間や大会に関わっている方々全員で支え合い、励まし合ったことで今回の厳しい山行を終えられたのだと思っています。この経験を一生忘れることなく、私のバ

イブルとして残していきたいと思います。

A隊 26 京都府 嵯峨野高校



まずは今大会に関わった皆様、貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。山を共通点として多くの人と出会い、北海道の自然の力強さを感じつつ自分達のベストを尽くして競技に臨んで、高校の部活動をよい形で締めくくれたと思います。部活動から最後の総体までの活動を通して得た人との繋がりや経験を大切にして、これからも山を楽しんでいきたいです。受験が終わってから。(高橋)

北海道という遠い会場や大会の規模の大きさに胸が高鳴る中迎えた本番。特に印象に残ったのは、班内での他チームとのやり取りです。競争相手である他県の人と励まし合ったり、互いの地元の話をしたり、同じ山に挑む仲間として絆を育めたのには心温まりました。僕の高校登山の集大成がこの大会だったことを誇りに思います。今大会に携わってくださった運営の方々、監督の先生、送り出してくれた同校の部員のみんな、本当にありがとうございました。(甲賀)

全国大会お疲れ様でした。あっという間に始まって終わった楽しい大会は京都に帰った今でもまだ引きずるほどです(大会後二週間経過)。いつもなんですが、この大会でもやはり7人の仲間と先生方がいてくれたからこそ楽しむことができたと思っています。ほんまにみんなと一緒に居てたのしかった！ありがとう！と、この場を勝手に借りて普段絶対言わない感謝をします。あと切実に文才が欲しい。(後藤)

私は予選で急遽先輩方のチームに加わり、インターハイに連れて行って頂きました。出場できるとは想像だにしていなかったインターハイで一番驚かされたのは、他のチームで立派に活躍する同級生の姿でした。彼らの姿を見た今、目指すべきところは自分が思っているよりもずっと高いところにあるなと感じています。来年は、もう一回りも二回りも成長して今年更新した京都最高順位を塗り替えたいです。(澤田)

A隊 27 大阪府 天王寺高校



なんの偶然か私たちの修学旅行の行き先は北海道だった。その時に少しだけ登山をし、大雪山の素晴らしさの片鱗を味わい、またガイドさんと来年また来ると約束をしたので、行くしかないみんなで心に決めて挑んだ結果のインターハイだった。関西空港まで見送りに来てくれた後輩たちの熱烈な見送りを受けながら出発した。

8/8 3 時起床。バスで十勝岳温泉まで運ばれたころには本降りに。そんな中登山行動が始まる。地図は事前に頭に入れていたし、大阪や近畿の山によくある難しい読図で鍛えられていたのでポイントの札を見るだけで難なく読図はできた。登り始めに見えた D 尾根や火山岩が転がるヌツカクシ富良野川が恰好よくて、雨具のせいでひどく暑いことも忘れるほど楽しかった。中腹に行くほど雨も激しくなっていくが、D 尾根を登っていくと雲の高さを超えたのか、急に雨が上がった。霧もなく、地形的に十勝岳は見えなかったものの眼前に広がる火山は圧巻だった。D 尾根を登り切って稜線に出ると爆風が吹き付けてきた。少し稜線を歩くと上ホロについたらしいがガスがひどく、そこがピークということがやっと分かるくらいだ。山頂で 15 分ほど読図提出兼休憩がとられ、その間にかなり体が冷え北海道の厳しさを思い知った。下りは天王寺が班の先頭だったので班長さんからいろいろと聞かせていただいた。登山口では地元の方々が出迎えてくださり、地元の銘菓までくださった。貴重なカロリー源だ。

バスに揺られて青少年の家まで行き、入浴。冷えた体に熱めの天然温泉が沁みる。幕営地に帰るとテン場が寝泊りできる状況じゃなかった了近くの高校の体育館に誘導された。先に帰って一番ひどいときのテン場を見た先生によると、ウユニ塩湖のようだったという。その日の審査は打ち切りとなり、その高校で炊事し、泊まることになった。雨と寒さにやられたのかメンバーの 1 人が少ししんどいらしく、微熱もあったので心配だ。

8/9 一晩寝ても回復しなかったようで、彼は医

務室に行き、残りのメンバーで準備をしていると医師の判断で棄権となる旨を伝えられた。インターハイに来て山に登れなくなり悔しい思いも少しはあった。しかし体調が悪いまま突っ込めるほど山は甘くないし、いい出しづらかったろうに言ってくれて感謝している。

大阪大会で勝ち抜き、様々な方に支えていただいた全国大会であるのに悔しい結果となってしまった。しかし短い間ではあったものの他校との交流やめったに味わえない山などを通して、この全国大会で様々なことを経験し学ぶことができた。改めてこの場を借りて大会を運営された皆様、高校 OB 会の方々や顧問の先生、ご支援いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

A 隊 28 兵庫県 柏原高校



まず、第 67 回全国高等学校総合体育大会登山大会の運営ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。2 日目から悪天に見舞われ、幕営地が池になってしまいましたがすぐに体育館へ移動の指示があり、体まで濡れずに済みました。大会を通してたくさん予定通りではないことがあったと思いますがその度素早く対応して頂いて選手の私たちは 4 日間問題なく活動できました。大会開催地の北海道の山は火山活動でできた地形や現在も火山活動している点で今まで登った山と大きく異なっていて地図を初めに見た時は驚きました。概念図作成の際、今まで見たことない地形だったので尾根の判断が難しく混乱することもありましたが、この地形を自分の目で見てみたいという気持ちがとても強かったです。実際に登ってみて御鉢平が見えたときは興奮しました。チームのメンバーと地形のでき方を話して盛り上がりました。他にも天女ヶ原や中岳温泉を越えた先の木道での景色が美しく、大会で審査があり、緊張感がある中でもかなり楽しめました。また、私達が大人数の隊であるからかたくさんの一般の登山客の方に話しかけて頂いて嬉しかったです。久しぶりに大きな山で山登りをしたので山っていいなと大変感じました。また、私達

が大会要項で見落とししていたら申し訳ないのですが、1つ改善して頂きたい点があり、チーム行動のチェックポイントでゴールとなる時はゴールしてから記録、読図に記入する5分の猶予がないということ。を次回から要項などに表示をお願いします。最後になりますが今大会で貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。全国大会は初出場でしたので思わぬ所で減点がありました。この経験を後輩に引き継ぎ、私たちより活躍してくれることを願っています。

A隊 29 奈良県 郡山高校



今回、初めてのインハイで色々なことを経験しました。今までにないような過酷な環境の中で登り、辛いと感じたことが何度もありました。しかし、他の県の代表選手や仲間と一緒に登ることで楽しさを感じると同時に未知のことや高レベルの技術などを知ることができ、またこの舞台で戦いたいと思いました。今年は最後まで登りきれませんでしたが来年は必ずリベンジしたいと思います。

(CL、気象、読図 佐藤爽)

今回初めてインハイに参加して多くの反省点が挙がりました。最も重大な点は、今回のインハイでは1・2日目がサブザック行動だったので、最終日以外は自分たちの中でも、サブザックの軽さに甘えていて最終日のメインザック行動が自分たちにとって厳しく、行動中に自分たちの体力不足を痛感したという点です。次回までに大会の山を余裕を持って登れるぐらいの体力を身につけてインハイに戻ってこようと思いました。

(SL 自然観察記録 山崎理和)

今回のインハイでは、残念ながら天候が荒れ、当初からの変更が多く慌ただしかったと思います。しかし、そんな中でも様々な対策を練り最後まで大会を行い、僕たちに貴重な経験をさせてくださった運営の方々には心から感謝申し上げます。また、僕は自身の体調管理を怠ってしまったために山行最終日に倒れてしまいチームや周りの方々に大変迷惑をかけてしまいました。今後、このようなことがないように十分に気をつけながら登山を楽しんでいき

たいと思います。(天気図 福間璃音)

今回初めてインハイという大きな大会に出て、今までの山行では得ることのできなかったような貴重な経験をする事ができたと感じました。夜は暑くてあまり眠れず、山の頂上付近ではとても強い風に吹かれて体が冷えるなどあまりの過酷さに驚きました。最終日のリタイアの悔しさをバネにもう一度インハイに出て良い結果を残せるように頑張りたいです。(救急 杉村謙心)

A隊 30 和歌山県 桐蔭高校



僕たち桐蔭高校は二年連続のインターハイ出場でした。

昨年の経験を活かし練習を重ね、登山部三年間の集大成としてこの大会に挑みました。今大会では初めて炊事審査とテント泊が行われ、また北海道の本州とは異なる景色が味わえるということでもとても楽しみにしていました。大会中は大変なこともたくさんありましたが、仲間と助け合い、無事に登りきることができました。とても刺激的だったこの大会中で特に印象に残ったのは次の二つです。

まず、他の学校との交流です。普段は他県の学校とほとんど交流することのない僕たちにとって、非常に貴重な時間となりました。初日の交流会で皆が楽しく話をしてくれて、不安が払拭されました。また、他の学校がどんな献立で炊事をしているのかや計画書の断面図や概念図の作り方など学ぶことが多くありました。そして他校の皆さんの歩行技術はとても優れていて、僕たちももっと体力をつける必要があると感じました。

二つ目は北海道の自然の雄大さを肌で感じられたことです。バスからの田んぼや畑の広大な景色は圧巻でした。登山中は標高が上がるにつれ植物の様子も変化していき、森林限界を超えるのが実際に感じられました。最終日に登った旭岳はとても疲れましたが、頂上から見る景色は壮大で感動しました。天候が安定しない中でしたが、それも含めて北海道の自然を存分に楽しめました。今回登ることができなかった十勝岳には、いつか自分の足で登りたいです。

今大会では仲間と共に登る楽しさ、登り切った時の達成感、そして他校との交流の大切さを身にしみて感じました。今大会で得た経験や知識は後輩に引き継いでいきたいと思います。北海道での五日間はとても強く思い出に残っています。これからも体力づくりに励み、安全に楽しくたくさんの山に登りたいです。来年の福岡インターハイにも僕たち桐蔭高校は必ず出場して見せます。

A 隊 31 鳥取県 米子工業高校



インターハイの行程が終了し、現在就職に足に向けて準備をしています。インターハイは一言で言うとても厳しいものでした。中でも大会の日程は開会式、閉会式を含む5日間ありますが、そのうち3日は山行です。体力はもちろん必要ですが、精神力もなければクリアすることができません。さらに、天気や気温でも登山の厳しさは左右されてくるので、服装などで対策をしないとイケませんでした。体力を削りながらも考えて登山する。僕の思う登山競技の難しい部分です。インターハイの日程中は、登山1日目、雨の勢力が強く雨具を着ての山行で体が濡れることは最低限に食い止めたが、テント場から、登山口までの移動で雨にあたっしまい、それによる寒さの対策を強いられました。登山2日目は朝から日が照っており気温も当然高く水分を奪われやすい状況でした。夜になると、強い雨が降り、湿度が高くなったテント内で汗をかきながら眠りにつきました。登山3日目では、昨日よりも気温が高く、防寒着を着ると暑いぐらいでした。体力の消耗も激しく、3日間の登山で一番厳しいものでした。この大会を通じてよかったこと、今後の課題になることを述べます。初めに良かったことについてです。数えきれないぐらいありますがここでは2つ述べます。1つ目は無事閉会式を迎えられたことです。天気の変化やコロナウイルスの影響により、急遽次の動きや大会の内容の方針が変わることが多々ありましたが、役員の方々の素早い対応によって選手の戸惑うような時間をできる限り減らしていただいたと思います。一方選手も指示を守りすぐに行動に移せていました。こういったことの積

み重ねが選手のコンディション、モチベーションを保つことにつながり、大会成功の一つの要因になったのではないかと考えています。2つ目はチーム内でしっかり声の掛け合いができたことです。些細なことですが、選手一人のメンタルを保つには大切なことです。次に今後の課題になることです。それは限られた時間の中で経験と準備をたくさんすることです。そうすることで、トラブルへの対応もしやすくなると思います。少しのミスも減らせるので必ず結果に影響してくると思っています。最後にこの大会で多くのことを学び吸収しました。次の舞台で吸収してきたことを存分に使い、輝ける大人に成長したいです。

A 隊 32 島根県 松江北高校



CL 三上征成

今大会中、自分は CL として出場しました。今回は悪天候のためコース変更がありましたが、山行2日目、3日目は北海道の雄大な自然を感じることができました。チームを引っ張る中で大変なことが多々ありました。特に旭岳コースでは班行動の際しんどくてチームの一番後ろで必死に食らいついて登りました。しかし山頂についたとき、今までの疲れが吹き飛ぶほどの達成感に満たされ、とても元気になりました。最高の山をチーム全員で登れてとても楽しかったです。

SL 三好海都

大会期間中は、大雨が降ったり、夜暑くて眠れなかったり、体力的、精神的に苦しい時間が多くありましたが、仲間と一緒に乗り越え、最後の旭岳まで登りることができました。そのお陰でものすごい達成感を味わうことができました。私達3年生は、これから受験勉強が始まりますが登山部で培った強靱な精神力をもって受験勉強を乗り切ろうと思います。最後になりますが、我々松江北高校登山部は永久に不滅です。

M1 木戸健太

大会中は天候が安定せず、特に山行1日目は予定の行動をできませんでしたが、北海道の山々の自然の力を身をもって感じることはできました。

旭岳コースの最後の登りは今までの人生の中で一番しんどかったですが、チームの皆のおかげで登りきることができ、頂上の景色は最高でした。今大会チームの皆にたくさん助けられました。皆には感謝しかありません。全国の高校生と共に北海道の山を登ることができてよい思い出ができました。

M2 縄田皓太郎

僕は人生で初めて泊りがけで山を登りました。お風呂に入ることができなかつたり、自炊したものを食べたり、普段の生活は全く異なる生活をしました。きついこともあったけど仲間たちと励ましあいながら楽しむことができました。登山行動では雨が降ってコンディションが悪かったけど、登り切った時の達成感は今までの中で1位2位を争うレベルでした。今回のインターハイで得た知識やマインドを今後の人生に生かしていきたいです。

A隊 33 岡山県 岡山操山高校



思い返せば、私達は部活動の仲間や先生方、OBの方々など数えきれない人の応援を受け、今大会を迎えた。大会中もここで書ききれないほどの多くの人に支えられた。だが、チームの一人の「自分たちは無礼ではないか。」との指摘で私ははっとした。今大会、私は準備不足が原因でミスをした。万全の準備が支えてくださる人々への唯一の敬意であるはずだったが、自分はそれを理解していなかったのだ。これからも私は多くの方々の応援を受け、進んでいくことになる。だから、精一杯の努力をして、その人々への感謝を忘れない人間にならねばならない。今大会でお世話になったすべての皆様、本当にありがとうございました。（荒川雄一郎）

昨年の秋に岡山県で行われた中国大会では、準備不足により入賞すらできなかった。そこから7大会ぶりのインターハイ出場を目指し、部活動に取り組んできた。インターハイまでの道のりは決して順調ではなかった。事前踏査も雨で不完全なものになった。不安だらけで臨んだインターハイだった。くじけそうになった時、インターハイメンバーに入れなかった部員、出場権を得られなかった女子部員、卒業生の顔が浮かんできた。私たちは4人では

なかった。「みんな」で勝ち取った優勝だ。最後に今大会の運営に関わったくださった方々に感謝いたします。ありがとうございました。（山田晃平）

雄大な北海道の山々を舞台に開催された全国高校総体登山大会。三泊四日という長い会期の中で、登山競技で試される自己管理能力や粘り強さを確かめるとともに、登山の醍醐味である植生の観察や壮大な展望を楽しむことができました。また、全国から同じ夢を抱いて集った仲間たちと、時に緊張感をもって、また一方ではチームの壁を超えて語らいながら優勝を争う経験は、競技登山、それもインターハイの場以外では得ることができないものと思います。登山人生、さらには生涯の中で貴重な経験となりました。（山根圭裕）

人生初の県外での登山大会。優勝という最高の形で終わることができ嬉しく思います。自分にとって未知の山々に興奮する思いと共に力を出しきれるかという不安な思いもありました。実際、今大会の準備期間と大会期間を通して全力を出し切れたかというところではない。と、言ってしまうほどチームにはあまり貢献できなかったという謝意と悔悟の気持ちがあります。しかし、今回の反省を通して、これからの自身の成長に役立てていこうと思います。大会出場にあたってご支援・応援してくださった皆様、誠にありがとうございました。

（白砂龍之介）

A隊 34 広島県 広島学院高校



僕は県総体、そして今回のインターハイでCLをつとめた。僕自身リーダーという立場に慣れず、リーダーらしいことはあまり出来なかった。自分の能力不足でチームメンバーに迷惑をかけてしまうこともあった。その節は申し訳ないと思っている。大会中は北海道の雄大な自然を味わえる機会が多く、チームみんな楽しみながら登山ができ、とても良かった。結果は8位だった。各々が何かしらの失点をしてしまった。今思えばああしておけば良かったところもいろいろと見つかった。この経験は後輩たちにしっかり受け継いでいきたい。最後に、今回の大会の運営に関わった全ての方々のおかげ

で無事大会を終えることが出来ました。本当にありがとうございました。(CL 一丁畑 零)

僕はインターハイに出場したが、結果は八位だった。偉大な先輩たちが去年優勝して二連覇が懸かった大会だったのでほとんど僕のミスで(他のメンバーはチーム競技の失点だからみんなの失点と言ってくれたがやはり敗因は明らかに自分)優勝を逃したのは正直未だにかなり辛いがそれ以上にメンバーや他の部の仲間に申し訳ない気持ちがある。ただそれを含めても今回の大会は楽しかったし、十勝岳にて下見の時経験した強風の中での心躍るような登山や、大会本番に少し晴れた時の旭岳周辺の雄大な景色は多分一生忘れないし、それらをまた体験するために僕は一生山に登り続けるんだろうと確信するにはインターハイは十分な出来事だった。またみんなと北海道の山に登りに行きたいなあ。(SL 岸田 陽)

この北海道・大雪山系で行われたインターハイは素晴らしいものだった。この大会を企画、運営していただいた方々、大規模な行動に協力してくださった現地の方々に感謝します。審査は細々とした注意不足により入賞を逃してしまい悔しい思いをした。この悔恨の情は一生忘れないだろう。だが登山自体は素晴らしく楽しかった。悪天により登れなかった山もあるが、北海道の山々の壮大な景色を見ることができた。ああ叶うなら、4人で頂上を目指したあの夢のような日々に戻りたい。大会が終わり1週間、もうそんなことを思っている。

(M1 平岡 拓磨)

僕たちは今回のインターハイに向けてかなり準備をしていたつもりでしたが、実際は点数をポロポロと落とし優勝はおろか上位入賞にも入ることができませんでした。先輩たちが去年優勝出来たから自分たちもいけるんじゃないかという甘えがあったのだと思います。中国大会でも県総体でも勝ってこの大会に再び参加し今度は悔いのない結果を残せるよう1年間頑張ります。

(M2 奈良定 克拓)

A隊 36 香川県 丸亀高校



私は今回のインターハイを通じて、様々なことにおける精神力が養われたと感じています。3泊4日という長丁場の幕営生活では、普段は気にならない些細なこともストレスサーとなってしまいます。ゲリラ豪雨や雷の発生で非常に恐ろしい思いもしましたが、そういったことに対するマネジメント、その場その場でのベストを尽くすという対応もできるようになったかなと思います。北海道の山々は綺麗でした。登山隊や班長、副班長さんのご尽力にはとても感謝しています。また、5班の皆さん、4日間お世話になりました。将来何らかの形で一緒できることを楽しみにしています。(CL 宮武孝太郎)

僕は昨年、地元・香川県で行われたインターハイに出場していて、どんな感じかはなんとなくわかっていたため、今大会はチームを引っ張っていこうと思って挑みました。しかし、今振り返ると、北海道の気候の変化の激しさなどに圧倒され、自分が万全の状態でない中で、チームのメンバーに助けられながらの活動となりました。そんな状態でもミスを最小限に抑えながら競技を進めていけていた中で、最終日の山に登れなかったというのはとても悔しい経験となりました。また、今大会を通じて、登山という競技は、ライバルであるはずのチームとも班という括りの中で共に鼓舞し合いながら山行する、すごく魅力的なものだなと感じることができました。

(SL 中田基晴)

今回私はインターハイに参加して、とても充実した日々を過ごすことができました。大会2日目は十勝岳には行けませんでした。上富良野岳までの道中で綺麗な景色を見て、白金温泉にも入ることができました。大会3日目は御鉢平がはっきりと見え、香川県では得ることのできない経験をすることができました。唯一の心残りは体調不良のため、大会4日目に登ることができなかったことです。チームメイトにも悔しい思いをさせていただきました。本当に悔しいです。この経験は絶対に忘れません。

(西堀凌矢)

このインターハイにおいて、北海道の美しい山々に登ることで登山の楽しさを味わうと同時に、悪天候に見舞われたことで山の厳しさも学ぶことができました。その厳しい状況の中でも同じチームの仲間たちや他チームの人たちと声を掛け合い、支え合えたからこそ乗り越えられたと思います。最後の登山大会が棄権という形で終わり、残念ではありましたが、この先の人生で山に登ることはまだまだあると思うので、登山大会で得られた経験をこれからも活かしていきたいです！！(坂井龍)

A隊 37 徳島県 つるぎ高校



僕たちのチームは4人全員がインターハイ初出場場で新鮮な気持ちで今大会に挑みました。県大会、四国大会と参加してきましたがインターハイの規模の大きさに驚かされました。先輩の代よりの悲願であったインターハイに出場出来た喜びとともに少しの不安も抱えていましたが北海道に着き綺麗な景色や雄大な山々を見ているとそんな気持ちも少しずつ和らいでいきました。

北海道に着いてからは悪天候が続いおり下見は上ホロ避難小屋までしか行くことが出来ず他の山の下見は1度も行くことが出来ていなかったのが大会で登る山がどんな感じなのかをしっかりと把握することができておらず再び不安感に襲われました。

登山行程1日目は雨が降っており予定が変更され上ホロでのピストンとなった為上ホロまでしか行くことが出来ず、下見も含めて十勝岳コースを行けなかったのが少し残念でした。

登山行程2日目はくもりではあったものの雨が降ることはなくとても登山のしやすい気候でした。黒岳、北鎮岳と標高が高く山頂手前の急登が大変な山でしたが1歩1歩踏みしめながら着実に山頂へと近づいていき登ることが出来ました。しかし、山頂は霧が濃く壮大な景色を拝むことは出来ず、風も強かったためすぐに下山しました。最後に乗ったリフトは目下に見える壮大な景色を楽しむことが出来ました。

登山行程最終日は天候が回復し晴天の中の登山だったのでとても暑く体力や水分を多く消費してしまいました。姿見の池近くのゴールにたどり着くと心地よい風が吹いており眼前に見える旭岳の雄大さに驚くとともにこれから登るという高揚感にも包まれていました。山頂までの急登で見た目下にある姿見の池等の景色の良さに感動したのを覚えています。山頂では顧問の先生と記念写真を撮ったりと良い思い出が出来ました。

最後になりますが今大会に携わって下さった行動隊や審査、設営隊など放送部みなさま本当にありがとうございました。合唱部のみなさまの素敵なセレモニーも大変良い思い出となりました。今回の

インターハイに出場出来たことを誇りに思います。改めて入賞された各校のみなさま本当におめでとうございます。参加された各校の皆様お疲れ様でした。

A隊 38 愛媛県 松山南高校



北海道の山を初めて登ってみて思ったことは、僕たちがよく登っている四国の山とは景色や植生、登山道の様子などが全く違うということです。愛媛県には西日本最高峰の石鎚山がありますが、標高は1982mで温暖なので植物が全くない場所というのはありません。そのため、十勝岳周辺の噴煙を上げる火口や、火山性の山特有の植物のない景色、キタキツネを目の前で見たことなどはとても印象的でした。雄大すぎる北海道の山々は、僕の3年間の登山部での活動を締めくくるのにぴったりな場所でした。惜しくも、優勝は1.0点差で逃してしまい悔しい思いでいっぱいですが、一生忘れられない最高の記憶になると思います。

(CL 3年 池田大晟)

僕は2年生で今回が初めてのインターハイでした。初めてということもあり最初は緊張したけど、3年生のためにという思いで頑張りました。結果は10位で1位のチームと1点差で、悔しかったけど最善を尽くせたので良かった。来年、僕と一緒に出場したもう一人の2年生と協力して福岡インターハイで優勝できるように今から体力・知識ともにつけて頑張っていきたいです。

(M3 2年 三ツ井太樹)

待ちに待ったインターハイ、1年の頃からのつらく厳しい練習にも耐え、己の経験や技術、知識を総動員させられるというそのとき、僕は緊張と期待の気持ちでいっぱい終始ドキドキしていました。絶対優勝してやると意気込み、試合に臨んだものの、特に工夫したところはあまり出ず、逆におろそかにしていたところを突かれ、凡ミスなども重なり、結果はあまり奮いませんでした。少し後悔はあるものの、皆本当に頑張ったと思います。

(SL 3年 滝口瑛士)

私は今回のインターハイで初めて北海道の山を

登ることができました。また、北海道の自然の雄大さや美しさを間近で感じることができました。私たちのチームは本番登ることのできなかつた十勝岳に下見で行くことができました。なので大会コースのすべての山を踏破することができたので嬉しかったです。北海道の山は地球じゃないみたいな景色でとても素晴らしかったです。大人になっても北海道の山に登ってみたいと思いました。

(M4 2年 岡村歩)

A隊 39 高知県 高知追手前高校



登山行動1日目では悪天候に見舞われて楽しみだった十勝岳も登れないと分かった時にはとても悲しくなりました。雨も強く降りだし、ヌツカクシ富良野川を過ぎたあたりのゴツゴツとした岩々はとても滑りやすく、班でも後ろの方のチームだったので差が開いた時はかなり焦りました。それでも上ホロカメットク山に着いた時には達成感がありました。そして上ホロカメットク山から安政火口の噴気孔やそこから出る火山ガスを見ると、四国にはない火山に登っているのだと実感できました。下山後の白金温泉では疲れを取ることができました。

2日目では前日の悪天候から回復し、黒岳後は強い風が吹いていたためチーム行動で終わりまで行けるか不安になりましたが、ガスが晴れた時の景色は雄大で改めて北海道を感じるとともに感動しました。中岳温泉で足湯にも入ることができ気持ち良かったです。裾合平付近の湿地帯での一面に広がるチングルマの大群落は、まるで童話のお話の中を歩いているかのようでした。最終的には規定時間に間に合ったので良かったです。

3日目ではメインザックで初めからかなりの登りでペース配分も難しく、前日の行動中に捻挫してしまったメンバーもいて気を配りながらの行動だったのですが、休憩も多めにとりながら良いペースで登ることができました。規定時間にも間に合い、旭岳にも4人で登り切り写真も撮れたのでうれしかったです。

私は3年生で、最初で最後のインターハイですが、同じチームのメンバーとハプニングなどはありません。

ながらも3日間登り切ることができて、何よりもそれがうれしかったです。結果などは反省をして次の1、2年生に任せたいと思います。高校生活の中での最後の登山が北海道の山々で本当に良かったですし、ずっと記憶に残る大会だと思います。本当にありがとうございました。

A隊 40 福岡県 修猷館高校



まず初めに、今回の大会を支えてくださった多くの皆様、本当にありがとうございました。

CL 川添 天

人生で1度きりの体験を北海道ですることができ大変嬉しく思っています。私は高校に入り思い切って山岳部に入部し、登山という素晴らしく魅力的なもの、そして最高の仲間に出会うことが出来ました。この経験を大切にしていきたいです。また、登山の醍醐味は人を豊かにしてくれ、他のスポーツでは感じる事の出来ない繊細な感情を引き出してくれるところにあると思います。この唯一無二の登山の良さをこれからも楽しんでいきたいです。

M1 赤星 康太

インターハイという大舞台に立ててうれしく思っています。とても貴重な経験になりました。私の祖父母も、当時登山のインターハイに出場しており、そこで知り合ったそうです。今回の大会は、祖父の偉大さを再認識する機会となりました。他県の方はフレンドリーでたくさん交流でき、おかげで楽しい時間を過ごせました。高校時代を山岳部で過ごせて良かったです。部活は引退という形になりますが、これからも登山を続けていきたいです。

M2 田口 弘樹

登山は私にとって、自分を省みるいい機会でした。今回は特に自分の“弱さ”に気づかされました。肉体的精神的に負担を感じる中で、いつも通りでいられる強さを、これから養っていこうと思います。最後に一言。三年間、山に触れることができて、最高のメンバーに出会うことができて、本当に良かったです。

M3 山口 隼

インターハイ準優勝という素晴らしい結果にとて

も嬉しく感じます。少し前まで体力、実力とともに不十分だった私達ですが、本番で実力を十分に発揮し、後悔のない大会にすることが出来ました。また、地元福岡では味わえない、峻嶒や広大な大地に感動を覚え、登山の楽しさを再確認する機会にもなりました。

最後になりましたが、今回の大会で出会った方々と、いつかどこかの山で出会えることを楽しみにしています。ありがとうございました。

A隊 41 佐賀県 鳥栖工業高校



県総体から周りの方の応援、顧問の先生方の熱心なご指導があり、今回のインターハイに出場できたと思っています。そのためインターハイで優勝を目標に頑張ってきました。しかしペーパーテストであまり良い点が取れていなかったのも、そこで自分たちの知識不足と詰めの甘さが出てしまったと反省しました。この経験を今後の社会人生で活かしていこうと思える大会となりました。

(北島啓杜)

今回の全国大会では初めての出場でもとても緊張していました。当日のペーパーテストでは知識不足が多いと感じ、勉強の方は自分の中でこれでいいという自己満足になっているんだということがとても感じられました。これ以上チームに迷惑をかけることはできないと思い、気持ちを切り替えて2日目からの読図や設営審査に向き合うことができ、チームで完璧なものにすることができました。さらに自分たちだけでなく家族の応援やこの先生方のご指導のおかげでここまでこれたと思います。最後に鳥栖工業のみんなで山頂まで登れたのはとてもいい思い出になりました。

(檜原慎矢)

今回一年生の時から目標にしていた北海道総体に出れて良かったです。今回の大会で下見からたくさんの方々にお世話になりました。今まで登山ができたのもたくさんの方々の支えがあったからだと、今大会ですごく感じる事ができました。これからも今大会のことで学んだ支えられていることを忘れないで頑張りたいです。

(江崎裕太)

前回の四国総体に出ていたのですが、今大会で学んだことは標高の高い山に登るのはとても楽しいまたとてもきつことが分かりました。大会2日目は天気でコースが変わり、初めての体験で驚きました。読図、気象を担当したのですがとても難しかったです。みんなで行動する班行動では、みんなペースが速く驚きました。とても楽しめてよかったです。

(豊増柊也)

A隊 42 長崎県 長崎北陽台高校



私は今回の大会で周囲の環境に苦しめられました。北海道の天気は長崎と違って変わりやすく、寒くなったり暑くなったりとても適応しづかったです。でも長崎にはない 2000 メーター級の山がたくさんあって、これらの山を登りきった時の達成感はいくらまでの山では感じたことのないものでした。インターハイは誰もが経験できるものではなく、この場に立てただけでもありがたいことだと思っています。このインターハイでの経験を今後の人生に活かしていこうと思います。とても楽しかったです！！

(高橋颯良)

私は今回のインターハイ(試走も含む)を通して、自然の厳しさと壮大さをより強く感じた。なぜなら天候が悪いと体に風雨が直接当たって体力を奪われたり、登山そのものを中止しなければならなかったが、天候が良いと 2000 メーター級の山々から見る景色は感動を覚えるほど美しいものだったからだ。また私は仲間に恵まれていたと感じる。メンバーはもちろん同じ班の仲間や隊長、副隊長のおかげで楽しい山行がさらに楽しくなった。今は今回の大会で出会った人達と山で再会する日がとても楽しみだ。

(吉永龍太)

今回は、大会の前の試走の際に悪天候に見舞われることが多く、下見に行けていないコースが存在した。このような状況下で地形図を見て独自のポイントを確認したり傾斜が急だと思われる箇所のペース配分を考えることができた。高校の約三年間の部活動の中で培った地図を「読む」力を活用し、引退後も楽しく安全に山を登り続けたい。

(江濱惟吹)

私が今回インターハイで一番楽しかったことは読図です。これは読図審査のことだけでなく大会前からの地形の把握、ルートの確認も含めてのことです。見たことのない地形をある程度自分の頭の中で想像してから、実際に試走でその場所を見てみると、また違ったことが見えてくるのは本当に楽しかったです。（道越大翔）

A隊 43 熊本県 熊本北高校



まず最初に驚いたのが開会式の雰囲気です。噂でしか聞いたことのない強豪校たちが目の前にいて、これからの審査で絶対に勝ち抜いてやるんだという感じがひしひしと伝わって来ました。あのときの緊張感はずっと忘れないと思います。

その後行われた天気図審査では、台風が出題される可能性が高いと思い、台風の天気図の作成を重点的に練習したのですが、本番では出なかったのので、最初は焦りましたが、いつもの天気図を書けるようになりました。他校は私達よりも多くの色のボールペンを持ってきました。おそらく、閉塞前線を書かなければ行けないときに紫を持っておけばそれだけで書けるのですが、青と赤だけでは2色並んで書かないといけなく、時間ロスにつながると考えたからではないかと思います。

装備審査では呼笛とレスキューシートをチェックされましたが、2つともしっかり全員持っていたのでここは良かったのかなと思います。レスキューシートは今回の大会のみ必要で、そのようなものは特に注意したほうがいいと改めて感じました。

設営審査では、ペグが数本入っていないという大きなミスをしてしまいました。大会前に新しいテントに買い替え、テントが届いたらすぐに送らなければならず、新品だからと思い、何も確認せずに送ってしまいました。ペグがないと気づき、急いで予備ペグを取り出し対応しましたが、時すでに遅し、チーム全員それで調子が狂い、ペグとポールが一直線ではないなど今までで一番でくの悪いテントが完成してしまいました。

大会コースに関しては、地元の山では絶対に経

験ができないようなことを何度も味わうことができました。四方八方見渡しても山ということに感動しました。とても良いコースだったと思います！是非また登りに行きたいと思っています。

審査を通して準備の大切さ、思い込みの恐ろしさを実感しました。準備が9割という言葉があるように、準備を徹底することの大切さを後輩に伝えていきたいです。

A隊 44 大分県 竹田高校



僕はこの紙をもらい、800字も何を書こうかと迷った結果、三年間の思い出を書くことにしました。

僕たちはもともとクライミングを志望して山岳部に入ったのですが山登りの方の部員の数が増減してしまい、クライミング登山を兼部することになりました。正直、クライミングのほうが好きで登山の練習はきつく辛かったですが、北海道インターハイへ行くことをモチベーションに頑張りました。今年に入ってから学校近くの階段を使い、歩荷に励んできました。また装備を大幅に変え軽量化を図りました。これらの努力の結果、四年ぶりに県大会優勝しインターハイへの切符を手に入れることができました。そして直前の様々なトラブルがありながらも、8月8日に4人そろってインターハイ登山行動が開始できました。天候が悪く、幸先が不安でした。8月9日はチーム行動が中心で4人で声をかけあい歩きることができました。そしていよいよ迎えた旭岳コースでしたが、全員疲労がたまり班離脱してしまいましたが、登頂することができて嬉しかったです。3日間の登山行動で見た北海道の景色は、九州で絶対見ることができない景色で一生記憶に残る美しさでした。私たちは4人中3人が引退してしまいましたがいつかまた4人で山を登りたいなと思いました。今回のインターハイでは本当に多くの貴重な経験ができ、様々なことが学べました。これらはチームメイト、先生方、保護者、そして運営、支援してくださった方々全員のおかげです。本当にありがとうございました。

A 隊 45 宮崎県 宮崎大宮高校



人生で初めての北海道でとてもわくわくしていました。北海道の山々はどれも壮大で、宮崎では見られない景色がいくつもありました。また、大会後半は暑かったのですが、全体的に涼しく過ごしやすい気候だったのが強く印象に残りました。自分の担当である自然観察は自信がなくて、完全に終わったと思いましたが、努力が実を結び見事に満点を取ることができました。登山行動も楽しくでき、最高の大会でした。

3年 相良 太輝

大会開催ありがとうございました。北海道は私たちの地元である宮崎と比べて涼しく、空港に着いたときには肌寒く感じたほどでした。そんな北海道での開催となった今大会は私たちにとって初めてのインターハイであり、不安な部分が多くありましたが、丁寧な説明や細かい指示のおかげで特に問題なく、充実した大会を終えることができました。大会では大いに楽しむことができ、一生の思い出になりました。

3年 弓削 昂大

大会運営に関わった約650名のすべての方々、本当にありがとうございました。大会中は天候が不安定であり、運営はとても大変だったと思われますが、皆様のおかげでとても充実した大会となりました。大会3日目は気温が低く、北海道の冷涼な気候を体感することができました。また、全国各地の選手と話すことができたこともよい経験になりました。またの機会に会えることを楽しみにしています。

3年 三浦 康暉

今回の北海道総体 2023 に参加し、今までの18年間の人生では体験し得なかった様々な経験を得ることができました。南国宮崎の地では味わうことのない冷涼な気候や豊かな高山植物群、それらに囲まれながら3泊4日の山行を無事に終えることができたことに感謝しています。今大会の私達は9位でしたが、私たちの思いを受け継いだ後輩たちが、来年の福岡総体で悲願の優勝を成し遂げてくれることを期待しています。

3年 岩永 草一

A隊46 鹿児島県 加治木高校



今回のインターハイは県大会とは比べ物にならないほど相手となるチームのレベルが高く、選手もかなり多かったため、いい緊張感を持って山行や審査に臨むことができた。今回の僕たちのチームメンバーは全員二年生で来年福岡で開催されるインターハイに向けて対策すべき点を見つけることができ、この大会で得ることができた知識や経験を同級生や後輩たちにしっかり伝えてチームとして強くなれるようにこれから頑張っていきたい。

1 日目の十勝岳は日本百名山にも選ばれているので、ぜひとも登って見たかったが私たちの安全を考えた結果、サブザック行動、コース短縮となってしまった。大会初日から雨だと気分が下がってしまうかと思ったが、インターハイが楽しい、登り切りしたいという気持ちがより大きくなり、今までの大会、登山の中で一番楽しいと思うことができた。

2 日目の黒岳北鎮裾合の縦走は、タイムレースだったので緊張感もありながら美しく雄大な景色を見ることができた。北鎮岳の登りがとてもきつく何度も諦めかけたが無事登り切り下山までできた。地点確認地図の紙にボールペンで書くときインクがはじかれてとても書きにくかった。このコースはきつい登山であったが、綺麗で美しい景色で感動した。山頂が霧がかかっていたので晴れている時期にまた登りたいと思った。

3 日目の旭岳縦走コースは旭岳石室までタイムレースで、旭岳展望台から旭岳山頂までは班行動、下りは監督との行動であった。前回のタイムレースでは規定時間以内にゴールできるか不安で少し焦ってしまった。自分たちの体力不安、トレーニング不足を実感できたので日々の練習を頑張っていきたい。日本百名山の一つ旭岳を乗り切ることができたのはとても嬉しかった。4 班での交流を深めることができてよかった。

A 隊50 北海道 旭川北高校



旭川北高校は完登とはならず、悔しい結果となりましたが、全員でサポートし合いながら全国大会の舞台にまでこれたことを嬉しく思っています。全国大会での登山は、何度も登っている山ですが、夏山の素晴らしさを植生やガスが晴れて見られる御鉢平などから感じることができました。地点問題は、地元の自分達でも迷いが生まれることがあり、問題の質の良さを体感しました。大会において、大勢の大人による大きなサポートを直に実感する場面が多く、審査、救護、運営の方々のお陰で雨天や非常事態にも対応していただき、大変助かりました。（山口）

地元開催のインターハイで全国の山岳部の方々と自分たちの慣れ親しんだ山を登ることができてとても自分は運がよかったと思います。全国の山岳部の皆さんには、10年後でも20年後でも、また北海道の広大な自然を味わいにまた大雪山に登りに来て欲しいです。大雨や猛暑で一時はどうなることかと思いましたがチームのみんなと1歩1歩登っていき、頂上にたどり着いた時はとても清々しい思いでした。辛いこともたくさんありましたが、3年間山登りを続けてきてよかったなと思いました。炊事審査ではメニューや調理方法にそれぞれのチームごとの個性が出ていて面白かったです。それぞれの県ごとに地区大会の審査基準が異なっていたことも興味深かったです。（澁谷）

インターハイに出場することができてとてもうれしかったです。この大会ではいろいろな経験をすることができました。まず、他県の人と交流ができたことです。それぞれの学校特有のトレーニングもあり、とても参考になりました。また、全国のレベルの高さを実感できました。天気図やテスト、設営のミスの少なさに驚きました。さらに、支えてくださっている沢山の人の存在にも気づけました。僕が旭岳で足がつってしまったとき、体調を見たり足を揉んだりしてくれた救護の方や下まで下ろしてくれた自衛隊の方々などいろいろな方に助けをいただきました。改めてありがとうございました。結果としては上位に入ることはできませんでしたが、この大会を

通じて自分を成長させることができました。最後に、ここまで支えてくださった顧問の先生方、部員、家族や応援してくださった沢山の皆様、本当にありがとうございました。（松本）

待ちに待ったのかそうでないのかよくわかんないインターハイ。結果は(涙)。今年のインターハイは北海道！いや地元やん、まあまあ地元枠で出れたんやしみたいなノリでいったインターハイ。何回も登った山で死んだ顔をしながら登る予定でした。しかし全国、各都府県からバラエティー豊かな人々が集まってました。方言が聞こえたり、イントネーションが違ったり地元じゃない感じがして面白かったです。また、行動中もそうでない時もとてもフレンドリーに話してくれて非常に全国を感じました。結果どうこうはありましたが思わぬところでいろんなことを感じた全国なのでした。（中村）

23. B隊(女子)感想文

B隊 1 旭川東高校



北海道開催で大雪山の荘厳な景色の中を全国の選手と共に登れてよかったです。天候に恵まれず不測の事態も多々ありましたが、最後まで大会を続行してくれた運営の方々には感謝申し上げます。自分は山岳部最後がこのインターハイでしたが後悔を残してしまっただうしたらもっといい結果にすることができたのかと考えてしまいます。もうこのパーティー登れないと思うと遺憾ではありますが4人で今大会に出場できて幸せでした(ひより)

北海道での開催ということで、昨年よりも準備を重ねて挑んだインターハイでしたが、目標点には届かず、悔しさが多く残る結果となってしまいました。一方で、全国の多くの方々と大好きな大雪山と登ることができてとても嬉しいです。来年のインターハイは北海道からとても離れた場所での開催ですが、今年の悔しさをバネに勝ちにいきたいです。大会の関係者の方々としてパーティーのみんな、本当にありがとうございました。(にの)

素晴らしい大会ありがとうございました。私にとって今回の大会は周りのレベルの高さに圧倒されるようにいかないこともあり、後悔の残るものになってしまいました。地区大会から何度も励まし支えてくださった先輩方やメンバー店 先生方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。来年またこの舞台に戻ってこられるよう頑張ります。今よりもっともっと強くなって次こそは満点を取りたいです。

(みのり)

私にとって今大会は山岳部員としてはしてまだま

だ未熟の中での人生初のインターハイということもあり、先輩方にもたくさんの迷惑をかけてしまいました。しかし地区大会から私達を支えていただいた役員の方や大会中に温かい声援を送ってくれたたくさんの地元の方々そして誰より登山競技にひたむきに打ち込んでいた先輩方を見て、改めてこの競技の奥深さを知ることができ、山岳部の一員として大きく成長するきっかけになりました。(こざくら)

B隊 2 青森県 八戸高校



昨年はコロナウイルスの影響で出場を辞退し、やり場のない悔しい思いをしました。だからこそ、今回のインターハイには、並々ならぬ思いがあって、最後まで、絶対に全員無事に登りきりたいと思いながら大会に臨みました。事前山行で強風と大雨の中で旭岳に登ったとき、自分の準備不足と判断ミスで、下山時に低体温症になってしまいました。初めて山が怖いと思いました。下山後、旭岳ビジターセンターで、たまたま居合わせていた看護師の方たちや一般の登山客の方々が適切な処置をしてくださり、また、部員たちもたくさん助けてくれて、本当に周りの人に支えられていることを実感しました。感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の大会では3日目が特に天候に恵まれて、下山時に下を見下ろした時の開放感が最高でした。360度見渡してもひとつとして同じ景色がなく、北海道の広さと雄大さを全身で感じることができました。また、後輩たちとの最後の登山を思い切り楽しむことができて幸せでした。私はこれで引退するこ

とになりますが、後輩たちには4人の絆をさらに深めて今よりもっと大きくなった姿を見たいです。

登山競技の中で、わたしが特に好きなのは、他のチームとワンチームで一緒に登って、敵対することなくみんなで穏やかに山を楽しめることです。大人になってからも仲間とまた集まって、山を登りたいと思います。一生涯の趣味ができて、山岳部に入って良かったなと思っています。全国の高校生たちと交流できて、良い刺激になり、とてもいい経験になりました。ありがとうございました。

北海道の雄大で美しい山を全国の山仲間と一緒に登れたことがとても嬉しいです。2年生でインターハイに参加できたことで、来年見える景色が変わると思います。今大会の運営を支えてくださった方々に感謝し、来年のインターハイに向けて頑張っていきます。

最高の仲間と最高の思い出を作ることができました。大会の運営の方々や優しく声をかけてくださった大人の方たちへの感謝の気持ちを忘れずこれからも登山を楽しみたいと思います。また、これまで一緒に戦ってくださった先輩の皆さん本当にありがとうございました。

山を登ると疲れとストレスでヘルペスが出まくるくらい登山が嫌いで、事前山行で雨風ガスまみれの旭岳登って一生登りたくないと思っていたのに、大会最後の登山、事前山行の旭岳が嘘だったかのように晴れて景色がすごく良くてヘルペスも吹っ飛んでいきそうくらい楽しいって思えました。

B隊 3 岩手県 盛岡第一高校



全国の仲間と戦える舞台を与えてくださりありがと

うございます。そして、4人で北海道インターハイに出場したこと、他県の登山部と友好関係を築けたこと、3年間ありえないくらい泣いて、笑って、山に登ったこと、先生含め家族みたいな関係だったこと、盛一登山部に入部して最高の時間を過ごすことができました。全国一素敵な仲間と同じ目標に向かって全国一の練習ができて、ほんとに幸せです！ありがとうございました！（吉田穂香）

3年間の集大成として「4人で全国に行く」という私たちの夢を実現できたことを本当に嬉しく思います。4年ぶりの完全体での大会は、去年以上に刺激的で充実していて、結果以上の努力や経験ができたと自信をもって言えます。とにかく楽しくて、終わりがくなくずっと思っていました。山で得られた思い出やつながりは一生の宝物です。最後にインターハイに関わる全ての方々、仲間達、先生方ありがとうございました。（茅平夏奈）

今年のインターハイはこのメンバー4人で出場することができ、記憶に残る思い出の深い大会になりました。2年連続の出場で、去年の大会を超える経験をさせていただきました。今回が高校最後の大会でしたが、今まで経験したたくさんの体験を今後も忘れず活かしていきたいと思っています。大会に関わってくださった多くの方々、本当にありがとうございました。あんぽんたん、またこのメンバーで旭岳にのぼるぞー！（菊地真琴）

3年間で初めてインターハイに出場して、緊張していましたが、1年生の頃から一緒に登ってきた仲間のお陰でいつも通り楽しく登れました。3人には体力面で沢山サポートしてもらいました。4人で大会に出場できたこと、一緒に笑って、泣き合えたこと、本当に幸せでした！そして、大会を開催していただいた役員の皆さん、自衛隊の皆さんありがとうございました。穂香、夏奈、真琴！3年間最後に最高の思い出をありがとう！（須藤はる美）

B隊 4 宮城県 仙台三桜高校



私たちは今回、残念ながら大会3日目で棄権となってしまいました。それでも今までの強化合宿や2日間の大会で学んだことがたくさんあります。

まず、北海道の山を登って痛感したことは、宮城の山とのスケールが全く異なることです。宮城ではどんなに高い山に登っても私たちの町並みや下界が見渡せましたが、北海道ではさらに高い所にも山々が立ち並んでいて、感動しました。あいにく下見でも大会でも、上富良野岳では悪天候でしたが、ふとした時に見える景色を楽しみながら登ることができました。天気の良いときに必ずリベンジしたいです。

2つ目は、他県の人との交流を通じて、地域の特徴や山岳部の違いを知ることができました。自己紹介で他県の魅力を知ると同時に宮城の魅力も伝えることができて、良かったなと思っています。

やはり、大会に最後まで出場しなかったという思いはありますが、棄権したことでは学べなかったこともありました。それは、私たちは多くの方々に支えられてこの場にいるんだ、ということです。

3日目、4日目は特に多くの方が私たちのチームを気にかけて下さり、たくさんの支援物資もいただきました。

私たちはこれで部活動引退となりますが、最後に北海道の山に登れて、インターハイに出場することができて、心から幸せだと感じています。県総体から今までの期間は間違いなく人生で一番辛かった期間であり、自分が心身共に一番成長した期間でした。仙台三桜ワンダーフォーゲル部に入り、顧問の先生やチームメイトと過ごした日々や経験は

一生の宝物です。3年間培った経験をこれからの人生に生かしていきたいです。今回は全国高校総体登山大会に参加させていただき、貴重な経験を本当にありがとうございました。

(チームリーダー 佐藤 風紗)

B隊 5 秋田県 秋田高校



8月1日、私たちは北海道に向けて秋田を後にした。車とフェリーを乗り継ぎ、翌日から下見登山を開始した。下見期間はいい雨が続いたため、大会本番に少し不安を抱えたまま事前山行は終了した。最初に挑んだのはカミホロ・十勝岳の縦走である。下見では悪天候で十勝岳山頂まではいけなかったのが、期待が高まる。秋田県にはあまり見えないような岩肌が露骨に見える山々が美しく、登っていてテンションが上がった。先頭を変えながら歩く中でチーム間の交流も生まれ、和やかな空気感で山行を楽しむことができた。残念ながら大雨によってコースの短縮を余儀なくされたが大会の幕開けを飾る登山としていいスタートが切れた。

大会3日目は黒岳北鎮岳裾合平縦走コースを歩いた。ロープウェイとリフトに乗ってから班行動がスタートした。黒岳山頂は、前日の悪天候が嘘だったかのように晴れ、下見では見られなかった景色を見れた。北鎮岳はガスで眺望がきかなかったがメンバーの心は晴れていた。その後の中岳もガスが濃かったが山が楽しいという気持ちは変わらなかった。トリカブトが咲き、巨大な岩が乱れ、広大な山の中の私たちは軽やかにCP2を踏んだ。

山行最終日、いよいよ北海道最高峰の旭岳を目指す。鬱蒼とした森林を抜け、チーム行動で辿

り着いた姿見の池。見上げると岩場が目立つ雄々しい旭岳がそびえ立っていた。班行動では、北海道の広大な土地を一步一步踏みしめるように歩く。天候にも恵まれ、白い噴煙を上げる地獄谷や周辺の山を望むことができ、感動を覚えた。山頂に到達し雄大な自然の中を姿見駅まで下る私たちの背は大会前よりひとまわり大きくなっているだろう。3日目の山行を無事全員で完登できたのは天候と人に恵まれ、そして北海道という最高の舞台で山行できたからである。今回の大会での様々な出会いに感謝するとともにこの学びをこれからの活動につなげたい。

B 隊 6 山形県 山形西高校



私は、登山が大好きです。それをインターハイでも改めて感じる事が出来ました。登るのが辛くなったときやテントの中が暑すぎるときなど、心が折れそうになったときもありました。しかし、山頂からの景色を見ることでこれまで大変だったことの全てが吹っ飛びました。なんとも言い難いほど美しい眺めでした。また登りたいです。そして、これからも大好きな登山を続けていき、登山や自然の良さを伝えていきたいです。(渡辺仁胡)

1年生の時にリーダーと「2年後北海道で開催されるIHに出場したいね」と話し、まさか自分が出場できるとは思いませんでした。下見ではガスがかかり真っ白で見えなかった山々が、本番では晴れて一面が見えた時の感動は忘れられません。辛い時があってもメンバーの優しさのおかげで困難を乗り切ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。貴重な経験ができた5日間、本当にありがとうございます。

いました。(鈴木心碧)

今までインターハイ出場と優勝を目指して本気で頑張ってきたこの期間は私の宝物になりました。夢の舞台であるインターハイ出場のために支えてくれた家族、先生方、メンバーには大変感謝しています。全国各地の高校生が集う大規模な大会に刺激を受けながら最高に楽しめた4日間でした。知識審査では情けないミスをしてしまいました。メンバーに支えてもらい3日間楽しく山行できました。北海道の山々の景色は格別でした！また来ます！(櫻井京佳)

インターハイの山行(特に旭岳)では、これまでの部活動を思い出しながら歩きました。山について勉強するのも、歩きながらいろんな植物を見るのも楽しかったなと振り返りました。そして、大会ルートの下見で見た十勝岳の姿、大会で見た御鉢平や姿見の池はすごく美しかったです。私にとってインターハイは、高校登山は終わってしまうけれど、自分のペースでこれからも登山を続けたいと思った、大切な5日間です。(中家由貴)

B 隊 7 福島県 磐城高校



今回磐城高校山岳部女子は2年生1人1年生3人という3年生がいない珍しいチーム体制だった。1年生は山の経験値が少なく体力も少ないため、このインターハイに不安を抱いていたが、少しペースは乱れるものの班行動では他のチームに大いについて行けたと私は思う。私たちの今後に関わる糧となった山行は主にB3、B4だ。

B3の黒岳からのチーム行動初めてであったため、ワクワクしたが同時に心配もあった。先頭の1

年生が他のチームのペースに飲み込まれてしまい他の 1 年生がバテしてしまうのではないかという点だ。スタート直後、旭川東のペースに飲まれ御鉢平展望台に到着する前に見事にバテしまった。休憩の合間話し合ったことでペースは自分たちにとってちょうど良くなり、無理なく北鎮岳山頂まで登ることができた。その後平坦な道や下りが多くなったためメンバーの顔には笑顔が見られた。また中岳温泉から湧き出る湯に触れたことでテンションを上げていた。もちろん、木道歩行中周りの景色にも心躍らせていた。

B4 は CP1 まで登りが続き、暖かい気候も相まって非常に辛い山行となった。またすべりやすい木道、ガレ場も続き苦しかった。私たちのチームではメンバーそれぞれの体力のばらつきが激しいため、チーム行動はやはり難しいものとなった。どうしても制限時間内までに CP1 を通過しなかったため、遅いメンバーを鼓舞しながら山行した。だがそのメンバーのスタミナは徐々に切れ、ペースダウンした。また本人曰く、心と体が一致しないと言っていた。このような状態になるまで無理して歩かせたことは申し訳ないと思ったが、普段からの体力づくりも大事だと思った。なんとか制限時間内までには到達できたが旭岳に上ることは断念せざるを得なかった。個人的には非常に登ってみたいかったので、大人になったら再チャレンジしたいと思った。

B隊 8 茨城県 水戸第一高校



私達水戸一高山岳部は、4 人のうち 3 人がインターハイ初出場、2 人が入部したばかりの 1 年生というチームで今大会に臨みました。大会が始まる

までは私達の体力や知識が全国大会で通用するかがとても不安でしたが、北海道の雄大な自然を楽しみつつ全員が無事に大会を終えることが出来ました。

大会期間中は天候の変化が激しく、2 日目の上ホロ～十勝岳縦走コースは土砂降りに見舞われ 4 日目の旭岳コースでは反対に夏の暑い日差しに晒されながらの山行となりました。このような様々な天気の下での山行はメンバー全員にとってとても良い経験になったと思います。また班行動の間は余裕を持ったペースで歩くことができたため雪溪の残る山々の美しい景観と僅かな標高差で大きく様相の変化する高山植物を楽しんで歩くことが出来ました。気象条件の厳しさと景観の美しさという 2 つの面で自然の豊かさを体感できた 3 日間の山行となりました。

今大会の私達のチームとしての反省は予報の読み込みが不足していた、ということです。天気図や読図では失点を最小限に抑え良い点数を取ることが出来ましたが、課題テストは勉強不足による小さな失点が目立ちました。また、計画書や炊事審査においても事前に予報をよく読み込んでおけば防ぐことのできたミスがありました。この反省はしっかりと後輩へ引き継ぎ次の大会へ活かしていこうと思います。

今大会で私達は大会を支えてくださった役員の方々、全国から集まった他チームの選手の皆さんなど多くの人の山に対する真摯な姿勢を目の当たりにしました。この経験は私達一人ひとりの登山に対する考えに新しい刺激を与えてくれたと思います。今大会で学んだ知識、身につけた様々な経験を活かしこれからの登山をより充実したものにしていきたいです。

B 隊 10 群馬県 高崎女子高校



高崎女子高校はインターハイ優勝を目指して日々練習を重ねてきました。ですが昨年のインターハイでは 8 位という入賞にも一歩届かない順位に終わってしまいました。そうした悔しい結果を経て挑む事となった今回のインターハイは群馬とは気候の異なる北海道という土地で、さらに昨年まではなかったテントでの宿泊を伴うものでした。昨年までは必要ではなかった食糧計画や着替えの量飲み物行動食の量などを考えることが増え、荷物が増えてインターハイの準備はお忙しいでした。

そして迎えたインターハイはテントの宿泊に慣れていないこともあり、困難の連続でした。夜の温度がどこまで下がるのか分からず夜の服装どうしたらいいかわからないや消灯時間が早く次の日の準備が終わらないなどあげればきりがありません。多くの困難にぶつかり、そのたびにチームで考え最善を尽くしてきました。こういったことによりチームの団結力が深まった気がします。悩むことが多いインターハイでしたが、それら全てが吹き飛ばすほど壮大な景色を見ることができました。群馬県にも高い山はありますが、そのどの山とも違う北海道しか見られないであろう地形にとっても圧倒されました。雲の間から尾根が見えていたり、姿見の池に山々が写っていたり、大きな御鉢平の全貌が見えたりと群馬に居るだけでは決して見ることはできなかった景色を見ることができ、とても良い思い出となりました。

今回の大会では下見も含めると計 12 日間北海道に滞在しました。大会に出場することができたのも下に行くことができたのも山岳部の先生、学校

の先生、家族、大会運営に携わった方々など多くの人々のおかげだと思っています。その人たちへの感謝を忘れずにこれからも部活動を行ない山を楽しんでいきたいです。

B 隊 11 埼玉県 和光国際高校



こんにちは、和光国際高校です。まずやはり全国大会という舞台に立てたことを嬉しく思います。埼玉県は実技や知識の審査がなく、今回のインターハイのように登山を競技として行うのが初めてで緊張していました。準備が足りなかったということや計画通りに進まないところがたくさんあったのですが、自分たちに足りなかったところを痛感して、とても良い経験になりました。これから登山に関する知識や技術をもっともっと身につけていきたいと思います。また、競争相手が他の様々な県から来た自分たちと同じ高校生だということも新鮮でした。競争相手と言えどたくさん話しかけてくれたり、登っている最中には「お疲れ様です」や「頑張りましょう！」と声をかけあったことがとても嬉しかったし、やはり登山といいなと思いました。

北海道の山は私たちが普段登っている山とはまた違って、自然の偉大さ雄大さを何度も感じました。特に北鎮岳を登っている時に雪が残っていて溶けているのが間近で見れたこと、噴火口、きれいな高山植物を見ながら歩けたこと、頂上から見る大雪山が美しかったことなど、例を挙げると切りがありませんが、本当に北海道で見たものを感じたものがどれも印象に残っています。ぜひまた北海道の山に登りたいです。本当に、今回、インターハイに出られた事、北海道の素晴らしい山に登れたこ

とは自分たちにとってとても良い経験となりました。この経験を活かして、これからもっと色々な山に挑戦し、良い経験をたくさん積んでいきたいです。頑張ります！！ありがとうございました。

B 隊 12 千葉県 千葉東高校



千葉東高校のリーダーです。私は、IH が初めてで沢山の思い出が出来ました。特に印象に残ったことは、3 つあります。

1 つ目は、「IH までの準備期間」です。IH は、県総体とは全く違い初心者の自分は何をすればいいのか全く分からず、沢山の方々に手伝って頂きました。本当にありがとうございました。私達が、無事北海道 IH を終えられたのは沢山の支えがあったからです。

2 つ目は、「登山競技に真剣に向き合っている人が全国にいる」ということです。登山というのは本来、楽しむものであり競い合うものではないというのを、解団式で聞いてその通りだと思いました。そのため、なかなか登山競技をわかってくれる方が身近にはいませんでした。しかし、この IH で登山競技に真剣に向き合っている人と闘えたことはとても嬉しかったです。

3 つ目は、「リーダーとして IH に出場する」ということです。IH に出場するということは県の代表であり、リーダーであるということはそのチームを引っ張っていくということです。これは、当たり前のことですが私にとってはリーダーという役目を果たせるか、とても不安で様々なことで悩みました。しかし、リーダーという役目は自分を成長させるものであり、とても価値のあるものになりました。

以下の 3 つ目ことが、特に印象に残りました。最後に、登山競技は体力ー筋縄では勝てません。そんな、少し複雑な登山競技の魅力を沢山の人に伝えられたら嬉しいです。

B 隊 13 東京都 早稲田実業学校高等部



テント宿泊、調理審査など大会では初めての事だらけでした。初日の合唱から始まった開会式で校名を呼ばれた時、東京代表としての自覚や今年もインターハイが始まったという緊張が急に込み上げ、不思議な気持ちになっていました。

2 日目は上富良野岳往復をしました。雨天のため予定よりコースが短くなってしまいましたが、東京では見ることが出来ない雄大な景色を楽しめたと思います。尾根に出ると、涼しい風が通り抜け、振り返るとこれまで辿ってきた道が小さく細く眼下に続いていました。疲れた度に振り返り、自分がここまで歩いてきた事をちょっとだけ誇りに思い次の一步を踏み出すための勇気になりました。

大会 3 日目は黒岳・北鎮岳・裾合平縦走コースでした。2 日目から続いていた雨天で、予定のまま登れるのか心配でしたが雨の影響も大きく受けずに完走することができ、差し入れとしてクーリッシュをいただいてこの日の行程が終わりました。山で疲れた体にはその美味しさが普段の何倍にも感じ、暑さや疲労を忘れ十分にリフレッシュすることができました。その後の夕飯もうまく作れた為、大満足の日となりました。

最終日は旭岳に登りました。疲労も蓄積している中で登り切ることができたのは本当に良かったです。最初の登りは終わりが全く見えず、険しい道を

永遠に登る事がかなり厳しかったです。景色も大雪山系とは違い、同じ風景がずっと続いて本当にゴールできるのか不安でした。山頂に着いた時、全力を出し切れた事、自分が北海道最高峰にいる事に感動し、今までの努力が報われたような気がしました。

今大会で、一緒に行動し、話しかけて下さった一班の皆さんや大会を通常通りに戻して開催して下さった運営の方々、励ましの言葉を下さった顧問の先生方、OB に助けて頂いて三日間登り切ることができました。本当にありがとうございました。来年は大会メンバーを集める所からのスタートですが、更に力をつけて挑めればと思います。

B 隊 14 神奈川県 麻溝台高校



今年のインターハイは天候に恵まれなかったものの、十勝岳連峰や大雪山の広大で美しい景色を体感できて本当に充実した3日間でした。メンバーの2年生の2人は初めてのインターハイで不安だったと思いますが、自分の役割を果たそうと頑張ってくれました。そして、去年も一緒にインターハイに出た3年生の仲間の存在は心の支えとなりました。監督の先生は親身になってサポートや応援してくださいました。その他にも様々な場面で協力してくださった方々のおかげで無事大会を乗り切ることができました。そのことに感謝し、今回経験したこと学んだことを後輩に受け継ぎたいと思います。

(保坂)

私個人としては今年度が初めてのインターハイで、最初はインハイの空気感がつかめず緊張し切っていたのだけれど楽しい先輩の姿や山での行動

中の「お疲れ様です」の聲がそんなにそんな緊張を解いてくれた。もちろん審査は緊張感が漂っていたが、想像していたよりもずっと温かみのある現場だと感じた。しかしそれと同時にインハイの厳しさと全国の登山をする女子の凄さを身にしみる4日間となった。自分たちよりはるかに早いスピードで登っていく力を目の当たりにして、感動すら覚えた。さらに私の担当した天気図審査では、放送とペンを持ち替える音以外何もない張り詰めた空気最終止手の震えが止まらないという、軽くパニックに陥っていたと思う。まったく思うようにいかず、悔しい結果となってしまいましたこのままじゃ終われない。もう一度この舞台に来なくては。直感的にそう感じている。今回の大会は、高校生という限られた時間の中で本気で取り組みたいことを見つけられたものとなった。1年後成長した自分と新たなチームで必ずリベンジすることをここに宣言します！

(角田)

B 隊 15 山梨県 韮崎高校



今大会は私たちにとって初めてのインターハイであり楽しい気持ちもありましたが、下見に行くことができないこと、さらに天候の悪化が予想されるため不安な気持ちが大きい中で本番を迎えました。

1日目はサブザック行動でしたが、私は皆のペースについて行くのに必死でした。そんなときふと顔を上げると山梨県では見たことのない広大な景色が広がっておりとても感動しました。下山時は土砂降り足元が悪い中、無事に戻ることができテント場で着くと本当に安心しました。

2 日目は体調不良のメンバーがいたため山に登らないという判断をし、朝出発するみなを見送りました。前日の天気とは違い、太陽の日差しが強い 1 日でした。同じく体調不良者がいた他校の選手と一緒に、みんなの帰りを待ちました。その間、他校の選手と普段の部活の様子や学校のことを話し、たくさんの刺激をもらい貴重な経験となりました。

3 日目は今大会の中で私たちにとって初めてのチーム行動でした。私はリーダーとして初めて登る山を 130 分以内という制限がある中でペースを作りメンバーの体調など細かに見ながら登って行かなければなりません。どのぐらいのペースで行けば時間通りにゴールにたどり着くかわからず、私は常に焦った気持ちで余裕がなくなり仲間への気遣いができなくなっていました。仲間の支えがありなんとか無事に大会を終えることができましたが、自分の未熟さを痛感した一日でした。仲間がいなければ乗り越えることはできず、仲間に感謝の気持ちでいっぱいです。この大会を通して山の素晴らしさや仲間の大切さを改めて感じることができました。また、インターハイでしか経験することのできない他校の選手の方々との交流ができたことは、私たちにとって良い刺激となりました。今大会の経験はとても思い出深く、これからの人生の大きな糧となってくれると思います。

B 隊 16 新潟県 長岡高校



登山インターハイを振り返って、私が一番感じたことは、人との繋がりでした。交流会や登山道で他校の方々と話す中で、この北海道の地に集結した各県の代表ともいえる人々の山に対する熱意がひ

しひしと感じられると共に、私の中にある山への愛が更に育っていきました。くじけそうな場面に遭った時、すれ違う人々からの声援、他校の方々、そしてチームメイトに何度も励まされました。この場を借りて、彼らに感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

さて、ここからは尊い 4 日間を忘れぬように、その日あったことを書きたいと思います。

1 日目の開会式ではたくさんの人に驚きました。ここにいる人たちと一緒に登ると思うと嬉しい反面、不安も多々ありました。なぜなら私は体力が乏しいからです。また、合唱部の素晴らしい合唱に私は感激しました。一日中合唱を聴いていたいくらいでした。

2 日目から登山が始まりました。2 日目の十勝岳はあまり天候に恵まれず、上富良野岳までの山行でしたが、悪天候と登山委員長のお陰でサブ行動になったことが非常に嬉しかったことを覚えています。ただ、やはり十勝岳まで行くことができなかったため残念でした。次回に期待しています。

3 日目の北鎮岳は北海道標高 No2 の山! 黒岳ではリスに会うことができました。しっぽがフワフワで可愛かったです。また、中岳温泉に入ることはできなかったものの、指先でちゃんと触れた温泉は、それだけでパワーがみなぎってくるほど気持ち良かったです。次は足湯をします。

4 日目の旭岳は非常に天気が良く、北海道とは思えないほど暑かったです。旭岳山頂の途中で見たカムイミントラの絶景は一生忘れないと思います。旭岳山頂は風が強く気持ちが良かったです。

この 4 日間は、私の人生において、非常に良い思い出と経験になりました。またどこかの山で会いましょう!

B 隊 17 長野県 松本鼎が丘高校



あれは昨年の 7 月。「来年のインターハイは北海道だぞ。」顧問の先生に言われた北海道という言葉に魅かれて、私たちはその日から北海道に行くことを夢見て部活動に励みました。そして今年の夏に県大会で 1 位を取り、念願だったインターハイ出場を決めました。

そんなインターハイの開会式では初めて他県のチームの人に会い、これから始まる大会に胸を躍らせていました。知識と天気図の審査が近づくにつれて緊張が高まり、不安に襲われました。審査後にも色々な不安がつきまといましたが、次の審査に向けて気持ちを切り替えることができました。

大会 2 日目は朝からあいにくの雨でした。前日のうちからサブザックの準備をしていたので、朝の引き継ぎ式にしっかりと間に合うことができました。初めての班行動ということもあり、ペースや歩き方など心配なこともありましたが、いつも通り歩くことができて安心しました。進むにつれて雨脚が強くなりましたが、下見でも同じような天候だったため、安全に下山できました。しかしその後、雨に濡れてしまったのが精神的にきつかったです。

大会 3 日目は前日に山と下界で降った大雨の影響で正規のルートに登れるのがとても心配でした。しかしその心配とは裏腹にこの日は天気が高く、北海道の雄大な景色が私たちを迎えてくれて本当に幸せな山行でした。

大会 4 日目では、ついに北海道最高峰の旭岳に登頂することができました。この日は朝から濃い霧に覆われて熱い一日になりました。旭岳石室までのチーム行動は CP1 の制限時間との戦いでし

た。暑い日に重いメインザックで登るのは苦しかったです。なんとか登りきりました。山頂まではサブザックだったため、楽しんで登りました。旭岳の山頂で感じた達成感は、これまで疲れをふっ飛ばしてくれました。何やかんやあった大会でしたが、最後はみんなで楽しく終われて良かったです。北海道は最高です。

B 隊 18 富山県 富山高校



私たち富山県選手団は 8 月 1 日に北海道入りをしました。ところがさっそく雨・雷で飛行機が 3 時間も遅れてしまい、入りの時間も遅れて初日からの大騒動でした。タクシー運転手さんに宿を教えていただき、1 日目から北海道の方々の優しさに触れることができました。その後下見中 1 週間全て雨が続き、十勝岳と旭岳はなんとかルートを歩くことができたものの、視界も悪く、状況は最悪でした。また黒岳コースは黒岳往復のみしか歩けず、大会の気持ちを保つことや疲れが下見の段階からだいぶ溜まったまま大会に臨むことになりました。

いざ開会式の会場に着くと全国の山岳部のメンバーが大勢いて、マイナーな部活と思っていたので、人の数に驚き正直ビビってました。しかし、式の初めに地元の高校生による合唱ですごい鼓舞されたり、選手団紹介のとき、自分の高校が呼ばれてやっと気合が入りました。課題テストでは足が震えるほど緊張しましたが、自分の学習の成果を出し切ろうと最後までやり切れました。設営審査では土の柔らかさをつかむのが難しく、すこし苦戦しましたが、速さの面で行けばいつも通りにできたのではないかと思います。

大会のメインである登山では、初日からやはり大雨でメンタルがズタボロでした。初日からこんなにきついのかと全国大会の厳しさを肌で感じました。登山2日目の黒岳はコース距離が本当に長くて、読図担当としては体力プラス集中力との戦いでした。登山3日目の旭岳コースは太陽がふりそそいでいて気持ちの良い晴れでした。というものの暑くてメインザックの行動だったのできつい部分もありましたが、大雪山系の雄大な大地形を見れて圧倒されました。登山後の交流会ではファンの人の件や学校について知れて、これも全国大会のいいところだと思いました。さまざまなハプニングに見舞われながらも円滑に大会をすすめてくれた方々に感謝し、個人としては今回の反省を踏まえ、来年も県予選を突破し、さらに改善できることを直して挑みたいです。

B 隊 19 石川県 金沢二水高校



テント泊一日目雨がポツポツとふってきて、雨天時の登山経験の少ない私たちにとって十勝岳に登れるか不安だった。時間の限られている中で臨機応変に行動するのは緊張感があり、チームの協調性が求められる場でもあった。あいにくの大雨でB隊は上富良野岳までしか登頂を目指すことができなかったのが、北海道の山々を度々眺めることができて、北海道の壮大さに圧巻された。雨の寒さでまさに「地獄」の様だったのが唯一の懸念点だと思った。

2日目の黒岳・北鎮岳・裾合平縦走コースは前日の天候が悪かったことや、コースの距離がとても長かったこともあり、自分たちの体力が持つかと

ても心配だった。また、時間制限のあるチーム行動を経験したことがないCP1 からCP2までがとても長い上、ゴールがなかなか見えないのが辛かった。しかし、チーム全員で励まし合いながらひたすら歩くことで、何と女子隊の中で一番目にゴールすることができ、うれしさでいっぱいだった。

3日目の旭岳コースは天気が良く気持ちの良いスタートを切った。先日の2日間は悪天候だった為登山道の状態は良いと言えなかったが、晴れていたことで美しい景色が見れるかもしれないという期待感と指定された時間内にチェックポイントに到達したいという気持ちから、疲労の残る足を速めることができた。見事時間内に地点を通過し 大会長の熱い思いもあり旭岳登頂を達成できたので一生の思い出となった。今までの登山活動の中で一番きつくてでも一番楽しかったのがこの大会だった。

山岳部は校内では地味な立ち位置で、普段部活の話をしても共感してもらえなかったり興味を持ってもらえなかったりするが、今回の大会で同じ活動を頑張る仲間と出会うことができ、登山をもっと好きになった。これから自分はどうなっていくのかまだ不安な気持ちもあるが、今までの登山活動と一緒に活動してきた仲間や先生方を思い出してがんばっていこうと思う。

B 隊 20 福井県 武生高校



今回の大会は、チームで登山する意味と大変さを改めて感じた大会だった。1日目、冷たい雨に降られての山行ではメンバーと一緒に登っている心強さを感じられたし、2日目では、大雪山の壮大で美しい景色への感動を共有出来た。一方、3日目

では、チーフリーダーとして全員の体調を鑑み、多くの葛藤の中で行動離脱の判断をしなければならず、団体行動の難しさを痛感した。悔しさは残ったが、多くの学びを得た有意義な経験となった。

(CL 渋谷知夏帆)

私は昨年もインターハイに出場しました。昨年に引き続きまた感想文を書くことができて幸せです。今年は昨年以上に記憶に残る体験ができ、充実した大会になりました。北海道でしか感じることでない広大な大地且つ雄大な自然に囲まれながらの登山行動は未だかつて経験したことのない感動に満ち溢れていました。私の体調不良により全て登り切ることは出来ませんでしたが、少しでも幻想的な景観が見れて今までで1番楽しかったです。

(SL 岸本梨沙)

今回のインターハイが高校生としての最後の大会でしたが、実に大変なことだらけでした。天候に恵まれない日もあり、体調を崩しかねないギリギリの状態でも目的を見失わないようにすることは、極めて大変でした。その時は苦痛で仕方なかったため、逃げ出したいと思うことも多々ありましたが、今は最後まで全力で頑張り抜いた自分を、心からたたえてあげたいと思えるほどこの大会の期間で成長できたと思います。

(竹内愛華)

私は今回初めてのインターハイで北海道に来て嬉しかったです。登山行動1日目は雨の中、短くなったコースを歩き、寒くて冷たくてつらいと感じました。2日目、3日目と晴れて楽しく登山できて良かったです。広大な景色を見ることができて気持ち良かったです、その上に地域の温かいおもてなしがなにより素晴らしかったと思います。おかげで濃く、経験することのできないことを学ばせていただきました。

(松本麻奈可)

B 隊 21 静岡県 富士高校

私は昨年の香川県大会にも出場しました。昨年度とは気候や環境が全く違く、下見も悪天の影響で十分にできませんでした。そんな中で大会はとても不安でしたが、大会運営に関わってくださ



った班長や副班長や多くの人たちのおかげで雨の中でも安全に帰ってくることができました。静岡県の山と北海道の山とでは違いが多く、普段できないような良い経験をすることができてとても楽しかったです。ありがとうございました。(大友萌々佳)

この北海道インターハイを目指して1年間部活動に必死に取り組んでできました。1年間夢見た舞台に立てて最高でした。思うように天気に恵まれず精神的、肉体的にも疲れましたが大雪山の壮大な景色を前にして一瞬疲れが吹き飛びました。(笑)全国各地の山岳部の皆さんと交流ができてとても新鮮で楽しかったです。大会運営に関わってくださった皆様のおかげで3日間を安全に楽しく過ごせました。ありがとうございました。(山田 純怜)

昨年に続きまたこの舞台に立てて嬉しいです。前大会とは全く違う部分もあり、不安もありましたが静岡では感じられない広大な景色と気候を体験することができて私の山岳技術は少しレベルアップした気がします。なかなか同年代の山岳部の人たちと交流することがないですが インハイでは多くの人たちと関わってたのしいです。5日間楽しく過ごせたのは大会に関わってくださった皆さんのおかげです。ありがとうございました。(松村陽菜)

私にとっては最後のインターハイだったので出場することができて良かったです。競技登山なので辛いところもありましたが、班行動やパーティー行動等で山を楽しむ時間があって良かったです。大雪山からの景色はとても素晴らしく、登ることができてよかったと思いました。また全国各地の人たちと交流できる機会は数少ないと思うので、交流会を通じて関わる事が出来てとても楽しかったで

す。ありがとうございました。(置田百香)

B隊 22 愛知県 岡崎高校



昨年県総体で僅差で逃して以来切望してきたインターハイ出場。岡高女子登山部としてようやくこの舞台に四人で立ち、全国の強豪から刺激を受けながら最後まで登り切られたことを嬉しく思います。風雨とガスで視界の悪い日もあったが北海道の大自然に包まれて山に登れて幸せでした。特に最終日に姿を現してくれた旭岳は忘れられません。共に頂を目指した全国の登山仲間、監督、そして大会のためにご尽力いただいた全ての方に感謝します。ありがとうございました。(CL3 年中江和奏)

やっとの思いで手にしたインターハイ。不安と緊張を胸に、高校生活最後の登山を楽しもうと決めました。大会中はあまりに必死で大して記憶が残っていないのが残念ですが、あっという間でとても楽しかったです。インターハイに出て、日本各地に仲間がいるとすることが出来たことがとても嬉しかったです。この夏の思い出は一生忘れない私の宝物です。最高の経験をさせてくださった全ての方に感謝しています。(SL3 年三浦あん)

岡崎高校登山部女子にとって初出場となるインターハイ。天候に恵まれないこともあったけれど大会 4 日目に北海道最高峰旭岳に登れたことは一生の思い出です。結果は 12 位。思い返すともっとこうしておけば良かったと思わないことはないけれど、悔いなく楽しく最高のエンディングを迎えることができました。大自然に囲まれながら山を仲間と一緒に楽しめる経験は登山部にしかありません。本当に登山部で良かったです！(3 年大引理央)

今回インターハイに出場して登山の楽しさを再確認できたような気がします。班行動の際、班長さんや副班長さんだけでなく他の学校の方や地域の方からの励ましがあったからこそ最後の旭岳まで登りきることが出来たと思います。来年は後輩を連れて大会に出るので今度は私が周りを励ませるようになりたいです。登山をもっと楽しめるよう、これからも登山の知識や技術を身につけ、日々の練習に励んでいこうと思います。(2 年渡邊陽奈)

B 隊 23 三重県 神戸高校



昨年人数が足りず大会に出られずに不戦敗で終わってしまいましたが、今年はなんとか人数が集まり大会に出ることができました。念願のインターハイにも出ることができてよかったです。1 日目に棄権してしまい登山行動ができずとても悔しい思いをしました。全国各地から来る他のチームがどのような登山をするのかとても興味があり、一緒に行動するのを楽しみにしていたので残念でした。

しかし、インターハイに出場し、学んだことや感じたことがたくさんあります。山の中でしか学べないようなこともたくさんあったのだと思いますが、1 日目だけでも学べることができました。開会式では、自分と同じ高校生がこんなにもたくさん山に登っているのだと実感できました。あまり感じたことの無い思いに嬉しさとワクワクを感じました。これから始まる大会に期待で胸が膨らんだことを鮮明に覚えています。幕営地に移動し、行動を共にする班の人たちに自己紹介する時はとても緊張しましたが、他のチームや他県のことを知れたのはとても楽しかったです。1 番感じたことは、周りの人へ

の感謝です。この大会で、家族、先生、応援してくれた友達や先輩、運営の方々などたくさんの人の協力によって安心安全に登山できていることがよくわかりました。今回学んだことを活かし、これからも自分が山に登れることに感謝して楽しく登山を続けていきたいとおもっています。

(3年 羽田睦月)

B 隊 25 滋賀県 東大津高校



東大津高校の山岳部は登山を楽しんで行う部活なので、北海道インターハイという大きな舞台に立つことにチーム全体として不安がありました。短い準備期間の中で、たくさんの人の協力を得ながら北海道の地に足をつけた日を今でも鮮明に覚えています。

先生が細かい部分まで組み立ててくれた計画を基に仲間たちと励まし合いながら下見登山を行いました。あいにく天候に恵まれない日もありましたが、それでも北海道という地域の雄大さや滋賀県にはない山の陰しさ、そして楽しさを十分に堪能することができました。この入念な下見登山があつてこそ、本番のインターハイであると思います。登山だけに限らずすべての物事には準備が必要であるということを改めて実感させられる3日間でした。

しかしやはり下見登山と本番の大会ではその場の雰囲気や気の持ちようがあまりにも違います。しんどい場所に赤い帽子の審査員が立っていて緊張感で疲労がよりたまつたような気がしました。さらに3泊4日テント泊で思ったより疲れがとれないまま、次の登山に行くことが多く、より疲れたように

感じました。しかしチームや班のメンバーと共に北海道の山を楽しく上ることができました。

また大会中は天気が良く、特に黒岳縦走の時には絶景を見ることができ、登山を頑張つてよかったなと思いました。大会2日目の十勝があいにく雨の影響でピストンになってしまったけれど、その後の2日間は雨も忘れるくらいに充実した登山ができたと思います。このチームメンバーでのこの4日間を過ごせて良かったと思います。今年のインターハイをこの4人が出場することができてよかったです。私たちのチームは1人しか3年生がいなかったですが最高のチームだと思います。後輩である3人は3年の先輩のように振る舞えるようになることを目標に頑張っていきたいです。そして次の大会も全力で頑張ることができたらいいなと思います。

B 隊 26 京都府 嵯峨野高校



あつぱあつぱで、てんやわんやで、ドタバタな全国大会でした。様々な事件が起こりつつも、無事閉会式に出席出来てほっとしています。ああしてれば、こうしてればという後悔は尽きませんが、諸々の反省は後輩に託そうと思います。北海道の雄大な景色は言い尽くせないほどすばらしく、「ほっかいどーは、でっかいどー」を感じました。愉快でとても賑やかな嵯峨野高校チームでしたが、沢山の方々にお世話になり、とても楽しく過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。(藤井)

まさか自分が全国大会に出られる日がくるなんて思ってもいなかったけれど、一生モノの経験と思い出になりました。悪天候による突然の変更と臨機応変な対応に追われた怒涛の5日間でしたが、

大雪山からみた景色は忘れられません。チームのメンバーや監督、班の人達、仲良くしてくれた子をはじめ、感謝を伝えたい人が沢山います。本当にありがとうございました。この部活動を選んだ3年前の自分に、最高の判断だったよと伝えたいです。

(松本)

このチームで全国大会という貴重な舞台に立ち、無事最後まで登りきれたことをとても嬉しく思います。体調不良や悪天候などの不安を抱えて迎えた大会ではありましたが、チームメンバーやフレンドリーな班の方々のおかげで楽しく大会を終えることができました。いつかきっと、今度は快晴の北海道の山々を登りに戻りたいと思います。本当にありがとうございました。

(前川)

この大会で特に印象に残ったことは、北海道の山々の独特な空気感です。京都の山は低山が多く、火山也没有。だから、噴煙の上がる噴火口や、大雪山の雄大な景色を見ながら登山をできたことは一生の思い出になりました。この大会に選手として参加できたことを誇りに思います。最後になりますが、大会を運営してくださった皆様、顧問の先生、同じチームのみんな、送り出してくれた家族や同級生達、本当にありがとうございました。

(藤原)

B隊 27 大阪府 常翔啓光学園高校



案外楽しいやん！！インターハイ経験者や先生からは「地獄の4日間になる」と言われていたけど、私はそう感じなかった。強いてしんどかったことあげるとするなら、テントの中が蒸し暑すぎて眠れなかったことぐらい。ひたすら登山道を歩くのも、急な

登りも、読図も、行き帰りのバスさえもすごく楽しかった。1番焦ったのは十勝岳コースで天気が悪く、記録書が水浸しになってしまい、提出までの最後の5分、ページをめくるのに悪戦苦闘したことだ。そんな出来事も、ラストの旭岳が吹き飛ばす。横に地獄谷を見ながらの上り下りでは、これが北海道か！と思わせる壮大な光景だった。下見では天候が悪く、景色をあまり見るができなかった森先生に見せてあげたいという気持ちと、こんな経験私がしているのか！という思いでいっぱいだった。それにしても幕営地で4人で作ったシチューは、大阪一美味しかった。知らんけど(笑)

(CL 高3 速水結花)

4月、メンバーを決めるときに人数が足りなくて困っていた時、1年生2人が「北海道目指してがんばる」ってメンバーに入ってくれて、私自身も出場するしかないと思いました。大阪予選で1位になり、インターハイへの出場が決まり、毎日少しずつ準備を重ねました。下見にも行き、いよいよインターハイ。本番では、天候にも左右されることが多く、臨機応変に対応しなければならぬのが、大変でした。けれども、4人で無事かえってこれて良かったです。来年に向けて、1年生の2人は頑張ってください。

(SL 3年 山添桃瑚)

「きれ～！！」思わず出た言葉でした。写真では到底収まりきらない壮大な景色、とにかく広い、どこを見渡しても山、畑、そして空。北アルプスや立山のそびえ立つ山々とは違う、広大で優雅な風景に心が癒やされました。初めて体験した、インターハイ登山競技の厳しさ。0.1点差で競う世界。時間に追われる4日間。それでも最後はゴールすることができました。しかし、現実はそう甘くなく、目標としていた順位に届かず、悔しさが残る結果に。インターハイの厳しさを改めて実感しました。その中でも得られるものが多く、日頃の生活のちょっとした「ミス」が今回の結果につながったことに気づくことができました。そして、みんなで作ったご飯！登山の疲れが吹き飛ばすほどでした。来年は、3年生2人がいなくなるけど、新たな仲間とインターハイと

いう景色をまた見たいと強く感じました。

(高 1 北村優莉)

まずはインターハイにこの 4 人で出ることができて、みんなで最後まで歩けたことがすごいことなんだなあと改めて思いました。私はこのインターハイに出て、自分にはまだまだできないことがたくさんあることに気がきました。だからこそ来年、まずは大阪予選で勝ち抜き、全国大会に出ることができるよう、知識はもちろんのこと、先輩や同期の部員に教えてもらっていたことを確実にできるように頑張ります。先輩そして同期の部員には感謝しかないです。ありがとうございました。

(高 1 山添莉瑚)

B 隊 28 兵庫県 長田高校



北海道で見た、どこまでも続くお花畑や大地、雲海の中に聳え立つ山々。全国の仲間と歩いた道。たくさんの人からいただいた、温かい声かけ。インターハイを通しての、楽しく素敵な出会い。チームのメンバーとの絆。山を通して得たこれら全てが、私が人生で大切にしたいものになりました。幸せな気持ちと、お世話になったたくさんの方への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました！

(小田楓佳)

目標の優勝には届きませんでしたが、4 人でメダルを手にしたことはやっぱり嬉しいです。やりたいことに熱中できて、本当に幸せでした。最後まで全力で競技に取り組むことができたのは、応援して支えて下さった全ての方々のおかげです。自分を信じて、仲間を信じて、感謝を忘れず。ここまで来れたことを誇りに思います。最高の仲間と、最高の

舞台で部活人生最後の山に登れたのは本当に大切な思い出です。ありがとうございました。

(山本美優紀)

昨年のインターハイで悔しい結果に終わり、リベンジを果たしたいと思い、今年も出ることになりました。最高のインハイメンバーと応援して下さった周りのあったかい人たちのおかげで成長できたし、後悔なく終わることができました。本当にありがとうございました。この思い出は私にとって大切な宝物です。またいつか北海道に来て、インハイの縦走コースを登りながら、懐かしい思い出を仲間と語り合う日を楽しみにしています。

(木村優希)

2 度のインターハイ挑戦の裏で、いつも支え、応援し、一緒に戦ってくれた全ての方々、大会開催に尽力された方々、本当にありがとうございました。17 位に涙を流した日から再出発して、やっと掴み取ったメダルは、自分の努力というよりも、沢山の人の思いや応援や支えの結晶です。競技登山にもう悔いはありません。部活の締めくくり、北海道の雄大な自然を噛み締めて歩くことができ、本当に幸せでした。優勝は後輩に託し、いつかまた違う形でインターハイに関わりたいです。そしてこれからは純粋な登山をもっと楽しもうと思います。

(岩見愛子)

B 隊 29 奈良県 高田高校



まず、大会運営に関わって下さった皆さんに感謝いたします。この登山大会の出場権を得るための奈良県予選は、2 泊 3 日の予定でしたが、天候に恵まれず、1 泊 2 日になりました。今大会も雨天が多く、初めての経験ばかりでした。私は 2 回目の

出場でしたが、昨年は従来通り開催されなかったので、テント泊や炊事など、変わった項目の試行錯誤が難しかったです。旭岳の日は、行動離脱になってしまいましたが、いずれ、皆さんが味わったピークに達する喜びを味わいたいです。

(榊田梨央)

私にとって、自然の厳しさに圧倒された大会となりました。成績は納得できるものではありませんでしたが、仲間と過ごした時間は私にとって北海道で見た景色と同じくらい素晴らしいものでした。正直なところ良い事より辛い事の方が多かったですが、私の人生の中で最高の経験でした。もうこのメンバーで大会には臨めませんがこの貴重な経験と悔しさを生かし次に繋いでいこうと思います。支えてくださった方々本当にありがとうございました。

(中岸美嘉)

初めに、大会に関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。高校に入学してから始めた登山ですが、今回のインターハイ予選やインターハイに向けた練習、そして雨の中行われたインターハイ本番を通してさまざまな体験ができました。チームのメンバーや先生方の支えがあったからこそ北海道の山々を登ることができました。本当にありがとうございました。(高仙坊実優)

山登りに対してほとんど経験のなかった私ですが、この数ヶ月で少しずつ登山の楽しさや難しさが分かるようになりました。さらにインターハイに出場できたこと、北海道の山々の魅力を体感できたことはメンバーの方々のさまざまなサポートや先生方の温かく、力強いご指導があつてのことだと心から感謝しています。共に山頂を目指したことは掛け替えのない経験となりました。本当にありがとうございました。(向井倅都)

B隊 30 和歌山県 田辺高校

県総体で優勝したこの4人で山が登れるという喜びを胸にしてから1ヶ月、みんなで力を合わせて練習や準備に励んできました。準備不足が審査に出てしまった場面やCLとしての反省点も含め悔



しさが残る部分もありますが、今は無事に終える事ができホッとしています。普段と全く違う山域での登山はとても楽しく、山の面白さを再認識できた大会でした。5日間大会に参加させて頂きありがとうございました。(久保地凜)

高校生活最後の大会は、天気図も読図も幕営も、もっとしっかり準備をしておけばもうちょっとうまくできたはずなのにと後悔することばかりで、自分の中で完全にやり切ったといえるものではないことがとても悔しいです。しかし2000m級の山々をはじめとする地元とは全く異なる雄大な北海道の自然や全国各地の登山をする高校生と話すことなど、経験することすべてが本当に楽しくて、あっという間の5日間でした。ありがとうございました。

(中嶋しおり)

昨年もインターハイに参加させていただき、今回の大会は前回ほど緊張せずに大会に臨むことができました。しかし、多くの場面で確認の甘さや準備不足を実感する大会となりました。3年間で初めて標高2000m以上の山に登ることができ、目の前に広がる雄大な景色を見て3年間の集大成となる大会で北海道の山々に登ることができたことを光榮に思います。5日間ありがとうございました。

(橋本日菜子)

初めて2000m級の山に登って、初めて炊事審査を経験して、本当に初めてばかりのインターハイでした。入部してからここまで頑張ってきたことや、全国の舞台に立って最後まで登りきれたことが本当に嬉しいです。たくさんの方の協力があつてこそ安全な登山が成り立っていることを再確認することができました。過酷ではありましたが、登

山する度にこの5日間を思い出しそうぐらい楽しかったです。ありがとうございました。（久保葵）

B隊 31 鳥取県 鳥取西高校



私にとって初めてのインターハイだった今大会は緊張したがとても楽しく色々なことを学んだ大会でした。

1 日目、開会式では、全国の都道府県のチームが集まりいつもと違い、同じ競技をする高校生が大勢いる光景に、改めてインターハイに来たのだと実感させられました。

2 日目の上ホロ・十勝岳縦走コースでは、雨が降りコースが短くなってしまい残念でしたが、雨が降った時の対処法などがわかったので良かったです。

3 日目の黒岳北嶺岳裾合平縦走コースでは、予定通り行くことが出来て北海道の広大な山の景色を楽しむことができました。実物を見ると写真で見るとは違う美しさや雰囲気味わえました。

4 日目の旭岳コースでは、晴れて暑くなりきつくなることもあったけど頑張りました。あとは旭岳を登るだけというところで、1 人が動けなくなってしまい途中離脱してしまいました。もう少しで登りきることができたのに最後まで登りきることができなかったのが悔しかったです。機会があれば、また北海道に行って旭岳に登りたいと思いました。

5 日目の閉会式では、他のチームと計画書を交換したりしました。他のチームの作り方の工夫が見れて良い勉強になりました。

慣れない気温で困惑したり、雨が降り天候が悪かったり逆に天気が良すぎてきつくなったり、大変

なこともたくさんありました。ですが、他の都道府県の山岳部との交流会などで他のチームがどんな練習をしているのかなど興味深いことが聞けたり、北海道の広大な地形や豊かな自然を見れたりして、とても内容の濃い 5 日間を過ごすことが出来ました。思い出に残る最高の 5 日間でした。

B隊 32 島根県 松江北高校



CL 山本珠緒

いろいろ不安を抱えながら出場したインターハイでしたが、北海道の壮大な山々を仲間とともに楽しむことができ本当によい経験になりました。今回のインターハイを経験し今まで以上に山を好きになった気がします。また、今まで関わる機会のなかった全国の仲間とつながりを持てるよい出会いの場にもなりました。反省点もありますが、それ以上に得たものが多く高校生活を代表する思い出になりました。

SL 木建七海

今回の大会は雨が降ったり、急に晴れて暑くなったり、天候が不安定でしたが仲間を共に乗り越えることができ良かったです。また、1 日目は荒天のためコース変更がありましたが、2 日目、3 日目は予定通りに行動でき良かったです。登るときはきつかったけれど、頑張ったおかげで頂上から北海道の広大な大地を見ることができ、自分の世界観が広がった気がします。

M1 奥野真汎

今回の大会で印象に残ったのは山行2日目の濃い霧が挙げられます。特に霧で髪の毛が濡れてしまったことが思い出深いです。私の暮らしている

島根県松江市ではこのように霧が出ることはめったにないので、初めての興味深い経験でした。山行1日目は豪雨、3日目には雷雨が発生したものの無事に大会を終えることができました。この経験から登山部という部活動の大切さを学びました。自分から進んで今回のような山を登ることがなかったので、インターハイに出場できこの部活動があったことに感謝します。そして今年、北海道でインターハイを開催いただきありがとうございました。

M2 江木千尋

今回インターハイに出場したことで身体的にも精神的にも成長することができました。今まで登ったことがない2000m級の山々を登りきることができた大きな自信になりました。きつときもあつたけれど、全国の仲間や北海道の雄大な自然に励まされて、北海道の山々を楽しむことができました。

B 隊 33 岡山県 就実高校



今回の北海道インターハイは私にとって初めての2000m級の山、初めての班行動と私にとって初めてばかりのことでした。特に北海道の山々は約1300mで森林限界が来るので、岡山では見られないような噴火口や湿原などさまざまな地形を見ることができました。また班行動では全国から来た選手たちと関わり、親睦を深められました。今回のインターハイでは大雨などで登れなかった山もあるので次行く際は登ってみたいなと思いました。

(横山)

登山部に入り初めてのインターハイは、地元にはない標高の山、景色、班行動、4日間という長期間のテント生活に、3時と言う早朝の起床等経験

のないことばかりでした。大雨や日差し、強風など猛威を振るう北海道の気候に負けず、皆で乗り切ることができました。他校のチームと何気ない挨拶や世間話を交わし、親睦を深めることができました。この貴重な経験を自県に持ち帰り、これからの大会そして全国大会を目指す後輩のためにも次に活かせるよう活用したいです。

(仁戸田)

今回の大会は3泊4日のテント生活で今まで経験した中でも一番長くて大変でした。経験したことのないような高い標高の山で、更に雨が降ったり風が強かったりとあまりよいとはいえない環境の中で無事に登りきることができて嬉しく思います。普段は出来ない他校との交流も良い経験になり刺激になりました。悔いが残る部分もありますが悔しさを常に次につなげたいと思います。

(島田)

今回のインターハイは私にとって初めての挑戦でした。天候に恵まれない時もありましたが、多くの方々のサポートのおかげで北海道という壮大な自然の中をチームや班の仲間と最後まで登りきることができてよかったです。普段と違う環境で3日間過ごしたことでチームの仲間との絆がより一層深まったと感じました。これからも仲間を大切に登山を楽しみたいです。

(西江)

B 隊 34 広島県 ノートルダム清心高校



今大会は悪天候によるコース短縮やメインザック行動からサブザック行動への変更など予想外のことがたくさんおきました。最初は雨の日の山行に慣れていなかったため、準備に時間がかかったりペースが掴めなかったりしましたがだんだん慣れて少し余裕ができたと思います。また、山の中で他

校のチームとねざらい合う事で疲れている時でも励みになりますし、同じ班の他のチームの人とも日ごとに仲良くなったと思います。北海道の山はいつも登っている広島山より標高が高く、植生も違うので、登っている間も景色のきれいに度々驚かされました。インターハイという大きな大会で登れたことがとても貴重な体験だったし、一生の思い出になったと思います。中1の時から一緒に山に登ってきた仲間たちと3日間を全ての山を完走できて、山岳部に入ってよかったと改めて感じました。

最後に支えてくれた家族、根気強く指導してくださった顧問の先生、大会関係者の皆様、開催地の方々に感謝申し上げます。

B 隊 35 山口県 防府高校



下見の時に男子が新型コロナウイルスに感染しました。女子にも感染の危機が迫る中、何とか今大会に出場できると決まったとき、一安心したのを覚えています。天候や体調不良などの影響で思うように下見を行うことが出来ませんでした。今の自分たちの力を最大限に発揮できるよう、頑張りました。

1日目の開会式ではたくさんの方々に支えられて、成り立っているということを実感しました。また、県代表として名前を呼ばれ、気が引き締まりました。ペーパーテストでは上手いといった者も、そうではなかった者もいましたが、気持ちを切り替えて大会に挑むことが出来ました。

登山行動1日目では、上ホロ、十勝岳縦走コースを登る予定でした。残念ながら大会本番で十勝岳を登ることは出来ませんでした。読図で、点を

落とすことがなかったので良かったです。行動記録では通過時間を書き忘れて点を落としてしまったことが悔しかったです。

登山行動2日目の黒岳、北鎮岳、裾合平縦走コースでは1日目とは打って変わってとても良い天気だったため、北海道の雄大さを五臓六腑で感じることが出来ました。チーム行動で制限時間がある中、焦らず自分たちのペースで歩くことができたので良かったです。

登山行動3日目の旭岳コースでは、下見の時に登ることが出来なかった旭岳に登ることが出来て感動しました。帰りのバスでは他の県の選手と話すことが出来て嬉しかったです。ホテルに帰ってからは美味しいご飯を食べて、三日間の疲れを癒すことが出来ました。

閉会式では、何より結果発表に緊張しました。結果は14位でした。やはり、全国の壁は厚かったです。しかし、決して悔しいという思いだけで終わる大会ではありませんでした。たくさんの人の支えがあるからこそ成り立つ大会なのだと、とても大切なことに気づけた貴重な大会となりました。

この経験は、これからの自分にとって大切な宝物になると思います。今回学んだことをこれからの受験や社会生活に活かしていきたいです。

B 隊 36 香川県 丸亀高校



私たちは昨年のインターハイで補助員として関わらせていただき、全国から集まった登山部の方々の熱い戦いを目の当たりにする中で、来年は北海道インターハイに出場したいと思うようになり、練習を重ねてきました。そして今回、最高のパーテ

イーで、最高の班で、最高の班長さん・副班長さんと共にインターハイという舞台で山を楽しめて、本当によかったです。

登山行動1日目は、北海道の厳しさを教えられました。下見の時も雨と強風で断念した十勝岳は、大会当日も振り向いてくれず、雨のため、上富良野岳のみとなりました。湿度も高く、カップを着ているため暑く、山を楽しむというよりも力を振り絞って1歩ずつ進んでいくという、体力的にもつらく、とても大変な日でした。

登山行動2日目は、北鎮岳までの急登に苦しめられ、ガスや強風で進行が困難になることもありましたが、黒岳へ行く途中でシマリスに出会えたり、御鉢平の広大で清々しい、素晴らしい景色に感動したりと、山の厳しさと楽しさの両面を実感することができました。

登山行動3日目はとても暑く、地元・香川県での登山を思い出すほどでした。旭岳石室前の最後の階段を登り切り、目の前に見たのは圧巻の旭岳。そんな旭岳を登りながら見る景色の広大さに、人間の小ささを実感しました。足元から視線を外し、周りを見渡すたび、遥か先まで続く青々とした光景に息を呑みました。最後にあの景色が見られ、頑張ってきたよかったですと、心の底から思えた瞬間でした。楽しいときも、大変なときも、仲間がいるから頑張ることができました。一步一步の積み重ねで北海道の最高峰に立つこともできました。

インターハイを通して、多くの事を学び、ひと回り大きくなった気がします。この経験を今後に生かします。今大会で出会えたたくさんの方々に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

(松尾遥希・劉珮辰・綾彩凡子・春田宏美)

B隊 37 徳島県 池田高校

私は8月7日から開催された北海道インターハイに参加しました。北海道の山は地元の山よりも標高が高く、私は初めて2000m以上の山に登りました。下見の時は雨が降っており、稜線上は立っていられないほどの強い風が吹いていました。大



会中も夜に雨が降ったり、2日目の山行中に雨が降ったりしました。

2日目の上ホロ・十勝岳コースは雨によりコースが短縮され、ほとんど登ることができませんでした。3日目の黒岳・北鎮岳コースは全てのコースを歩くことができ、御鉢平の美しい景色も見ることができました。北海道の山はとても大きく、今まで登った山とは景色が大きく違っていました。特に私は8月に雪渓が見られることにとても驚き、北海道と地元の気候の違いを改めて感じる事が出来ました。3日目のコースは前半の標高が高いところは涼しく過ごしやすい気温でしたが、天気が良かったため標高が下がるごとに気温が上がり、後半はかなり暑く感じました。4日目の旭岳コースでは3日目よりさらに天気が良く気温も高かったため、姿見の池までのチーム行動はこれまでで1番大変な行動となりました。下見では旭岳に登れず姿見の池付近までしか行けなかったため、大会で旭岳の山頂に登ることが出来るのかとても心配していましたが、良い天候のおかげで山頂まで登ることが出来ました。ここからのコースは、予定ではメインザック行動でしたがサブザック行動に変更されました。山頂までは火山であることが感じられるようなコースでした。山頂は霧がかかっていたため景色を楽しむことは出来ませんでしたが、北海道の最高峰に登ったという達成感を味わうことができました。登りでは見ることでできなかった景色も下山の時には見えるようになり、地獄谷も見ることができました。

今年は数年ぶりにテント泊のあるインターハイが開催され、しんどいと感じる場面も多くありまし

たが、北海道という場所で新しいものに出会いながら良い思い出を作ることが出来ました。ここで経験したことをこれからに活かしていきたいと思います。

B 隊 38 愛媛県 松山南高校



私がこのインターハイの中で一番泣いたのは、開会式の時です。

私は兼部生だったこともあり、部活動になかなか参加できなかった時期があり、登山部の仲間と顧問の先生方にたくさん迷惑をかけてきました。さらに、私はこれまで大会の知識審査で一度も満点をとれたことがなく、今回も、北海道滞在中にキャプテンや後輩に協力してもらって知識を詰め込んだけれど、開会式の時点では本当に知識が身についているのか不安で仕方ありませんでした。そんな中で迎えた開会式の中で、合唱部の皆さんが「失敗も思い出」「土砂降りも楽しもう(私たちのチームは、この2年間なぜか練習登山中に大雨に見舞われることが多かったのです)」と歌っているのを聞いて、松山南高校登山部員として過ごした日々と、とうとうこれで最後か、という気持ちが合わさって、号泣してしまいました。

また、3日間連続でのテント泊は大会としてはもちろん、人生の中でも初めてだったので、とても大変でした。ですが、実際に山でテント泊をすると、飲料水もトイレも必ずあるとは限らないし、安全確保や下山などの判断も自分でしないといけません。環境が安全で快適になるように整えて、私たちがインターハイに専念できるように、本当にたくさんの方が助けてくださったのだなと実感しま

した。下山したとき「お疲れ様です！」と声をかけてくださったたり、お菓子を下さったり、グータッチをしてくださったときも、思わず泣いてしまいそうになりました。

結果は14位でしたが、私は大会中「行動中に前の子と間が空いたらどうしよう、こんなに大声で喋っていたらマナーが悪いとみなされてしまうだろうか」という考えでいたのに対して、大会中ずっとハイテンションで笑っていたチームが表彰台に上がっているのを見て、「やっぱり審査を潜り抜けることも大事だけど、大会自体を純粋に楽しんだ子達が勝つのだな。負けたな。」と、悔しいけれど納得してしまいました。でもやっぱり未練があるのか、インターハイから帰ってから、夜はほぼ毎日登山大会の夢を見ている。

B 隊 39 高知県 高知追手門高校



登山行動1日目の上ホロ・十勝岳縦走コースでは、あいにくの悪天候のため上富良野岳までのピストンになり十勝岳を登ることができず残念でした。ですが、地元の登山では見られない植物や壮大な地形・天候を体験し、三百階段という非常に厳しい登りに挑む貴重な体験ができました。体力が不十分であること、歩行技術が低いことを痛感しました。技術・体力不足という課題に向き合い成長するための良い機会になりました。

2日目の黒岳北鎮岳裾合平縦走コースでは、標高二千メートルを超える北海道の山々の雄大さを実感しました。とにかく遠くまで見渡せる景色、過酷な環境下でたくましく広がる高山植物、ゴールまでの長い道のり、どれも私たちの経験したことなの

いものばかりで、終始驚きっぱなしでした。中でも御鉢平の広大な展望には度肝を抜かされました。今大会最初のチーム行動もあり中々に陰しい道のりでしたが、無事下山できてチームの絆の深まりを感じました。

大会最終日の旭岳コースは、天女ヶ原の湿原を渡り、噴出孔が間近に見られる火山礫の尾根を登る、景観の変化が豊かなコースでした。中でもこのコースで一番感動したのは、パーティー行動での下山の時にさあっとガスが消えて見えた大雪山系の美しさです。ハイマツなどの木々が織りなす緑の平原、遠くには湿原、近くには噴出孔がもくもく煙を立てていて、神様が作ったジオラマみたいでした。これは確かに「神々の遊ぶ庭」という表現がぴったりだと強く思いました。

私たちにとって北海道インターハイで体験したことは初めてのことばかりでした。好天も悪天もあり北海道の山々の美しさと過酷さ、その両方を体験できたこの大会、その辛さも楽しさも共有してチーム全員で乗り越えたことは忘れがたい大切な思い出になりました。楽しく安全に登山をおこなえるよう大会を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。

B 隊 40 福岡県 修猷館高校



「北海道の山に登ってみたい。」九州から遠く離れた山への憧れと好奇心がなかなか思うようにいかない大会が続く中で立ち上がる為の軸であったように思う。私にとって登山の大会とは決まって楽しいものではなかった。普段身を置く世間やその評価から離れ、大自然の中でその恵みを享受し、

己と向き合う中で何かを得る。そんな普段の登山に対し様々な事に良し悪しがつき、ほんの一瞬の些細なことで点数が左右し、勝敗が生まれる大会に対し葛藤があった。今までは北海道への切符をつかむためにとらねばならないことであると言い聞かせたが、今大会を通じて感じたことは登山における大会は万全な準備が求められているということだった。それは登山そのものがそれを必要としているからだと感じた。大自然は美しく同時に気まぐれで恐ろしい。だからこそきちんとした計画漏れのない装備、体力などがなければ自らの命さえも危険に晒してしまう。登山を本当に楽しむための日頃からの準備を問われているだろうと 3 日間の山行を通して思えた。私たちは今回万全な準備をして臨めただろうか。不十分だった点はいくつも挙げられるが、毎日のように集まり、細かい点までこだわり抜こうと励んだ仲間と過ごした時間はかけがえのないものとなった。

また、憧れの北海道の山々は悠々とどこまでも広がり、美しく雄大であった。仲間と共に見た美しい北海道の景色の数々を忘れたくないだろう。何よりここに来ることができなければで会う事が無かったかもしれない全国の猛者たち、班長、副班長をはじめとする役員の方々、自衛隊の方々、地元の方々、それぞれ異なる場所で日々を生きる私たちがこの大会を通して出会えたこの奇跡に感謝したい。来年地元で行われる福岡インターハイが関わるすべての人々にとって大切な記憶に残る、山や人との出会いにあふれる素敵な大会となることを心から願っている。

B 隊 41 佐賀県 唐津東高校



3 年生の時北海道でインターハイが行われること、そして登山という経験したことなかったものへの憧れや期待から私は登山部に入部しました。しかし実際には大変なことも多く入部したときの気持ちを失うこともありましたが、今となっては 2 年と少し諦めずに続けてきて本当によかったと 4 日目の旭岳に登頂し、その途中で大雪山系の雄大さを見て感じました。人生の中で貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。

(CL 江川叶苗)

私も北海道でインターハイが行われることを知り、登山というものが何かまったくわからず入部しました。最初に山に登った時は自分の体力の無さを痛感させられました。そこから重さを持ったり 走ったりしてみんな必死について行きました。北海道の山を見て今まで頑張ってきてここまで来て本当によかったし、この大会での経験が一生の財産になりました。登山するにあたって関わってくださったすべての皆様に感謝します。

(SL 麻生紗希)

佐賀県には 1000m を超える山が三つしかなく 2000m 級の山に登るのが今回が初めてでした。北海道は九州と気候も植物も全く違い、標高も高いので 3 年生最後のインターハイで、自然豊かな雄大な景色を見られたことにとっても感動し、大会中何度もこんなにすごい山に登れ良かったと思いました。大学生、大人になったら今度は今回登れなかったコースや北海道でまだ登っていない山にも行きたいです。北海道最高でした。

(岡部春奈)

私はこのような大きな大会に出場するのは初めてで、また北海道の山に登るとするのも初めての

経験だったのでとても不安で緊張していましたが、先輩や先生方、周りの人たちのおかげで無事にやり遂げることができ本当に良かったです。この大会で学んださまざまなことを今後に生かしていけるように、精一杯頑張りたいと思います。このような貴重な経験をさせてくださりありがとうございました。また北海道に行きたいです。

(松本愛羽)

B 隊 42 長崎県 長崎北陽台高校



今回のインターハイは自分にとってすごく貴重な財産となりました。北海道の山に登ることも天候に恵まれない中でも最後まで山行できたことも、これまで関わってくださった方々そして今回の大会を運営してくださった方々のおかげで経験できたことと思います。本当にありがとうございました。今後は登山競技に参加することはできませんが今回の経験を生かせるような人生にして行きたいと思います。

(CL 木村真由美)

大会には十分に満足のいく試走が出来ていないまま臨む形になりました。本番でも毎日天気心配ばかりしながらの登山で不安な時もありましたが、大会中はメンバーのみんなと話し合いながら臨むことでそのような気持ちが軽減したのだと思います。また登山部の先輩方や先生方のおかげで、大会に参加し競技を無事に終えられたことを本当にありがたいし、嬉しく思います。

(SL 入江優衣)

二年生の私が足でまといになって大幅な減点をしてしまうのが心配でしたが、他のメンバー 3 人の支えのおかげで最後まで大幅な減点をせずにやり通すことができました。この結果はきっと一人では

なしえなかったと思っています。改めて、今回の大会で仲間の存在の必要性を大きく感じました。そしてこの大会を計画実施していただいた方々に対して素晴らしい体験をさせていただいたことに心から感謝しています。（朝倉まい子）

私は2年生ですが3年生の先輩方と一緒に県高総体からインターハイまで出場することができて、とても良い経験ができました。また、山行中、長崎にはない高山植物や動物に逢うことが出来たし、変わりやすい天気や強い風にあおられる中、自分たちで判断して安全に登山することの大切さを学びました。今回たくさん得るものがあったので、これからの登山や来年の高校総体に向けて活かしていきたいと思います。（宮崎羽夏）

B 隊 43 熊本県 熊本北高校



私たちはインターハイに出場する前に8月1日から4日まで下見で大会のコースを登りました。天候はいいとは言えず、一日を通して風が強く、雨が降ったり止んだりの不安定な天気でした。そんな中、今まで本当に使うのだろうかと思いながら持っていた装備の大切さに気付かされました。

十勝岳縦走コースは上ホ口の避難小屋で引き返す程の悪天候でした。黒岳・北鎮岳では上り下りが多く、コースが長かったので本当にきつかったです。また、初めて雪渓を見ることが出来ていい経験になりました。旭岳は強風で霧が濃く、何処まで登っても同じ景色で辛かったのですが頂上付近で強風の中、岩陰に咲く黄色い花を見つけて頑張れる気力をもらいました。

8月7日の開会式では会場全体が緊張感に包

まれているのを肌で感じました。県大会とは全く違う空気感にとっても驚かされました。開会式が終わるとすぐに筆記審査です。私は天気図の担当で県大会では緊張で手は震え、放送を聞き逃すという苦い思い出があるので、県大会時の3倍は天気図をやり込みました。そのおかげが緊張はしたものの落ち着いて挑むことが出来ました。他の高校のペンを動かす音に動揺し、集中力が散漫になりそうになりましたが、自分を信じ、精一杯力を出し切ることができたと感じています。その後、キャンプ場に移動し、装備審査、テント審査がありました。テント審査は他の高校がどんどん立てて行くので周りに飲み込まれそうになり、ペースが乱されていたと思います。自分の納得のいくようなテント設営することは出来ませんでした。この後惜しくもリタイアとなってしまう、悔しい思いを残したまま、私たちは会場を後にすることになりました。悔いはないという嘘になりますが、運も実力のうちです。

今回の大会を通して自分の反省点や考えの甘さ、練習不足など色々なことが分かりました。またこの競技はチームプレイなので同じチームの仲間を信頼する大切さも実感しました。そして自分たちも準備に準備を重ねていたけれど他の高校もそれは同じことで大会に対しての向き合い方に差があると感じました。自分たちは甘すぎると思いました。しかし、この経験をさせてもらえたからこそ、私たちはまたひとつ成長できました。ありがとうございました。

B 隊 44 大分県 竹田高校



3年生2名2年生2名の4名で挑んだインター

ハイを終えて一番に浮かんたことは、このメンバーと一緒に登山ができてよかったということです。私たちは体力に自信がなくて、3日間続けて登山をしたことも今までなかったので、とても不安な気持ちがありました。しかし、すべての山行を離脱することなく、完走することができました。

下見の時点で天気が悪く、どのコースも最後まで歩くことができていなかったのですが、大会本番に皆で完走できたことは本当に嬉しかったです。ペーパーテストや設営審査、炊事審査などのその他のことも、ひとりひとりの自分の役割をにきちんと取り組んでくれました。誰か一人でも欠けていたら最後までやり遂げることはできなかったと思います。昨年の新人戦からこのメンバーでインターハイ出場を目指して頑張ってきました。まずはここまで一緒に頑張ってくれたメンバーに感謝を伝えたいです。

またこの大会に出場するまでにたくさんの方々から支援をしていただきました。まずは顧問の先生方、手伝ってくれた一年生、応援してくれた家族の皆、次に全国の先生や地域の方々、友人などそしてここまでたくさん協力してくださった校長先生、みなさんには本当に感謝しかありません。ありがとうございました。最後になりましたが、今回大会を運営するにあたって様々な方々にサポートしていただきました皆様のおかげで安全に楽しむことができました。心より感謝を申し上げます。私は行動3日目の旭岳下山中に観たとても綺麗で雄大な素晴らしい景色を一生忘れることができません。北の大地北海道でのインターハイに参加できたことをメンバー全員が誇らしく思っています。本当にありがとうございました。

B 隊 45 宮崎県 宮崎大宮高校

私が今回の大会の中で1番印象に残ったのは、北海道の山の雄大さです。想像の何倍も山が大きくて、視界の端まで陸が続いていて感動しました。北海道の広さを体感することができました。ぜひみんなに北海道の山に一度は登ってほしいです。2



年生としてインターハイに出場できて本当に幸運だと思いました。来年は必ず優勝します。県大会から丁寧に試行錯誤を重ねていきたいです。

2年 楠原瑞歩

今回の大会では、北海道の雄大な山々を肌で感じられた気持ちの良い山行となりました。自身の課題である天気図では、満点を取ることができず悔しさが残りました。結果的に過去一の得点をとることができてほっとしたのもつかの間、減点となった部分ばかりに目がいきまいて後悔しました。この悔しさを後輩に託し、来年はぜひ満点を取り優勝してほしいと思っています。

3年 黄 晶美

北海道の山々は今までのどの山よりも雄大で、山の魅力にどっぷりはまりました。今回私は3度目のインターハイで最後の大会でした。どの大会よりも悔しい思いをし、過去の自分に怒りを覚えるほど悔しかったです。しかし、今大会で他県の選手との交流ができ、全国に山が繋がってくれた友人ができ、楽しい思い出ができました。他にも北海道の食を満喫できるなど最高の大会でした。

3年 小林 咲楽

今回の大会で一番学んだことは、「山に登る楽しさ」です。北海道の山は、地元宮崎の山域の状況とはまるで違い、大雪山の広大さに、今までの登山では感じたことのない感動を覚えました。仲間との協力や班員とのコミュニケーションをとることも、とても楽しく、人脈が広がっていく楽しさを感じました。一生の思い出に残る登山、インターハイとなりました。

3年 石原 若奈

B 隊 46 鹿児島県 加治木高校



待ちに待った令和 5 年度全国高校総体登山大会。舞台は北海道、大雪山系。大会出場の中で最南端の県である私たち鹿児島県加治木高校はついに日本最北端の県である北海道に足を踏み入れた。

登山行動一日目私たちは上ホロ十勝岳コースに挑戦した。悪天候のため当初の予定から変わり、上富良野岳までのピストンコースとなった。雨具を着て汗だくの中、ぬかるんだ道を歩きとても疲れたが無事に全員上富良野岳まで登頂することができた。疲れきった後、私たちは白金温泉に入り汗を流し、温泉で疲れを取ることができ、他のチームとの交流を深めることもできた。登山の直後に温泉に入ることができるのはあまりないので貴重な経験となった。

登山行動 2 日目、私たちは黒岳北鎮岳コースを縦走した。前日の雨もあり天気が心配されたが、何とか予定通り山行することができた。下見の時は天気が悪く、北海道第 2 の高峰である北鎮岳に登ることができなかったため、大会ですべての山に登り縦走しきれたことが私たちの大きな自信に繋がった。登りが急で長い道のりも、今まで一緒に頑張ってきたチームだったからこそ最後まで諦めずに乗り切れた。

登山行動 3 日目、私たちは北海道最高峰の旭岳山頂に向けて出発した。前半のチーム行動は怪我で重い荷物が持てないメンバーを全員でカバーし合いながら、なんとか規定時間内にゴールにたどり着くことができた。チーム行動を通して、さらにチーム間の結束が強まったと感じた。後半の班

行動ではサブザック行動に変わり、それにより余裕を持って北海道の広大な景色を堪能することができた。下見では行けなかった旭岳に登ることができて嬉しかった。大会中、さまざまなハプニングに見舞われながらも、メンバー間で声を掛け合い、見事登りきることができた。さまざまな反省点はあるが全国の強豪校から学ぶことは多く、何より北海道の美しい自然を部活動最後の山としてもぼることができてよかった。

B 隊 50 北海道 旭川北高校



1 年前の私には想像も付かないような、憧れのインターハイに出場できたことをとても嬉しく思っています。出場が決まった直後は、あまり実感が湧きませんでしたが、周りの方々に祝福の言葉をかけて頂いたことでだんだんと実感していきました。インターハイに出場することは、やはり簡単なものではなく、辛いことも少なからずあり、辞めてしまいたいと思うこともありました。それが、出場できるという実感が湧く出来事でもありました。精神面、体力面と今までとは求められているものの格の違いを感じさせられました。そして、その都度、インターハイのレベルの高さを知らされました。

それはインターハイ出場が決まるまでのことに限らず、大会が始まって早々、ペーパーテスト前の取り組み方、山行では、歩行技術、設営では、ペグを打ち込む速さなど、圧倒される場面が多く、刺激的でした。見慣れたはずの景色は、聞き慣れない方言と共に何故か新鮮味のあるものとなっていました。天候に恵まれず、予定とは大きく異なる場面がありましたが、地元開催ということで馴染みのある

人々、環境だったため落ち着いて取り組むことができました。慣れない環境の中で、柔軟に行動している他校には、対応力や計画性など教わるが多くありました。

登山行動が全て終了した後の交流会では、「景色が壮大だった。」という感想が多く、旭川の近郊である大雪山系、十勝岳連邦は、見慣れた景色になっていましたが、そんな景色をこれからも見れること、この環境で山に登れていることの有り難みに気付かされました。

山行の中では、他校から学ぶことが多くあったため、学んだことを実践し、自分たちのものにしつつ、壮大な景色を楽しんでいけたらと思います。

インターハイに向けて取り組む中で成長できることが沢山ありました。高校生活の中でこういう経験ができたことを大切に、これからの糧にしていきたいと思います。

インターハイに出場出来たのは、地区大会から始まり四ヶ月間という長い間、顧問の先生方を始め、部員、家族など多くの人に支えて頂いたからです。本当にありがとうございました。

24. 登山大会を終えて

登山隊長 内海 健一

(北海道旭川北高等学校)

1 はじめに

4年ぶりに幕営、調理など一式がそろった登山大会を計画し、アポローチまでの移動距離は長いものの、早朝起床で時間をクリアして、天上の樂園へ、そんな正常性バイアスの元で作り上げてきた計画は、大雪山系十勝岳連峰の神々によって一蹴された気がした。強く降る雨、北海道とは思えない高温多湿、『荒天対策』をとっていながらも、刻々と大きく変わる気象条件に翻弄され、対応が十分にできなかったのは、登山隊長として、忸怩たる思いがあった。それでも大会自体が最後まで行われたのは、道内道外の役員の方々への努力によるものが非常に大きかった。道内各地、日本各地からお集まりいただき、大会を支えていただいた役員の方々に心からお礼を述べたい。

2 大会地の選定

令和元年に専門委員長になったあたりから、今年のインターハイの構想が始まった。道内顧問の諸先輩方からは、「前回インターハイは国体の関係でニセコと羊蹄山になった、次は大雪で」という声をよく聞くようになった。北海道内の山で、北海道らしい登山ができる山はいくつもあるが、選手役員の宿泊地、幕営地、アポローチなどを考えると日高山脈や知床、利尻とはならず大雪山系が最もよいのではないかと考えられた。



一口に大雪山系といっても広大で、たくさんの選手が登山できる環境を考えると、旭岳、黒岳、白雲岳、十勝岳を候補として考えた。

今回大会ルートとして使用した、上ホロ十勝岳縦走ルート、黒岳旭岳裾合平縦走ルート、旭岳ルートの他に、最終的には第2回安全対策会議のある大会1ヶ月前までに十勝岳の火山噴火レベルが現状の1から上がることがあれば変更するということで、銀泉台赤岳白雲コースを設定していた。大会前のごたごたで銀泉台赤岳白雲岳ルートを持つ上川町に十分説明ができておらず、実際にはルート変更は難しい状況にあった。火山噴火レベルも変わらず、銀泉台赤岳白雲岳ルートはお蔵入りとなった。



3 開催地への出向

今回の大会は、当初幕営地のある東川町に協力を要請し、開催地としてご協力いただく予定であった。ただし、東川町も『写真甲子園』などの行事をたくさん持っており、多忙を極めていた。大雪山系、十勝岳連峰を取り巻く4町(東川町、上川町、美瑛町、上富良野町)で協力してはどうかと、町の



方々からの発信が有り、4町での体制が始まりそうになったが、距離が離れている中でどんな協力が求められるのか、町の職員も多忙の中で人員を割かなければならないのかなど、実際に動くにはクリアしていく壁が多く、まとまらないまま4町にご協力はいただくまでも、主になるのは北海道実行委員会という形ができあがった。このとき、内海は東川町へ出向していたが、収まりの悪い状態で、業務を進めていくことになった。



4 幕営地の課題

今回の幕営地である東川町民運動公園グラウンドは2つめの候補地であった。当初、美瑛町の国設白金野営場と国立大雪青少年交流の家をベースにする案を立てていたが、十勝岳の火山噴火レベルの関係で美瑛町の方から、噴火レベルが上がったときの代替がきかないので避けた方がよいというお話を受け、東川町のグラウンドに落ち着いた。南東北や宮崎の大会での幕営地は、グラウンドの方が不公平感がないと聞いていた。水資源が豊富な東川町なので、給水等も問題がないであろうと考えていた。実際には、東川町の各家庭の上水はすべて地下水であるが、公共の学校や海洋センターなどたくさんの人間が出入りするところでは塩素殺菌が必要なこと、400～500人が一斉

に使う水圧を考えると、水圧を上げるためのポンプを設置しなければならないことなど、想定外の事態が表面化した。ポンプの設置工事は200万の見積もりが出され、キャンプ場の水問題は頓挫した。



このとき、南東北大会の蔵王でのキャンプ場を見た自衛隊の水タンクを思い出し、自衛隊への協力要請をお願いすることにした。災害等に備える設備でもあるため、そのようなことがない場合に使用させていただくことになり、旭川市水道局から直接水をくませていただけるようにもなり、ほっと胸をなで下ろした。「タンクからの自然流下で水圧も大丈夫であろう」という、業者さんとの打ち合わせも有り心配していなかったが、本番では小型の水タンクが配属されたことで、全くシンクに水が流れず、給水車から水をくんで、シンクで使うという不自然な形の状況になってしまった。



また、晴天が当初続いていた東川町では、グラウンドが硬くなり、ペグが折れるような状況がプレ大会も含めて続いていた。何とか水をまいて、グラ

ウンド条件をよくしたい、ほこり対策もしたいということで300m分のホースを用意していただいたが、今回の大雨、すべて、徒労に終わった。

5 予算の作成

北海道からの要請を受け、先催県の資料を頼りに、予算を作成した。実際には細かい消耗品系のリストにおいて不明点も多く、道担当者からの追求に苦慮した。それでも、大きな契約が必要な仮設トイレ、シンク、OA 機器、スポットクーラーなどの物品は見積もりをとっての予算規模、必要性の説明を行ったことで、風通しがよくなった気がした。医療消耗品は医師、看護師の方との連携が必須で、特に一般消耗品として購入できるものは早めにピックアップできているとありがたい。

6 医師看護師の件

JMSCA の三浦先生、中島先生、浦川さん、福島さんを中心に構成させていただくよう打ち合わせを続けた。内海自体も旭川市はじめ周辺の医師会に足を運び、地元の医大にも働きかけをしたが、色よい返事は得られず、三浦先生と総合病院にも協力要請を行ったがうまくいかなかった。大会本部がある東川町の町立診療所にも何度か足を運び、現状を訴えたが、なかなか門戸は開かなかった。大会直前の6月に行われた、第2回安全対策会議の折、再度医師看護師の方とそろって東川町立病院を訪れ、協力の申し入れを行った。その際、三浦先生を臨時医師として受け入れていただき、医薬品の提供もしていただけたというお話を聞き、一気に問題が解決した。札幌から2名の帯同看護師、地元から1名の幕営地看護師、山岳部顧問でもある養護教諭が幕営地付きになっていただけで、医療班の体制が整った。

今考えれば、この体制ができあがらなければ、熱中症と感染症でごった返した、救護室、大会中の救護体制が維持できなかったと思い、皆さんには深く深く感謝している。



7 大会中の登山隊長と行動隊

昨年も、四国の大会で登山隊長の役割を見てきたつもりであったが、全く頭に入っていなかった。中央総務会議の内容がぼやっとしか理解されておらず、救護記録の連動や詳細の仕事について、全く先回りできず、西村先生や石田先生頼みの業務になってしまい、非常に申し訳なかった。無線での連絡でいろいろ動いていただけた地元の人員が不足していたこと、内海が様々な場面を想定し、ケーススタディをまわりと共有していなかったことなどが実際の大会に影を落とし、深く反省した。

行動隊は隊長さんを中心として、支援隊、医療隊が連携して動いており、とても頼もしかった。自分が把握し切れていなかったところをすべてカバーしていただいた。



8 自衛隊の方々の協力と大会形式

今回の大会の3日目では、登山口～姿見の池までのチーム行動が終わった後や、その前後で行動離脱が目立ち、脱水や熱中症での担ぎ搬送が複数起こってしまった。自衛隊の方々には、緊急

時の対応とはいえ、深く感謝したい。大会運営をする側としては、B隊隊長のサブ行動変更の英断のように、前日からの寝不足、急激な高温、疲労の蓄積を考えると最終日はサブ行動にするという選択肢もあったのではないかと今反省している。全国大会ではあっても、たくさんの選手が、楽しく安全に登山ができるのがベースだとすれば、体力差が出にくくても、選手の体調に即した大会運営が必要であったと考える。しばらく行われていなかったテント泊や気候の状態で大大会形式を変更できる体制が必要なのかもしれない。



9 第5類への変更と感染症対策

今回、大会直前に1校、大会初日に2校のコロナウィルス感染症陽性が出たため、医師からは大会そのものの継続を含めて、様子を見るために翌日の行動を中止したらどうかという提案もいただいたが、中央総務との相談の中で、内部での感染ではない感染が表面化したと考えられることから、天候の悪化を鑑み、サブ行動で上富良野岳または上ホロカメツク山ピストンという判断をした。

大会最終日までトータルでA隊 4 名B隊 4 名B監督 1 名役員 1 名計 10 名のコロナウィルス感染症陽性者が出て、A、B隊のべ 7 校が出場辞退または棄権となった。大会後、全国的にコロナ感染症の患者は増加傾向のようなので、今後もこの傾向は続くと考えられ、医師との連携の元、感染症の検査キットが必要になると思われる。(今回は東川町のものを多数お借りした)



10 結びに

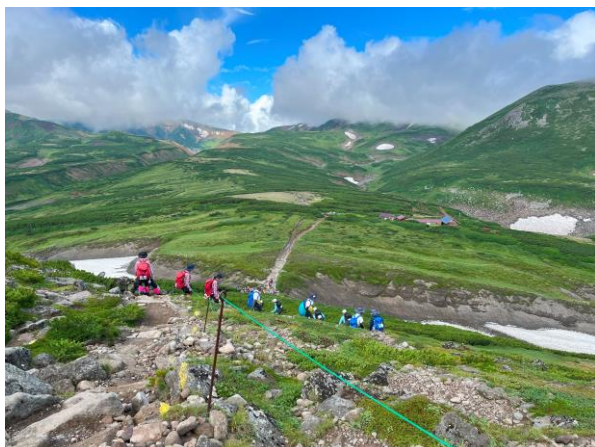
令和 5 年度全国高等学校総合体育大会登山大会第 67 回全国高等学校登山大会は、たくさんの方々の献身的なご協力で、何とかゴールにたどり着いた。4 年ぶりであるフル開催に向けて準備を進めてきたが、感染症と荒天によるルート短縮や大雨による体育館避難、幕営地の高温多湿による体調不良者の続出、熱中症・脱水症状者の続出、本部から 1 回、競技場所から 3 回の救急搬送、体調不良による低体温処置、高温による解団式場変更等々、バラエティーに富んだ対応が迫られる大会となった。登山隊長としては、天候も含め、しっくりいかない大会になってしまったが、選手の皆さんの感想を読ませていただくと、北海道の自然に触れられたこと、大会ルートを踏破する中で、協力しチームの絆が深まったこと、全国の他のチームとの交流を通して刺激を受けたことが綴られており、高校生の選手たちにとっては、学ぶことができる部



分もあったのだなと思い、正直ほっとしたところで

あった。

大会中は全国高等学校体育連盟登山専門部長の本多滋明先生をはじめ、中央総務の先生方、審査員の先生方、運営役員の先生方、行動役員の先生方、補助生徒の皆さん、そして、全国から北海道へ足を運んでいただいた、監督選手の皆さんに支えられた。日本最北の地北海道でのインターハイが 36 年ぶりに行うことができたことに、すべてに皆さんに感謝を申し上げる。





飛び立て若き翼 北海道総体2023



轟かせ魂の鼓動北の大地へ大空へ

皆様のご協力で、最後まで大会を行うことができました。

ご協力ありがとうございました。

全国高校総体登山大会北海道実行委員会事務局

**令和５年度全国高等学校総合体育大会
登山大会事務局**

住所：北海道上川郡東川町北町１－７－１

東川町Ｂ＆Ｇ海洋センター

ＴＥＬ：０１６６－７４－３９９７　ＦＡＸ：０１６６－８２－４６０７

**令和５年度全国高等学校総合体育大会
登山競技実行委員会事務局
（北海道教育庁学校教育局高校総体推進課）**

住所：北海道札幌市中央区北３条西７丁目

道庁別館８階

ＴＥＬ：０１１－２０６－６８６３　ＦＡＸ：０１１－２３２－１２９６